

岳 山

年 一 十 二 第

號 二 第

黑
部
號

黑
部
號

山 岳

第二十二年第二號

昭和二年六月發行

目 次

仙人澤入り	冠松次郎	一頁
黒部川	沼井鐵太郎	三二
双六谷から黒部川へ	冠松次郎	八八
黒部川より立山川への旅	岩永信雄	一二三

圖 版

○上流より見たる棒小屋澤と劔澤との合流點	對頁
○新鐘釣溫泉	四
○百貫山下の岩壁と黒部川	八
○猿飛附近	

- 祖母谷落合附近○仕合ヒ谷落口より夫婦岩を見る．．．．．一六
- オリヲ谷の合流點附近より奥鐘山を仰ぐ○アヅ原附近の黒部川．．．．．二〇
- 東谷落合附近○東谷の落口より黒部川下流を望む．．．．．二八
- 劔澤、黒部川、棒小屋澤．．．．．三二
- 棒小屋澤合流點の上手．．．．．三六
- 棒小屋澤落合下の黒部川○下廊下の廣河原．．．．．四四
- 下廊下のタルより下流に仙人山を仰ぐ○下廊下の廣河原より見たる仙人山．．．．．四八
- 下廊下にて上流に岩小屋澤岳の支脈を望む○岩小屋澤岳支脈突端の赤壁．．．．．五二
- 無名澤附近の絶壁．．．．．六〇
- 岩小屋澤岳支脈二〇六七米三角點附近より見たる立山○ハシゴ谷附近より見たる劔岳．．．．．六八
- 黒部別山澤と無名澤との間．．．．．七十二
- 黒部別山澤附近より赤澤岳を望む○野營地より見たる黒部別山澤附近の岩壁．．．．．八〇
- 黒部別山のオホタテガビンと岩小屋澤岳支脈の突端○下廊下の徒渉點と大屏風岩．．．．．八四
- 大ヘツリより上流を見る○大ヘツリより下流を見る．．．．．九二
- 岩小屋澤岳支脈二〇六七米三角點附近より見たる黒部別山と劔岳○新越澤落口附近より大ヘツリと黒部別山を望む．．．．．九六
- 棒小屋澤無名澤間のヘツリ○新越澤右岸の壁○劔澤落口○新越澤落口附近○

新越澤落口附近	一〇〇
○下より仰げる内藏の助澤○内藏の助澤より立山本峯を望む	一〇八
○内藏の助澤落口附近の壁○内藏の助澤上流より立山本峯○内藏の助澤手前より黒部別山を望む○内藏の助澤落口○内藏の助澤落口附近より黒部川上流を望む○内藏の助澤落口附近より赤澤岳を望む	一一二
○内藏の助澤の上流○御山澤	一一〇
○仙人澤に至る途中の棧道○シジミ坂の梯子○オホタテガビン附近の黒部川○オホタテガビン附近より黒部川下流を見る○内藏の助澤落口の黒部川○御前澤落口	一一四
○双六谷五景	一二八
○双六谷廣河原附近○双六谷の奥抜戸	一三六
○五郎乗越より見たる笠ヶ岳○双六谷奥抜戸附近の廊下	一四〇
○五郎澤○上廊下の入口○上廊下立石の上手○上廊下の入口	一四四
○赤牛岳側より落つる瀑の澤○薬師岳カールの澤の落口○薬師岳下中央部の上廊下○木挽澤落口附近の黒部川○薬師岳下の上廊下○奥のタル澤	一五二
○赤牛岳中腹より見たる薬師岳○薬師岳下よりスゴウ乗越を望む○立石の岩小屋○上廊下立石の上手○五郎澤落口より太郎兵衛平を望む○上廊下立石の上手	一六〇
○薬師澤の合流點○水蝕されたる上廊下の壁	一六八

○小スバリ澤附近より木挽山を望む○新越澤手前の架橋○新越澤落口附近○新越澤落口下手の黒部川○オホタテガビン附近の黒部川○パンバ島……………一七六

雑 録

至自
一四六
八四

○黒部川概観(冠松次郎)○積雪期の黒部川(渡邊漸)○春の黒部川(冠)○黒部川探勝の経過(冠)○黒部川の歩道(冠)○黒部
峡谷案内繪圖の誤を正す(冠)

雑 報

至自
一八五
八九

○阿蘇山の大爆發○燒岳の降灰○臺灣山岳會○早池峯登山路○飛驒山脈彙報
○會員通信

會 報

至自
一九三
九〇

○第三十五回小集會記事○會務報告○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃

地 圖

○立山東面と黒部川の下廊下(石版三色刷)

卷
尾



影撮 氏 耶次 松 冠

(川 部 黒) 點 流 合 の と 湍 瀾 と 湍 屋 小 湊 る た 見 り よ 流 上

仙人澤入り

冠 松次郎

新鐘釣温泉、小黒部谷路口、樺平、シジミ坂、シアヒ谷、オリヲ谷、アソ原、仙人澤、仙人湯、池ノ平、ハシゴダン乗越、内蔵の助平、黒部別山、内蔵の助澤、御前澤、サル又雪、雄山、室堂。

新鐘釣温泉まで

去年は南の方聖岳を中心として、谷から谷へとさまよひ、長厚な山又山の壯觀と、遙遠な溪谷の悠大とに、楽しい幾日かを過したが、その最も深い印象を受けた時でさへ、私は越中の山川、殊に黒部峽谷の雄峻を思ひ出さずにはゐられなかつた。

それで今夏は、下流から溯つて、久しく憧れてゐた奥鐘の絶壁、仙人の瀑、仙人ノ湯、それから黒部別山や内蔵ノ助平を探つて、サル又雪を大汝へ出て見たいと思つて、七月十六日（大正十一年）の夜行で上野を出發した。

七月十七日。午過ぎ愛本の鐵橋を渡つてから、黒部の崖道を辿り、新鐘釣温泉シンカネツルに着いた頃には、もう夕靄が川の面をたちこめて、岸邊から昇る出湯の煙がほの白く、湯宿の障子にはランプの灯が赤くうつつて、何となく山の湯の黄昏時らしい情趣が漂よつてゐた。私は奥の鐘釣温泉へ宿をとるつもりでゐたが、部屋から直ぐ谷川を見らるゝ所、温泉へ氣儘に入れる處と思つて、新鐘釣の方を選んだ。湯につかつて對岸に黒く滲んでゐる山影や、星のきらめいてゐる奥深い空を見入りながら、今日過ぎて來た黒部の谷や、兩岸に相對してゐる山々などを思ひ浮べて、久しぶりで陶然として旅の氣分に

浸つた。

桃原の釣橋を渡つてから、この谷の大きい直線的の深さに、私の心はズン／＼引き入れられた。佛石の茶屋まで入つた丈けども、私は何となく深沈たる大きな溪谷の静けさを味はずにはゐられなかつた。森石澤から奥になると、溪観は目立つほど雄大となり、森林は漸く濃く深く、兩岸の山々もその山脚も、大分角度が急になつてくる、そして山と山との折れ目から懸つてゐる谷は、殆ど皆黒部特有の割れ谷となつて、崩石を押し出してゐる處があつても、それは安定をゆるさない位い急角度で川の縁に堆高くなつてゐる。上流の下廊下に落ち込む支流が、どれも皆この様な割れ谷となつて、勾配がより急峻の爲に、その割れ目から流れが瀑となつて逆しつてゐる奇觀を思ひ出して、矢張り同じ行き方だなと思つた。

雄大な黒薙川の出合附近にたどりついた頃には、日は可なり西に傾いて、前方の山々に遮られると、崖道は急にひつそりとして、涼風が四邊から起り、日盛りの暑さも疲労も全く忘れて、清爽の氣分に足どりも自づと早くなる。山毛櫨、七葉樹、楓などの森林の下を、山坂の切り通しに添つて登つて行くと、向ふから温泉歸りの人夫が杖を振りながら下つて來た。なまじい一人位の人に遭ふと、周りの廣大な自然に壓せられて、そのあとには却つて寂寞の感を起させる。

自由の天地を飄然として歩いて行く私の身の周りにもつれてくるなつかしい香り、それは人工的の強い刺戟をもたないが、何となく大きくうつとりとして、然も氣を引き立たしめる、自然そのもの、香りのやうに思はれた。この大きな谷筋に漲きつてゐる雰圍氣、その中には恐らく源流地の偃松の香りや、上廊下の方から傳はりつゝくる森林の匂ひ、それから下廊下の岩魚の匂ひも、川添から湧出する温泉の臭ひも交つてゐるに違ひない。それ等が一つになつて渾然として嗅覺をそゝるものは、黒部川の匂ひでなくて何であらう。黒部川の匂ひ！私ばかりでなく、恐らくこの溪谷を溯る程のタニキチ

は、屹度その香りを味はつて成程と思ふに違ひない。

去年猫又谷に沿つて步道が付けられたと云ふことを聞いてゐたが、今年は既に丈なす雜草に埋められて、その道は全く分らない位になつてゐた。鐘釣岩を廻る時分には、步道は益々狭く、緩坂を闊葉樹の中に通じてゐる。大きく谷に向つてひと廻りすると、黒部川の澗に出た。潺湲たる溪聲がすき腹にしみ込むと、急に寒さと飢とを覺える。やがて行く手を遮つて釣橋が見え、その手前の大きな壁傳ひの上り路が、新鐘釣温泉へ私等を導いて行く。

温泉の入口で顧みると、對岸の山の割れ目からサンナビキの上方にあたつて、峨々たる山骨を仰ぐことが出来る。華やかな夕日の光、黝黒の偃松の色、その兀々とした肩骨の力強さ、それからその懷に垂れた夥しい雪、それは今年始めて見た夏山の品麗な残雪であつた。サンナビキの頭、駒ヶ岳に連なる一角であつたらうと思へた。仰角は頗る大きい。

新鐘釣温泉　オリヲ谷手前

七月十八日。ゆつくり湯に入つて、午前八時過ぎて出發する。今日からは黒部の奥へ入れる。そしてその溪流や、壁や、森林や、山岳などの壯觀を、勝手にむさぼれると思ふと、私一人で入るのは、あまり勿體ない様な氣もする。

新鐘釣から釣橋を對岸に渡つて、左岸の崖側の路を、つま先き上りに登つて行く。これから上流東谷の出合までは、左岸にのみついて行くので、右岸は川近くを通ることが出来ない。奥鐘山の太岩壁がへつれない爲、祖母谷から南越の道を上り、祖父谷の支流を乗越して、餓鬼谷まで出るので、大正八年古河合名會社の開いた道がそれであるが、棒小屋澤の小屋場迄は、殆ど川から遠くの處ばかり通じてゐるので、私等の希望が、黒部川溯行である限り、到底満足が出来ないものである。川から千米

突以上の處を乗越して行かなければならぬばかりでなく、下流で最も光彩を放つてゐる、奥鐘の高大な山壁をヲミツトすることは、黒部の風光を賞せんとするものには、それだけでさへ、非常の損失であるから、こゝはどうしても左岸を行くに限る。

鐘釣岩の根元に建てられてある新鐘釣温泉は、對岸で顧みると、釣鐘を伏せたやうな高い大きな岩峯を併せて、黒部川に臨んでゐるので、殊に風趣を添へる。伐採の殆ど入らない、この崖側は森林が美しく、何處の山々を見ても、私は飽くことを覺えない。五六町程上り、鐘釣温泉へ立ち寄つて、小黒部から先の道を尋ねると、今年はまだつい二三日前に、十人程の夫夫が上流の方へ道を修繕に入つたので、よく様子は分らない。昨日歸つて來た人夫の話では、シヽミ坂の先の釣り橋が落ちてゐるので通れないと云ふてゐたから、立山へ行く小黒部入りの方なら安全だが、川通し上へは先づ一寸むづかしいので、御止めになつたらと、忠告してくれた。私は出鼻を挫かれたやうな氣もしたが、兎に角日數をかければ問題にならないと思つて、別段豫定を變へずに、行程を進めることにした。鐘釣の岩峯を過ぎると、百貫山、それから名劍山ととりつぎに開展される。そして左岸の尾根の間に大窓つゞきの岩尾根が見える時分には、尾根の出入が複雑して、溪谷がどつちへ曲つて行くのか分らない位い、山々が深く重なり合つてくる。百貫山から名劍山の山脚を咆吼する黒部川も、随分大きくカーブを描いて、隨所に深い蒼碧の潭を湛へ、山足を繞り、巨岩を廻つて行く。私等は、離れ小島の如く岸から乗り出してゐる大岩壁の上で休む。落葉松の茂りを透して、脚下に渦巻く深淵を覗き、上流の山谷を仰いで讚嘆の聲をもらした。金作も米谷も、初めてなので、黒部は美しいなと合槌を打つ。實際常願寺川あたりには、この邊だけの雄大な深遠な景色でさへ持つてゐないから、あながち遙々東京から來た、私に對する御世辭ばかりでもないと思つた。

百貫山は鐘釣式の更に高く大きい峻峯であるが、名劍山の方は可なり複雑した山の側面を擴げてゐる

影坡氏耶次松冠

泉温釣鐘新



る、山々は針閣混合の密林に鎧はれてゐるが、そのはげてゐる處は殆ど完膚なき迄山骨を露出して、その窪に添つて、斧で割つたやうな深く、細く、急峻な谷を刻み、黒部に向つて突込んでゐる。

鐘釣温泉からウド谷の間と、ウド谷から小黒部谷との間は二と一位の行程で、私等はウド谷から小黒部への距離が地圖のに比べて甚だ近いのに氣づいた、午前八時半小黒部の釣橋を渡つて、對岸に休んでゐる内、壁を降つて本流の澗に出て見る。小黒部の落口は瀧の如く、すばらしい勢ひで飛躍して来る。その水嵩は可なり大きい。本流の水が激湍になつて疾走して来るのが、小黒部の流が突込んでくるので、衝戻して底の方から突き戻されてくる。そしてさすが黒部本流の水も、こゝで大きな奔潭をつくつて旋回してゐる。その底の方からの泡沫が丁度無數の眞珠の玉が亂れ狂ふかと思ふ様になつて、五彩の色を放散して巻き上つては、川一杯に漲がり擴がつて行く。花崗岩の河床の上を流るゝ溪水が、灰青色の淀みをもつ處は深く美しい。森林の被ひ冠さつてゐない黒部に於て、殊にさう云ふ氣持がする。洗ひ出された花崗岩の岩壁は、小黒部寄の岩つゞきも立派だが、對岸の壁は可なり美しく、大理石の肌の様な純白のうねりを以てつゞいてゐる。

九時小黒部發。小黒部入の路と岐れる處に附近の名勝猿飛、樺平と印された立札がある。成程猿飛は名勝に違ひないが、樺平が名勝と云ふのは一寸變な氣持がする。猿飛から數町上手の黒部川の傍にある僅かばかりの平地があつて、そこに東洋アルミナム會社の天幕が一つと、古い小屋が一つある、樺平と云ふても、今は樺がある譯でなく、別段風景絶佳と云ふ所でもないらしい、只黒部の崖路を造る爲の根據地と云ふ様な處に過ぎない。

祖母谷道と分れて樺平へ着くと、天幕の中にこの道を修覆する爲の監督者らしい人がゐたので、行く先の様子を探ねると、今日シヅミ坂の先の釣橋が架けられる筈になつてゐるので、多分シアヒ谷までは行けるでせう、その先はまだ去年のまゝで、今年は全く一人一人入らないので、橋も棧道も落ち

て、路も可なり崩れてゐると思ふ故、若し行けない時には、こゝまで戻つて來らるれば、何時でも泊めて差上げると親切に云ふてくれた。オリヲ谷の出合から川通しを、餓鬼谷の方へはともに行けない、若し川について行くものなら、今年のやうに水の大きな年には、出るもひくも出來なくなるので、大事にお行きなさいと云ふ。私等は中食をとらせてもらい、助言の好意を謝し、正午、小屋の横を抜けて木下路を登つて行く、私は歩きながら考へた。雨天ならば兎に角、道が悪い位いで、だれがわざわざ戻るものかと。

暫く行くと、小谷が二つばかり入つてゐる。小さいが矢張割れ谷になつてゐる。それから崖道が壁の露出の上を通じる様になると、追々悪くなつて、やがて路は急に谷に下りる。その底に雪が小山の様に残つてゐる。こゝがシジミ坂で、谷幅は岩の割れ目になつてゐるので甚だ狭く、左右から丸い岩壁が重なり合つてゐるので、上方はよく覗くことが出來ない。割目に添つた大きな空瀧の豎壁に、二十數間の梯子が取りつけられてある。その上を登り切つて、岩壁の欄を斜左に黒部川の方へ廻つて行く。これからシジミ坂の險にかゝるので、水面から直立してゐる高さ數丈の壁の上の巖に沿うて、爆破によつて路がつけられて、ポートを打込み、鐵線を張つて手がゝりにしてある。それを握りながら行くと、對岸は恐ろしい壁つゞきだ。午後一時。

その壁の持主の奥鐘山が、鼻先に大きな胸骨を突き出してゐる。このスフキンクスは、腰から下を深く地中に没し、結跏趺坐して黒部の奔流を躋と掌との間に通はしてゐるのであらう。丁度その肋のあたりが稍突き出て、岩の棚や、皺折に添つて、灌木や草などが僅に生え付いてゐる。或處は直立に、大體は八十度前後の角度を以て、谷の上方千五百米突近くまでも豎壁になつて延ひ上つてゐる。雄渾なる山の塙、樺平附近から始まつて、オリヲ谷の處で殆ど直角に曲折して、餓鬼谷にまで延びて、東谷山に對してゐる。その間の距離は恐らく一里以上あるだらう。それだからシジミ坂からシア

ヒ谷の出合、オリヲ谷の出合を過ぎて、餓鬼谷の合流點までは、始終對岸に我を威嚇して、或時は霧の狭衣を被ひ、或る時は流るゝ横雲を頸に繞らし、黒部下流の險は乃公の腰を繞ると云つたやうに、超然としてその胸毛をなびかせてゐる。

黒部別山の優秀な山壁を除いては、奥鐘程の長高な壯大な懸崖を、黒部川に向つて露出してゐるものはない。只惜しいことに、その岩の色彩が變化に乏しく、灰白色の深みのないものであるから、暗褐色に隆々たる岩の瘤を突き出してゐる、黒部別山の 大壁に比して、甚だ見劣りのするのは已むを得ない。

鐵線を握りながら、ヒョット下を覗くと、脚下數丈の處で、黒部川は全く奔湍の連續となつて咆吼してゐる。壁に衝突し、岩を裂き、虚空を震蕩して行く壯烈な激流は、見てゐると胸がすく程痛快である。私は壁の窪にリュックサックを下ろし、寫眞器を取出さうと思つて、紐を解くと、その紐に結びつけてあつた水呑が轉び出した、おさえやうと思ひ手を出したが、僅か一尺幅位の壁の皺折なので、到逸して黒部川へ奉納してしまつた。漸く小形の寫眞器をとり出して、腹ばいながら幾つかをフィルムに收めた。

岩壁の道を過ぎて、崖道はさう安樂にはならない、然し山毛櫨や樺などが大分茂つてくる、岩の角を廻ると、釣橋の前へ出た、私は今迄落ちてゐたのはこれだと思つた、左岸の岩壁に屏風ほどに折れ窪んで、のしかゝる様になつて川まで直立してゐる、木の枝を合せて組まれた簡單なものだが、七八間があつた。この釣橋が出来てゐなければ、私等は數時間を無駄にして、可なり上の方まで匍ひ上り、横にへづつてロープで降らなければならぬのであつた。

丁度出来上つた處だと云ふのだから、とりも直さず私等の爲に造つてくれた様なもので、私は誠にすまない氣持がした。やがて崖道を谷へ下り、大石累々たる稍廣い河原へ出る。その中の洲に天幕が

張つてあり、そこで人夫が六七人休んでゐた。

今日はもうこれで樺平へ引き上げるのださうで、私は釣橋の禮を述べ、行く先の様子を聞いて見たが、兎に角この奥へはまだ入つてゐないので様子は分らない、これからは多分棧道や梯子が崩壊し、橋などは墜落してゐる處も多く、今迄よりは餘程手ごわいに違ひないと思つた。午後二時少過。

左岸の山の割れ目からシアヒ谷の溪流が走り込んでゐる。その上方を見ると、大きな残雪の塊りと花崗岩の巨石の崩落した残骸とで、谷の中は随分荒廢して、そのどんづまりは窓になつて可なり低く明るく見える。割れ谷と窓、これは黒部の名物で、内藏の助谷あたりになると殊に規模が大きい。シアヒ谷の落口と向ひ合ひに、稍赭色を帯びた柱の様な岩壁が兩岸から直立してゐる、右手のは低く砲彈の形をして、その上に木が残つてゐるが、左のは奥鐘山の壁の出鼻になつてゐるので可なり高い。土地の者はこれを夫婦岩と云ふてゐる。

黒部川はこゝでくの字なりに曲折して、この岩の戸口で縮められた全流が、その下の深潭に向つてドン／＼吹き出してゐる。

時計を見ると午後三時に近い。私等は夫婦岩の右の鞍部を上つて川添を行くと、川に向つて傾いてゐる一枚岩の板のやうな壁つゞきに出る。打ち込んであつたポットは、處々に残つてゐるが、鐵線は全く切れて用を爲さない。萬一の用心にロープを用ひて、はいづつて行く。通りすぎるとすぐ梯子の上に出た。大分壞れて危険なので、豎の棒に着けられた枝の結び目に足をかけて下ると、又一つ崩れてゐるのがあつた。それを降つて崖道を行く内上りになり、登り切ると今度は岩壁にかけられた十數間の梯子が落ちて跡方もない。己むを得ず荷をロープで下ろして、私等もロープでづり降りる、下は稍平かな草地になつてゐるので危険はなかつた。それから先は棧道も梯子も殆ど落ちて益々歩き悪くなる。道は川から五十米突程の處を通じてゐる。

案じながら歩いてゐた私等は、又絶壁の横に出て先進を阻まれた。川に向つて五十米突以上もある碧壁が、四間から道なりに刳れてゐる。その上がかぶり氣味になつて、灌木や石楠花シダ類がまばらに生えて、壁は一面に蒼黒い薜苔で川まで蔽はれてゐる。舊の棧道になつてゐた丸木の筏がポロ／＼に壊れ、半は落ちて斜に谷の方へ傾いてゐる。荷を負ふてはともに行けないので、皆身輕になり、ロープを入口の木の枝に結び付け、金作が先にハレモノにさわるやうな様子で傳つて行く。それでも慣れてゐる山人のことで、身長を利用してどうやらかうやら上の灌木を掴み、棧道の中の丈夫さうな結目に足をのせてへつ／＼と行つた、それから私も同じやうに、なるべく壁に添つて渡つて見たが、終りの一問ばかりの處が中々通れないので躊躇する、漸くのことで金作の出す棒につかまつて安全地帯までへつりつゝいた。これから荷を運ぶのだが、どうもうまい具合に行かない。ロープに結び幾度か壁に添ふて運ぶ様にしたが、壁が斜左にエグレ込んでゐると、荷の重みで、川中の方へ落ちて行く、已むを得ず私等が渡りつゝいた方の崖から、谷の方へ四五間も突き出てゐる大きな樺の木に金作が登り、そこから二重に綱を張り、一本を控として、荷をその木の先へたぐり込み、それを又私の方へ下げて来る、三四回に運び終つたが、僅か四間程の壁を通過するのに、約一時間半を費した。

たれでも經驗することであるが、黒部川の様な險阻な崖道は、完全に出来てゐれば兎に角、大概の棧道や梯子は一冬たてば、雪崩れの爲に落ちてしまふ。そのみではなく、なまじい道を拓いた爲附近の地盤が弛み、崖の崩壊する處が多い、地形の好い處の道は何時までともそのまゝに残つてゐるが、悪場になると毎冬必ず崩壊して、その修復の出来ない限り、通過するのは容易でない。

この邊を通るのでも、七月下旬か八月に入れば人夫の入つてゐる時ならば、大概安全であるが、七月初旬或はそれ以前だと、手入がしてないので意外の努力と時間を費すことがある。

この悪場を過ぎてから、道は非常によく、山毛樺や七葉樹、楓、シナなどの中に交つて、落葉松、

五葉松、梅等が茂つてゐる氣持のよい森林の中を登つて行くと、溪流は遙かに脚下に走つて、涼々たるその音が遠嵐に和し、黒部の谷中が美しい交響樂を奏で始める。

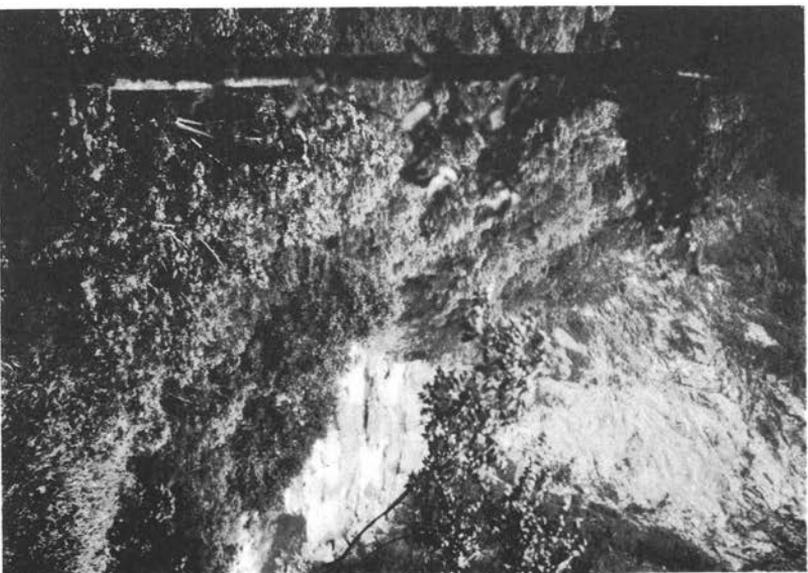
四邊から押しつめられるやうに、暗さがはびこつて來たので、時計を見ると既に七時に近い。尾根の様子では、直ぐこの下あたりが、石小屋（オリヲ谷出合）らしく思はれるが、何分足許が危くなつたので降られさうもない。山の鼻を大きく廻る處で、私等は荷を下ろして、水を捜しに行つた。丁度十五間程先に小谷があつて、水が得られるので、道傍にある梅や落葉松の間の少しばかりの窪地を選んで、野營をすることにきめる。

天氣は申し分なく、森林の茂みの中にすみきつた夜の空に、夕星がもう燦々として金粉を散らしたやうに光つてゐる。飯を終ると、天幕を張らずに三人の上へかけ、碌に焚火もせず、寝そべりながら世間話を始める。夜が更けるに従つて溪聲は益々叫音を高潮して來る。空にうつる落葉松や梅などの枝葉を仰ぎ、星の世界を眺めて、獨り喜んでゐる内、何時しか夢は華胥に入る。

オリヲ谷 仙人瀑

明くれば七月十九日。稍を拂ふ朝嵐に支度もそこ／＼午前七時飯も食はずに、山の鼻を右に曲り、どん／＼降つて行くと、二十分ばかりで森林を抜け、道はオリヲ谷の落口に出る、石の高い間を縫つて、その合流點から、黒部本流の澗に出て、ドツカリと腰を下ろし、朝餉の仕度を始める。

今日も美晴で、拭つた様な朝空には、霞一つかゝつてゐない。目覺めたての溪谷の中を、時折うすもり羅のやうな朝靄が悠々と上流から下がつてくる。溪流の上にもつれ、森林をぼかし、飯焚く人々までを畫中のものとして川下の方へとして行く。美しく清んだ黒部の水に嘸ぎ、大石の上に腰をかけて上空を仰いで腹一杯の深呼吸をする。もう四五日も谷歩きを續けると、私の腹の中も、清冽な黒部の



百貫山下の岩壁と黒部川



猿飛附近

冠松次郎氏撮影

水と、澄徹した溪谷の精氣で、恐らく岩魚のもの、やうに、奇麗に洗はれることであらう。

四方の森の中から小鳥の囀りが聞える。朗かな朝は溪聲まで何となく快闊である、岸邊に臨んでゐる尾根先は、今迄見た壁つゞきではなく、森林が濃密で、闊葉樹の積翠は、新緑のそれと見紛ふ程潤ひのある鮮かさで、溪側を包んでゐる。そしてその間から、谷に向つて挺んでゐる梅、落葉松、五葉松などの集團は、一層溪谷に氣品を添へる。然し流石に黒部らしく、如何程樹木が茂つてゐる山足でも、殆ど直立に近い急角度を以て、函の様に溪側を取り圍んで、谷は著しく直線に縁取られてゐる處が多い。

この出合は一體に明るい感じのする處で、餓鬼谷の方から緩傾斜の川床の上をすべつて來る水は、今迄の激流のやうに刺戟的でなく、溪谷の空氣に微動を興へる位なやさしさである、丁度オリヲ谷の少し手前で、二丈程の水晶簾が數間の平滑の岩の上から懸つて、幅廣い瀑となつて、それから谷は一丈陥没して大きな淵となり、その先は彎曲して美しい花崗岩の大石を配置し點綴して、可なりの落差で、翠綠のつゞまつた山脚の間に潜つてしまふ。

遠い、恐らく後立山あたりの峯の間からであらう。旭日の初光が斜めに射し込んでくると、奥鐘山の岩がしらが赭紅色を潮して、その岩の皺が美しい明暗に彩られる、やがて大空の光輝が反映すると、谷中の總ての物象が春らしい華やかさにひたつてくる。私はもうじつとしてゐられないので、水さわについて上流の方へと歩いて行つた。

出合から半町程上手の美しい砂地の上に、四坪程の花崗岩の大塊が蹠踞してゐる。その懷が深くエグれてガマになつてゐるので、私はそれが石小屋ではないかと思つた。然し砂が濕つてゐると、少し雨續きになれば出水で潜つてしまふやうな處にあるので、恐らく違ふだらうと思つてゐたが、石小屋は少し尾根の方へ上つた平地によいのがあつた。この巨岩から先はやがて左岸も森林が濃く、川

から二丈ばかりは岩壁が續き、その上は木が茂つてはゐるが壁は中々險惡らしい。樺平の人が忠告してくれたのを思ひ出して、谷通し行くことは我慢をしたが、すぐ三四町程の上手で尾根先を一回りすれば、餓鬼谷の合流點に出られると思ひ、好奇心をそゝるやうな美しい谷の曲り目を見てゐると、身躰を引き入れられる様にたまたま先へ行つて見たくなる。食物ならば咽喉から手が出るとでも云ふのであらう。

出合へ戻つて、暖かい飯と味噌汁で腹を拵へて、それから後ろの尾根、餓鬼谷の方へ向つて出てゐる尾根の中途を、森林の中の路らしい處を選んで眞直に登り始める。午前八時。數十歩にして、左手の大木の下の雜草の間に、疊八疊敷位の大石の下端が、天井の様に平らに冠さつてゐる自然の岩屋がある、石小屋と云ふのはこれで、この附近では最もよい野營地になつてゐる。石小屋を左に見て、山側の急斜面をひた登りに三百米突近くも登つた處で、梅の大木の傍に腰を下して休む、一しきり急激な登りをやつたので、身躰中が汗にまみれ、上氣した様に顔までホテつて來る。然しそれは僅かに瞬間で、氷冷の山風が身邊を掠めて、清爽の氣に蘇ると、黒部の溪谷を隔て、奥鐘の幟壁が我と相對してゐるのに氣付いた。尾根近い高所から眺めるので、殆どその全容をむき出して、頂上直下より續く立派な大壁は、直立の三角形に尖つて、無數の彫塑された岩の皺折は、壯觀な斜線を黒部谷に向つて放射してゐる。何しても今日迄の中で最も雄大であつたのはこの山で、もうこの乗越を越えると再び眺めることは出來なくなる。私は奥鐘山に向つて暫くの間別れを惜んだ。

またあへぎながら登り續けて行く内、針葉樹の大木が茂つた尾根上らしい景趣に變つて、間もなく少さな然し氣持の好い鞍部へ出た。一二〇〇米突位の處である、私はこれを假に石小屋乗越と名づけた。この乗越には米梅、ドウダン、石楠花等が密生して、亭々として延び上つてゐる梅の大木には、サルオガセが、無數の長髯をなびかせてゐた。

今迄溪側や谷通しをのみ歩いてゐたので、行く先の展望は尾根に妨げられてゐたが、この乗越へ登つて始めて、頭上の障壁がとり去られて、窓を開けた様に明るくなり、奥深い黒部の谷筋を見通すことが出来た。

兩岸からかき合はされた幾多の尾根の交錯してゐる上に、一段高く、黒蒼い大きな岩尾根が峨々として左岸から乗り出してゐる。その胸のあたりに刻み込まれた、幾筋かの創痕は、この尾根を殊に雄峻なものにして見せる。黒部別山の壁に違ひないと思つたが、それは劔澤の下手を固めてゐる仙人山の黒部寄の支峰で、黒部別山の前衛格のものであつたが、その周囲の尾根等と比較すると、眞に鶏群の一鶴たるに恥ぢない。東谷山の上に、赤澤、鳴澤、岩小屋澤の連嶂が初めて見參に入つた。高く、遠く、その懐には雪溪の條痕が鮮やかに残つて、青苔のやうな假松の色も、崔嵬たる岩の脊梁も、黒部深溪の上に仰望するので、頗る高邁の感じを興へる。

午前十時半頃乗越を上流に向つて下る、脚下は見渡す限り闊葉樹の密林である。それが尾根の起伏に従つて、十重廿重に重なり合ひ遙かに黒部の川邊までも續いてゐる。

この邊の秋の景色が思ひやられる。シアヒ谷から石小屋の間、それから仙人の瀑附近までは、秋色酣な頃には、谷の雄峻、水の清麗と相待つて、萬山の錦繡は私等の遊心をどれ丈魅惑することか、そしてあの東谷の落口にある、節理の美しい花崗岩の肌から迸る、水晶をとかしたやうな温泉に入つたならば、山登りの享樂もクライマックスに達したのだと思ふに違ひない。

路は密林の中を左に通リながら降りて行くので、細いがはつきりとつけられてある、落ち積つた枯葉上をふみしだいて行くと、その音に驚かされて山鳥が二羽羽ばたきをして飛び出して行つた、山毛櫨、楓、樺、七葉樹、ナ、カマドなどの美しくしい闊葉林の中を、駆け廻つて行く私等は全く遊山気分で、奥秩父の幽邃な森林の中をさまよつてゐるやうな氣持になつて、約一時間ばかり下つて、小澤へ

降りた、これはアゾ原の温泉の下手へ落ちる澤で、流れの岸からも、石の間からも、砂をおし上げて、硫黄の沈澱物を動かしながら湯が湧き出してゐる。手を入れて見ると可なり熱い。

澤の上流を見上げると、山が大きく割れて、右手の溝には大きな雪の洞門から煙を吹いて瀑がかつてゐる、中のも可なり立派な窪になつて、雪が随分残つて、その間の細尾根には崩れ出したばかりの山草や、灌木の若葉がべつとりと、嫩青色を埋めてゐる。この澤の一番左手のを登り切つて、乗越の様になつてゐる尾根の上を越すと、仙人澤の瀑の上に出られる、立山へ上る近道だと云ふことを聞いたか、私達は仙人の瀑を見たいので、この澤を上らずに、尙ほ崖道について行くことにする。

澤を渡つて路傍の日影で晝食を認め、それから一時間餘も晝寝をして、アゾ原を見に行く。澤は川近くになると、瀧の様な奔流になつて落ちてゐる、それから本流を十數間行くと左岸の、平たい大きな石の丘の上から濛々と煙を上げて、出湯が滾々として川に向つて溢れてゐる、この岩の丘の周囲は黒部の溪流が流れてゐるので、多量の噴湯は皆その中に惜しげもなく消え去つてしまふ。以前に木暮中村の兩兄が來られたときには、この湯の傍の砂洲の中を掘つて、そこへ湯を導き、黒部の水を調査して随分氣持のよい入浴をしたと云ふ話を聞いてゐるので、私も入りたいと思つてゐたが、何分水が大きいから、岩丈は出てゐるが砂地などは全く見えな。或はこの外にアゾ原があるのではないかと、近傍を捜し廻つたが、外にはこの様な大きな噴湯は見當らなかつた。

大分道草をして、午後二時過になつてから、上流の方へと崖道を行く、石小屋乗越からは地勢が穩やかなので、頗る歩きよく、重に森林の中を行く爲に、日光の直射も受けずに、森林を通してくる風は涼しく、汗などは何時の間にかひつこんでしまつた。降るに従つて山側は益々傾斜が緩漫になり、何處を眺めても、立派な山毛櫨の純林で、それが晝も暗い程密生してゐる。急角度の尾根の側面は川近い處で、急に大まかな起伏となり、幅二三町長さ十町近くの、この邊には珍らしい平となつてゐる。

これを奥平と云ふのださうである。然し川幅が可なり狭く、對岸は大きな野つゞきになつてゐると、密林の中にある爲に決して快闊の地とは云へない。幾年か落ちためられた朽ち果てゝゐる木の殘骸や、厚く敷かれた枯葉の上を行くと、足の下からむせぶ様な土の香が襲つてくる、どこかこの平附近の川添にも温泉が湧いてゐるらしく、行く先々で硫黄の匂ひが嗅覺をそゝるのが氣になる。

平が行き詰つて、道が俄然急峻になると、行く手が明るくなり、大きな岩尾根が視界を遮つてゐる。もう午後四時過であり暗がりの森林の間から見るので、外界は殊に明るい、私等は既に仙人の岩山の間近に來たのであつた。夕日に榮えた豪壯の岩の肌が、桔梗色にすぎ微つて、その山の大きな割れ目に、雪溪が一筋深く喰ひ込んでゐる、中程の棚にかき集められた殘雪の下から、細いが素的に高い、美しい瀑がたつた一本、素絹を懸けたやうに垂直にかゝつてゐる、これは仙人澤と奥仙人澤との間にある小谷のであるが、雪溪が雷光形に折れてゐる先から、直立に垂れてゐる瀑布は、日本畫の山水にしてほしい様な趣があつた。

崩壞された岨道は益々狭く険しくなり、歩くのよりもへつりの方が遙かに長い、棧道の落ちた處から覗くと、五十米突程下に、ヤゲンの様に削磨された花崗岩の川床の中を、矢を射る様に疾走して行く急流は目にとまらない程早い。四十分近くも同じ様な險惡な崖側を行く内、道が谷まり、鞆轆たる響音に驚かされて、崖を廻つてその奥を見上げると、仙人の瀑が、五段に折れ曲つて、荒蕩たる崩岩の間を迸しつて來る。水量は随分多い、私等は瀑の手前の巨岩に腰を下ろして、黒部上流を眺めながら休む。

東谷の落口から半町程下手で、大きく曲つてゐる黒部川は、幾つかの小さな曲折をつゞけて、仙人澤の出合に向つて流れ込でくる、然し大體眞直な走向をとつてゐるので、遙か上流の方まで見通しがきく。

上流は左岸の壁が四五丈位高く、その上森林は針葉樹が多くなつたので、今迄よりも遙かに暗い黒い感じが勝つてくる。右岸の方は傾斜が緩く岸邊近くまで、森林や崩れが延びてゐる。見通しのつきるあたりを一寸左へ廻るとそこはもう東谷の落口になる。これからは立山側が悪くなり、後立山側の方が歩きよくなるので、黒部別山の壁が頭を出すのも程近いことであらう。

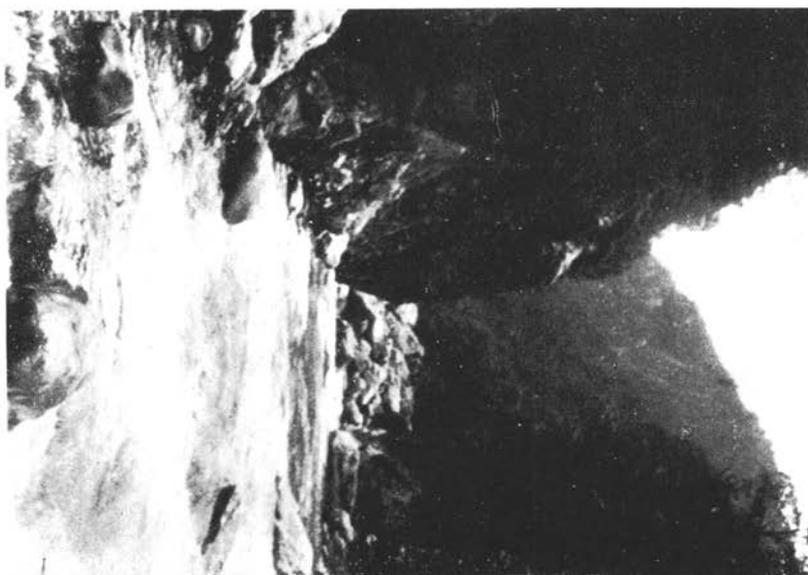
處々岩に堰かれて、飛沫を上げて落走して来る藍靛の流れの色も、出合近くなると、谷幅は更に狭く、激流は底深い紺碧の色に冴えて、落口の上手數十間の處にある、川幅の四分の一位を占めてゐる巨岩の周りを渦巻いて、非常な動搖を以て、衝き落ちて行く。出合の處から急に右に折れて、それから、下は狭い廊下の中を疾走して、奥平(山毛樺の平)の上手迄は中々險惡になつてゐる。

瀑の附近には平地は全くない。岩の上に宿る譯にもならないので、今夜は奥平(山毛樺の平)まで戻つて泊ることに定め、今來た崖道を引き返した。途中で森の間から岩石が露出して、僅かな溝になつてゐる處を見つけ、明日はそこを登つて、仙人澤の雪溪の上へ出る豫定にして、平に泊つたのが午後六時十五分で、この往復に一時間と二十分を費やした。それから天幕を張り夕飯の仕度にかゝる。平のはづれの崖下から美しくしい清水が滴たゝつてゐるので、川まで降りずに煮炊の用達が出来る。濃密な森林の中が眞暗がりになると、蠶蚊が襲撃して來るので、落付いてゐられない。焚火を始めてから、漸く莫塵の上に腰を下ろして休むことが出來た。米谷が岩魚を三匹程釣り上げて來たのを鹽焼にして、焚火の明りで夕餉をすませ、天幕へもぐつたが、この夜一晚中蚊に攻められ少なからず惱まされた。窪地だけに夜は暖かであつたが、甚だ陰鬱な濕池で、密林の間からかすかに、澄み渡つた青空と、星の光を望み得らるゝ位いで、溪聲だけは夜もすがら壁に衝突し、岩を裂いて、轟々と叫びつゞけ、私等は幾度か夢を破られては、又深い眠りに落ちてゆく。



冠松次郎氏撮影

仕合ヒ谷落口より夫婦岩を見る



岩永信雄氏撮影

祖母谷落合附近

仙人澤 仙人湯

七月二十日。夜は明け離れたが、森の中はまだ薄暗がり、蚊が又盛んに襲撃を始める。午前七時、昨日の路を登り返し、森の外へ出て見ると、今日も日本晴で、空はもう日の輝きを一杯に受けて、淺黄色に光つてゐる。瀑まで行かずに、昨日目印にしておいた岩の窪を登つて暫く行くと、急な草崖になり歩き悪くなつたので、右手へ梅の森林の中を匍ふやうにして上つて行く。傾斜は頗る急峻で、休むのにも、木と木の間に腰を下ろさなければ安定が出来ない。

一時間程上ると、谷川は大分下になつて、溪聲が微かに聞え、美しい梅の森林の間から、東谷山の尾根を越して、鹿島槍續きの岩壁らしいのが赤褐色に煙つてゐる。私等はそれを眺めながら、木にかまつて休む。谷から上つて来る風は氷の如く冷たいので、何とも云へないよい氣持だ。谷も好いが、山も矢張り美くしい。森林を透し、溪谷を壓して聳えてゐる、一萬尺の岩の臺、それは縦走者の到底味ひ得られない高邁と快闊の趣きがある。

急峻な斜面を森林の間を縫つて、ひた上りに登つて、約二時間程で、細い山稜の一部に出た、それを左に廻つて行くと、すぐ下に仙人澤の上部の瀑が見える、その附近は一面に赤崩れで、崩れの上に瀑がまだ一つかゝつてゐる。アソ原の澤の左のを登つて来ればこゝへ出られるので、この崩れへ下つて、上の瀑の横上を登つて行けば、仙人澤の雪溪へ早く出られるのであつたが、不案内な私等は、それを氣がつかずに、又一しきり尾根側を登つて行つた。谷への降り口を見ながらへつゝてゐるのだが、どこも直立の壁になつてゐるので、容易に澤へ降りられない。その内にだん／＼足元が悪くなつて、最後には根曲筥にぶら下りながら行かなければならなかつた。汗みどろになり、咽喉が渴く、腹は空るし、僅かな處で非常の困難をさせられた譯で、途中で晝飯を出したが兎ても咽喉へ通らない。苦し

まぎれに、ウキスキーを飲んだところ酩酊して、餘計に渴がつかなくなつて來た。十二時半頃になつて漸く仙人澤の雪溪の上に降りて、雪を嚙りながら晝飯を認めた。

午後一時半出發。谷へ降りてからは立派な雪溪續きで、行く手から尾根がさがつてゐるので、谷が二つに岐れてゐる。右のは小澤で、左から來るのが本流である。雪が夥しい爲尾根はまだ冬の姿で、ミヤマハンノ木の密叢で蔽はれた尾根先の雪近い處は、柴泥の中から、シ、ウドや蘆などが僅かに芽生をしてゐる、雪溪の縁から水蒸氣が煙の様に騰つて、靜かに下の方へなびいて來る。湯ではないかと思つて、近づいて見ると、雪溪の下が大きな洞になつて、その中で溪水が飛沫しぶきを吹いて、立派な谷川が雪の下に流れてゐる。

本谷の方へ廻ると、直ぐ上流の左手の岩の丘から噴煙が濛々として渦卷いて、硫黃の臭氣が鼻を衝いてくる、私等は間もなく仙人の湯の傍に荷をおろして、温泉を見て歩く。午後二時四十分。

仙人澤の本流から左に岐れてゐる小澤の、左の丘の岩原の間から湯が湧出してゐるので、岩の間を溪流のやうになつて流れ落ちて、雪溪の下へ沈んで行く。噴湯は十數箇所あるが、もと浴槽の出來てゐた處は二箇所らしく、二間位に周圍を石でしきつてあるが、花崗岩の泥砂や沈澱物などで、平地と同じやうに埋まつてしまつて、その隅の方から湧き出してゐる湯が、その中を幾筋にも流れてゐる。

今日は先刻の藪で疲労したのと、仙人の湯へ漬つて見たいのとで、早いけれども煙の來ない澤寄の丘に天幕を張り、野營の仕度をして、それから湯槽を掘りひろげて、出口を塞ぎ、湯をその中に溜める。然し掘る道具の持ち合せがない爲、可なり時間を費やして、漸く座つて腰まで入る程の深さに造り、その中に足を延し腰を浸して見る、湯は適温であるが泥砂で濁つてゐるので、別段珍重する程の氣分がない。地獄谷の湯と同じ様で、温たまるが、身軀は一向洗はれないと、金作が悪口をたゞく。

昔早月川の方から、谷を登り、峯を越えて、湯に入りに来た時分には、浴槽の設備もよく、小屋などもあつたからよいが、現今の様では殊更に入りに来る程の出湯ではない。只海拔一七〇〇米突の高さに雪溪に添ふて盛んに湧出してゐる珍しい湯なので、名所見物のつもりで見に行く位ならよいだらうと思ふ。

今日は大分雲が濃いので、白馬嶺の山々も高原も、雲霧の中にぼやけて、時々その緩斜面や、溪谷に残つてゐる雪が光つて見えるばかりで、山々の頂きは全く見えない。天幕の張つてある丘から雪溪を越えて、向ふの仙人の本流との境につき出てゐる森林に蔽はれた尾根が邪魔をし、仙人の頭は見えない。

仙人湯 池の平 内藏の助平

七月二十一日。昨日は大分惰けたので、今日は午前七時に出發する。本流の雪溪を上らず、野營地の前の雪の上を登つて行くと、だん／＼左の方へそれてしまふので、已むを得ずミヤマハンノキ、ナカマドの藪をかき分けて、右へ／＼と横ぎつて、仙人山の肩の方へと登つて行つた。藪の間の平地のやうな斜面には雪が溢れるやうに残つて、雪の解けた草地には、イハカバミやミヤマキンバイ、チングルマなどが若々しく咲き亂れてゐた。

暫く登つて藪を出抜けると、仙人の頭から左に下つてゐるなだらかな尾根が見えて来る。すると、その後から、そのスロープを越して、トサカのやうな恐ろしい岩峯の群が、ひと塊まりになつて浮び出てゐた。今日迄は、谷底から遠くに、又は漸次に山を仰ぎ見てゐたので、左程驚歎する程の印象を受けてゐなかつたが、今朝のは全く突發的なので、私は恐ろしいものを見たやうに、暫くの間だまつて行んでゐた。

劍の一角であると云ふことは頭に浮んだが、餘りに立派なので、その何處の邊であるかを疑つた位である、漸くそれが最も峻險な小窓の頭で、然も三窓の頭と重なり合ひ、八ツ峯の最後の高峯迄併せて、その鋭峯を挺んでゐるので、この岩頭の集りを一層崔嵬たるものにしてゐると云ふことが分つた。

私は先づ、朝日を吸ひ込んでゐるその岩の肌の美しくしさに魅せられた。紅玉のやうな光澤を以て、東方に向つて傾きながら、競ひ立つてゐる叢峯の雄姿を眺めてゐると、何時の間にか私の心も身體もその方へ引き寄せられてしまつた。淡碧の朝空が冴えて、その面に岩峯が一つ／＼に磨き出され、その皺や地衣などの濃淡が鮮かに指摘出来る。幾つもの岩頭かつゞまつてゐる真中から、殘雪が幾筋も割れ込んで、偃松の群が水晶の中の草藻の様に、蒼紫色に呼吸づいてゐる。

私は後から登つて來る山人達を手招した。彼等も暫くの間佇んで、初めてこんな山を見たと云ふ様な驚きを以て眺めてゐた。

仙人の乗越を登ると、左の方に八ツ峯の劍澤寄の最高峯を起し、それから三窓の頭につゞく、鋸の齒の様な岩尾根が、どれも皆頭を頂上の方へ傾けて、重ねたやうになつて目白押しに並んでゐる。尾根が全體に現はれて見ると、どう云ふものか、初めて目に入つた時程の、強い感興を惹かなくなつた。美しい朝空も、何時の間にか、煙草の煙の様な軽い雲が浮び出して、八ツ峯の上を順にからみながら、小窓の方へと延び上つて行く。劍の絶巔は三窓の頭にかくれて見えない。

私等はそれから仙人の乗越を向ひ側に下り、斜面に付けられてある路を、池の平の方へ廻つて行つた、處々小谷の殘雪を踏んで、午前十時頃に池の平の飯場のある所へ出て、小舎の爐邊で休む、今朝しがたまで誰かゞゐたと見えて、爐はまだほとぼりて暖い、櫓をくべて湯を沸し、茶を入れ、早いが中食を少しばかりとる。



冠花ノ耶氏丸影



オリアノ谷の各津點附近より奥嶺山を仰ぐ

小黒部谷の方から騰つて来る濃霧が、澄んだ朝の景色を抹殺してしまふと、馬鹿々々しく寒くなつて来たので、外套を羽織つて、小屋の外へ出て見る。五つ程建てられてある飯場の一つが、倉庫にあつてられてゐるが、戸は壊れ中の物が亂雑に散らばつてゐた。そこには帳簿や傳票や筆墨などが、卓上に置き去りになり、蒲團が幾十枚となく積み重ねられたまゝ、腸の様に綿を出して、食糧や味噌なども、澤山貯藏されたまゝ、腐敗してゐる。鑛山に要する道具や、ワイヤなども、所せまき程置き捨てられてゐるのを見て、私はその浪費の甚だしいのに驚いた。勿體ない話で、この鑛山の所有者が莫大な損失をしたと云ふことが想像出来る。これも劍の様な靈山の咽喉へ穴を開けた、天罰だとだけかゞ云ふ。

私はこゝへ来て思ひ出したのは、先年伊折から早月川を上つて、杉の平の鑛山事務所を通り過ぎた折、事務所にある係員が、僅か數十圓の月給を支給されてゐるのに、土曜から日曜にかけて、殆どかかさず、魚津へ出て酒色に耽つてゐる、その暮し振は、數百圓の月給取でも出来ない程の、贅を盡してゐると云ふことを聞かされた。大窓の方から早月川の尾根のマツヲ平に架けられた索道も、恐らく此頃では古い棕櫚繩の様に、赤く錆びたその醜態を、白萩川の上にぶらさげてゐることであらうと思はれる。利に敏い人達が、その勞力を以て自然を征服せんとあせつてゐるのが、打算が覺束なくなる、何時の間にかこそゝと影をひそめてしまふ。その跡を、自然は黙々としてその根強い威力を逞うする、回復は時日の問題で、やがてまた禮讚者の目を喜ばせる時は廻つて来る。

小屋は皆傾き壞て、その内の稍頑丈なものでも、改修しない限り一二年で地に委してしまふことであらう。残雪が小屋の前の平から池を埋めて、谷までも續いてゐる。中食をとり暫く遊んで午後一時出發。小屋から池のある平に降り、そこから一段落ちてゐる處を雪の上を避けて、小藪と岩石の間を縫つて、小窓の雪溪の上へ降り、やがて三窓の雪溪から劍澤の出合に出て休む。

雲が多いので三窓の雪溪も小窓のものも、上までは見えない。日にあぶられた赤い色の薄霧の間から、時々強烈なる日が射し込んで來ると、あたりが急にきら／＼と光る。暫く見なかつた溪流はまた私等の前に躍り狂つてゐる。それを見ると私はその先の劔澤を覗いて見たくなつた。

出合の上手で劔澤を横ぎり、楊や白樺などの林の中を行くと、大町の直吉が休んでゐる。後から來る客を待つてゐるらしく、金作と何か談を交へてゐる。

劔澤に分れて、ハシゴ谷の方へ入ると間もなく、雪溪の上に出る。數町で谷が左右に岐れ、左のは黒部別山から直接に出てくるので、この上は可なり急の様である。私等は乗越から來る右の方の澤へ入つて行く。尾根の茂みは随分えらいが、雪溪の上は緩傾斜の坦道になつて、内藏の助平へ入る乗越の上までは至極樂な道で、私達は劔澤の落合を午後二時に發つて午後四時に二〇〇五米突の乗越を出た。然しこれがもし時期が遅く、雪が消えた跡であつたら、それこそハシゴ段の様な岩の段を泥土をふみにじり、水に逆らつて上るので、可なりの惡道となる。

乗越の上から内藏の助平がよく見える。立山東面の盆地の底に、コゼンダンの丸山（假稱）のぢぢりに、毛氈の様な美しい草原が、周りの蒼黒い林の中に鮮麗な青緑の姿を展べてゐる。今夜は彼處で泊るのだと思ふと、私の爲に、都會の一流のホテルを準備されたよりも遙かに嬉しい。

ハシゴ谷の今登つて來た側は、雪溪續きなので樂をしたが、乗越から先をのぞくと、恐ろしい灌木と竹の密叢で、うんざりする程茂つてゐる。然し降りなので、大した苦しみもあるまいと、午後四時にその方面を真しぐらに、と云ふても根曲笹につかまりながら、後ろ向きになつて、づり降りて行く、手さへ取りつぎに、しつかり竹を握つてゐさへすれば、足は少し位いぶらさがつてゐても大事はない。降るに従つて藪は益々猛烈になるが、約一時間程で、細い空澤に出る。その上を左へ廻りながら降つて行くと、勾配が緩かになり、やがて黒部別山の中央部から出る澤、——これも空澤——との岐れ口

に出てそれから少し先で澤に別れ、今度は山毛櫛、樺などの闊葉樹の深叢、晝尙ほ暗い程の奥へ、好い加減に方向を定めて入つて行つた。三十分程林の中を潜つて見たが中々平に出さうもない。もう午後六時に近い。こんな處で日が暮れては大變だと思ひ、もとの處へ引返し數町程降ると、空澤が一段落ちて、そこから非常な勢で泉の様な清流が湧き出してゐる。こゝで他の澤が入るものと思ひ、戻つて搜したが、そんな様子は更になく、乗越の方から來るこの澤が、こゝ迄伏流となつてゐたのが、急に地表に躍り出して、谷川となつて流れてゐるのであつた。

その附近から更に方向を定めて、又平の方へ突進して行つた、今度はさゝめがあつたと見えて、やがて廣々とした内藏の助澤本澤の立派な河原へ出て、それを横ぎり、又暫く林の中を行く内、林が盡きて小溝に出る。向ふを見ると内藏の助平の青草原が靜かに展開されてゐる。溝の傍に小さな沼の様な池があり、その附近が沮洳地になつてゐるので、そこを横ぎり、丈なす大イタダリの叢をぬけて、午後七時、東南隅の乾燥した草地に天幕を張り、夕餉の支度を始める。

黒部別山へ

私は大正六年七月、早月川の尾根から劔越へをやつた時に、立山東面に入り、黒部別山や内藏の助平を探つて、御山澤の方へ出るつもりで豫定をした。然しその時分には、未だ立山の下の黒部川が、どんな様子になつてゐるか、黒部別山の岩壁がどれ程立派であるかを、一向知らなかつたのと、劔の頂上へ登つて、立山東面の盆地を見下ろした時、肝腎な内藏の助平の青草原が見えないのと、その周圍につゞく山々を埋めてゐる、濃厚な森林と藪ばかりを見たので、尻込をしてこの東面入りを果さなかつた。

然しそれにもかゝらず、佐々内藏の助成政が伊折から大窓を越えて、立山の東面に入り、内藏の

助の岩窟で泊つて、内藏の助澤を降つたと云ふ傳説のことを考へ、その岩窟が黒部川に向つた處にあつて、そこから黒部の溪水がよく見える、内藏の助の瀑が十數丈の瀑布を懸けて、兩岸に迫る岩壁は幽麗峻嶮であると云ふことを臆ろに聞き覚えてゐたので、その内には是非一度探らなければ、氣がすまない處の様に思つてゐた。

七月廿二日。静かな内藏の助平の夜營と、今日一日滞在すると云ふ情氣の爲、よく寝こんでしまつて、目覺めた時には、日が既に三竿に上り、周圍の山々を照して、原はまばゆい程の明るさにひたつてゐた。時計を見るともう午前七時を過ぎてゐる。

黒部別山へ遊山に行くので、野營地はそのまゝにして、午前九時過、平を後に、昨日苦しんだ藪の中を、朝露を浴びながら本流に出て、それから昨日より好い處を捜しながら、空澤の方へ上つて行く。途中で大イタドリの茂つた三町四方位の原へ出て、巨岩の上に乗つて休む。周りが密林なので眺望がなく、内藏の助澤の上流の方が見える丈であるが、真砂から續く尾根の小谷や窪地には雪が随分残つてゐて、その周りに茂つてゐる灌木が、偃松の様な鮮かな色を見せてゐる。又暫くすると、同じ様な小さな平に出る。この附近には内藏の助平の草地の外、森の茂みが剥ぎ取られたやうに兀てゐる小さな草地が處々にある。

午前十時頃漸く空澤へ出て、少し登ると、昨日目印にしておいた、黒部別山へ上る澤の入り口に出た。上部は薙の様な空澤で、初めの内は傾斜が緩やかだつたが、登るに従つて峻急になつてくる。一時間程上り、細い残雪の上に出る。狭く急なので林との間を辿つて、山稜間近い崩れの上で、岩に腰を下ろし、立山の方を見ながら一息入れる。

先刻から氣になる程、鮮かな残雪をちらつかせてゐた、立山の別山は、内藏の助平を隔て、最も近く、最も大きく、颯爽たる英姿を挺んでゐる。遠山川の上流から上河内岳を見た時のやうに、そ

してその正しい三稜形の、大きな壁の間の縦谷には、目覺ましい殘雪が無數に眞砂の谷に向つて放射されてゐる。壯麗な雪の山を、澤の左右から茂つてゐる針葉樹林を隔て、望むので、一層さらびやかに見える。私は立山の別山に對して、この山を黒部の別山と云ふ名をつけたのを好いと思つた。

右手の森の間から劍の雪が光る。左手には群峯の盟主立山本峯が、富士の折立から大汝、その後ろに雄山の一角と折れ重さなつて聳えてゐる。その豪宕な岩骨によつて飾られた山の肌、壯大なカールから懸つてゐる、縦谷の美觀、それはとても彌陀ヶ原からの賽者の伏し拜み得られない秘められた立山隨一の偉觀である。

雪から上は山稜まで崩れになつて、峻急な山坂は、崩岩が砂礫と共に積み重なつてゐる、こゝ一呼吸が難所なので、登り切ると、少しの間藪を潜り、林を分ければ、黒部別山の頂上に續く山脊に出られる。

登つた所から東南のつるは可なり低下して、二三〇〇米突の三角點をその突端に起してゐる。左へ頂上の方へ、小さな隆起を越して藪と矮林の間の切り開けを行くと、ハシゴダンから續く所に出る、もうその先は二つ位の隆起で直に最高點で山の様子がなだらかに美しくなり、殘雪が所々見えて来る。頂上の下の丸い草原の斜面の處へ出ると、私等は期せずしてそこへ腰を下ろした。午前十一時半。

草原の西寄は唐檜、唐松、梅などの林や灌木の藪が防風林の様になつて、長細いこの山の頂を限つてゐる。その間から、劍岳はもう鼻先に見える。三窓の頭から小窓の頭、大窓の山や池の平、仙人山など、過ぎて來た谷や山の姿が、一眸の下に明瞭に指摘出来る。見る位置が變つたのと、優秀な展望臺の上から眺めるので、何時まで見てゐても飽きると云ふことを知らない。慾を云ふと劍の肩幅があまり廣過ぎて、あぐらをかいてゐると云ふ感じもないが、平藏澤と長次郎澤との間の尾根か

ら、特立してゐる二つの瘤の様な岩峯、八ッ峯の第一峯、それから小窓の頭など、すばらしい峻嶮をもつて劍の頂上を圍繞してゐる。その真中に光つてゐる長次郎澤の雪溪の上部は燦爛の美を呈し、三窓の雪溪は刃の様に鋭い。見てゐても動悸がする様だが、大窓の丸い頭から、池の平のなだらかな雪の窪地や、仙人の尾根の緩やかな傾斜の方へ目を移すとき、頭の中が漸く平靜に返る。

雲が多いので、劍の頂はかくれ勝で、早月川の方から断え間なく潮の様に押し上つて来るガスの塊りが長次郎澤の窓を越すと、大きくバツと擴がつては、巔に近い處をポカシてしまふ。やがて晴れることゝ思ひ、氣永に見てゐたが、中々晴れさうもないので、草山を登り、小藪を踏み分けて、北の頂上の峯つゞきに出ると、後立山の方が展開される。この方面は藪が少なく、残雪と草地が続いてゐる。森林が一しきり茂つて、立山側の方が見えなくなると、黒部谷の方がよく見えて来る。

會て劍の頂上から眺めたとき、この山の巔の中央部に、水溜りの様なものを見たが、それは確かにこの雪であつた。雪の續いてゐる側は、草地や平かな岩壁の露出で、緩傾斜の丘が、幾段にも黒部谷の方へ續いて、短かい草原の中には、白根葵や車百合などが美しく、紫紅の手を擴げてゐる。その上を縦横に、清水のやうな雪解の水が、ちよろ／＼と流れてゐる、こんなやさしい草地の水が、下廊下の絶嶮に薙ぎ込んでゐる黒部別山澤となるのかと思ふと、私は何となく好奇心をそゝられる。

この下が恐ろしく複雑な壁つゞきで、ある所は千米突以上も階段の様な立壁の連續になつて、それが劍澤の落口から内藏の助澤の落口迄、殆ど下廊下全體に亘つて左岸を占領して、日本に比類ない絶大な割れ谷の、側面を爲してゐるのだから、恐らく日本アルプス中での長大な壁の持主、黒部川の王様と云ふても決して誣言ではあるまい。

頂上からは、黒部の水はあまり見えな、新越澤落口の下あたりのと徒渉點の下の方が少し見えたと思つてゐたが、北寄の三角點から遙に下の方へ下らなければ、黒部川の縦觀はむづかしいらしい。

先年下廊下から後立山の方へ匍ひ上つた尾根筋も、その岩壁の露出も岩小屋澤の支尾根二〇六七米突の三角點の附近の森林、その上の美しい草の大斜面などがよく見える。

私は頂上で暫く休んでゐたが思ひ出の多かつた山旅のことを回想するにつけ、忘れ得ない山々の中に、私はこの黒部の別山と云ふものを秘めておくことが出来たことを、幸福に思つた。

晝過ぎから雲は深くなつて、午後二時頃には霧の去來が烈しくなると、後立山の方で雷鳴がひき白をひく様に響いてくる。その方を見ると、針の木岳スバリ岳赤澤鳴澤の連峯が氣味の悪い雲の下に澁面を作つて、その谷々からもや／＼と煙の様な雲霧を吹いてゐる。劔ももう上半身を密雲に閉され、立山の方の空も何となく騒動しくなつて來た。山上は風が俄かに強く、身體が冷えて來たので、急に歸りたくなり、もと來た道を辿つて澤へ下り、それから空澤に出て、伏流のつきる邊から尙ほ澤について降つて行く、雨がバラ／＼とやつて來た。然し此方は夕立がそれたらしく、大したことはなかつた。歸途は藪の中を潜らない算段を考へ、本流との落合まで降つて見る。それから内藏の助澤を少し下つて見たが、水は大きいのに、もう食糧がゆるさないので斷念して、出合から本流を溯り、小さな瀧の落ちてゐる數間上手の、藪の中から落ち込んでゐる小流れについて上つて行くと、間もなく内藏の助平の東南の隅に出て、白樺の間を漫步して行く内、ひよくり天幕の傍に出た。歸途は頂上から約三時間を費した。

内藏の助平

立山の東面には、巖岩の間に喰ひ込んでゐる大きなカールが七つもある。その中央部の、富士の折立と眞砂岳との間にあるものとを併せて、雪の縦谷を形ちつくつてゐるものが内藏の助澤の源流を爲し、その雪溪の雪が解けて泉の如き美しい谷水となり、御前澤とこの谷との間から、北の方へ下

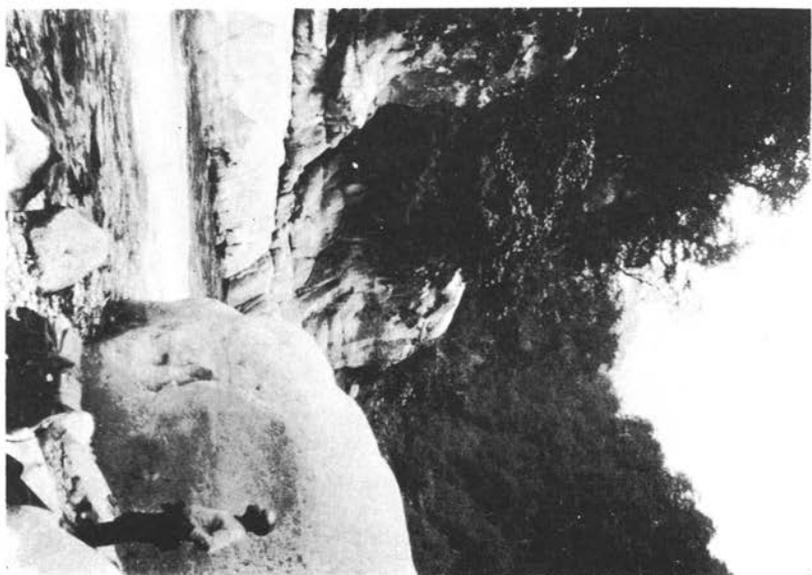
りてゐる長い尾根先を廻るあたりから一面の高原になつてゐる。そこが内藏の助平で、東西約十五町南北三十町程の廣さを持つてゐるが、その劍澤寄の三分の二は、十數年來斧鉞の入らない闊葉樹の森林と、根曲り笹の密叢とになつてゐて、南隅三分の一位が青々とした草地を展べてゐる。

そこには雪解の水を湛へた、四周の山や林の影を蘸してゐる小さな池があり、清水のやうな美しい溝川が原の縁を流れ廻つてゐる。この原の東南寄の隅の方には、白樺の林が茂つて、その後ろの岩壁近い處には丈の長い偃松や楓などに交つて、石楠花の桃色の花が寂しく咲きみだれてゐる。今は時期が早いので、山草はあまり開いてゐなかつたが、梅鉢草、白馬フウロ、岩カガミ等の花が處々に見え、大イタドリ、蓬、シ、ウドの密叢が原の隅々に蕃殖して、池に近い處は廣い沮洳地になつて、藺の類が一杯に生え蔓びこつてゐた。

この二三日は毎日雲が早くから出て、晝間の展望を妨げられ勝だが、朝夕は随分よく晴れてゐるので、清々しい野營を樂しむことが出来た。

夕方など空が名残りなく晴れ渡り、金樺色の光りが東方に流れて、黒部別山の頭顱が赤く輝いてゐるのを見てゐると、黒部谷の方から、岩燕が群を爲して翔け上つてくる、暫くの間、木の葉の如く上空を飛び交してゐたのが、いつの間にか見えなくなると、夕暗が徐ろに山裾から迫つてくる。その内に森林や、小流れの上が夕靄でつゞまれて、静寂なこの平は、更に寂寞たる夜の領域に秘められて行く。私は酔つた人の様に、そゞろ心で原の中を彷徨つてゐたが、身邊が急に寒くなり、夕星の光りか追々冴えて來たので、天幕へ戻らうと思ひ、草叢を横ぎつて行くと、數歩先の草が波を打つて、がさがさと何かが駈けまはつてゐる、杖で追つて見ると、小兎が二三匹飛び出して、夕暗を山裾の方へかくれていつた。

内藏の助平の夜は、今迄の野營の内一番物靜かで、遠くに内藏の助本流の瀬音がさゝやくだけで、



東谷落合附近



東谷の落口より黒部川下流を望む

冠松次郎氏撮影

風の無い夜は陰沈として、焚火の明滅する光りが、時折夢を驚かす位であつた。然し明方三時頃になると、さすがに寒い、手足の冷える具合が、まるで霜の朝を思はせた。とても寝てはゐられないので、焚火へ枯枝をそへ身體を暖めては天幕に戻り、また暫くの間まどろむ内、凜々とした駒鳥の第一聲が、曉の空気をゆり動かす、もうミンサッイ、ゼニトリ、カツコウなどが、すぐ近くの林で囁り始める、目をさまして寝そべりながら、様々な小鳥の歌に聞きとれてゐると、すぐ後ろの藪の中で鶯がせせこましく鳴き始めたので、私はとうとう天幕からはい出した。

そとは一面の朝霧で、その日の天氣の幸を象徴してゐる。溝川へ顔を洗ひに行くと、氷の様な冷水は漱ぐことも出来ない位で、私はその傍に佇みながら、面白い朝霧の動搖をながめてゐた。霧の扉は上へあがらずに匍ひ下りてくる、頭上が漸く薄らぐと、黒部別山の圓頂が馬鹿々々しく大きくアブリ出された。だんだんにひかれた霞の幕が、追々大タテガビンの横から、黒部川の方へ吸ひ込まれて行くと、森林が水墨の山水の様に、模糊としてとりつぎに現はれてくる。もう四周の山の頂きは、朝暈をあびて、壯麗な赭色の輝きを發してゐる。

テントの前では人夫が出發の準備に忙しい。私等は數時間の後、立山本岳に向つて、内藏の助澤を登り始めた。

内藏の助澤　サル又雪　雄山　室堂

七月二十三日。米はもう殆ど盡きてしまつたが、今日一先づ室堂に出る豫定なので、何となく氣が軽い。

午前六時出發。内藏の助澤の本流を横ぎつて、藪のなささうな處を迂回し、又本流に出ると、澤は緩やかな電光形に折れ曲つてゐるが、その上部が非常に高いのでよく見通しがきく。一町ばかり流れ

を溯り、右に曲つて、残雪の上をひろつて行く内、雪溪の上へ出て、緩やかな登りを行く、もう右手に近く眞砂岳から黒部別山につゞく大尾根の側面が立派な岩壁を露出して、その左が窓の様な凹になつて、その上手は内藏之助のカールを形ち造り、それから悠々と立山本峯が重なり合つて、手のとどく様に見える。その頸あたりにカールから懸つてゐる残雪が三つ、この谷の方へ向つて急な傾斜をしてゐる。

この大尾根と、本峯との間に入つてゐる雪溪の下の股は案外狭く、山側は可なり急峻な岩壁になつてゐる様に見受けられた。これは昨年（大正十年）沼井岩永兩氏の一行が登られた處である。

内藏の助澤の上流は、複雑なよい谷をなしてゐる。左岸立山寄の山脚は岩壁や巨岩の配置が面白く、右岸の長い尾根には森林が殊の外美しい。

左手から出てゐる枝尾根の先を廻ると、勾配が漸次に急峻になつて、數丁先で雪が切れて瀑となる、水は甚だ少ない。それを登りきると、大きなカール狀の棚の上に出る、内藏の助澤はこの棚から右に曲つて、富士の折立の下へとつゞいてゐる。

顧みると、前方の支尾根を越して、大タテガビンの力の張り切つた、黒い岩の瘤が四つ、トサカ立ちに屹つ立つて、眼界を遮つてゐる上から、鹿島槍の上半身が、すつきりと大きく抜け上つて、瑠璃のやうな桔梗色に透き徹つてゐる。他に山が一つも見えないので、この山丈が素晴しく立派に見えた。

私等はこれから上流の方へ廻らずに、御前澤とこの澤との間の尾根の、一番低い所を、サル又雪の方へ越す爲に、眞直に入つてゐる急な小溝を登つて行く、雪が急なのでカンジキを穿つ、そこを登り切ると、瘦尾根の藪の中へ出て（御前澤内藏の助澤の分水嶺）右へ少し下り可なり悪い處を廻りながらへづゝて行き、狭いが緩やかな草地の上へ荷を下ろす。私はこの乗越を假に内藏の助澤乗越と名づ

けた。午前九時半。内藏の助平より約三時間半を費す。

こゝはもう、御前澤の領で、崖側を暫く横に廻れば、サル又雪の上に出られる。草地はキンポウゲ、キンバイ、白山一花、チングルマ等の黄と白の染分の御花畑になつて、その間々に、車百合や白馬フウロの花の赤い色が美しくい模様を織り出してゐる。御花畑の上手は白樺の藪尾根が續いて、その上に高く、富士の折立の一角が、螺螄の様な岩がしらを突き出してゐる。

恐ろしい纒岩の集り、立山表口からの登山者は勿論、劔岳の偉大な岩壁を激賞する登山家達も、未だ立山東面の雄渾なる、岩壁の壯觀を知るものは少ない。ましてその晶麗な大カールや雪の縦谷の均整せる力の抑揚に、造化の神秘を憧憬するものは更に少ないであらう。

午前十時半。サル又雪の上へ出て見下ろすと、そこから谷がガックリと陥没して、その下が又碗状の窪地になつてゐる。雪溪から滲出した水が、浅い流れになつて其の上を落ちて、やがて兩岸の迫つてゐる崖尾根の間にかくれてしまふ。然しこれから御前澤中央部の瀑布までは谷は割合に歩きよい。

カールの勾配は三十度位で、兩岸に近づくに従つて傾斜を増してゐる、タンポ澤の上流と境した岩尾根も立派だが、何と云つても大汝の方へ向いてゐる岩壁の壯麗さは、恐らく立山劔を通じて最も美くしいもの、一つであらう。

暫く登ると大汝の方へ、幅廣の雪溪が入つてゐる。その奥の方を見上げると、筍の様な岩塊の群れが離れ小島のように無數に叢立して、その周りを氷雪が潮の如くに取りかこみ深く大きく急に大汝下に喰ひ込んでゐる。雲霧の中から浮び出てゐるその姿は、數多の佛像が山上より來迎するかのやうな奇觀を呈してゐる。雪が一段急な登りとなると、その先は緩やかな鍋の底のやうな窪になる。數年前私は尾根からこの窪に出て暫くの間降りたことがある。もう尾根はすぐ間近に見えて來たが中々長く途中で雪が大きく、幾段にもなり層を造つてゐる。最後に五六十度もあるかと思ふ、雪の急坂を上りき

○黒部川 沼井

ると雄山の三角點の峯から續いてゐる尾根の鞍部に出る。多分名のない處だと思つて、私はこゝを假にコセンダンの乗越と名づけた。
私等はそれから三角點の峯に登り、雄山に參詣して、午後四時半久しぶりで室堂に下り、翌日は更らに劍への行程に就いた。(了)

黒部川

(鐘釣温泉より平の小屋まで)

沼井鐵太郎

大正十四年八月二十五日—九月一日。

——鐘釣温泉(泊)——猿飛——樺平——シアヒ谷落合(泊)——折尾谷落合——シヤマ坂——アゾハラ——仙人谷落合——吊橋を渡り、東谷落合(泊)——作郎越(日本電力の歩道、新稱)——棒小屋澤落合下流の泊場に泊——棒小屋澤落合——長次郎越——本流右岸、棒小屋澤落合より數町上流の地點(泊)——無名澤落合の下流約二町の地點(泊)——岩小屋澤岳の長尾根に登り、再び本流右岸に下る——黒部別山澤落合の約二町上流の地點(泊)——本流の徒渉左岸、大へつり——内藏助澤落合——ゴセン谷落合——堆山澤落合——平ノ小屋(泊)。

一行 冠松次郎 岩永信雄 沼井鐵太郎
人夫 案内宇治長次郎及野口、安川、宮平、村井、青木助、青木長、白川、山本の八名。

緒言

去年冠さんと岩永君は黒部別山澤南方の大ヘツリで、用意の足りなかつた爲止むなく下降を中止

劍澤 黒部川 棒小屋澤
(棒小屋澤より西に向つて撮る)



冠
松次郎氏撮影

し、内藏助澤を上られたのであつた（本號岩永氏の紀行參照）。爾來岩永君の黒部行きの熱望が益高まつたのが動機となつて、終に冠さんと三人の間には今年こそといふ一致した計畫が成り立つたのであつた。日本電力の下からの道は去年既に棒小屋澤落合附近の泊場までついたので、残つた惡場の通過に三日かけても、全體として大した日數はかゝるまい。然し其部分に於ける考察と實際上の全き準備とが必要である。

私は嘗て大町の佐藤靜馬他二名を連れて東谷（カハラ小屋澤）から下廊下の核心へ近付かうとしたが、其道程に於て既に無理があり、かてゝ加へて食糧の缺乏を來したので、棒小屋澤劍澤兩落合の形態も精査するを得ずして復た國境の方へ辛くも逃げたのであつた（沼井、「大町より下廊下へ」、山岳十五年一號二四——七一頁）。其後長次郎を連れて黒部別山へ始めて登つたのも、實は下廊下に關して何等かの知識を得たいといふのが眞の目的であつた（沼井、「黒部別山と内藏の助平」、山岳十七年二號一九——二七頁參照）。此時は既に前年長次郎を先達とした冠氏が黒部別山澤の對岸迄下つて居られたので（冠氏、「下廊下の記」、山岳十六年一號四三——六五頁）、下廊下下半の通過に關する考察の材料は驕氣ながら略々出來上つたのである。實際には中々思ふに任せず、昨年の行にも私は加はる事が出來なかつた。

但、此等の觀察よりして、恐らく下廊下の未知の部分は所によつて岩石の節理面の向きを異にし、其爲意外に便利な水邊の棚（廊下の裾）と割目を提供して呉れるかも知れないと考へた。此は冠氏と長次郎の見通しによつて最早部分的には肯定的に鑑識せられた事である。同氏の行では其處に礫の存在する事も認められた。又、私は自己の乏しい經驗と諸氏觀察の結果より想像して、棒小屋澤落合を廻つて上流の右岸は、河身の方向が多少東西に傾いてゐる爲却つて岩が順層（*Conformable*）であり、へつりを確實ならしめるであうらと樂觀したのであつた。それにしても棒小屋澤劍澤の兩落合附近は、其

險惡さを少しでも私が知つてゐる丈、最大難關に思はれた。又、黒部別山澤より下流の屈曲部は確かに大問題だつた。其處には長次郎が谷より山より屢々見て、彼の知れる範圍内に於て最も惡場とした、右岸直立數百米の赤瓦の絶壁がある。

然しかういふ奥深い場所は兎に角當つて見なければ眞實分らない。其故今年は出来る限り慎重な態度を取つた。先づ、殘雪の特に多い此夏を過して最も水の少いと思ふ時季（八月末）迄待つ。長次郎に早くから依頼して彼の他八名の入夫を契約して置いてもらふ。入夫を多くした事はへつりや徒渉、架橋の際の作業能率を増す爲である。又、此迄の經驗に徴して登山具も念入りに整へ、赤絲入りの英國製登山綱を百呎一本、八十呎一本、六十呎二本、其他に和製の二重に編んだ木綿の綱約八十尺、計約三百八十尺のロープと、今年始めての試みにピトン（Piton; Mauerhaken）十本を用意した。長次郎の方へも必要と思ふものは持つて来る様に云つてやつた。長次郎からも他の荷は成るべく少くして呉れと云つて來たので、私達はつとめて享樂的食糧品等は減じた。防寒具は谷を行くので不用である。本綿とスレンの寢袋さへあれば寝られる。洋服丈は上下とも毛織の物を一着餘分に持つて、破れた時の用意且立山に登つた時の防寒兼用とする。天幕は不用といへば不用であるが、二百十日をひかへた頃の事として、一行十二名を分けて容るゝに足る屋根型天幕三張を持つて行く事にしたが、支柱は勿論家に置いた、草鞋は長次郎達の手製の緒の丈夫な奴を三人分二十足持つて來させる事にする。此他不足の品は三日市で買ふ事にした。尙又、寫眞は出来る丈撮るつもりで、冠氏は手札形アルペンカメラ、コリニアF六・三の器械でフィルムバック五打を持ち、岩永君はヴェスト形ピコレットのツアイイスF四・五でロールフィルム二十本を持つ。私は記録係といふ役目でノートの他に双眼鏡、クリノメーター、バロメーター、寒暖計等を持つ。初めはもう少し氣のきいた測量器械をと思つたが、荷にもなるし又限られた日の行に惡場での實際的效果を疑つたので、止めた。眞實言へば何も持たずに壯絶な

景色を飽くまで眺めるのが私どもの第一義である。

一 鐘釣温泉まで

八月二十四日。午後七時の金澤行急行で上野を出發する。歐米を一廻りして此月初めに歸つて來た別宮さんが送りに來て呉れる。氷河の上に聳え立つ鋭い輝かしい峯を登つた新歸朝者は、溪谷と森林の美に於て我國が如何にすぐれてゐるかを感得して來た人である。「黒部、お供したいなア」とウエツターホルンの模型を前にして、遠くなつかしく求める様な眼の色を漂はした同氏の面ざしを、私は忘れない。此數年冬山夏山の快き行に大抵いつも連れだつた仲間の一人を殘して山のへに去る事は心淋しい。然し同氏の友情は既に手配整つた私達の首途かどてを毫も亂さなかつた。私は同氏のロンドンで求められた新しい眞白な百呎のロープ（アーサー・ペール製）と、アメリカ製の野營用ズツクのバケツとを受取つてやがて氣持よく別れた。

空は星の夜。下右弦の月も照る。

汽車はすいてゐたのでらく／＼と寢て、いつしか信州路は過ぎ、二十五日の黎明には越後國糸魚川驛に着いた。私達は普通列車の一番に乗り換え、西へ／＼とつゝましげな日本海を右窓に眺めつゝ揺られる。焼、火打の火山の群も岳の色鮮やかながら、なほ深く高く樹山越しに白馬、旭、小連華、朝日等の雪多く殘る峯々と、瀧倉岳のあたりが指されると、バツクの都にて過去の思出、今年の想像に耽り耽つた黒部川の奥の間が、又なつかしやの言葉となる。然し私どもは空想からは明かに離れつつある。話杜とだ絶えて一しひとさり双眼鏡から偃松の深さや雪溪の状態が覗かれる。其内に黒部川の鐵橋を渡る、豫想外に水が少いので、先づ此分なら下廊下もと、冠さんは自信ありげに言ひ切る。私は久しぶりに來た越中の山河、たゞずまひの如何にも鷹揚な、そして何處か引き締つた景色を見て、心が遠

過清淨される様な氣がする。

午前六時四十分、三日市驛で下車して驛前の宿屋に上り込み、朝食をした、める。此附近は有名な黒部水瓜の産地とて、大きなのが店の前にごろ／＼してゐる。食物では中々むつかしい岩永君も水瓜は第一級の好物とあつて、食後早速よく熟れたのを切らせる。此は大和水瓜で、本統の黒部水瓜は未だ早いといふ。大和の方で四貫目位のが十五錢とは安いのに呆れる。

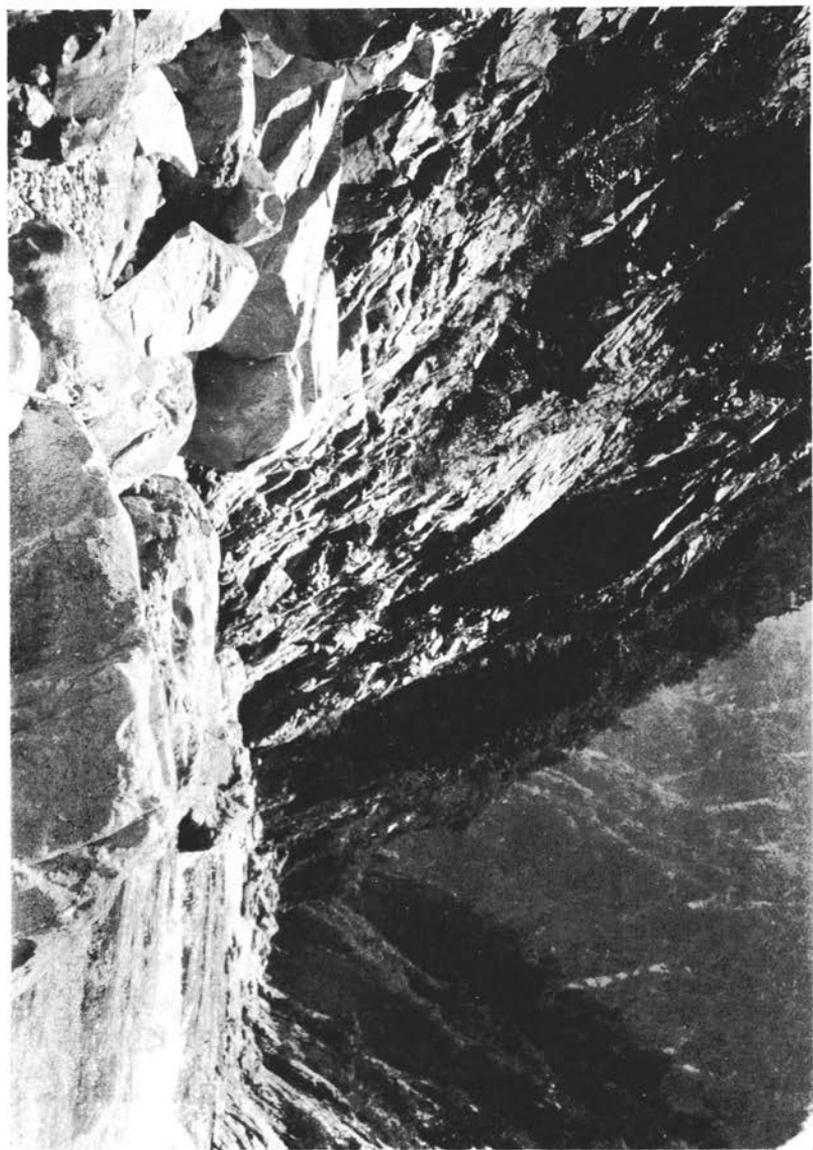
長次郎達は九時頃来るわけなので、其迄の時間を利用して三日市の町に買物に出かける。仕入れた物は木綿の細いロープ百五十尺、麻絲若干、かすがひ五本、三四寸の釘十數本、金槌一挺、鹽引の鮭二匹等が主なるもので、此内かすがひ、釘等を求めたのは谷に入つて對岸に越す際橋又は筏を組む材料に使はうといふ冠さんの考へからであつた。(然し結果から見れば、特別用具としてピトン四本が使はれた丈で、他は悉く豊富なロープが重要な役目を演じたのである。)

九時の汽車ではまだ人夫達は來なかつたので、私達はぶら／＼過して十一時に至つた。長次郎他八名は其時來る。挨拶もそこそこに黒部鐵道の小ざつぱりした電車に乗りこむ。今度は皆始めての人ばかりである。御本人の長次郎の身體は大分いゝがどうも頭が病んで困るといふ。思ひなしか彼も白髪が大分増えて顔面もゆるんだ様だ。

電車は前々から都會化した女連れや遊山でもする風體の人達が多かつた。此は皆宇奈月に入沿がてら遊びに行くもので、初めはあんな山の中へ行くにしては少し變だと感違ひしてゐたのだつた。此電車は一時間ばかりで宇奈月に着く。途中愛本までは黒部川兩岸の峽入口の山の襟が見える丈で變つた事もない。愛本では愛本橋から餘程離れた所を通つてしまふ。それから兩岸の山肌を直かに見て行く。長いトンネルを地下水のしぶきを浴びながら走り抜けると、所謂文化式建築の宇奈月停車場が見れる。あたりは以前から見れば驚くべき程變つて、宿屋、料理屋食物店等が數十軒立列び、遠慮なく

影撮 氏耶次松 冠

(る通を側左てつ向ち即岸右) 手上の點流合澤屋小椽



新開地温泉郷の悪臭を發してゐる。そしてなほいやなのは此處が登山根據地の様に宣傳されてゐるからだ。其のつもりなら以前の如き口元黒部の落付きを何とか残して置いて然るべきであらう。よく物の本に見、人の話に聞いた黒部の玄關が斯く迄荒されては、滔々たる時勢、誰かよく下廊下の絶美こそ破壊されないと言ひ得るだらうか。

私もは一秒間ももどかしくいそいで晝の仕度を整へて、午後一時半頃其地を離れ、右岸へ渡つて、山奥の縁に包まれた古い温泉場へと線路道を行つた。日は光耀と輝いてゐたが、川の面から涼風が起つてゐた。黒部下流の峽には今、日本電力の電車線路を敷くとて、かしがましい工事が始められてゐた。群れゐる工夫、材料運搬の鮮人、荷を負ふ女達、口髭の生えた測量師らしい人物、轆る電車、仕上げ終つたトンネル、未だ終らざるトンネル、はつばの音生々しい破壊の崖と碎岩の堆積、廣々とした小屋場、そんなものが混つて私達の眼を刺戟し脚を疲らした。黒部川の水は屢々碧い淵と湧き立つ瀬波の只ならぬ景を示したが、其は餘りに騒音と雑影の満ちた内に己一人を持する姿であつた。恐らく鐘釣迄電車が開通した曉には此口元も以前とは違つた意味ではあるが、自然に近付いて來た人達の心に清楚な趣を見せる事であらう。今は只一時も早く去つて、自からなる森の下道を我が足下に踏みたい願ひのみで一杯である。

三時、森石澤を過ぎ、少し行つて線路を離れた。十五分過には黒部での大きな支流の一つ、黒薙川に架した橋を渡る。此川の上流にも工事は行はれ、遙かにダイナマイトの岩を崩す音が聞える。黒薙川に添ひ稍上つて曲り角で休み、人夫達を待ちながら、木暮、田部兩氏の此谷の奥、エブリ谷の旅を忍びつ、其の緑深い境地が電力供給地と成り行く悲しき運命を考へる。しばし經て人夫達が上つて來る。其後からホワイトシユース輕々しく(?)湯場廻りの遊山客が二三通り過ぎる。やがて我々も立つて、日のかげつた山の鼻を越し、下りにかゝつて再び黒部本流の右岸を行く。四時十五分、出シ清

水といふ所で水を飲み休んだ。其先には出平(デダヒラ)といふ停留場になる所があつて、其邊から谷がよく見える。左岸の鐘釣岩見たいな岩壁に眼が留まつた(黒部川は愛本より入るとすでに山は急峻で崖が現れ始めるのだつた)。次に出シ大谷といふ地點があつた。

五時十五分といふに猫又谷の落合に着いた。美しい此の落合の水色も、あたりに大きい工事場が建ち、幾十といふ人の働いてゐるのを見ると、興ざめがして停まる気にはなれなかつた。然し此谷を過ぎると漸くトロ道に離れ、浅い森の下蔭を行く様になつた。とある岩に腰をかけ、木の間を通して谷のざはめきを覗き、又人夫を待つたりした。バロメーターを見ると氣壓は七十耗ばかり低い様に思はれた。

それから空腹の脚は、先の岩屑を敷きつめた道の行にほてつたまゝ、稍々重げに運ばれて行つた。行々仰いだ高い攀ぢ難い東鐘釣岩の下を廻つて進むと、對岸の澤に一塊の残雪が横たはつてゐた。六時十分、崖際から吊橋を渡る。其袂近く、新鐘釣の温泉は大岩と相擁して建つた様な宿であつた。川を覗きこむ浴場は開放されて、裸かの人が立つたりしてゐた。橋を渡り越すと左岸五町にして此夜の宿り、鐘釣温泉場に着く。時に六時二十五分。

丁度入湯の盛りで満員だとあるのを、頼んで私達は家人の一室をあてがつてもらひ、長次郎達は上の薬師堂に泊る事になつた。あの長い道を下りて積の湯にも行く。混雑してゐるので、中村清太郎氏の麗筆によつて豫想してゐた趣は、私には起らなかつた。宿に歸つて食事後横になると、もそ／＼と例の蚤が皮膚の上を歩き廻つた。此にはひどく弱り然も退治の下手な私は遂に全滅を期する事は出来なくて、此旅、下廊下の清浄境までしよつて歩かなければならないのだつた。其夜は暖く、窓の所でも十時頃二十二度半位であつた。

二 東 谷 落 合 に 到 る

山道はまこと八月二十六日の朝より始まる。温泉で米、味噌其他一週間分の物を仕入れて、七時三十分にいでたつ。二町上にガラ谷といふ名所がある。岩稍灰色の積で、さして美しい罅間でもない。百貫山は緑の樹もて衣を織り、岩兀をくるんでのさばり立つ。仰角三十五度。此のあたり流石立秋の頃をへて、樹々の葉色少し褪せ、小粒の實さへ其蔭になつてゐる。

八時、さゝやかな峠の上。百貫山、名劔山をかたへに、遙か源には大窓續きの淋しい雪の山が現れてゐた。下り道となつてヨヘラ谷といふ稍赤味ある小さなガレ澤を通る。本谷は遙か下の所で、感じのよい流を見せる、百貫、名劔の莊重な姿を眺めるにも適當である。八時四十分、ウド谷。此は傾斜に緩く稍大きな左岸の澤である。一休みして蟬の聲水に響くを聞きながら、漸く黒部流域の、山は幾重にも襟を合せ、峻しく谷に落ち入つて、森中に光る水、谷奥にたゆたふ雲の、色映えの引き締り行くのを感じて来る。山際の森林はまだ闊葉樹ばかりである。小屋ノ平といふたらくぼみを通過し、九時三十五分には小黒部谷落合の吊橋を渡つた。

私達は此橋で始めて深山に近付いた気がした。狭いが岩を削る小黒部の流れより、岸を傳うて本流の方へ通ずる道跡がある。此も水電工事のさきがけのもので、ポルトを打つてあるので先づ容易にへつる事が出来る。そして本流左岸の廣い岩棚の上に立ち、沸騰する流、狂奔するタルの止むなき躍動の姿を眺める。此場さへも文化の責苦に遭ふた都人には瑠璃の光彩である。それを何事ぞ、峽谷の秘密は今金力によつて發かれ、變裝の止むなきに至つてゐるのだ。

水は本流より小黒部の方が冷たかつた。人々は湯の匂がするといつて鼻をひく／＼さした。十時十分出發、五分ばかり登ると峠路に來る。即ち右は「池ノ平通路分岐點、標高二〇〇〇・二六尺」と標木

がしてある。我々は左して數分後に切通しに出た。道はそれから方向を變へて上流本谷の河身に向つて下る様になつてゐる。奥鐘山が此方からは木山に見えて突立つてゐる。だら／＼と下ると左手下に名もしるき猿飛の名勝が現れる。空晴れて常より明るき空氣を通して、私達はまざまざと其光景に見入つた。魚の肌の如き黒ずんだ藍色の水が峽中をと／＼と流れてゐる。漸く現れ始めた黒部杉は崖際にもたれ聳えて一段と深味を添えてゐる。歩を進めて上流を覗けば、又此方が谷の景色は軟かくてよい。折しも岩魚がさりとタルを躍り越えるのが見えた。この邊の岩は白味と青味交互してゐる。

十時五十五分、分れ道。一行の進むべき黒部歩道は右であるが、中食の爲左へ下つて、袂に「東洋輕銀會社樺平測水所」と書いた札の立つた吊橋約三十五間を渡り、祖母谷川の左岸に来て腰を下ろす。川水を汲んで来て中食後人夫達は晝寝をし、岩永君は溪水をレンズに入れるとて大分下の積に下り、私は長い吊橋の上に腹這つて、本流の水の迅く走り去るのをぼんやり眺めたりした。水に流されてしまつた祖母谷温泉の昔物語、鐘釣が第二の宇奈月となる頃には其處も新たに宿が建つて、豊富な湯量と幽邃な紅葉美とが人を呼ぶ事にならう、第二の鐘釣になるのも遠くあるまい、などと冠さんは思ひを述べられた。

曇り日となつた正午、元來し方より黒部川右岸の歩道を踏み分けて行く。稍上つ方にて右方より涼氣が襲ふ。其は自然に出來た風穴の一種で、岩の積まれた間を何處ともなく吹いて來る。出口の一で測つた温度は五度半。珍しさに若干の人と共に十分ばかり居残つて、冷やかさに足のだるくなつた頃、又ふはりと熱い大氣の内に身を傾ける。十二時半、中年の榊生ひ茂つた段地の上に来た。此が樺平で、乃ち日本電力の事務所のある所だ。先頭の冠さんは一町程下の小屋に立寄つて道を聞いて居られる。初め長次郎が木暮、中村兩氏の伴をして助七の案内で行つた路は、私達の來た通りの方向に辛じて跡を見分くるのみの草埋みとなつてゐる。上つて來られた冠さんは小屋に一人ゐた男が教へたと

云つて上の道を指される。其は古い路から高みへ折れ曲つて行く、今年伐採の仕立下ろしの道なのである。

道はいきなり登つて行く。其に従つて奥鐘稍々尖り、谷の奥山も見えて来る。九十九折の細徑は峻坂を攀づるので、荷の重い人夫達は間もなくおくれしてしまふ。たゞんだ絲立一つの他何も持たない長次郎と三人のみが、急ぐともなく知らぬ道の不安より餘り休まずに行く。陽の現れて又隠れた空は夕立の氣がしてゐた。一時近く汗ひききに二十分程休んで、尾根にかゝると、其處に脆い元岩があつた。豁然として南方の山澤が現れる。紫黑色を呈した奥鐘の大峭壁は俄鬼谷の山を背景として黒部の大割れに望み、流石廊下の弟たるに恥ぢない。東の方、祖母谷の澤筋は緑の大塊に喰ひ入つて、高き極みに残雪まとふ假松の山、あたりに赤元二條をかけて横はつてゐる。この元は祖父谷の奥であらうか。

道はなほもさかしく續いた。遠山は屢々眺められた。一時半頃、梯子を架した所には「大、十四、八月、日本電力」の文字が見える。バロメーターではすでに二百米近く登つてゐる。カケスの聲を跡に涼風に吹かれて進めば、道は山腹に横移りして下り氣味となる。ワイヤアだのポルトだのが傍に置いてある。と、人聲が聞える。近付いて尋ねると此道は今開鑿中だといふ。成程一廻りした向側にはカチン／＼働いてゐる工夫達が見える。いづれはこの通り殆ど水平に持つて行つて（凡九六〇米のコンタライン）、東谷對岸に同様作業してゐる道と一致させるのだ。出来たら東谷の根據地迄材料食糧運搬の用に供するのださうだ。私達は折角三百米も登りつめてこの様に呆然としてしまつた。そして小屋の男の信じ難い事、或は商賣がたきの様に思はれたかも知れぬ事を今更に知つた。初め冠さんも、前に來た時には小屋の下から川岸近く行つた様なのに、男はそんな道はない、上のが本統だと斷言したさうだ。尤も彼は新參で仙人谷迄も行つた事がないのだつた。

二時、皆は中ッ腹で駆け下りて行つた。重荷を負つた人夫達の憤慨は無理もなかつた。二十分にし

て私達は樺平の小屋に着き、男をなぢつた。彼はしきりに其不明をわび、茶を入れて呉れたりした。人夫達は十分程してから私達と合した。二時間も空費し、大切な人夫を疲らしては、豫定通り折尾谷かアソ原で泊る事は無理になつた。

二時四十五分發。私達一行は小屋の下から少し上り、榎林の中を横に行つた、忽ち谷筋が隈なく見渡せる所に出た。黒部川は殆ど直線的に此の所シアヒ谷の手前迄顯はれてゐる。露出した崖は未だ高くはないが、秋近い森に包まれた兩側の山脚は川中に折り入つて、典型的のV字状谷を示してゐる。岸べには礫のとびくにある様、川中には花崗岩の巨石飛び立ち、碧流を邀へて往々白く相撃つ色相、其は水少しといへ、實に黒部の美しい特徴である。打仰ぐ左壁（右岸）、奥鐘の絶壁は一段と水態に生氣を興へてゐる。

夫から涸澤と水澤を経て稍々濕つた道を下りつゝ、三時二十分にシジミ坂登口に着いた。シジミ谷といふのは黒部本流に入る水無しの崖谷で、狭いながら恐ろしく急な悪場なのである。道は一旦本流水面近くの礫に下り立ち、それから此崖谷の急場に立てかけた高さ十二米ばかりの梯子を登つて行く。入口には可成り高い尖頂塔状の雪塊が直立してゐた。對岸奥鐘の削壁は美事なものであつた。梯子が終ると左して裸か岩をへつり、上の荒れた窮谷、岩登りの遊びに選ばれさうな箇所を振り返り惜しみつゝ再び林叢の内に入つた。シジミ坂附近からは全く黒部を溯る氣分に一貫して來た。谷の見通し、緊張味の始まり、そして谷の匂。

思ひ切つて斷ち割つた一片の様な奥鐘山を眺めて、あの頃木暮、中村兩氏が其絶巔から瀑となつて落つる雨水に壯快を叫ばれた事を憶ふ。其時は此道も出來てなくて、一上一下岩魚釣師の怪しげな跡を拾ひ、シジミ坂などはもう少し上まで登られた様であつた。四時近く、山際を廻りこむと危い吊橋がかゝつてゐる。長さ八米ばかり、澤は小深く削られた一のガレ澤である。之を渡るとすぐ先にも一

つ吊橋がある。長さは前の凡そ倍あつて、澤も見るからに險惡な割れ谷をなしてゐる。橋を過ぎてからは道は次第に下つて行く。四時十分にはシアヒ谷（仕合谷又は志合谷、いづれも宛字らしい）落合に着く。

此落合は磧が廣い（凡一町程）。もう大きな石がごろ／＼してゐる。黒部川は夫婦岩の關門にしめくくられてより、東側にかたよつて流れてゐる。奥鐘の聳えた他特別に奇とすべき景ではないが、少くとも第一日の野營地としては迫らず、嶮しからず、夕暮の空氣は氣儘に水と和し、草の葉を撫でゝゐた事がよかつた。心伸びて私どもは夫婦岩の一に立つたが、此上の見晴らしと俯瞰は豫期を満足しなかつた。それからシアヒ谷に登つた。其處にもすぐれた景觀はなかつたが、飛泉を越え、久方振りの残雪に接してすが／＼しくなつた。下ると人夫達は三張の天幕を稍高みにピンと張り、食事の支度も整へて、今は子供の如く岩魚追ひの最中であつた。シアヒ谷の水路を丸きり變へ、オホイタドリやヤマヨモギの葉でかこつた流から二尾の岩魚がすくはれた。ズック製のバケツは魚籠にもなつた。

始めての谷の宿りは夕焼に祝福された。野營飯も大きな焚火のぐるりて楽しく始められた。食後の一服又一服は水音に聞き惚れ、新たなる谷の實感に旨味を持つて來た。私達は一番小さな四人用の天幕にもぐりこんだが、この夜からの固い寢床も暖かく（八時天幕内にて二十四度）、其にも増して「山に寝る」事が嬉しかつた。

八月二十七日。夜露が大分下りて未明から冷やかになつた。四時半頃起き出でてしつとりした谷の空氣を吸ひ、聳え立つ奥鐘山をいゝなと思つた。空模様も順調なので安心する。

七時五十分、出發。夫婦岩（左岸小なる方）の肩を越え、漸くに色調鮮やかになりゆく黒部の水趣を喜びつゝ、稍進んで段々上りとなる。約百米迄登つて來ると、やがて傾斜三十五度の岩壁をへつる様になり、其から逆落しの下りとなる。然しさういふ所には道は手を入れて梯子が組んである。此の

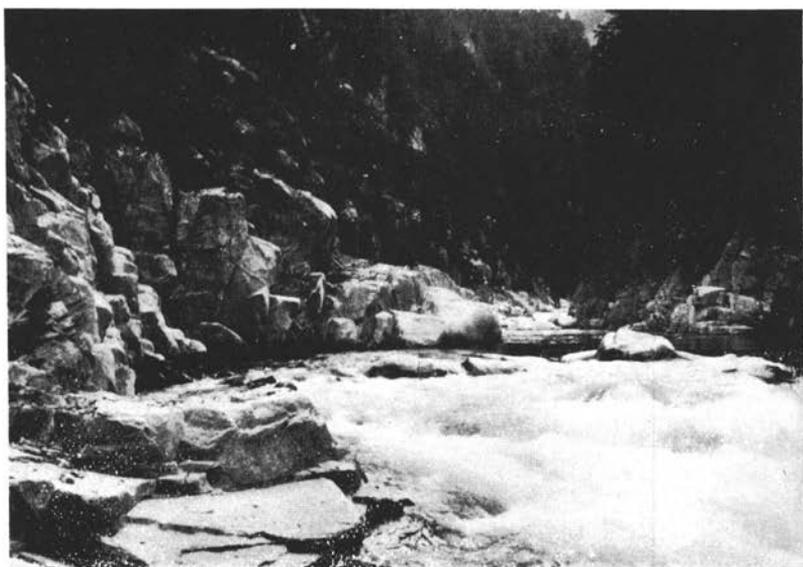
梯子道は長さ凡十五米ばかりで、或所はシジミ坂よりも悪かつた。此より奥鐘山は見えない。そして餓鬼谷の割れ目とおぼしき地形が行手にあつた。

第一の梯子道から暫くして又急な梯子道となつた。其は藪蔭に隠れた割れ澤の様なへこみで、道の有難さは、荷がつかえる位のわづらはしさですんだ。(けれど嘗て冠さんは此二つの急場で道がこはれてゐたので惱まされ、綱を使つて活路を開かれたのであつた。總體にこの黒部左岸の歩道は其後よく手入れがしてあるといふ話である。)其邊から道は廣く屈曲する川の左岸を巨石磊々たる、水量豊富な折尾谷落合の光景を見つゝ廻つて行つた。

折尾谷はシアヒ谷よりも大きく、雄々しい氣のする所であつた。私達は其を渡つて本流の磧、石小屋のあたりに荷を下ろし、八時四十五分から十時二十分迄其附近で遊んだ。本流は流の幅凡二十間もあらうか、轉石は白くどつしりと河中に羅布され、岸の小崖は裾を垂れて一齊に傾き、流るゝ藍に、巻き返る白い渦紋に洗はれてゐる。岸の上は闊葉樹の林がクロベを混じて深々と包んでゐる。峡谷のうるほひ、凝視と默想が私達に始められて來たのだ。其中でも本流の中程迄淺瀬を渡り大石に這ひのぼつて眺めた、水晶玉簾の如きタルの彩を忘れ兼ねる。又、奥鐘が下流の上空をしかと塞いでゐるのもよかつた。

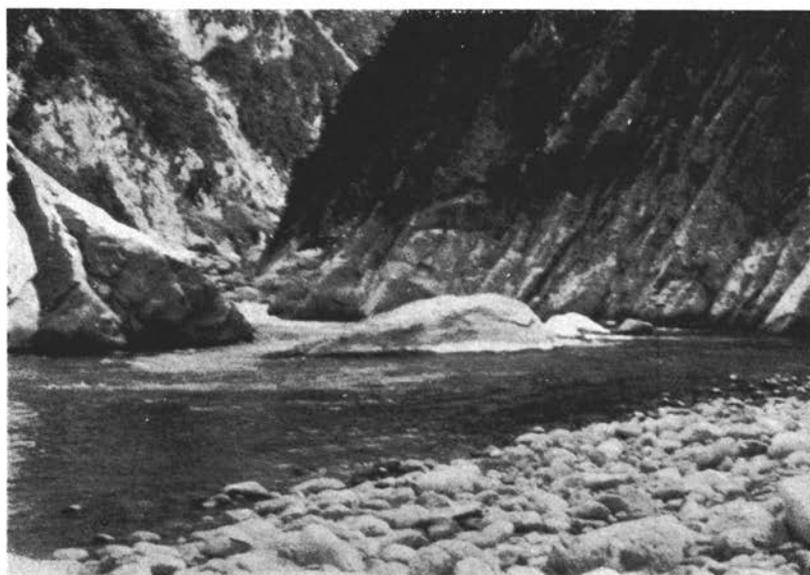
私達が景色に見惚れ、寫眞を撮つたりしてゐる間に人夫達は又岩魚追ひをやつてゐた。此落合でも私達は温泉の匂を嗅いだ。本流の水溫は十四度ばかりで、折尾谷のは之よりも一度丈高かつた。

此落合を去る前に下の道から水電の人夫達がやつて來た。今朝早く樺平を出て來たもので、これから東谷の天幕場迄荷を運ぶのださうだ。其人達は荷が重たいので、私達が出發して新道を進む事僅かで追ひ越し、つひに其日再び逢はなかつた。新道は上りの餘りないよい道で氣樂に行ける。そして林の道は十一時十分前にガキ谷落合の對岸を通つた。此谷は森中に深く狭く刻まれた澤の様に見えた。



影撮氏耶次松冠

川部黒の下合落澤屋小棒



影撮氏雄信永岩

原河廣の下廊下

それでも葉隠れにきらりとひらめく岩と水の存在は、優に黒部支流の險惡さを顯はしてゐた。水面から凡五十米の上を平らかに過ぎる歩道は谷底より稍高しとはいへ、嘗て此の水脈を戀ひ慕つて一上一下苦しみの勝つた行をなした人々よりも、遙かにまじな覗き方である。

ふと仙人山の黒い姿を行手の空に認めて、私達の探るべき所はなほ遠ざかれる事を考へる。道は之より又上り下りして少し宛高まつて來る。十一時二十分、稍急なザクの様な小澤で中食。空曇り來つて涼しくなつた十二時過、午後の行を始める。道は又よくなつて、路傍の小景には氣も留めず去つて行く。東谷山（五萬分一地形圖の稱）に屬する黒部側の崩れた崖が見える。十二時半上りが終つて私達は本流へ突出た左岸の山膝を乗り越える。と其處に一つの岩場があつて、山側は南に向つて急下し、現れた一幅の山水、アゾハラの湯けむりと支流の小瀑、綠なす森を左右に幅廣くうねつて眼覺むるばかりの碧藍の淵と白い奔湍の階調、湯垢のついた黄味の岩は其に混つて、此處に印象的な俯瞰となつてゐる。折から小雨が一しきり襲ふたにも拘らず、私達はこの寧ろ奇拔な光景を飽かず眺めて、物の十五分ばかりその岩場の乗越にゐた。

硫黄の湯臭い空氣をゆらいで、私達の身體はアゾハラに向つた。其處の下りは中程は殆ど直立の崖の面をワイヤアで吊つた、丸太五六本列べた棧道を行くのであつた。それから平たとなつて進むと、森林中ちにありさうに思へぬ尖つた岩塊のガレがあつた。そのあたりは非常にお湯臭いので、恐らく地下の暖ぬもりで新しく崩れたのであらうといつた。アゾハラの小屋場はそれからぢきであつた。午後一時着。

其處は本流から三四十米高い所で、粗末な小屋が一つあり、又立派な小屋場にする爲のならした平がある。陽がかつと照つて暑いので私達は支流の澤に下りて水を掬つた。然し其水はぬるく、湯が混つてゐるのはたしかな事だつた。此前よりも一體に谷が荒れてゐるとは冠さんのお話であつた。湯も

川の上にあつた所がなくなつて、今は氣樂に入るべきでもないらしい。總じて地のぬくもりの爲かアゾハラの樹は瘠せしなえて、楓はむしばんだものばかりである。そして澤の上手を見やると、荒々しい其形貌は分岐した枝澤皆瀑をかけ、恰かも浸蝕の進んだカルデラに近くゐる様な氣がする。

眞晝の陽は照り渡つて長く留まるべき誘惑を私達に與へなかつた。されば本流に近づくと見合せ、一時二十分道の續きを追ひ求めた。ぬる澤のすぐ隣に一つの小澤がある。此は水清く冷たくて思はずも數杯を過ぎた程であつた。それより少し上れば森蔭を廻らうとする所でアゾハラの上手の澤の奥、黒味勝ちな岩の割れ目荒々しい山肌に食ひのぼつてゐる雪溪を顧みた。シジミ坂の割れ谷より遙かに規模大きく、其趣も異つて如何にも凄慘な、死の冷たさを感じる様な状態である。高嶺の峻峻。氷雪まばゆき岩の殿堂には、登高の心誘ふ華やかな透明さがあるであらう。さりながら此の荒谷、峽流近き岩と雪と森の抱擁して荒涼たる境地には、珍しき觀物ながら、異常の第六感に訴ふる寂しき引力が働くのである。

私は恐い物見たさに似た心持を以て振り返り、道を登つて行つた。前に來た山岳宗徒の人々が、其れを通つて木山高く越えた事も思出されて、益々アゾハラと其澤奥の事が心に印せられた。其が見えなくなると眼は黒部の流に向つた。老若の樹生い茂つた山腹のへつり道から、アゾハラのあたり、又上流の一段と黒部川らしくなつて來た谷景色を見て、悦に入つた。やがて谷を廻るとアゾハラの流と上に奥鐘山が見えた。其峻峯は南の三角になつた尾根を眞直に望むのであつた。其後道は次第々々に高さを増して谷に離れて行つた。樹の木立を通して黒部大谷の屈曲するあたり、稍赤味ある岩肌を水光にさらした姿が映る。恰かも水勢が谷を押し擴げんとするのを堅緻な岩根之をむかへてさはさせじと喰ひ留めたかの如き、節のある水脈、其は眞に黒部の特徴である。そして其右岸の岩壁は細かに割れてゐたが、明かに順層である事をも認めた。

かくて可成りの高度を有する乗越に着いたのは二時であつた。黒木稍多くなつて來た兩岸の山々、右に偏つて稍遠く仙人山の東尾根、其鋸齒を刻む外形を眺めて、私達は十分ばかり休んだ。次で下りは小綺麗な榭林を過ぎる。やがて山を廻り始めるに及び、仙人山の先の小澤、殘雪を藏し下部は瀑が落ちて居るのを目撃する。すでに谷は奥まつて來た。對岸闊葉樹の熊の棲家らしい深い緑の色、其は午後の陽に照り返つて無焔の火の如き豊かな生氣を呈してゐる。本流は藥研の底を水聲烈しくわめき落ちてゐる。力あるものゝ美しさ、限りなき憧憬、水邊への思ひは胸につつて、只管に歩を運んで行く。

先んじた私は樹蔭から現れて、岩の上に立ち、足下十間ほどの仙人谷を眺めやつた。流石に其は源より高さ、より深き飛瀑重なる相貌である。岩の間の狭く段をなせる事、兩岸の垂直近き壁、其上の密林、いづれもが廊下近き吊懸の支流なる事をうなづかしめる。急な梯子道を下つて、水邊の岩床に行き荷を下ろす。時に二時四十五分。此落合も非常に湯臭い。其湯は少し下の本流に少し傾ける一大岩面の上部に湧く。(出口にての溫度六十五度)。又橋の向側にも湧く。尙又本流の右岸にも湧いてゐる。間もなく一同揃つて第二回の中食をすまし、一時間近く休息をとつた。

岩永君と私とは仙人谷落合の光景を割り増して想像してゐたのであつた。折尾谷で逢つた水電の人夫達は、仙人谷にも小屋場があり、流には橋が架けてあるといつたので、兼て聞いてゐた仙人の瀧と本流の豪勢な様を更に美しく胸に描いてゐた。けれど小屋場は水に遠く(小屋はなし)、橋も吊橋ではなかつた。恐らく虹をなす飛沫を浴びて渡るのだらうと曾遊の冠さんさへ想はれた落合の瀑は、全く跡方もなく、嘗て水を支へてゐた岩塊は飛び散つて本流對岸に迄及んでゐる。思ふに雪崩の勢で斯くの如き變化を生じたものであらう。天地滄溟の變といふも強ち形容ばかりではないと感じた。

落合附近の本流は上手に狭い關門をひかえ、左後から白玉の水がほとばしつてゐる。其が深い潭に

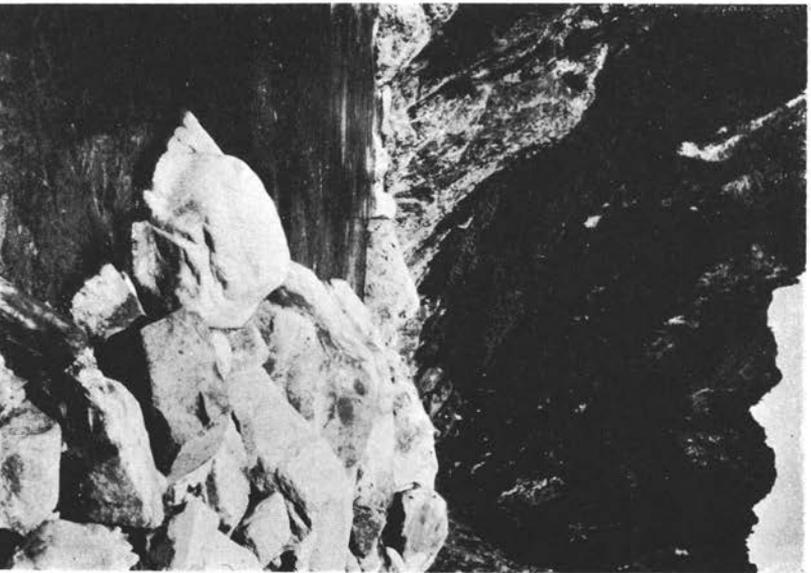
擴がると、其處に川中に一つの大きな饅頭岩がのさばり出てゐる。此岩と右岸岩壁とのあはひは二間位にせばまつてゐる。そして此が最初近藤氏を誘惑したものだといふ。實際に同氏が利用したのはもう少し上手なる左岸の岩壁である。本流の景は未だ豪壯と極賞するを得ざるも、亦此迄來れば、谿水只岩のみに觸れ、谷内の反射光線は華麗なる映像と化し來るのである。

休息の間小雨があつたが、三時四十分出發の際には未練氣もなく上つてゐた。之から東谷落合の對岸迄は餘り上下もなく、道のりも意外に近かつた（地形圖は少し變である様な氣がする）。仙人谷と平行して次に直ちに可成り大きな澤がある。がら／＼の石の積まれた平凡な澤で、水量も少なかつた。其を渡つて爪先上りになると行先からハツバの音が響いて來た。先入觀念かも知れないが、私にはどうも其反響よりも、殺生ながら獵銃の響の方がびつたりと氣持に合ふ。昨日以來しばらく忘れてゐた工事の音響は、單純に山道を行き、溪間の序曲に耽溺する事を妨げる。

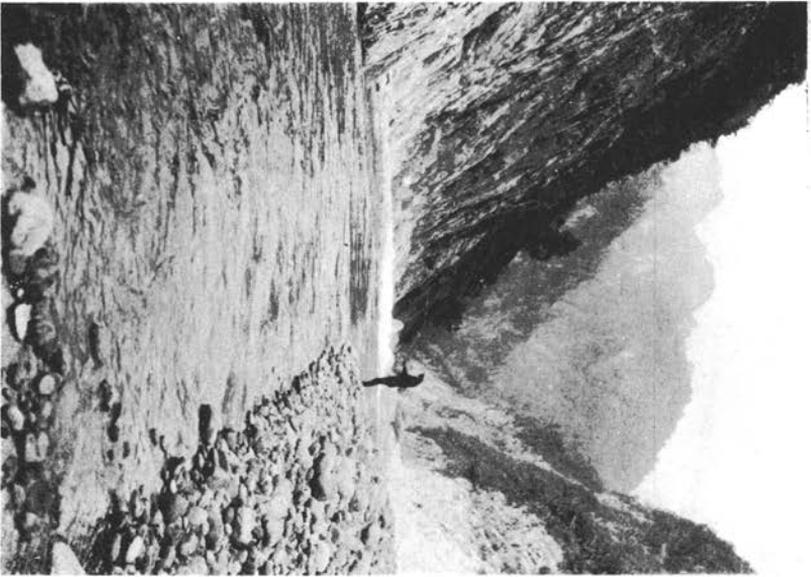
やがて指す手に東谷落合が現れた。嘗て私が下る能はざりし其支谷の最下部は、今や無人境の誇を奪はれて、右手に水電の白い天幕さへほの見へる。谷を廻れば後へ森影なりし仙人谷の上段の瀑は、稻妻の如く折れた姿を本流の縦通しに眺められる。

私は又東谷左岸、黒部川右岸の高い森に包まれた尾根を眺めた。彼の時只管大谷の水魔に吸ひ寄せられて、東谷の瀑場より尾根に逃れ、之に近付かうとしてさまよひあせつた岩場や草場や姫小松の木立、涸澤のくぼみなどが、今は手に取る如くなつた。一見平凡な會遊の地を他所より望む氣持は全く主觀的回想的なものであつた、當事者以外には何等の興味をも生じないかも知れぬ。私の心は暖く和らいで、早くも東谷の水に觸ればやと小躍りする。

四時十分、東谷の正面に來る。矢張り大きい支流で、小黒部谷、祖母谷を除けば今迄鐘釣温泉から見て來た内で一等である。落口は低い瀑となり、其上は可成り平らかに流れて右手に隠れてゐる。瀑



下廊下のタムルより下流に仙人山を仰ぐ



下廊下の廣河原より見たる仙人山

冠松次郎氏撮影

場は此蔭らしい。落口迄瀑の連続の様想像してゐた事は當が外れた。又落合は何となく應揚に擴がつて右手に岩の段あり、白い二棟の測量天幕が屯してゐる。道から右岸への吊橋はもう少し上手にある。けれど私達は一度崩石で道のこはれた悪場で行きつまり、上の工事場で爆破する石の墜落を避けて戻つた。兼て注意された通り一同揃つて聲をあげると、やがて水電の工夫がやつて来て工事を一時中止させ、私達を導いて呉れた。一つの小屋場に出て先づ安心する。此は吊橋を架ける迄の水電の陣屋だつたものだ。吊橋は其れから直ちに渡られる。餘り上等な作りではなかつたが、お蔭で私達は數年前は夢にも思はなかつた黒部本流越えの宙乗りをする事が出来た。

本流右岸積の適當な所で野營を張つたのは四時四十分であつた。私達は水電の人に挨拶しに行く。西川義男氏といふ若い技師の人が居て、大變に歡待して呉れる。そしてしきりに其天幕に一泊をすゝめるので、無下に斷はりもならず我々三人だけお世話になる事にした。此天幕には西川氏の他に口元黒部の音澤村から來てゐる山案内が二人ゐて、丁度長次郎が平の小屋から下へ見通しをつけてあの立派な、水に近い道を作つた様に、同じ仕事を受け持つてゐる。

東谷の落合附近の谷の景觀は一言にしていはゞ瀟洒たる風光と稱する事が出来る。流の幅は七八間、落合附近は稍づつまつてゐる所がある。美しい白肌の花崗岩塊は水蝕に圓滑ながら、決して弱々しい形貌ではない。岸の崖は高さはいふ程の事はないが、面白い形に彫刻されて、凝視すれば何となく滋味が湧くかの様である。水量の變化少しといふ黒部川も流石今の渇水期には水引いて吊橋の先から此方泊場の近く迄相當廣い積になつてゐる。(吊橋の長さは凡二十五間あるだらうとの事)。谷奥は流二町程で右折して右岸の山足森の縁に閉され、水は其蔭から雀躍して行進して來る。更に東谷落合に立てば、支流は恰かも突き當りの崖から湧くものゝ如く、見えぬ瀑場から餘勢を以て濺々と岩間を走り、最後に平たい岩の上を滑り又は其横手から本流に擴がり注いでゐる。其行先本流の下は又堆石と

岩鼻の優しげな組合せをなす間を、色は静かに深み滔々と流れて行く。先づ居ながらにして見る川の折れ曲り、落合の落付、然も力を藏して慎み勝ちな、森林と空と境する、奇は無さも飽かぬ姿なのである。

そして自然の技巧は此落合に理想的の温泉を加へて呉れたのである。其は日電天幕場の上手岩間から湧くもの、二條あつて炊事用は攝氏凡六十度、入浴用は五十七八度（共に二十八日早朝の測定）、湯量は相當豊富なもので、質は硫黄氣を極微含む殆ど單純泉に近いもの、立派な風呂桶を二つも備へて、人々は朝な夕な汗を落し暖まつて勞役を忘れる事が出来る。

東谷落合の温泉。其によつて全く思ひがけなき仙境を得たのであつた。我々は私かに測量天幕の代りに感じのよい木小屋と、山谷の放浪者のみの生活を想つたのであつた。秋、紅葉たけなはの頃、ざくりくと霜を踏んで谷の上下いづれかの道から、此湯場を尋ねたら如何に心地よい事であらう。又、此温泉はアゾハラなどとは違つて水に浸る憂ひはないので、今後、水電事業の根據地たるのみならず、其歩道を利用して兩岸の山々への登攀の足溜り、休息地となるべき運命を有してゐる様と思ふ。

三 作郎越

（東谷落合より棒小屋澤落合まで）

八月二十八日。午前四時半眼がさめると本流は流石に水聲高く、暗がりの空氣は冷たかつた。今日棒小屋の泊場迄成るべく早く行つて、それから先道のない我々の本舞臺に入る所の様子を偵察して置く豫定なので、私は提燈をさげて人夫達を起しに行つた。空は殘ソの星またゝいて、今や白み行く。天氣の續くのが何よりの仕合せで、風呂につかりながら私は全く安心し切つて居た。

朝飯も御馳走になつて、七時二十五分厚く禮を述べ、愈々最後の足溜りを去つた。吊橋の袂から右岸作郎越の歩道は上り始める。作郎とは前記音澤村の案内の一人の名前を取つたものである。少し登れば本谷は左岸仙人山の側は壁屹立し始め、漸く峻巖な地勢となつて來た。然し谷の幅は比較的細く、水も今は乏しくて大岩の轉々累積するのを認める。廊下の裾は多くは斷ち切れて、左岸の克明に川傳ひし難い事を示す。兎に角東谷落合を境界として茲にも黒部川の景觀は上下に區別する事が出来るやうである。そして其上流の陣容は主として劍澤を挾んで下廊下の怪物黒部別山と相對する仙人山西面の形作る事を知るのである。

道は次第にくの字を描いて高みへくと登つて行く。思ふにましてよい道で、かの數年前始めて古河の測量隊によつて作られた様な俄か道とは物が違ふ。棒小屋の泊場迄で大約二萬圓を費したといふのだから、今度の水路測量の規模の雄大なのには感心させられる。それ丈、彼の日道なき密林をへづり其夜の野營の水さへも心許なかつた大町よりの旅とは、似もつかぬ今日の山旅となつて居るのだ。

八時十分、左手森中の小尾根に達する。此附近は私の足跡が六星霜を経て思出深い境地なのである。とあるクロベの下に「作郎越」と記した一の石標が見出された。恰かも奥仙人澤の直前に當り、黒部谷の上流は左岸仙人山側の崖、木は生えたれど心ゆくばかり直なるに對して右岸は稍々なせに見え、其先に棒小屋澤とおぼしき割れ目と峭壁が讀まれた。本流の積は相變らず輝く谷に見えたが、此前の豪宕なる流勢は見られなかつた。只私共は流に覗く壁が高く七十度を越えて益々直立式となるのを認めたのである。又、谷の奥左手に偏り突元として風雨に背き、はむかへるが如き赤澤岳西尾根が現はれてゐた。二つの尖峰は特に山の子の神經系をかき亂した。此は大正八年の行にはついで氣付かざりし景である。黒部別山の筋骨隆々たる相貌も僅か我眼に觸れてゐる。

私共はなほ行手に二つの自然ならざる物を認めた。一つは棒小屋澤迄の間にある草場を東信電氣の

道が電光形に下つて來て居るものであつた。他の一つは棒小屋澤左岸の遙か上（鳴澤續きの山？）に一つの旗が閃めいてゐるものであつた。其は恐らく測量の爲にであらう。双眼鏡を互に渡し合つて其旗の存在をたしかめる仕事に私達は餘程時を過した。

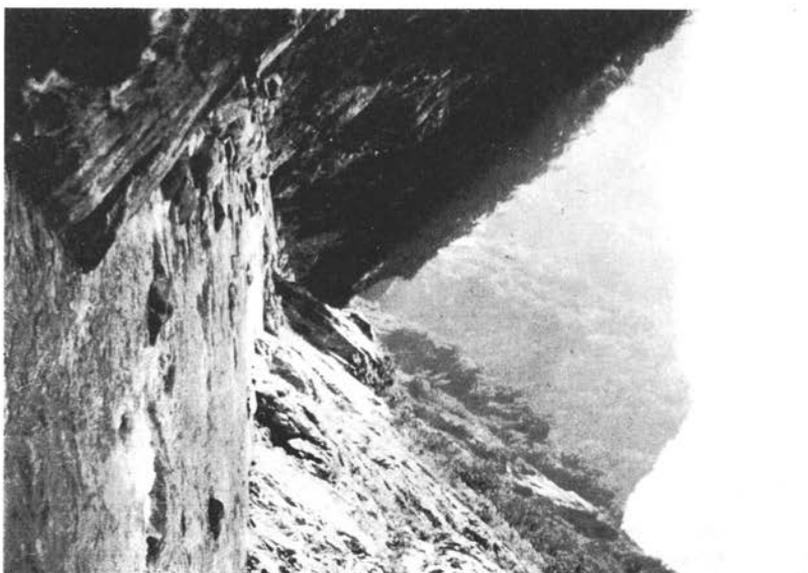
二十五分の後又道を進む。尾根歩きが始まる。一所、赤澤岳西尾根が馬鹿に際立つて見える場所がある。「猫の耳」とたとへた上部の鎌のやうな鋭峯が殊に私達の好奇心に満足を與へる。それより尾根の右について上つて行く。黒部別山の壁が見えたり、本流の明るい水と岩の群りを覗いたり、又遠く岩小屋澤岳の高い尾根を仰いだりした。然し何といつても全く骨其物の様を黒部別山の寄りかゝつた様な突起の割れ目と岩壁は凄いものだつた。

此の小尾根を衝き上つて半時程の間には、高みとはかけはなれ、一の草生水無しの涸澤を越して南走するに至つた。大まかに斷落した黒部別山、其北峯が見えて來る。之に對する仙人山も凄い形相だが、ちと神經質的な表情を浮べてゐる。榊林の下にて休み、セロ奏づるが如き親しみある大谷の水音に耳傾けては、去りし日行く日の山行く我心の微笑を送る。ふと其の溶くるがの心持は木の間より見る切れ／＼の赤澤岳の姿に突沸する。

平らかに歩道は續いた。又涸澤を渡つて、峽谷の奥に東澤乗越の赤ガレや雪溪を望んだ。眼下本流の廊下は早直壁をなして居る。進んで赤澤岳の側こそ隠れたれ、遙か黒岳、日本北アルプス中央の雪の殿堂を仰ぎ見えては、黒部川といふものが如何に直流的な削流をなして居るかと納得するのである。やがて稍々大きい石の涸谷に來た。此は先年私の一行が下つた澤で、私共はこの餘程下より本流間際迄網を使つて下つて行つたものであつた。彼の時は囊中の物を探るが如き期待と不安とがあつた。今は翠緑を分けて足自ら歩み速め、間もなく棒小屋の泊場へ着かうとしてゐるのである。道こそは有難い。けれど此も可成り上を通つて居るので、此前私を見た谷の景觀は眼に入つて來なかつた。殊に



岩小屋澤岳支脈突端の赤壁



下廊下にて上流に岩小屋澤岳の支脈を望む

私がかしめたく思つて居た、川中の島の様になつた山脚の瘤と其附近のとろりとした碧い清潭のうねりは、終に見過してしまつた。

澗谷からは一段と涼しい緑林の内を歩き、やがて梯子道の下りとなつて、高度は急に減じて来る。其小尾根道から棒小屋澤泊場附近、荒削りの岩間と流水とが視界に入つて來た。一休みの後道のよきに任せて走る如く下つて行く。此邊からはたしかに元の古河測量の道を利用したらしい。作郎越の尾根から注意した分れ道（東信道）は其邊に合してゐた。棒小屋澤下部は落口の上右岸の支流迄悪く、黒部本谷は又崩落しさうな崖があるので、此迄迂回するのは或は止むを得なかつた事であつたらう。分岐點から棒小屋の泊場迄はぢきであつた。下りで凡十分位であつたかと思ふ。

泊場着午前十時三十五分。下りで汗をかいてうだつた所へ、夏の陽は又明るい谷内をかつと照したので、私達は愴惶として其處に建つた二棟の小屋の内に別れて入り、脚を投げ出して、人夫に持つて來てもらつた本流右岸に湧く清水に喉をうるほした。私のリュックサックからはレモンの實が取り出され、天下一品のレモン水が杯を重ねられた。其後ののび／＼とした午睡は。又必要な事であつた。

此泊場は此前私の泊つた場所と同一である。附近の動かぬ自然には變りない様だが、溪水は著しく減じて心の狂ふ様な美感には撃たれないが、河中に岩が幾つも現はれて、却つて奇景を作つてゐる。

小屋前の附近の丸岩の下から對岸へ上下二條のワイヤアが張つてある。此は日本電力のもので、前に古河の架けたも少し上流のワイヤアは取り去られてゐる事が後で分つた。

午後一時、年上の人夫二人を野營の支度に残して、他の九人は空身になつて落合の様子を探りに出かけた。積へ下りて後は道らしい道もない。積は相變らず小廣くなつてゐるが、水の引いたせるか、何處か變つた様に見える。左方さ、やかな崖澤によつて矢張残雪がころがつてゐる。其附近から湧く水は冷やかで清冽だ。積の中に「距愛本道標十一里十町」と記されてある。

先へ進めば崖際水をびちや〜渡つて巨岩の壘壁を乗り越え、右岩崩落せんとする崖下の棚迄、一つの山脚を越える。此邊は何だか前よりも状態がよくなつて歩き易い。少し行けば流れはもう凄まじい早淵となつて、人は岸の岩間をへづる様になる。以前はワイヤアが張られてあつたが、今度は其便はない。川に向つて下向きの棚で、滑らかに洗はれた岩面は只、摩擦のみが手頼りである。先頭の山本は單身斜に攀ぢて三角形の傾いた棚上に立ちロープを垂らす。其一端は其處に打ちこまれたポールに結びつける。すると長身の青木長松と頑健な宮本岩次郎が後を追つて、其まゝ青木は長身を利用して足場を探り三四間先の安全な棚場へ達し、宮本と協力してロープを斜に張り渡す。長次郎は後から私達を看守つて呉れる。何のと私は山本の眞似をしてロープに頼らず上の點に攀ぢたが、狭いおぼひかぶさる様な急壁で指先丈の手懸りでは心許なく、終に山本の助けを借りた。來て見ると悪い所で、下の深い藍色の奔湍を見ると、自ら緊張し過ぎて體の平衡が危くなる。然し兎に角張られたロープに従つて行けば安全である。最後に山本がやつて來る。ロープは歸りがあるのでかけ放しにして置く。皆揃ふと棚場を歩いて、第二の難所に来る。此邊は川幅がぐつと迫つて來て、もう眼の先に落合の見える所だ。但、落合の壯觀は川岸からは全然分らない。此前私は靜馬達と共に此岩場迄來て行きつまつてしまつた。勿論水量も多く、今よりらくでなかつた。道具立を充分にしなかつた其時には勿論不可能の事であつた。

第二の難所は水際から高さ三間ばかりのしかゝつた岩壁の頭をへつて上下するのであつた。然し其下りめには一番のつぼの青木長松でさへやつと足の届いた、つる〜の行手とは反對の方に傾いた、丸みのある岩面がある。此處は全く悪場で、後下廊下の核心へ行つても見ない程の氣味の悪い所であつた。私達三人はロープがあつても單獨では行けない所であつた。漸く幅廣い棚に達してほつとしながら、白い花崗岩の壁をへづる友を見返り、水濁れても恐しい一團の水力の強さに心奪はれ、世にも

珍しい光景と思つた。對岸の壁は順層で、遙かに歩きよさうに思へる。壁上の緑の林、日中の谷は今し燃え立ち輝いた盛りである。行手間近かの棒小屋澤右岸の壁（實は其一つ先の本流の壁であつた）は傾斜七十度、其對岸は六十六度を算し、全くの窮谷になつてゐる。

私達はそれから水邊に下りて傳ひ、壁は直立して激流となつた所で、少し川中へ轉石を踏んで徒渉した。水量は膝程であるが、中々強く、人夫に杖又は手を引かれて渡つた所もあつた。其先は又網目の早い漕になつて谷は更に變まり、滑らかにそげた右岸の岩壁に對して、皎々と光る角張つた岩蔭から、劍澤の落ちるとおぼしく、押し出される本流の水は一きは目立つて白沫を吹いてゐる。偕て流の縁は通れないが、其處の手前から岸は巨岩を越えてすぐに藪中をらくに登つて行かれる。そして水面から凡二十米上の突端に達した、時に二時三十分。

其時一と眼見てあつと驚いた。驚いて忽ち眞美を悟つた。この喜ばしい壯絶の感じは恐らく私どもの一生忘れ得ないものであらう。即ち足下の裂け目が棒小屋澤の幽谷だつたのである。そして棒小屋澤と劍澤の落口は完全に一致して向ひ合つてゐるではないか。

嘗て私のさまよひにも思つた。この行でも上流に向つて兩岸の緊張した山脚を眺めて、兩落合は地形圖の圖示程違つて居ないにしても、薄刃の様な岩根を介在して間近かにはなつてゐるだらうと想定した。然し實際には其以上で、斯くの如き珍しい、黒部十字街が開かれてゐたのである。私達は棒小屋澤の割れ目を一つ先へ多く勘定してゐたのである。

劍澤の冷水は一つの大きなカマから幅一丈ばかりの小瀑となつて本流に吐き出されてゐる。此突端からはカマは三分の二程しか見えませんが、沸騰する渦紋により瀑の存在は明かである。其縁の岩壁は實に壯麗な花崗岩の特徴を表はして、美しい幾何學的の線が走り、其曲面が如何にも立派だ。瀑上は岩盤の傾斜稍鈍く、思ひの外木立が深い。恐らく其靈泉は樋の如く瀉下してゐるのであらうと思はれ

る。

棒小屋澤は又三段の瀑場になつてゐる。左上手折れ曲りより飛び出て落つる瀑は三間程、此が第一で、次に電光的に屈曲せる三間餘の瀑となり、第三に二間ばかりの斜の瀑となつてゐる。カマは小さい、四間餘。劔澤に比較して何となく壓迫される様な暗い影の射す吊懸谷だ。然し此瀑場の上は更に更に幾段かの人間を近付けぬ瀑の咆哮が存する事を知つた私は、棒小屋澤の流に一しほ感慨無量なのであつた。下から二番目の瀑上は細流をなして平らかに流れ、積さへ生じて通過し得る可能性が見るのである。棒小屋澤の通過は極く上か、極く下かでなければ無理だらうと推定した事は此で當つてゐる。

更に又黒部本流を眺むれば、二町半ばかり上手、右岸に墜石の積があつて、流は之を迂回して現れ來り、廊下は三四の節を有して、下流より一層華麗な勝地を形作つてゐる。もう眼に見えて落差がある、二つの支流の落合は洞門の如く縮まり湧き立つてゐる。川中に現る、巨石、岸の削壁、陽の明るさ異なるに従ひ變幻極まりなき水の色、燃る立ち深み行く岸上の樹林、そして全體に渡つて峯頭の如き透明な光彩。

かくする間に長次郎は早本心に歸つて病を忘れたるかの如く、ロープを用ひ、棒小屋へ或は本流の岸へ、明日の下調べに出かけて行く、其結果今立つ突端の右手本流の岸に下つて架橋した方がいだらうといふ。落合の上流に就ては何ともいはないが、あの墜石の積迄壁傳ひは中々難事であらうと思はれる。私どもは我を忘れて或は凝視し、或はレンズを覗き、屢々讚嘆の聲を擧げて只々谷に酔つてゐた。

黒部別山は又程近く其直壁を峙だて、私どもの心をひきしめた。詳しく見れば裂れた様な滑らかなの棚があり、岩は赤味さして飽くまで硬かつた。植物生育の最盛時を過ぎつゝある頃の事として、樹木は

八月初めよりも割合に下迄茂つてゐた。折しも頂よりの散光が射来る。縞目に谷の急壁は染まり、水はモザイクに變色する。壯年の巖谷は水今なほ怒り狂つて千尋の底まで巖を劈き割らんとしてゐた。略々景を見つくし、悪場の様子も探つたので、三時二十分歸途についた。徒歩もへつりも慣れで心安く行つたが、第二（行き）の悪場は避けて下から架橋して越えた。架橋の材料は行きに置いて行つたものだが勿論充分な事は出来ないで、長次郎ともう一人が先づ危い所をへつって行き、丸太の一端にロープをからげて下げ、踏ん張つた。私達は水面から僅々三尺ばかりの所をかうして渡してもらつたが、人間の支柱は始めて、人夫を信用してゐるもの、不安でならなかつた。然し越中の入夫が水をよく知り、岩をよく選び、悪場にあつても動じずに迅速に作業する様を見て、誠に頼もしく思つた。

へつりが終つてから未だ早いので、人夫の一人（青木長松）は釣絲を垂らし始めた。蒼黒い淵に走る魚影は少くないがどうしたものか絲ばかり切られてしまつてゐる。崩れ岩の山脚を越える手前で、私は川中に突き出た大岩の上に攀ぢ登つて、又谷景色に現をぬかす。岩の南端淺瀬の所は趣が奥深い。試みに此處から兩岸の仰角を測ると、右岸五十六度、左岸四十度と出る、流石に深いV字状谷だ。此岩は日本電力の測量にも利用したと見えてベンチマーク（B・M）が打つてあつた。

四時半頃泊場に歸る。六人用の天幕が一つ張つてある。人夫達は大きい方の小屋に寝るのでといふ。小屋は兩方が開け放して夜になつたら寒さうだ。さうかうする内に黒部別山の壁に夕雲がかゝつて上空は色付いて来る。黄昏どきの其峭壁は見れば見る程壯烈だ。其を眺めつゝ今日よりは眞に山奥らしき宿りが始められてゐる。夕食後のウキスキ、小倉羊羹、未知の嶮峻に入るに先立つての味覺の満足は又言ふに言はれぬ樂しきものである。

私どもは早寝すべきを、月見にとて岩の縁に腰かけて谷あひの夜景を楽しんだ。奔流青白く跳び、

山の端の針葉樹轟々として蒼黒き溪山の眺め、静けくも妖麗の月光なるかな。いつとなく三人は黙し、世を離れた岩上にて恍惚として佇むのみである。漸くに谷内が黒くなつた九時、天幕に歸り、好晴を感謝しつゝ眼を閉ぢた。

四 長次郎越

(稀小屋澤落合の通過)

八月二十九日。今日こそ無人境に入る日である。三時半頃稍寒く眼がさめたので私は抜け出でて火を焚いた。五時二十分頃から起き出す。氣温十度。礮に下りて洗面する、其水温九度。兎に角快晴がうれしい。長次郎は落合の上流の赤ぬけは通れないから其上を廻る豫定だといつた。彼の計畫に間違ひはなく、然も日を経るに従ひ元氣になつて行くのは流石に雄々しき山人である。

七時三十分出發、昨日第一回到りにロープを使つた所迄十七分を要す。礮から人夫の一人は丸太を一本かついで行く。悪場にさしかかゝると皆荷は置いて、先づ精悍な山本が先頭で一番高みに登り、他の人夫は順に配置されて、荷物から運び渡す。それから私達だ。此岩壁は水面よりの高さ約十二米、へつる場所は下部水面上三米の所より始まる。今日は少し行き方を變へて餘り上下はしない。八米ばかりの長さを有する岩角のオーヴァーハングを下廻りに行く所が悪いので、橋をかける。山本は最後迄高みに残り、ロープをはづして單身下りて来る。かくて作業と通過全部終る迄四十分かゝつた。それから徒渉を一寸して十分ばかりで第二の悪場に来る。此處は宮本とも一人が荷を擔いだまゝ通過してしまふ。勿論ロープは昨日から張つたまゝにしてある。それから青木助次郎が中に立つて荷の中次をする。中次は第一の場所よりも遙かに悪いが、人夫は巧みに聯絡を保つて料理する。一方最後の長次郎はロープをしかと握つて水邊に近付き、誰か落ちた時の用意に身構へてゐる。此岩壁にロープを張

つた高さは水面上凡六米、長さは十五米ばかり（但ロープは八十呎のものを使ふ）である。昨日の歸りに下を通つた所は逆には出来ないで、再びあの具合の悪い丸いつるつるの岩を越えて行く。下に落ちれば助からぬ流があり、渦まき返つて滔々と鳴る音を聞くと、私達は一層緊張した。此は全く峯の岩登りには缺けてゐる危険である。然も技術上あちらの岩登り屋が最も困難としてゐる *steep* 上の横断なのだ。身體の重い冠さんには上と下と三人が、りりで慎重に足場を定めた。最後に長次郎は山本の補助をかり、ダブルロープで下りて來た。第二作業と通過は三十分にして終つた（局部的にいふならば此のへつりは平小屋迄の全行程中最悪なるものであつた）。

すでに九時十分。夏の陽は今谷に輝く。黒部別山はぬくもつて直壁は赤黒くなり始めた。蟬が無心に鳴く。對岸には黄色いキンレイクワ、赤いアザミの類、白い忍冬科植物の花などが咲いてゐる。岩へづりをやつた後には瑣々たる花にも優しさを感じる。少憩。其次の水勢激しい徒渉は荷があるので足の運びが不安で緊張し切つて。それから昨日の道を突端に登る。時に九時半。くぼみに荷を置き、人夫は残らず一組になつて辨當とロープを持ち、棒小屋澤に下り、澤の對岸に攀ちて先を見に行く（昨日長次郎は本流の水分に下りやうといつたが其はやはりむつかしい事が分つた）。私達三人は萬事を彼等に任せて長い事其處で待つ。

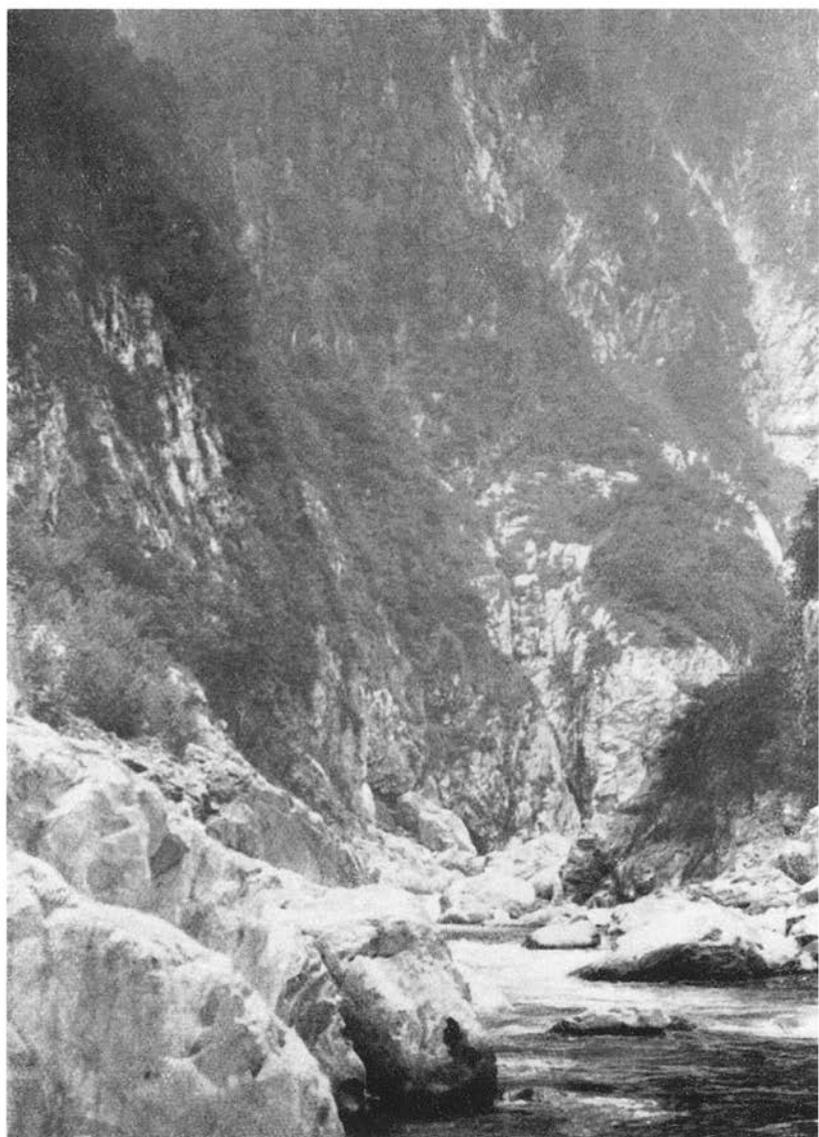
二三間下つた所が棒小屋澤の觀瀑には最もいゝ。本流は午前の陽を受け返して、昨日よりも明るく感じる。何度見ても美しい力のこもつた景色だ。何處から來たか赤トンボが澤山飛んでゐる。スイスイと上流をさし、劍澤のカマの上を舞ひ、又は空高く登つて氣流に乗じてゐる。私は恐しい境地なる事をも忘れて、其銀色の翅の行末を眼で追ひ求めた。ふと氣が付くとちり／＼と額は陽に煎られてゐた。暑いので藪影に行き、寫眞撮りに何處か見えなくなつた連れをも呼ばず、とろ／＼と眠りかゝる。

暫く立つて私は二人を促し、高みの方へ登つて劍澤の上部を見通さうと企てた。森林のおほふ此の山の端にも隠れ岩は到る處に行く事を阻んだ。棒小屋右岸の尾根を凡八十米ばかり攀ぢる。劍澤は最下のカマから上の可成り広い所が現れた。嘗て望んだ瀑と釜の連続せる峻急にして燦然たる壯觀は更に北方に寄らなければ見えない。仙人山側の細かに條割れのいつた崖だけが見えるに過ぎない。其は劍澤の探查第一着に私が數年來下行して見やうと思つてゐる澤の右岸である。此の見え方より察するに、劍澤は上流池ノ平分岐點なる岩小屋から下數町にして本流近く迄（落口より三四町の所）一直線に飛下し、其れより落口に向つて右折し、稍平らかな岩盤に到つて左折し瀉下して、再び本流の上流に向つて瀑となり落合のカマとなるものである。故に地形圖の澤の方向は大體に於て正しいものと認めるが、落合といふものは地形を表はすに重要であるから、是非測圖の修正を施すべきである。但、此は決して測量部の仕事を批難すべき事にはならないので、黒部峽谷の如き峻嚴なる深刻なる地形では、見通しだけでは水線の記號を正しく描く事は先づ不可能であると思ふ。

下り道、棒小屋澤の瀑場の上の一部分を下瞰した所に乗越せる場所があつて、測量隊が手を付けた様な形跡がある。下流で日本電力の人から聞いた事によれば、棒小屋澤の架橋を試みた事は事實で、只事業の進上其よりも東谷以下の歩道を完成する事が緊急だつたので中止したさうである。突端に歸つて來た頃には、私達の人夫は本流の壁の方へ木の茂みを分けて、すでに消えてしまつてゐた。私は一人一人の通つた跡に従つて棒小屋澤の水邊に下りた。其處の下り目には昨日今日の新しさではない伐跡がある。崖はさまざま急ならず、頼りになる木があるので、其を手繰つて先づ容易に下りる事が出来る。高距凡五間。下り立つた所には小崖に圍まれ、流に洗はれた一坪半ばかりの曲玉形の積がある。落口から十五間ばかり奥。同じく高距は六間位かと思はれる。丁度下から數へて第二の瀑上の平で、對岸迄あはひ五間ばかり、下端のタルのふちは成程よい渡り場である。然し水勢は相當猛烈で一

無名澤附近の絶壁

(棒小屋澤と新越澤との中間)



冠
松次郎氏撮影

人では徒渉に不安がある。本流の方を見やると棒小屋澤落口上の早瀬を通じて劔澤第一瀑と釜及び落口のタルが見える。岩壁の壁は錯綜し、釜の縁の一部の白色を除いて他は鐵赤色を帯び、實にすばらしい、溪谷支流と十字路をなすさへ稀なるに、斯くの如き力強き燦爛たる落合が他にあらうか。餘りの壯美に獨占も惜しく、上に登つて二人を呼び、辨當を持つて再び棒小屋澤の小河原に來り、第三瀑の飛沫を吸ひながら中食を開く。

午前中は此處は日影で涼し過ぎた。十二時頃から陽が洩れ始めて身體は暖まつて來る。水音は子守唄の如く思ひ、うたゝねをする者さへある。ふと見れば陽の昇り加減で、劔澤の釜は先の青味は失せて、草色の乳狀に變つてゐる。黒部本流の止むなき水の面も色薄く、今にも大氣との境は消えさうに思はれる。人夫達の登つて行つた對岸にはシモツケの紅花が飾られてゐる。そして私はいつしかぼんやりと澤の水の速く往き動かぬ波の如き、タルの頭をみつめてゐた。

やがての事に再び上の休場に歸つて、輝く陽光の下に山巒の陰影を生じた、深み勝る黒部別山の姿に見入つた。山は動くかの様に生氣を發してゐる。山肌は幾重にも平行した割れ目があるが、尾根は皆切れて到底登り難い。中でも中央より上に大きな岩塔が屹立してゐるのは凄絶を超越して世外の美術である。一時頃バロメーターは六六四耗、八四〇米を示してゐた。三度安逸な睡眠に陥る。耳朵を撃つた峽の水聲、瀑の響は重く遠くなつて行く。上流の壁と水が幻の如く頭の中を通り過ぎる。

午後一時頃叫聲がするので、起きてまぶしい眼に小手翳し、對岸を見る、纏て人夫はしづ／＼と下つて來る。偵察の結果は如何。程隔つて語り合ふべくもないが、其内に澤近い惡場を山本から先に四肢を張つて巧みに過ぎた。二時十分前、ひよつこりと山本一人丈が私達の傍に抜け出て來た。餘り長かつたので心配しながら「どうだ」と聞くと、此れから見える上流の積の少し先にうまく下りられる、一行は其處で野營地をも確めて來たといふ。越える所は此れから見える岩の間の草生えた急場から倒

れた枯木を傳ひ、棒小屋澤左岸突端クロベにサルオガセの豊富な小尾根を行つて、大きな立枯木の後から本流の方へ搦む様である。山本は私達と共に在つた殘餘のロープを持ち、再び對岸に登つて倒枯木の上に投げかけ、他の人夫と協力して悪場の上に張り渡す。そして他の人夫は之を傳つて棒小屋澤を越え、私達の方へ揃つて歸つて來た。

彼等のよく我々の目的を知り、己を忘れて冒險的な探查に奮闘して呉れた心根を思へば、私は其時張り詰めてゐた感謝の念が烈しくこみ上げて來て、知らず涙が溢れ落ちた。三人互に握手して「有難い」と言つた聲は、少くとも若き日の歡喜に震えて響いたのであつた。長次郎も微笑を浮べて私達に安心の言葉を與へた。曰く、之を行つて下りはらくである、そして屈曲の先は磧が下廊下（狹義）の口迄續いてゐるといふ。（尤も此は長次郎の癖で、至極樂觀的な口調なのであつた。）

二時十分、私どもは荷を背負つて勇躍上流に向つた。棒小屋澤の流は八尺程あるが、其には架橋されてらくに越える。越えた所の小さな中洲から劍澤落口の瀑と第二のタルのへこみが見える。中洲から一寸徒渉して二條目の瀑上を過ぎる。それから岸に攀ぢて行くにはロープの助けがあるので、行程が捗る。大して急ではないが、倒枯木下の所は草の元場と一丈ばかりの岩壁で、大分悪い。かくて二時三十五分に全部の人の上の大枯木の立つた岩場に集まつて來た。本流間近かなので、下流の谷と劍澤とがよく見える。谷に落ちこむ瀑は凄まじい。然し其上は大きなタルだと思つてゐたのがさうではなくて、日光龍頭瀧式の瀉下する急瀬で、暫く左右に屈折し終に岩蔭木蔭に隠れる様は手に取る如く分かる。落口の釜は右側案外に丸からずして、下流に向つて長くなつてゐる。落口の水勢は劍澤よりも棒小屋澤の方が豪勢に見える。

それから私達は棒小屋澤右岸の突端より少し高めの所を本流に添うて通つて行く。山は骨が現れて急なので、藪は案外にない。本流の半以上を眺めて行かれる。其上、小藪のまばらに生えた頗る急な

くぼみを百呎の新しいロープを全部使つて登つて行つた。此處はロープがなくともよかつたが、安全の爲の、英人の所謂ハンドレイルに使つた。此上に又六十呎のロープを張る。先頭は白川と青木長松で、身輕に操作して行く。此上りは積に下りる迄で一番悪い場所、一所など傾斜は七十度に近く、崩れ易い石と原土から成つてゐた。それから先は大した事はない。三時、私達は乗越に來た。垂直百米餘の登りで、乗越といつても別に鞍部ではない。稍平らかな黒木の下の休場なのである。十分に最後の長次郎がやつて來る。記念の爲其處の立木に「長次郎越」なる新稱を年月日と共に刻む。彼の見通しと指揮によつて我々の一行が開いた此の道筋は、既に記録された劍の雪溪、平ノ小屋より下方の黒部川の新道と共に、彼の名を冠しても不可はないであらう。

一 休みの後、少し上り氣味に三間乃至五間へつてより、下り氣味に長い露岩の下を劍澤を後にして行く。此はシ、の歩いた道跡であるといふ。成程シ、ともあらう者はうまい所を歩いてゐる。棚續きの下りである。次に藪に入つて行く。對岸の細く高い瀑の見える所から傾斜六十度ばかりの小部分をロープで吊り下り、其少し下から崖際の木に六十呎のロープを結んで簡單に下る。も早水は近い。暫く林の内を猿の如く攀ぢ下れば、傾斜緩やかとなつて、俄然シ、ウドやオホイタドリの草藪となる。但木よりも草の傾斜の方が注意を要する。漸くに其下端から南に進み、黒岩から本流の右岸棚の上を下るを得た。此處は落合から望まれた積の二十間ばかり上である。一同水邊に揃つたのは三時四十分であつた。即ち落合から一時間半かゝつた事になる。

落合を過ぎて黒部別山下の領域になると風物は總じて雄大で典雅なるものと一變して來る。水量は落合下に比して少いが、兩岸の裸岩の壁は高聳し始め、落差明かに増して、足下近くにも一つのタルさへある。谷間は下流よりも大きく、斜陽になほ明るく頗る清新の感を與へる。豐滿な紺白の激流、其上には右手黒部別山中央部の大障壁が高く屏風をめぐらし、其下方には黒部別山澤と間違へ勝ちな

大割れの崖谷と、思ひ切つて胸をそらした突端のピラミッドが現れてゐる。其のあたりこそ下廊下の中心であらう。今や我が足は嘗て幾日の夢なりし無有境にしかと立つた事を意識した。

技術的に見て私どもの喜んだのは、此の屈曲より上は右岸の岩層が大體に於て豫想通りの事であつた。利用し得る岩棚の面は其附近で strike N6—9° W, dip N54—58° をして居て、少しの偏差はあるとしても、棒小屋澤澤落合下方と反し所謂順層 (Kopfschie) なるものである。(花崗岩類は塊状の深造岩であるが、大體は節理面に矢張一定の規矩がある様に思ふ。) 左岸は之に反し、殊に黒部別山式に岩の裂罅が直立に近く立ち始めてゐる。岩山にしるき崖澤も美事に生じてゐる。たま／＼其岩面が曲り緩やかなるものも明かに逆層 (Rückschie) なる事を認める。

野營地には此の大きな岩棚より一段下りて砂地より淺瀬を行き、本流屈曲部の礫を稍下つた右手にある滑らかな崖際の斜に長いオーヴァーハングを利用し、人夫達は巧妙にピトンとロープを用ひて上段と下段とに、天幕をおほひかぶせ、頗る變つた陣屋を作り上げた。火は礫に焚く。礫の上部には黒い斑紋のある岩がすはつてゐる。それから下手流によつて礫は谷の中程迄出てゐる。私達は清流に口を嚙ぎ、頭を洗つて水際の大岩より谷の上下を見渡す。

先づ棒小屋澤落合右岸の突端、私どもの長く居た休場が間近かに見える。黒部川は二段のタルから立派な岩の關門を過ぎて、幅廣く丸く兩岸を押し、沸々とたぎつて落合にせばまつて行く。岩壁は白と鐵赤と黒、灰のモザイクに飾られてゐるが、皆光は吸収するものより反射する方が多い。落合への眺めは全く下流よりの夫れとは形も距離も違つて見える。此は豁谷の形状と觀測者の立脚點によつて異なる事は勿論であらうが、傾斜面の上よりと下よりとの感じの差が錯覺的に異なる爲ではあるまいか。私は谷の上から見た方が距離は短縮した様に感じた。兎に角下流の眺めは眞に絶景である。棒小屋澤落口の白瀑は明かに指され、劔澤の釜を包む特徴ある岩塊も鮮やかであつた。

聽て焚火をかこんで楽しい夕食が始まる。椎茸と玉葱を入れた味噌汁は殊にうまい。そして其間、今日も亦夕雲がしづくくと谷に下りて来る。私達は最上段の寢床に引き上げて、其入口にさゝやかな火を焚き、ブトを防ぐ、其光景は一段と印象的な原始的感銘を與へる。人夫の一人が負傷したので、朝鮮人參エキスを塗つてやる。此の薬には私も昨日から向脛が厄介になつてゐる。手當濟んで湯を沸かし、又山にはちと過ぎたホットレモンを乾杯する。

月は又峯を離れた。三人は其の青白い光を慕ふて積に出た。奔る瀧は今珠玉の如く輝く。とぶ水は白うして稍うす青み、うちひそむ早淵はえも言はれぬ銀色に照つてゐる。高き崖は浮いて仙骨稜々とし、右岸の森の梢はうごめくが如く深い趣を表はして、今や天地嫦娥の遊歩に好むがまゝの姿態をもつて待つかの如く思はれる。ふと夢遊病者の如く水邊に歩み、手をひやくかな川床迄いつまでもひたして、私は限りなき月夜の思ひを親しんだ。背にする岩はひえんと、奏づる水の調べにいいいよ、眼は芽えて来る。終に峽の月は黒部別山に隠れた。廊下の半ば上は光照れるに名残惜しみ、九時十分分に寢床に歸る。下廊下の第一夜は斯くも祝福された。(午後十時過、氣温十八度。)

五 下廊下の核心へ

八月三十日。未明の星空は下廊下の行が幸ひされてゐる事を物語つた。一夜の宿りの禮を岩壁に厚く述べて、八時に十分前なる頃、朝暈に向つて川を溯り始めた。昨日下りた廣い岩棚の續きを進むと、タルの上に青味を帯びた美しい平滑の壁がある。其處から今日は黒部別山澤對岸の稍下手なる赤抜けの山肌が見える事に氣付く。朝の谷水はほがらかに流れる。

平岩から一寸下つてより傾斜五十度ばかりの面を斜に三四間登る。長次郎はロープを垂らして呉れたが、岩の性状からいつても極めて安全な足場手懸りがあるので、不用な位だ。何となく岩壁は丸味

を減じて來た。タルの上流は又落差を増して一つも女性的な流紋は作らない。右岸のアンデサイトを思はせる様な赤壁を二度目のロープで三十五米ばかり攀ぢ登る。傾斜五十五度位。此處は技術的にいへば綱で結びあつて各人隔時登行をすべきである。下をへつても行かれさうだが、一ヶ所足の運びのむつかしい所が淵の上にある。上つてからへつるとすぐに灌木の中を行く様になる。私はふとクマリン（香料の一種）の匂を感じる。麩でヤマヨモギや花の凋んだカメバヒキオコシ等の草の生えた平に出る。平の上には生々しい赤壁が直斷されて立つて居る。此の草の平を一町ばかり進んで行く時、私は草中には角のある石が地をおぼつてゐるのを見た。皆赤壁よりの岩屑で、之で見ても黒部川が生を營んで、盛に削磨し、兩岸又之に伴つて變化して行く事が分明である。

私達は草場の中頃、川縁を稍離れた岩屑道の元場で休んだ。振り返ると嵯峨たる仙人山東のヅコ（頭）も見える。まとまつた美しい景色だ。對岸は矢張り逆層で、潺湲たる水注ぐ小澤が多い、灌木も相當茂つてゐる。其側上空の黒部別山支峰の亂峰は蒼色に光つて、おごそかな有様を示す。此の平は元場の所で二十度前後の傾きをなして可成り廣く、下廊下の域内としては珍しい所だ。私は重荷となるのを承知で岩片を採集したり、人夫にさがしたりしたので、二十分ばかりわけなくたつてしまつた。

九時近く、又草原を分けて、咲き残つたツリガネニンジンやカハラハ、コに眼を觸れて行く。黒部川は此の平の臺を小廻りして流れてゐる。見やる對岸には長石のヴェインが太く入つてゐる。其は皆縦に入つてゐるので、恐らく其基脈又は基岩との境目から浸蝕作用が起つて裂開を生じ、末には其處に見る様な大小の崖谷が右岸よりも遙かに多く發達したものであらう。

草場の外れから木藪を少し下り、川岸の水から一間乃至三間の箇所に行く。別にむつかしいへつりではなく、美しい水の躍動や波紋を眺めつゝ歩ける。野營地からも見えたり白くむき出しになつた黒部

別山側の尖頂岩は眞上に聳えてゐる。其岩峰から谷に下りてゐる崖際は、質が脆い様で、常に破壊の營力は働けるもの、如く、最下部には扇狀のタールスが發達してゐる。此も下流には餘り見なかつた地形だ。それから川の屈曲を曲ると私達は谷の奥、例の直立數百米なる赤瓦附近の下廊下プロボアを望み始める。川は一寸開き、廊下らしい削立となつて来る。川幅も今迄に比べると稍擴まつて、益々「明るき峡谷」の特徴を發揮して来る。

行先の川岸の岩壁は順層ながら稍丸味を帯びた赤味の壁で、流の大量は濤となつて靜かに押し合つてゐた。對岸の岩は平滑な八面體に割れてつる／＼のものが多し。但、傾斜は今ゆく側の方が總體に強くなつてゐる。再びロープが取り出される。約五米攀ぢ登つて、對岸草の生えたタールスを望みながら、次で十五米ばかり斜に岩腰を下る。此は手懸り足場は小さいが矢張上向のしつかりしたものなので具合がいい。そして此場所は傾斜四十度以下の岩稜の横面なのであつた。

これより一町ばかり平らな積を歩む。積には大小の墜石が散らばつてゐて、岩の間軟かき砂地には羚羊の足跡が續いて印せられてゐる。谷奥の左手には、先年冠さんが三角點から天氣の模様を見て下らうとせられた無名澤の割れ目と、其上の額の様になつた木深いが側腹峻しい山の鼻が見えた。其處が實に下廊下の中心なのである。なほ又、下廊下の大觀を組立つるに最も役立つた黒部別山は、惡絶險絶なる地貌をあらはし、一大屏風の上には角塔、尖峰、乳頭等種々の岩塊の突起が數へ切れぬ程隱顯し、疊積して、誠に比類少き山なる事をうなづかしめる。立山、劔より展望の快を貧るの時、木深い低い平べつたい山の黒部別山の裏側（黒部側）が、劔、穗高さへ或は三舍を避くるていの複雑な地形、峻峻な傾斜を有する事をよく想像し得るだらうか。後立山山脈の尾根からさへ、恐らく其眞劔味は終に了知されないであらうと思ふ。

さつき見たタールスの次の澤にも草地があり、上は壁になつてゐる。壁の地は闊葉樹の細木が立て

こんでゐる。礫はぢきに盡きて、九時三十分、其南端に來り、涼々の水聲に耳洗ひながら行手の通過如何にと片唾を呑んだ。此處で此日始めて考慮を要する長い悪場に遭遇したのである。谷は先行二町ばかり、川幅一杯に濁流が漲つて兩岸共に純粹なゆるみなき岩裾となり、殊に我々の行くべき右岸は傾斜平均七十六度位の、初めはオーヴァーハンギング氣味の、金氣の色出た岩壁なのである。黒部別山の高みは仰角四十度を示す。谷中、此方に近く大岩が横はり、其上手の水は白めきさはぐ急瀬より俄かに深く激んでタルとなり、再び湧き立つて眞中へと疾走して行く。私達は其の力こもつた山水を今迄よりも更に美しとは思ふものゝ、如何に通らうかの思ひで双眼鏡を用ひ、岩壁をあれこれと探し求める。流の上には今高く無数のトンボがきら／＼と舞つてゐる。

すでに長次郎は單身ヘッリを始めてゐて三分の一程行き、自信を抱いて歸つて來た。彼が流近き岩上に腰を下して上流を見つめる頃には、彼の指揮に従つて山本を先頭として残らずの工夫はロープと共にピトンを携へて作業に行く。自ら工夫は二組に分れ、若い三人と宮本とは先に進んで悪場終局、川中へ大石の散亂した所へ出る。他は割合に近い所でピトンをうち、又橋を作るのである。ピトンをうつた悪場から大石の礫迄は岩稜の鼻が四つばかりある。其の二つ目迄若い組は戻つて來て、抱いた石を水中にどし／＼投げこむ。十時十五分、作業終つて工夫が歸つて來る。日射しは暑く、昨日よりもたしかにすぐれた日本晴だ。工夫達は先づ荷物を置きに往復して、次にか弱い私達を渡して呉れる事になる。長次郎は一安堵して頭が病むと訴へる。彼に事なかれかしと祈る心を轉じて、黒部別山側の岩の割れ目に氣を付けて見ると、割れ目の線は少しく南に傾いて來てゐる。つまり岩石の節理面がさういふ傾きなので、従つて上方の尖峰や角塔はいづれも南方がより急に突き立つてゐる。凡俗を脱した其形相は寫すに筆なく、只「豪い」といふ言葉に盡きてしまふ。私共は待つ間の長さに、日影なる岩のほとりにてしばし氣持よく華胥の國に遊んだ。



山立るた見りよ近附點角三米七六〇二脈支岳澤屋小岩



影撮氏耶次松冠 岳剣るた見りよ近附谷ゴシハ

三人の夫が私共のリュックサックを取りに来て呉れたのは十一時十五分過であつた。一緒に直ちに出發。十間ばかり岩の壁を平らにへつり、其處にゐた一人の夫に指されて川の縁を徒渉する。六間ばかりの距離であるが浅い。又岩をへつって行くが、其は皆とげ／＼してゐて順層である。之よりロープ、ピトンの場所である。ピトンは初め一本、次は三間ばかりの平滑な急斜した岩面で、其處に二本連続のピトンがうつてある。ピトンからピトンへは勿論ロープが連絡してある。初めの所は手懸りが充分なのでピトンは不用の様に思はれたが、次の部分は全く其の有難味を感じる急場であつた。なほ第三のピトン一本をへてロープを頼りに下る。傾斜凡四十度の平壁。今度は川の縁を膝迄入つて渡る。此處は夫が石を投げこんで浅くして呉れた鼻である。十間未滿にして岩角を廻つたが、本流の疾走を身に感じて、水温以上にひや／＼かな感覺が岩へづりよりも強く心をひきしめた。廻つた所は僅かばかり小石の積になつてゐる。次で稍深い徒渉。以後流と岸のすれ／＼の境を或はへつり、或は渡りかゝつて十間もすると登り易い岩角に来る。斜の棚を登つて最後の岩鼻を越しにかゝる。其鼻の下は恐しい迄に流が透明で深かつた。十二三間の間は上向きで凡七七八度の面を有する理想的の棚である。それから丸味はあるが幅廣の棚となり、之を歩いて十間ばかり進むと、川中に大石の轉々とした積に着く。此日の大へつりは此で終つた。十一時四十五分。丁度このへつりに作業の準備し始めてから二時間餘を費した事になる。山人達は私達の荷を持ち、私達を助けながら、終にピトンをも外して越して來たには感謝と共に其のバランスとへつりの巧みに驚嘆するの他はない。天晴れ、長次郎が選抜して來た丈あつて、誰一人として弱い者はなく、然も自ら分業し、互に呼應して沈着に動作する一の氣風は、昨日以來益々下廊下行にふさはしき、かぐはしきものに思はれて來た。

そして其勇者達は今や巨岩の傍にのび／＼と憩ふのである。頭が痛いといひながら、一面頗る樂天家なる長次郎は、山人達に笑はれながらも釣れぬ岩魚釣りを始めてゐる。棒小屋澤劍澤落合附近から

は人跡絶無でさぞかし夥しい漁獲だらうと思つてゐたにも拘らず、一昨日から少しも釣れない。去年連れたといふ竹次郎といふ名人がゐないからだらうなんて言はれたが、それにしてもつぼの青木が釣好きと見えて休息の度毎やつて見るが、どうも上らない。兎に角今年は不漁であつた。

この休場では火を焚いてお茶を沸かし、中食をゆつくりと味はつた。下流には仙人山の頭が三つ見え、其最東峰と二番目との間には兀岩の突起がある。足下の本流は魚影明らかにして優しげなタルと渦流から成つてゐる。岩は白色を帯びてゐる。對岸黒部別山側の崖は前に見た上部の色々の自然の彫刻は隠れてしまつて、最上の塔だけが可成り南に傾いて見えるばかり。其邊の山脈は今光と影との面白い對照だ。やがて眞綿の散切目の様な雲が少しばかり湧いて来る。なほ左方上流へと眼を轉ずれば、左岸には、遙か下より頗る顯著だつた鋭三角の谷底より抜け上つた岩峯は、最早手近かに迫つてゐる。黒部別山澤對岸あたりの廣い山は二つに打ち重つてゐる。其森林には黒木が多い。問題の赤瓦は上部丈すらりと人を射てゐる。

川は上手、之から左に曲つてゐる。曲り角對岸の壁は長三角形をなし、其處丈滅茶々に白い脈が入り亂れてゐる。晝間の光明で少し上の山の肌が燃えたつて来る。全くの裸岩ならず未だ草木が少からぬ此附近の景勝は、綜合性を好む人に嗜好せられるであらう。中食後は各々勝手な所に陣取つて晝寝をする事になつた。長次郎丈はどういふつもりか又絲を垂れ始めた。私どもはまともに日を受けて寝られぬ。見ると大きな岩の集ふた間の日影に山人達は寝ころがつてゐる。しばし其處へ行つて細かい砂を弄び、涼氣を入れて、岩永君と二人上流を見に行つた。少し進むと積續きによい泊場になり得る砂地がある。先は此積から徒渉と一寸へつりをしてから又積に出で、それより谷は左に曲り又右に行くのが見える。對岸にも積が開けて流水は右より左へ移つてゐる。益々逼迫して來た廊下の趣、然し積と巨石は到る處に感じよく開けて、單調ならざる様に配せられてゐる。既に美の諧調はいやが上

にも襲ひ來つた。下廳下核心への自然が、如何に我が心を躍らし、賞美措く能はざるものとなり行くであらうか。

戻つて話す人夫達は私達の見た砂地に泊つて空身で先を見に行き、明日は此の鼻の山を乗越さうといふ。けれど長次郎は徹底せずんば止まぬ志と、多年の經驗と其天才的の感の鋭さより、此先水面上三尺程に見える積迄行つて泊り、乗越した方がいゝとたしなめる。米は餘す所二日分のみ、よつて赤兀近く迄は一尺一寸でも進んで置きたいといふ私達の希望通りに進行する事になる。

陽光燦たる晝過一時半頃、先づ私達三人より行きかける。砂地を過ぎるとぢきに積は盡きて、行手の赤抜けは見えなくなつた。上流の景には變つた面白さが現れてゐる。無名澤の山水は矢張り狭く、其邊の山態威嚇的な一要素をなしてゐる。追ひついた人夫の半數以上は其の角立つた壁をへつて先の積に行つた。一町半以上隔たる。人體が入ると垂直線になつて谷のV字狀が格別興味深く覺える。

私達も残りの人夫と共にへつり始めたが、オーヴァーハングの下も引懸りは尖つてゐて安全であつた。下りは岩が稍缺けてゐたが、先づ無難に水邊に到り、約十間にして又川岸の上を小さく越す事凡十五間。此足場は太やかな脈の取残された出つ張りの上を行くのであつた。下流から見た時此下が浅い様に思はれたが、來て見るとどうして中々凄じい深さであつた。大分谷に慣れたつもりでも我々はまだまだ騙され易いのである。それから積に取り付く。此迄のへつりはロープを使はず、先發の人夫が引返して私達の荷を持つて呉れた。

私達が積に出たのは二時十分過であつた。此處は前のものとは違つて大石は全然ない。よく洗はれた丸石が綺麗に敷きつまつた平で、川の方に斜に上に向つて長く突き出で、其長さ步測で三十六間ある。砂をも混えて、それには又シ、の跡がついてゐる。本流は此積の爲に面白く曲つてゐる。積の先に立ち、五間程にせばまつた奔流を隔てて美事な崖路をそなへた左岸の岩壁に對し、此旅始めてイ

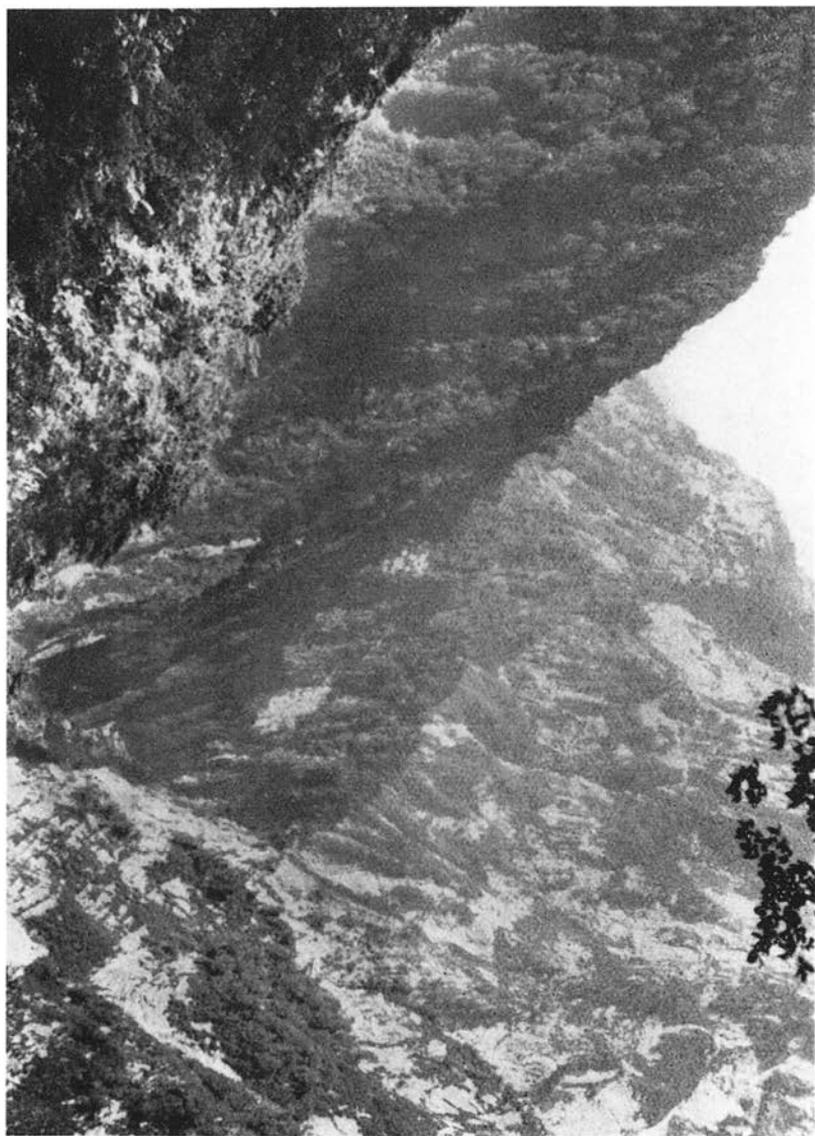
ハツバメ飛び交ふ様を見て、愈々下廊下の感深しと喜んだ。崖は未ださほど高からず赤裸の所凡三十米に過ぎないが、何となく岩の割れ目、崖罅の怪偉な姿は我が旅の益々純化し至高となりゆくを思はしめるのである。深き谷にての思ひは清流一掬の後座して四周を顧る時の景の變化に引かれて、センチメンタリズムの徒らに甘涙を誘ふ様な餘裕は生じない。陽は對岸の崖に隠されて、水のどよめきは更に高い氣がする。積の上手は本流が一の臥岩の爲に堰から放たれて直ちにうねりし、我等の立つ積を洗ひつゝ半圓を描いてゐる。斯くの如きも黒部に始めて得らるゝ明媚な奇景である。

右岸は僅かな距離だが全く壁が傳へないので、長次郎は一人積を離れて岸に上り、上へ〜と林の中を攀びて見に行く。百米も登つた頃合圖がある。其處で残りの者はかたまつて彼の跡にしたがふ。二時二十五分。此の上りは危げはないが、棒小屋澤左岸の登りよりも總じて急に感じた。上る場所は對岸三角壁の正面よりも少しく下流である。木にすがり奮闘する事少時、崩れさうなガケ谷を一廻りして、本流の潑刺たる麗はしい姿、川中の巨石轉々たる様、峻直の壁を俯瞰する。二百米近くにしてやがて下りとなつたが、其は餘りへつりもしないで殆ど同方向に吊り下つて行く。汗は瀧つ瀬の如く、咽喉はやゝひりついて来る。

四時十五分、川近くの草生えた白ナギに出る。積から此の上下に一時間四十分を費した事になる。そして積との水平距離は恐らく二町にも及ばぬ近さと思はれる。最後の人もそれから五分にして合す。あたりの岩間洩る清水のうまさ。此處は丁度三角壁の直前で、今や其岩山は形全く異り、上方は正しく黒部別山の北峰なる事を示す。休息後岸を傳ひ、二十間にしてロープを用ひる。も早兩岸は純粹の廊下となる。水聲は凄まじい。愈々へつれなくなつた垂直の壁に梯子掛けの作業が始まる。梯子は流木で急造の段梯子、補助ロープで段をくゞつて、長さ凡一間、下四尺は水下に没してゐる。作業は實に速いものだつた。梯子を登り切つてから斑點のある岩を攀ぢる。此は傾斜六十度位。それか

影披氏耶次松 冠

(派支の岳深屋小岩は左 山則部黒は右) 間のと深名無と深山則部黒



ら約五間へつり、下れば左手岩壁から吹き出した冷泉(八度)がある。恐しい力で噴水の如くほとばしつてゐる。此のあたりから何となく魚臭い。行けば河水は叫喚を擧げて玲瓏たる巖に衝撃し、水魔の聲、精靈の眸、私達より感覺の分類をなす能力を奪ふのである。

かくて四時四十分、一の積を得て之を泊場にきめた。すぐ上流の折れ曲りには赤元の親類筋で裏隣りなる元げた壁の大崖窟が二すぢ見える。總ての風物は其がたしかに下廊下の核心、黒部別山澤下から長い洞門の出口なる無名澤の落合なる事を物語つてゐる。先づ長次郎と山本と二人丈が先を見に行く。此二人のへつる様は頗る馴れたものだ。忽ち落合迄の三分の二を行つて戻つて來た。曰く「落合より上は兩岸全く垂直の高い断崖で全然廊下が續き、それから又曲つてゐる」といふ。果せる哉、我は終に來る所迄來てしまつたのだ。其處で長次郎のすゝめに従ひ、今から之を見に行き、明日は尾根から廻らうといふ事にする。

山本と白川が先頭、私、岩永君、冠さん、青木助次郎等の順で、廊下の裾、川中に伸びた岩鼻の急場下の棚を二町ばかりへつて行く。水面上約四間の行きつまりから上流を見る。此迄のへつりは細木のある所を行くので、まアロープはなくてもいゝ。然し先は大分むつかしい。落合迄は約四十間あるが、日暮近くの危険なへつりは萬全の策ではない。遺憾ながら此處で満足する事にする。落合附近にある小さなタルは積でも見られたが、其は本流のタルで、落合は其蔭で水も細いらしい。落合の上手に小なる積あり、其右に少しばかり本流の全く澗になり切つた油の如き濃色の水面が見える。其上の岩壁は断落せんとして固結せる力強さ、何とも形容し難き表情を以て我等を睨まへてゐる。傾斜推測八十五度位、水は此岩下を離れると奥は見えない。左岸の壁は七十度位、此も全く裾を缺いた廊下の眞の絶壁である。谷の深刻狭隘になつた故か、私どものしがみつてゐる岩壁の下を流れる水量は、下流より却つて多い様に思はれる。

私の此部分は餘りに記載的な、然も拙なる言葉なる事を悲しむ。然り、既に鐘釣温泉より歩道を踏んで幾多の勝地を經、棒小屋澤、劍澤の本流にクロスせる世にも珍しき下廊下の關門に來りて落合を乗越し、それより莊嚴華麗なる景の應接に暇なく過ぎて漸くに溯行し、此處に到れば俄然兩岸は相高まり相迫り、共に急峻の度削立の凄さを増して、我等の主觀は正しく大自然の威力に壓せられたのである。只我等は決して陰慘險怪な氣分にうたれたものではないと言ひ得る。下廊下は如何に深しと雖ども、其は誇張すれば水晶宮の奥深き迷路なればである。

私どもは綱で體を結んで此の深奥巍乎たる光景を撮影し終り、程なく泊場へ歸つた。泊場は餘り良好ではないが、上段に一つ私達の天幕を、下段に岩陰を利用してロープを張り天幕をおぼふた人夫達の小屋場を作つた。私達の天幕場の下は急な岩場の下りになつてゐる。炊事の火は流近くの岩の間で焚く。緊張の日の夕べ、一服の煙草は思出と此旅の目的半ば遂行し得たる満足とに味はいは格別である。

今宵も積にさまよい出た。けれど八時半になつても月は現れない。光は見れど本形なき晩である。さるにても私共の眼は下流黒部別山と仙人山と重りて漏斗状谷をなし、内側が青味を帯びた銀色に光り、特に岩壁は鈍銀の様な輝きを持つてゐるのに吸ひ付けられた。人寰を脱し何のけがれもなき大いなる窮谷の夜の絶景を私達は泌々と眺めた。翻つて上流は背景をギザ／＼山でかこつて、月は其背後を忍ぶものゝ如く、か黒い影はいつまでも黒かつた。されど兩岸の漏斗形は却つて下流よりも眞に迫つてゐる。自然に對し人間の餘りに小さければ、萬斛の雪解水、森より滴たる清水に混じて我等は微細なる粒子に化して行くのではあるまいか。そして只、上空の峨々たる嶮山のみが濾され残るのであるまいか。

月無き宿りには其代りブトの來襲がはげしかつた。人夫の野口に天幕口に焚火をこしらへてもらつ

て、九時頃寢に就く。友は早、軽きいびきに眠つてゐる。私はしばし眼が冴えて、落流する水音に私ひそかに我が思ふ山幸ありやなしやを問ひ、明日の運命をよきに考へた。

翌朝クリノメーターで私どもの泊場から四圍の高みへの仰角を測つて見た所、次の様な數字を得た。

上流谷の上空山々の凹所	二十二度
上流ギサ／＼山の高所	三十三度
右岸山額	五十八度
左岸岩壁上	四十八度
黒部別山（漏斗の左上）	二十四度
仙人山	十二度
下流谷の上空山々の凹所	十度
下流漏斗右上	三十二度

六 右岸尾根を迂廻し再び下廊下へ

八月三十一日。此日こそ私等の黒部行に記念すべき日である。食糧の關係からどうしても其日は下廊下の冠氏舊知の部分、黒部別山澤落合稍上手なる徒渉點へ出なくてはならなかつた。少くとも早く測量道に出て谷か嶺かへ向はねばならなかつた。若し嘗て冠さんが二夜を過された三角點（二千六十七米）に晩く着いたなら、長次郎は信州路へ國境越えを主張した事だらう。然るに東信電力の大正十四年盆前に付けた測量道は、私達の此の大迂廻をたしかに救つて呉れた。ナアロー・エスケープといふ英語の意味がびつたりと當てはまる様な一日の場面であつた。其は次の様な經過で幕は開き又閉ぢた。

午前四時近く私は一人起き出でて星を仰ぎ、幸福を感謝しつゝ、火を焚きつけた。そして煙草一服ふ

かしてゐる間に人夫も起き出でて私から火種をもらつて行つた。六時頃は全く明るく、皆は支度に忙しかつた。人数が多いと何かと手がかゝつて、出懸けたのは豫定より一時間後の七時であつた。泊場へ別れ際に冠さんは「大正十四年八月卅一日、棒小屋落合ヨリ川傳ヒニ、日本山岳會員、沼井、岩永、冠」と、味噌の空樽(徑七寸位、高さ六寸位)に記して泊場の二三間上方に置かれた。だるま然たる青木助次郎がいきなり立つて燃急さしてもつて、自分達の泊場の壁になつた岩面に簡単な文字を記した。「ナベカズキ」といふ文字が附け加へられた。其は鍋擔ぎの謂で、一行中の長老の一人安川龜次郎といふ男が鐘釣温泉以來鍋を最も貴重な物として責任を持つて擔いだからである。安川のおとつあんは「若い者に任して置けない」と誇りに言つた。

先づ下流へ戻つて例の梯子を架けた悪場を緊張して渡り、最後の長次郎はダブルロープでやつて來た。そして七時二十分には昨日一安堵した草場へ來る。此處でいづれを登るかが問題であつた。十間ばかり長次郎は其の眞上の岩抜け場を登つて行つたが、岩は崩れ落ちさうで多人数は危ないといふので、山本と私とが同じコースを續けたのみで、他は昨日下りた矢張り急な林の中を登る事にした。此行で始めて二組に分れる。羚羊の様に確實で速い二人の跡を私は稍々あえぎながら踏んで登つた。戦慄に値する程ではないが、崩れさうなとげ／＼岩をへつり上つたり、一枚岩を横這ひに越したりして、よい所ではなかつた。成るべく木の茂みを攀ぢて、七時四十五分、昨日の上りと殆ど同高の所迄來た。傾斜地に荷をかばひながら一休みし、他の組のなほ遙か下の林の中なるを待つと共に山を眺めて、新たなる壯快の氣分を抱く。黒部別山の白兀や草場や、南方や南方の割れ目や明日行くべき大へつり上の壁などが見える。

之より稍なるくなり、八時、草谷となつた。それより石、草相半ばする崖澤をへつり登り、本流水面から凡二百米の高さの所で休む。他の一行はまだ下である。登る毎に黒部別山は益々大きく立派に

なつて此處では絶頂の平も明かとなつた。私達の今日下らうとする尾根は谷の上手、黒部別山澤の前に長い肩を現はしてゐる（實際下つたのは此の稜線より更に南の部分で、其間に例の赤元があるのである）。其のふもと、無名澤落合より上の谷はへつて瞥見した通り、深い青淵が續いてゐる。

それから上は大分なせになつて來た。くぼみの奥の榊林も見えて來る。休めば山鳥の聲。谿音の律調。羚羊の跡を見て山の深さ、峻しさを思ふ。

其休場からは仙人山の高點も見えた。黒部別山大尾根のなつかしい平とあの針葉樹の森も眼に映る。南峰の東尾根の下はいさゝかのゆるみもなき廊下の大壁、縦目の割れすぎ、青き細尾根、影なる巨大の裂けたる岩罅に眼は吸ひ付く。更に南なる隆起は尖頂塔ツギンギルムにして北側えぐれたるもの、實に凄絶なる風光ではないか。

アマドリ（イハツバメ）の行末追ひ見つゝ、憇へる時にがらくと墜石の音が聞えた。人が落したのであらう。其人々は間もなく私達の方へ草を分けて横切つて來た。一人、二人、三人と、かくて九時頃一行は再び一緒になつた。此上はもう登攀の苦しさはない。くぼみを奥へくと進んで榊林の中に入つた。九時半頃少し左へからんで一の開地から鬼ヶ岳や御前谷の下尾根を眺め、本流の廊下の底を俯瞰した。其谷は見えざりし所、行くを得ざりし部分の最も險惡なるものであつた。即ち壁の最下部はオーヴァーハングし、上部は數百米の間削るが如く、少し上手は塔狀の岩塊となつて、すぐ先の曲り角となつてゐる。此より見かけの傾斜、右岸六十度、左岸七十度。實に海内にならびなき深刻な峽谷、單に絶景と稱するのみでは足りない。しばし讚嘆の辭を重ねて、九時五十分發。少し上れば谷の聖なる美しさは見えずなつた。十分間にして北西の方に池ノ平の山が見えて來た。然れば谷の音遠く尾根近くなるのであつた。

十時二十分、終に平になつた。此尾根には妙なくぼみが出來てゐる。羚羊の糞などが落ちてゐる。

私達は久しぶりにて牛首山、鹿島南槍、布引ノ頭、爺等の國境の山々に面する。此等信州境の山脈は黒部別山の壁ばかり見つけた故か馬鹿におとなしく見える。少し北には白馬の旭岳、清水平の山、及び黒部下流の奥鐘山、名劔山等が現れてゐた。眺めはあつたが、此れから先は藪がひどくなつてゐた。押し分けくゝて十一時頃、クロベ、ヒメコマツの寄り合つた地點で休んだ。藪との苦闘は只休息と涼風とによつてのみ辛うじて償はれる。平尾根に出たら東信道に合するだらうとの當てが外れて一同落膽したが、時刻なので飯盒に詰めてよくパッキングを施して來た谷の水を少しづつ分けて、中食の箸を取る。樹間からオホタテガビンの峻直な絶壁を見ると、矢も楯もたまらなくなる。之と相對して黒部川を雄偉ならしめてゐる赤澤岳東尾根の危峰もほの見えた。

十一時三十五分出發。中食の前後に木に登つて三角點へ行く見當はついたので、大分馬力を出して藪山に行く。晝間とて身體は熱し、汗は服の上下とも通して來る。途中に小池が二つ離れて見付かる。水は赤く染まつて底は泥深くオタマジャクシが泳いでゐるので、飲む氣にはなれなかつた。又、或る所からは立山の東面、サル又の大残雪と大汝とが立派に見えた。私達は只管測量道に出ん事のみ願つて、稍々あせり氣味に押し分けて行つた。

ふと、先頭の人夫から「道だ」といふ聲が叫ばれた。うだつた身體はきゅつと引きしまつて足早に近付くと、たしかに其は東信の新道で、中々よく作つてあり。丁度棒小屋澤の二股（西澤小澤との落合）から上つて來た所なのであつた。千七百米乃至千八百米のあたりである。時に十二時二十五分。いささか悲觀してゐた所へ第二の豫想よりも意外に早く現れたので、一同はすつかりはしやいでしまつた。道のべにゆる／＼と腰打ち下し、汗をぬぐつて、牛首山より續く鹿島槍の山肌、森林の美しさ、山姿の鷹揚さに思ひを寛やかにする。私は嘗て溯つた棒小屋澤へちよ／＼と駈け下りて一飲み其の眞清水を含んで來たい心が動く。けれど今は悠々たるべき時ではない。十五分休憩の後には私達から

先にぐんぐんと新道を尾根通し登つて行く。

道なればこそ、急ぎの尾根よりも左右及び北の山々が望まれた。祖母谷のイワウ澤、雲かゝつた劔岳、オホタテガビンと重つた立山、黒部別山上の白兀などが印象に残つた。道は丁度私達の追ひ返された無名澤の直上を廻りつゝある。此澤も左右兩岸の山腹は急峻で崩落し、一寸下れさうにも思はれない。山抜け場を過ぎて上り、一時二十分、三角點の峯を直前にして母の下で休む。我等が下らんとする尾根は前方に針葉樹瀟洒として立列び、黒部の絶壁をさし挟んで立山、劔の聖壇を見る。立山はカアルがよく現れてゐて面白い。劔は幅廣い黒部別山に下部は隠されてゐるが、其山容は岩峯断裂して如何にも淋しい景だ。長次郎澤の熊ノ岩は見えてゐる。

道はそれから三角點には登らず、峯を巻いて一時四十分には側尾根に達した。そして之を下つてゐるので、私達にはあつらへ向きだと大喜びし、休んで、劔、立山の寫眞をとつた。人夫達はも一つの飯盒水を出して中食を腹に詰めたが、私達はさして腹もへらないのでレモンを切つて砂糖と共に啗り、水を飲んだ。立山に雲がかゝる頃ほひ下り始める。時に二時。

尾根道の下りから劔の全容が見えたが、前よりも更に其岩峯（八峰？）の連立がいかに淋しかつた。黒部別山の方が谷近くでは覇者の如く見えるのであつた。道は直ちに左に折れて山腹をへつり下る様になる。然し私どもは敢然豫定の如く之を捨て、再び藪行く人となつて、細い急な尾根を下る。も早冠氏、長次郎會遊の地に入つてゐるのである。涼風にありがたく吹かれて滑るが如く下つて行く。

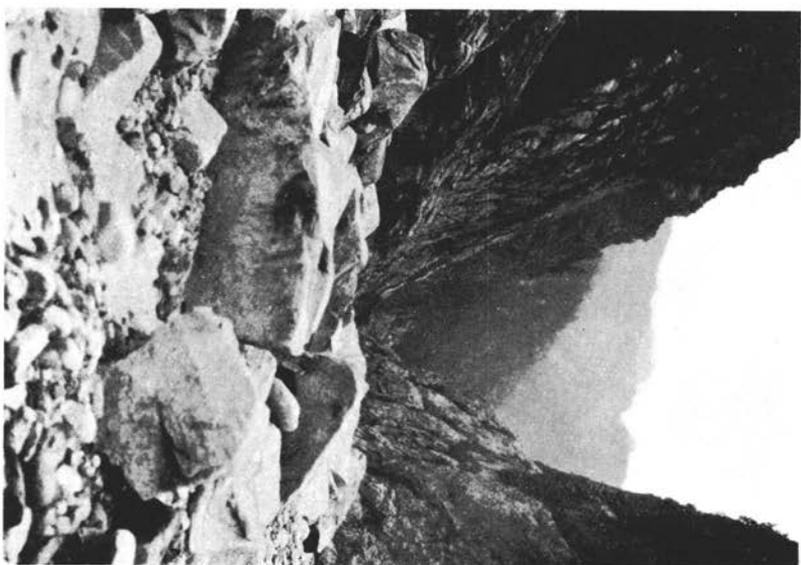
此の下りこそは本統の慎重な急行であつた。豫定よりは二時間程もおくれてゐる。最後の下り場は長次郎の見る所では只一つよりしかないの、其れも上るより探すに難い事である。本流の水邊だつて此前は橋を架けたのでよい所ではあるまいといふ。途中には水を得る望みは全くない。食糧も明日の朝さりなので、何としても廊下の裾迄は行かなくてはならない。私達は出来る丈奮闘を誓ひ、ひと

へに長次郎の見通しに信賴してついで行くべきである。

初めは尾根も急だが手放して歩ける程度だし、ひどい藪も避けられるので容易にはかどつた。大分下つて、昨日今日川岸から見た尾根の肩の上段迄來た。ノートに記す暇もなかつたので、詳しく正しい事は云へないが、一二度行き直した事もあつた。尾根は下るに従つて小骨に分れ、錯雜して來るのであつた。兎角して執拗な平藪を過ぎ、一の草場に出て休む。時は四時二十分。此上から黒部本流の最も險阻にして見えざりし部分（此の迂廻路の登りにて見た險所の更に上流）及び黒部別山の壁を眺める。すばらしい光景だ。

此からロープが取り出され、強さ（速さ）と確實さとの平行しない私達を山人は見まもつて呉れる。美しい針葉樹の生えた縁はも早崩壊し勝ちな崖が出て來て、山の傾斜は眼に見えて落ち來るのであつた。餘程左へ（南へ）移つた様に記憶する。長次郎は常に皆を激まし、急がしてゐた。

五時、水邊からさり立つた壁の最上端、突起の頭に着。右手には通過不可能の谷の部分に抜け落ちた例の赤瓦が見えてゐる。明かに逆層の巨大な板状岩盤を縫ぎ合はしたやうな此上もない險悪さである。黒部川は其鼻で見える。此で下廊下は兎に角全部見られたわけで、突端の今見えぬ小部分は黒部別山の上から望める箇所である。私達はさつき飯を食べなかつたお蔭で大分疲れてゐた。就中、岩永君はいつもの遠慮から私達に義理立てた爲、下りの能率がひどく低減してゐた。つまらない場所で石を落したり、私達が平氣で通つた所を逡巡したりした。然し此は決して君の強さを否定する事にはならない。登山者の山の強さの曲線といふものを假に描いて見たならば其波の高低が甚だしい人と然らざる人とに區別出來るであらう。君は其前者に屬し、平均の強さは普通人より遙かに上位にあるが、空腹の時には急激に我々以下に落下する性質を有してゐる。果せる哉、食を攝つてからは俄然頑張り出した。



黒部別山澤附近より赤澤谷を望む



野管地より見たる黒部別山澤附近の岩壁

此鼻での食事は大した満足を皆に與へなかつた。私のリュックサックから取り出された板チョコレ
 ートとソールト・フレックスといふ鹽味のついたビスケットが少し宛十一人に分配されたに過ぎな
 かつた。豫備の食糧としては他に上等な貝の柱を持つて來たのであつたが、どうした事か其時は誰一人
 として思ひ出せなかつた。然し兎に角、急ぎに急いでなほ長次郎の豫定では後三時間はかゝると云つ
 た小休では、私達の心の餘裕は餘りに少かつたのは事實であつた。

其後の下りは危い所を避けて成るべく林の中をずり下りた。五時四十五分、大分下つて川を近く見
 る所に來た。其邊は尾根は斷落してゐるので、細かに割れた山腹をどうなり傳はつて行つたのであつ
 た。廊下の壁は益々急になる。巧みな長次郎の見通しによつて得た最後の下りは、此前彼が冠さんを
 導き攀ぢた壁中の溝に他ならない。ロープを垂らし、石を落さない様に慎重に一人宛吊り下つて行つ
 たりして、其崖溝を通過した。實に氣味の悪い難場であつた。

それでも終に切り抜けて、到頭望みの谷間に下りる事が出來た。時に六時十五分。先づ物をも言は
 ず思ひ切り水を呑む。うまい、實に美味な水であつた。長次郎の豫定よりも遙かに早くつけたので、
 彼も頗る上きげんである。私達も安全な泊場を日の内に得て欣喜雀躍、大へつりや徒渉點を打ち眺
 め、最早平ノ小屋迄行つたかの様な氣分で、右岸の岩棚を乗り越え、下の礫に行つた。礫は冠さんの
 嘗ての行よりも廣く出て水は遙かに減つてゐた。其故、右岸の橋ごしらへもしないですんだ。

泊場では六時二十分から人夫は野營の支度に急がしかつた。私達は久しぶりで肌を洗ひ、顔を洗
 ひ、壯絶極まりなき景觀を楽しんだ。此處は昨日の泊場よりは岩は鋭く、裸かの壁ばかりであつて、
 明るさと廣さと見晴らしは遙かにすぐれてゐる。赤澤岳が上流V字狀の空間をひきしめて塞いでゐる
 のも傑作だ。黒部別山澤の大割れ、高直なる岩の殿堂、綠玉の反光にもたとへつべき満を持したる蒼
 水、堂々たる赭黑色の峭壁。其は冠氏「下廊下の記」に簡潔に描寫された所のものであつた。

夕食は晝飯の残りを雑炊にして食べた。それでは未だ不足なので、人夫達は砂糖湯を作つてがぶがぶ飲んだ。既に夜の帳は峡谷に下り切つて、積にて營みの焚火のみがめら／＼と照り燃える。過激なる登降の後の五體は氣持よく伸びて、はてしなき無我の境にさまよひ行く。月明に幽仙の興趣は増す。唄も歌はず、感嘆詞も洩らさず、十一時頃迄、照りて青白き巖に腰かけ、只々岩と水と、光と音のすぐれて調和した永遠の山の生に、我が魂を熔融してゐるのであつた。

泊場より仰角及び見かけの傾斜は次の如くである。

上流谷奥のギヤツツ	十五度
赤澤岳尾根最高に見ゆる頂	十八度
左岸	四十三乃至四十八度
右岸	四十八度
下流上空の山	三十四度
見かけの傾斜	
上流右岸下部	九十度
上流右岸中部	六十度
上流左岸下部	六十八度
上流左岸中部	七十五度
下流右岸下部	六十八度
下流右岸中部	八十五度
下流左岸	六十六度

七 黒部別山澤落合より上流

九月一日。昨宵は喜びの餘り興奮した故もあるが、少し暖い様であつた。よい天氣が續き過ぎたの

で變るかも知れないといふ不安は皆の胸に湧いてゐた。果して午前時半眼さめた時には細雨が泊場をしめらしてゐた。一議にも及ばず早發と決し、白みそめ、細かな水滴のとまつた頃人夫に後始末を頼んで、五六人で黒部別山澤の落合迄見に行く。

磧より後立山側の巨岩の間をめぐり、落合正面の大盤石に攀ぢる迄凡二町、五分位かゝる。此から谷は惡絶な眞の廊下をなし、此時期でも徒涉し得る所がない程に深潭を走る峻流となるので、覗く丈であきらめる。落差は落合附近が特に著しい。黒部別山澤は流石に秋立ちし様の、落合は雪消えて、多からざる水が本流に注ぎ入つてゐるが、少し上からは白凱の濁筋となつてゐる。急傾斜だが、若し落合に渡られるものなら登られさうに見受ける。但其岩壁は灰白色の凝灰岩めいた花崗岩から成つて、右股を行けば、奥迄正しく進むに非れば、攀ぢ難い斷崖のみである。

私達が峯の仰望に水の凝視に心を留めてゐた時、人夫達は「シ、だ」と言ひ出した。見ると灌木の茂みから岩間を傳つて水飲みに行かうとしてゐる可成り大きな羚羊だ。十五分ばかり氣永に待つて、黒部別山澤の左岸、本流との突端、此方と殆ど同高の場所に下りた時、カチリと二つのシャッターは動いた。と同時に用は濟んだとばかりわつと喚聲を擧げた。羚羊は驚いて隠れやうとしたが、悪場は流石に此の岩登りの名人にも容易でないと見えて、跳びも出來ずよろめきながら滑稽な姿で高みの木の間に入つて行つた。私達は大に笑つたが、思へばあはれな事をしたものである。彼が絶體安定の棲家なりし下廊下核心はすでに人の香來つて、其生活は精神的におびやかされたに違ひない。恐らく其日は愈々渴してたまらなくなる迄岩間にひそみ、草の搖ぎにも心おぢ／＼と落付かなかつたであらう。兎に角珍しい見物であつた。

羚羊を驚かした罰か再び小雨が落ち出した。其處で泊場に戻る。用意整つて徒涉點に向つたのは七時五分であつた。此徒涉點は冠氏の記された如く實にうまい所にある。流は悠然と右岸より川の方

と直角に曲り來つて美しい玉石の磧と磧の間を過ぎ、稍々ざはめいて又直角に折れ曲り、左岸全く裾なき大屏風の下を落ちて行く。だから私達は川の方向に渡を突き切つて渡るのである。（かういふ流路と之を利用しての徒渉は決して此處丈にユニークなものではなく、私どもの乏しい経験でも鹽原附近、大蛇尾谷を溯行した際にも遭遇した事がある。典型的なV字状谷でも有り得る事で、少し谷に注意すれば尙幾多の例を発見する事が出來やう。只、此處のものは我國で最も深刻な大峽谷たる黒部川にあるさへ珍しさに、就中最も景象の非凡な絶險の中心に位せるが自然の妙手至れり盡せりと思ふのである）。

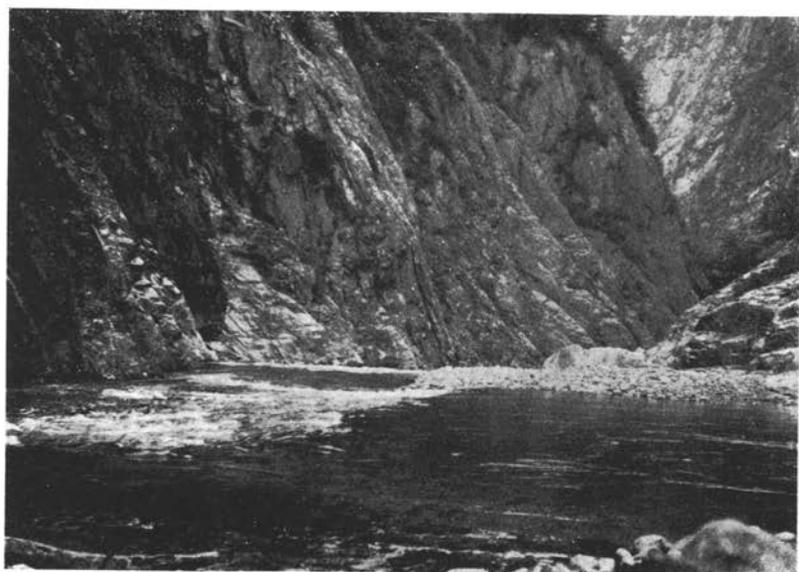
徒渉は深さ膝を僅か越すのみで容易にはかどつた。私の様に軽い者でさへ、人夫に助けられないで直線的に渡る事が出來た。それから少しして大へつりにかへる。此も總じて言へば、豫想よりらくにそして安全に行けた。岩層の關係からいつても、下流からする方が困難の程度は少いと認められる。ピトンはついに不用であつた。但、此の成就はひとへに水量の減じた事が第一の條件であつた。何となれば大へつりは上部よりはよき足場を備へた水邊を歩む事と、之に出る迄岩稜と岩棚とを越す緊張味との組合せであるからであつた。

七時十分、左岸の行が始まる。一寸棚を上り、長次郎と山本の二人が六十呎のロープを持つて攀ぢ、私達は其によつて安全に行く。次に八十呎のロープを張つた所を越す。其次には残雪のある大きな割れ谷が来る。上れさうに見える。之より本統の大へつりで本流が少からぬ大きな飛石を洗ひ洗ひ、白熱し、藍靑化し、激しく撃ちあふのを眺めながら、行手にわんぐりトンネル様の口をあけた大残雪がある所まで、傳ひかゝる。

雨はなほそぼ降る。壁の花崗岩はつる／＼に磨かれてゐるが、角立つて引懸りは多く、高さ岩峰のロック・クライムの氣分がする。但ロープは餘り使はず一へつり過ぎる。次に又滑らかな岩を長次郎が



(左)端突の脈支岳澤屋小岩と(右)ンピガテタホオの山別部黒



影撮氏郎次松冠 岩風屏大と點涉徒の下廊下

いさゝか上でロープを支へて、先づ青木長松から先へ上り、一行はダブルロープで一人宛行く。それから數回上下を重ね、行先に丸味ある大岩を眺めて、全く平滑に磨かれた岩の斜面にぶつかつた。傾斜は七十度に垂んとしてゐる。どうするかと見る間に長次郎はわきから四五間上につつてロープを垂らす。山本は其端をしかと片手で握つて荷を背負つたまゝ裸かの足の親指を二錢銅貨大のくぼみに引懸け、四五回體を動かしたら上り抜けてしまつたには驚いた。私達は腰にロープを結び、用心して引張り上げてもらつた。それから下つた先の所には先年冠さんの通過では見えなかつた小さな積が横はつてゐる。手前から見た丸味ある大岩は積に續き、私達は右手に登つて行く。恰かも滑石の如き水蝕の一樣な岩場である。凡百二十尺上迄ロープは二度使つた。第一のものはつる／＼で七十度ばかりの壁であつたが、辛じて足場はあつた。第二のものは氣休め出来る容易なものであつた。

それより又二度ロープを使つて、岩筋横がらみの上下をやつた。終つて現れた灌木の叢を高みに登り、愈々去年の一行が追ひ返された實體なる壁に來た。正に九時。今年は條件がいゝので安心である。細雨も全く上つた。此處の峭壁には著しき石英(?)の脈が水平に貫通してゐる。岩面の滑かさは此れ迄のものに優るとも劣らない。一行はロープを用ひ、平らに岩角を縫つてへつた。稍々離れて高みにロープを支持してゐた長次郎は、其惡場をダブルロープなしで(尤も引懸ける所は絶無であつたが)、實に巧妙な腰つき足つきで、手は所謂 *press hold* を用ひ、見る者の眼にはらく／＼とへつり終つた。今更其のバランスの完全な事に感嘆した。今度は脈が垂直に下つてゐる所から、危険はなく下つて、さしもの大へつりも終局を告げた。岩永君達が斷腸の思ひで去り兼ねた行きつまりの立場の岩がしかと踏まれた。事實此の大湖行での難場は過ぎてしまつて、私達は溢るゝ歡喜に面を輝かし、萬歳を叫び、谷の響を新たなる氣分で聞いた。岩よ、水よ、我等は汝がかたき抱擁より今し離れたのである。うたかたの夢、峽流に添ひへつり遂げたい心は、今より美しい思ひ出と變つて、戀ひ慕ふ憶ひ

は永遠に生きるであらう。

一同へつり終つたのは九時十分。約二時間にして此の長いトラヴァースは私達のものとなつたのであつた。谿水の狂はんとする姿はも早我が親しき友であつた。下流の空間は右岸八十八度より六十度の面に屈折し、左岸六十六度平均に稍々コンヴェックスに迫つた有様なるに引き換へ、上流は廣く開けて來た。然し對岸(右岸)は既に逆層をなして、其岩壁は傳ひ難い。

間もなく私達は残雪の窪地に來てゐた。大雪塊の高きは十間餘もある。ひやゝかな雪溶け水が流れてゐる。よい休場だ。そして此れから突兀たる黒部別山側へ攀ぢて行つて見たい氣のする所だ。然し山人達は足早に過ぎて行く。平ノ小屋迄行かなければ食を得られないからである。其處に本流が一間ばかりにせばまつて旋風の如く巻き返り突進する奇景を近付いて賞する暇もなく、小藪を越え、山裾を相當らくに歩いた。其邊からかすかな切開が現れた。去年の行よりは高みを行くので、水態をうかがふには不便であつたが、緑深き右岸よりかゝる垂直の高い瀑布、即ち新越ノ瀑上段が眺められた。此は河岸を行けば、下段の低きものと落口とを見るに過ぎないといふ。

やがて一の惡場に達したが、岩へつりはワイヤアと梯子、ポートの組合せで工事されてゐたので、難なく越した。それから明かな道となる。兩岸の山は次第に開き、凄みを失つて來るが、森と水は豊かに接近して來る。急ぎの足、空腹の眼には景色をと見かう見する餘裕はなかつた。道が出來ては簡單にとばして行けるので、以前は夢にも思ふ事の出來なかつた短時間でクラノスケ澤落合に着く事が出來た。十時四十分着。クラノスケ澤落合附近は流石に下廊下の上の關門といはるべきすぐれた景觀を有してゐる。私達は不思議な窓の様な澤の落口で、立山側から吹きおろす風に震えながら、貧しい中食を攝つた。三人分のツールト・フレックスとレモン水、其れに片栗一袋が全部の分前なのである。此處でもどうしたものか、最後の食料品として用意して來た貝ノ柱は少しも思ひ出せなかつた(此は

千垣に着いて荷物の整理をした際漸く発見出来たとはをかしい話であつた。

十一時半、やをら立ち上つて、益々作りのいゝ左岸の道を上に向つて歩んだ。クラノスケ澤落合の對岸、曲り角岩壁の稜線は下より順を追つて傾斜八十五度、九十四度、八十二度と全く鋭い立ち方をしてゐる。其先は右岸は廊下の壁で感じがよい。忽ち赤澤岳の黒部川へ面する尾根が現れた。針峯チイゼンイユの如き尖鋭な亂障は黒部別山のどつしりとして力強い削立に對して、又格別の味ひを持つ。黒部別山オホタテガピンは赤澤岳よりの澤（大なる押し出しあり）の對岸でレンズに入つた。谷とあはせ持つた其の獨自の展望はユニークなものであつた。

ゴゼンダンに着いたのは十二時二十五分。稍暗い感じの湧く其落合で十分間休み、又進む。落合の對岸すぐ先に東信道が低く水平に近付いてゐる。無名澤で一休みし、一時二十分には御山澤に着く。落合は大分林が開けて元の如き優婉な趣はないといふが、相變らず富士の折立より本山迄の尾根頭が望まれる、黒部川には珍しき遠景をあはせ持つてゐる所だ。高い山は案外大きく見えた。私どもは沙洲に休んで、二時十分、平ノ小屋に向つて進んだ。

御山澤の先の吊橋は大分傾いてゐた。谷は益々廣く蛇行大きくなつて、壁の代りに深い闊葉樹の森林が光れる積込積がつてゐる。壁へつりて鋭敏になつた神経は此の優美な溪流と四圍の縁に撫でられるが如くおさまつて、稍々倦怠の脚は平らかに運ばれて行く。いつしか人夫より先んじて中ノ谷先の吊橋を渡り、其れより積を歩んで平ノ小屋に上つて行つた。三時三十分到着。クラノスケ澤落合からは休息とも四時間、大へつり終局よりは同様六時間二十分で、道の有難さを必々覺えたが、道の上では深い印象と高調した主觀とを與へられなかつた事は否定する能はざるものであつた。

（大正十五年四月二十五日脱稿）

附記

本編に記した氣温、水温等の温度は皆攝氏で表はしたものである。

又所々に距離、高距等を記したものは殆ど皆目測によつたもので、其れも寧ろ感じといつた方がよいだらう。私は成るべく一行の各人に就て聞き、或は何か長さの分つた物を基準にして對照し、つとめて平均を取る様にしたが、實驗室に於てさへ我々の最に關する感覺は誤差少からざるに、黒部川の如き平常我々が生活せる所と全く違つた特異なる地形内にあつては、我々素人は其の概數を得るさへ頗る困難に感じた。そして峡谷に於ける感覺の誇張又は縮少は、觀察者の立脚地に速き流水のある事によつて更に助長せられる様に思ふ。

擱筆するに當つて私は同行の冠、岩永兩氏の懇篤なる御助力を深謝するものである。

双六谷から黒部川へ

冠 松次郎

一、双六谷を溯る

見座。金木戸。北俣川。廣河原。打込谷。下抜戸。奥抜戸。蓮華谷。九郎右衛門谷。黒部乗越。

二、黒部川を降る

黒部乗越。五郎澤。五郎澤黒部川落口の高原。薬師澤出合。上廊下入口。立石。薬師下。赤牛岳。東澤。平小屋。御山澤落口。

一、双六谷を溯る

見 座 まで

一度は探りたいと思つてゐた双六谷を、今年には黒部上流へ入つて見たいので、その足固めに、かつは黒部川と双六谷の溪趣の特色や、その自然の配置などを窺いたい爲に、いつもと方面の違ふ飛驒路へと神通川の澗を行く。

八月一日(大正十三年)。上野を夜行で發ち、翌日午前七時に富山驛に着いて、笹津行の輕便に乗る。(同行者金作。竹次郎)。

厚い雲は立山連峯にも、薬師岳の上にも掩ひ冠さつて、風の少ない夏の眞晝の炎熱は耐へがたい程車中の空氣を蕩かしてくる。午少し前笹津へ着き、驛前の自働車に乗つて、越飛國境の猪ノ谷の部落に向つた。數年前に通つたときは笹津から車馬が通つてゐなかつたので、徒歩で行つた爲、茂住か、土あたりで一泊しなければならなかつたのが、今年には笹津から猪ノ谷まで自働車の便があるばかりでなく、猪ノ谷から更に船津行の自働車へ乗り替へることが出来たので、非常に便利になつて、午後二時には船津の町に入つた。

眞夏の日盛りでも、山國の町家は森閑として塵一つ動かない。清洒な道路を僅かに三々伍々人の往來するのを見るのみで、漸く眠り覺めたる大都會の朝の如く、日蔭を辿れば鬱風自から身邊に起り、山國の氣分は身にしみ渡る程清々しい。

高原川の澗に出て、先づその水の少なさに驚く。往年の夏この附近を通つたときには、山よりも町よりも、兩岸に溢れんばかりの碧流が滔々として流れて行く様を見、私はその水上の山谷の重錯を思ひ浮べて、獨りで喜んでゐたのだが、今年は大らかな河原が兩岸に露はれ、川中に巨岩が處々脊を出してゐる。水の色も浅い爲か藍色に清んで、小供達が巨岩の上に集まつては又水に潜り、面白さうに遊び廻つてゐるのを見た。

谷から谷へと涉つて行く今年の旅程では、水の小さいと云ふことが私にはどれ程便利であるか、それを思ふとまんざら不愉快でもない。私は今年こそ下廊下の絶險を突破出来ること、心強く思つた。

船津の町はづれで高原川の釣橋を渡らずに、左岸(右側)の方の道をとる。右岸の道は日に向つてゐるので、暑い爲に涼しい左岸を選んだ譯である。高原川に沿うて行くこの道は、川以外に大して賞美する程の處がない。然し流石に川沿の風は涼しく、午前の炎熱を全く忘れて、左した疲勞も感ぜずに、午後五時頃に見座の部落に着いた。大きな段丘の上に建てられた見座の村落、それは森林の茂つてゐた昔は、高原川の清流と共に美しく、私等はそこ迄入つただけでも、双六谷の深邃を想像出来たのであつたと思はれるが、今では地勢の優秀なものも係らず、樹林が稀薄になつた爲に、大した興味をそゝらないのは遺憾である。殊に高原川に架けられた柳橋は、名の美しいものにも似ず、門の様な大きなコンクリの橋受けが兩岸に建てられて、同じ釣橋でも卑俗なもので、風趣を害すること甚だしい。

柳橋の袂の和仁と云ふ雜貨を嚮ぐ傍ら旅舎を營んでゐる家へ泊り、久しぶりで溪聲を聞きながら寢に就く。

北俣川 廣河原

八月三日。米味噌を調達して、午後六時半宿を出て、柳橋を渡り、山嘴を廻り、中山の部落を右に見て、双六谷に架けられた釣橋を對岸にうつる。川から百餘米突の崖側の道について、双六の里を過ぎ、尻高橋を下に見て、路傍に磐の石を見物して行く。二尺方形の花崗岩が置捨にしてあるその周りに柵を圍らして左の如き立札が建て、ある。

由來

此石は古來神石として傳へられ、猥りに之に觸れ故意に暴行をなす時は驟かに暴風雨降雹等の

災害即時に起りしこと其ためし少なからず斯かる傳説は一片の迷信とせずして崇敬の念に出でられたし。

大正十一年四月

愛 溪 會

由來は中々恐ろしいものが、石は甚だ貧弱であつて、加ふるに路傍の草や矮樹の中に無雜作に置かれてあるので、一層私達の好奇心をうらぎられる。磐の石をよく保存しておく者があつたならば、何故少なくともこの附近の樹林を昔のまゝに残して、その傳奇的神祕性をきづつけない程にしておかなかつたかと思つた。

見座より約二里、金木戸の手前にかゝると、僅か百米突程の處だが、急峻な登りとなり、闊葉樹の茂みの中を上つて行くと、蟬が盛んに鳴いてゐる。その頂の狭い平に人家が數戸寄り合つて建てられてあるが、櫓の様に双六谷に向つて突き出てゐるので、眺望も開け、風通しが素的にいゝ。谷寄の方に小さな祠に一段高くなつて、左右から丸太でさゝえてあるのは風雪の當りが強い爲であらう。私等は最奥の家の縁先に腰を下して、茶を入れてもらひ暫く休む、歩き始めの日なので、荷物が高く、今迄の道は日蔭が少なく日射が強かつたので疲労を覺えた。

宿の主人が何某の書いたと云ふ黒淵の畫を出して見せる。この家の忤がついこの間黒淵を見物に行つたさうで、今年の水が少ない爲、瀧が小さく石が露はれてゐて餘程見劣りがしたと云ふてゐた。黒部乗越の様子を聞くと、近頃では黒部へ減多に人が行かないので様子が分らないが、九郎右衛門谷を登りさへすれば乗越へ出られる、そしてそこは、非常になるい鞍部になつて、黒部の岩魚が双六谷へ來たり、双六谷の岩魚が黒部谷へ入つたりすると云ふことだと、笑ひながら話しをした。

これからまだ一里餘も草山つゞきで、暑いので大事にして行かれろと云はれて、少しうんざりした。私は双六谷を高原川の出合から、樹木鬱蒼として溪谷が深く、谷筋の部落ももつと山深い趣さ

のあること、思つてゐたが、見座から炎天に照り付けられ、漸く高燥な金木戸で休んで、この行く先の溪谷の森林道を樂しみにしてゐたのに、自然の頽廢が案外深い處まで喰ひ込んでゐるのに失望を禁し得なかつた。

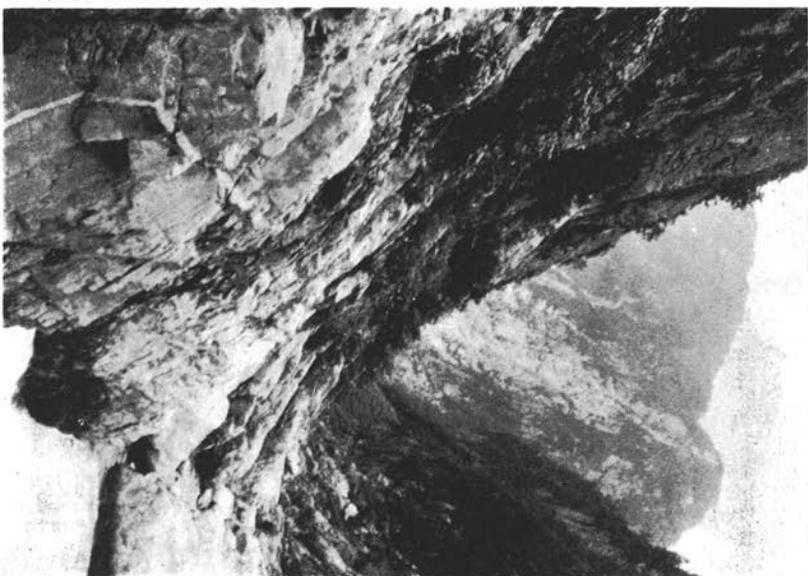
午前十時に出發して、草いされのする緩漫な道を行くと、五六町で二つに岐れる、私は初めての谷であり、大山村の人夫も一向土地の様子を知らない、毎年同じ様に知らない山や谷を、米と味噌に依頼して行く旅に慣れてゐるのだから、道の誤り位いは覺悟の上のことであるが、それにしても損をしたくないので、暫く考へて見たが、金木戸で聞いた一里餘も草山つゞきだと云ふのを言葉通り信じて、杉の林が茂つてゐる右の道を谷へ降るものと思ひ、左の草山道へ入つたが、一時間以上も登りに登つて、とうとう路がつきて、そこに幾つかの炭焼小屋を見付け、山仕事をしてゐる夫妻のものに出合ひ、道の誤つてゐるを聞かされて、已むを得ずもと來か道を戻つたが、往復二時間程の損をして、雜風景の草山詣をやつたことが、この旅行第一番の失策であつた。右の道をと半道ばかり行くと、又路が二つに分れてゐる。左の方には木を横へて路が塞がれてゐるので、うか／＼と右下の方へ降つてしまつた。大分降りがつゞくので變だと思ふ内、釣橋が下の方に見えた、これは八丁峯の道だと感づき、又もとへ引返して、横木の入つてゐる處を跨いて、左の途を行くと打保の方へ上る間道がある。

なるほど金木戸から一里で、大分木が茂つて來た、最も目につくのが山毛櫨で、それへ檜が一分交つてゐる。それが皆大木ばかりなので中々美しくしい。森の下道が急に涼しくなつて來ると、今迄雜音に聞えてゐた谷川の音が、妙にリズムミカルに響く様になつた。

今日の目的は北俣川と廣河原にある。午後四時頃松の谷へ出たが、峽風と共に夕立が俄に襲つて來た。あはて、合羽を被つて松の谷の左岸をひた登りに登つて行くと、小半時間で夕立は遠く去り、夕



大へツリより上流を見る



大へツリより下流を見る

冠松次郎氏撮影

榮の空が森林を透して高く輝いてゐる。風に揺られてばら／＼と落ちて来る雫が雨の如く。午後暑さや疲労は全く拭ひ去られて、身の内が清爽の氣に満ちて来る。

松の谷は水量の少い割合に谷幅が中々大きい。そしてその周囲を高く繞らしてゐる大尾根の側面は、皆豊麗な針葉樹林を以て埋められて、頗る闊大の感じを與へる、對岸は八丁峯の尾根續きも、高く天半を限り、双六本谷は益々その深さと大いさを加へて来る。私は松の谷へ入つて初めて双六谷の幽邃はこゝより始まると思つた。

この溪水を渡つたならば、直ちに崖側について行けばよささうなのに、路は松の谷の左岸に沿つて愈々登りとなる、一時間近くも溪水について、檜、黒檜、山毛櫸、檜などの大木の鬱生してゐる、然し懷の廣い氣持のよい處を登つて、戻り氣味に崖側について上流の方へ廻つて行く。金作はこの道は山廻りの爲に、四周の山の展望のよい松の谷に添つてつけられたのだと云ふた、事實はさておき、周りの尾根の見晴の最もよい處で、若しこの附近に盜伐でも入つてゐたとき、この道を通つてゐたならば、必ず指呼の間にその位置を案ずることが出来るであらう。

双六谷の溪聲を遙か下に聞いて、大尾根の側道を幾曲りも／＼歩かせられる。水聲の近く聞える度に、北俣川へ出たかと思ふが、中々それらしい深溪には出ない。五六度大きな尾根の出入りを廻つて、幾つかの小流を横ぎり、午後五時過ぎになつて愈々當面に轟々たる溪音を聞く様になつた。やがて道は急激に、その谷に向つて落ち込んでゐる。急坂や丸木橋を渡つて、私等は漸くにして北俣澤の澤邊におりた。

こゝは双六本流との落合より可なり上の處で、溪谷は豪壯と云ふよりも寧ろ陰凄の感じが強い。日暮近い爲でもあるが、森林は谷近く迫り、流れの大半は巨岩の累積と蟠踞によつて埋められ、其深い岩の圍ひの底を、隨所に湛えられた深潭の色は、蒼黒色に沈んで、溪水の叫びは狭谷に反響して耳染

を聳せんばかりである。

累積された巨岩の中途から、石碑の様な大きな岩が突立つてゐる。その前に丸木を二本束ねて、僅かに人が渡れる位の橋が二つ架けてある。最早高波橋と云ふのはない。そして今の位置は高波橋のあつた處よりも、可なり上手の様に思はれた。

流れを渡ると十間程谷について降り、それから尾根の崖側へ又道が登つてゐる。下手の方から谷に沿うてくる道があるが、それが高波橋の昔の道であるらしい。溪側を幾曲折してゐる内、日は全く暮れて、森林の下はもう足を運ぶことが出来ない程暗がりになつたので、小流の逆しつてゐる傍の斜面へ陣どり、今夜の泊りを餘儀なくされた。北俣澤から約一時間行程の處で、檜の森林の下に莫塵をしき、飯を食はず茶を煮、菓子を食ひ、今日一日の話に花が咲く。道を誤つた爲、廣河原までは出られなかつたが、悠々たる山旅の気分は、ひしひしと胸に溢れる。

天氣がよいので、天幕は張らずに、三人が寝た上にかけることにする。急な斜面なので寝つくとも身躰が少しづつづれてゆく。仕方なしに木の根に足をふんばつて寝たが、ぶり降りるので時々目がさめては、又もとの位置にかへる。

廣河原 下抜戸

八月四日、好晴。朝四時半に起きると、急いで仕度にとりかゝり、五時頃に出發して、又暫くの間、尾根の腰を廻て行く。幾度か可なりの昇降をして、漸く谷に向つて大きく降り、野營地から小一時間で廣河原へ出て、美しい水で米をとき、飯を焚き、汁を煮て、昨夜の分と今朝のとをしこたま腹につめる。

廣河原は双六谷としてはめづらしく闊く明るい處で、上下流とも森林は美しく、溪流は穩かで、これ位広い處はこれから上流には見當らなかつた。食事をとつてゐると、遠くの山裾で、カツコウ

の聲が幽寂に響く、川上から朝靄の群が、楊の林を浸して此方へと下つて來ると、その後ろから射し込む朝日にあふられて、煙の様な青紫色に變り、やがて四散して、透明な空氣の中に吸ひ込まれてしまふ。そのあとは溪流が一際美しく光り狂ひ、森林は鮮かに浮び出て來る。高い尾根にかざられた朗らかな空は谷上一杯に擴げられ、双六谷は春の朝の様な長閑な氣分となる。

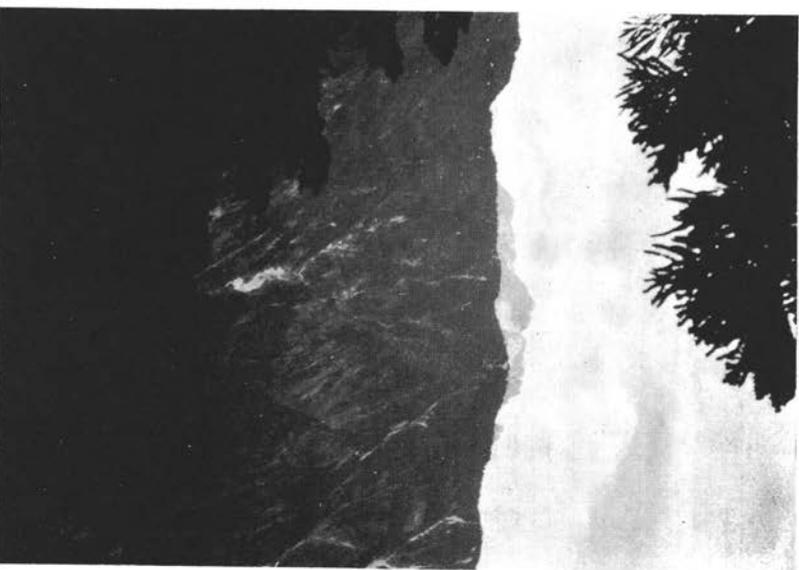
暫く休んで、午前八時頃廣河原を發つ。淺瀬を對岸にうつり、楊の茂つた間の、砂と石が自然にならされてゐる側流の上を行く。必要もないので廣河原の小屋は見舞はず、流れは狭くなつてから壁へづりを二回程して、尙左岸について上つて行く。

廣河原から先は道と云ふ程のものがないので、重に谷通しを行き、行き詰ると徒渉をして對岸へうつるか、山側をへづるかして行けば、大體目的地に達せられる。土地の者を連れてゐないので、細部に涉つて路を大分損をしたが、未知の深谷をさまよう面白さと、自然の寂寥さはそれが爲却つて強められる。

少し行くと流が全體に大きな淵となつて、青綠色の水を美しく湛へてゐる。多分青淵と呼ぶ處がこれであらう。そのすぐ上手に續いて、長瀬が半町程瀬になつて流れてゐる。いづれもさうすばらしいと云ふ景色ではない。午前九時二十分、それから右岸の壁の上手で、左岸から右岸の方へ徒渉する筈であつたのを、尙左岸について行くと、山嘴の登りになる、灌木につかまりながら、瘦せた尾根先を暫くの間切り開けについて登つて行く内、方向がだん／＼怪しくなつて來た。すぐ下に立派な谷川が流れてゐるのが見える。小川原谷の方へ來たらしいので、もとへ引き返して右岸へ徒渉する。この徒渉はやゝ深く股を沒した。水の多い時には恐らく腹くらい迄は浸されるであらう。激流に逆らいながら、石の上を拾つて行くので、ひと／＼すると非常な目に遭ふ。先年小島さんの溯行されたとき、一行の人が淵に押し流されたと云ふのはこゝではないかと思ふ。間もなく谷が行けなくなり、暫くの

間とりつぎに小さな崖側へづりを續ける。切開けがあるので藪を潜らずにすむことが何よりだつた。瀧の様になつて落ちてゐる、小川原谷の水を對岸に見て、右岸の山嘴を昇降して行く。牛首と云ふ附近であるらしい。左岸へ徒渉したこともあるが大體右岸を行き、川がよくなると大石を傳はつて川の中を溯る。今迄左へくとくねつてゐた川の走向が、急に右に折れて行く處の角に、大きな岩の丘があつたので、そこへ休む。馬鹿くしく大きな略平な岩が約二三十間も露出して、その上手の處に細い瀑がかゝつてゐる。大きな楊？かなぞの下に荷を下し、正午なので金作が飯を炊き始めると、竹次郎が岩魚釣に出かける。飯が出来上つても中々歸つて來ない。一時間餘もかゝつてたつた一尾を大事さうに持つて來た。目の下一尺丸く肥えた美味なものであつた。瀧の多い淵の大きい双六谷も、近頃は岩魚がめつきり減つたと見えて、釣上手の竹次郎が一時間で、僅かに一尾しか釣り上げて來ない。黒部の方ならば二三十尾位は釣つて來る時間なのに、双六谷では岩魚が不漁で、黒部乗越へ出る迄とうとうこの一匹の外に獲物はなかつた。道理で見座では肉よりも骨の多い鵜鯉を食はされた。多分近頃は双六谷の岩魚は黒部へ行くが黒部の岩魚は一向双六谷へは乗越さなくなつたものと見える。

谷筋を行く内、右から小溪が落ちて來る。やがて更に大規模の崖へづりが始まる。矢張右岸をのみみ迎るので、谷は又少し左に屈曲して行く。檜の大木の多いこの谷は、至る處鬱蒼たるその純林が谷の上に蔽ひ冠さり、その間に榎や黒檜などが稀に交錯してゐるが、落葉松は全く見當らなかつた。山の鼻の石楠花やドウダンの太いのを掴んで、軽くもない身躰をづり上げては又づり下ろす。始めの内は溪流を見て行つたが、追々高くへづる様になり、五六十米突の所を水音ばかり聞いて、山の鼻から山の鼻へと遊いで行く。一時間程で漸く河原へ下る。私の歩いた双六谷ではこれが一番長いへづりで、(山岳第九年三號にある双六谷流域概念圖の打込谷の下手の川が、下流の方から見て、一寸左へ曲つて



岸小屋澤店支脈二〇六七米三角點附近より見たる黒部別山と細岳



新越澤河口附近より大へツリと黒部別山を窺む

ある所がこのへづりにあたる。その下手のくの字なりに屈つてゐる角が前記の中食を使つた岩の丘のある處である。これから谷の中を登つて行くと、間もなく河原が急に廣闊となり壯大な出合に出る。午後四時山勢は著しく雄峻となつて來た。双六本谷の方へ眞しぐらに落込んで來るのが打込谷で、本流の方は殆ど直角の走向で左手に曲つて行く。打込谷はその水量本流に迫り、谷の荒廢、山の急峻、岩石の壯大なことは却つて本流を凌ぐ程である。私はこの谷を笠へ登つて見たくなつた。

本流の方へ入つて行く。もうこの附近は抜戸近いので、顧みると打込谷落口の左岸に、赭黒色の岩壁が丸く重なり合つて聳えてゐる。今迄に見られない程岩壁が壯麗になつて、規模も遙かに大きくなる。右岸急峻な山側は檜、白檜、唐檜などの黒木で濃密に蔽はれて、この方には岸邊に添つて緩斜地が多い。

恐ろしい岩の世界、溪流の半は近くは巨岩が積み重ねられて、その岩の集團が期せずして奔流を堰きとめて階段をなし、瀑となり、奔流となつて、その下に深淵を漚し、更に又巨岩の排列によつて谷水は堰かれて飛瀑となつて落下してゐる。淵から瀑、瀑から淵とつゞいて行く、その境界をなすものは巨岩の列で、私等はその高い岩の上を登つては徒渉をする。小山の如き巨岩に行く手を遮られるときは、その上をはい上るのに、相當の努力を要した。

大自然が築いた岩のきざしは、然もそれが美しく花崗岩の大塊の配列と、澄明清冽なる水の床ばりによつて造られてゐる。四周に鬱生された豐潤なる原始林の美觀を増大すべく、下抜戸の大岩壁の露出は、左岸にあつてその高さ數百米突を算し、數十間の間黒條々たる岩の肌は谷に向つてむき出してゐる。赭黒色の岩壁が角の削磨されて隆々たる筋骨を露はしてゐる様は、黒部の下廊下の入口、内藏の助澤附近のものに似てゐる。たゞこれは部分的に露出してゐるのが、黒部のは連續して廊下を形ち造つてゐる。森林の美は然しこの方が勝れてゐる。

下抜戸を通つて暫く上り、右手の岸邊の砂洲に荷を下ろす。野營に好適地なので、奥抜戸まで行かずに野陣を張る。午後六時。丁度下抜戸と奥抜戸との間の處で、天氣さへよければ奥抜戸のむさくるしい岩小屋などよりは快闊に遙に氣持のよい處である。淵に向つて砂洲が十坪以上平になつて、後ろは森林に蔽はれてゐるが、左右は岸邊の岩つゞきで、前は丁度瀑と瀑との間になつてゐる美しい深潭が、池の様に藍碧の色を流してゐる。そこが炊事場兼洗面所にあてられるのだ。双六谷としては至極明るい處で、今夜も天幕を張らずに山へ來た冥加に青天井を見ながら、身體丈へかけて寝る。

奥抜戸 蓮華谷 黒部乗越

明くれば八月五日。狭い溪谷の一夜が明けかゝると、駒鳥は谷中に美しい音響を漲らしてゐる。上空を仰ぐと、有明の星光をかすめて雲足が早い。時々バラ／＼と雨をこぼして行くので、今日の行程が氣になる。それでも出發迄には雲が切れて、尾根上に朝日が照り榮へて來た。今日も好晴だと皆勇み立つて、第三日の旅程に上る。

午前六時半出發、一時間餘にして、大石奔流の域を脱して、谷筋が大分穩やかになり、前方が開けて來ると、黒部五郎岳(圓岳)が名の如く丸い頭を出す。雪は見えないが、岩骨假松の色彩は、さすがにアルパインの風貌を具へてゐる。

右岸の山勢は中々急峻で、可なりの角度を以て川に落んでゐるが、左岸の方は楊の森つゞきになつて、河原も中々廣く、砂利洲が続いてゐる。溪流は右岸の方へ傾いて流れて行くのが、一町程の間は美しい澗をなして、對岸の森林や岩壁の影を蘸して、物寂かな情趣を舒へてゐる。下流の青淵長澗などよりも遙に幽深な感じを與へた。

小澤が瀑になつて右岸の壁から落ちてゐる。午前八時半。少し行くと、高く双六、蓮華の尾根續きを仰ぐ。谷がまたつゞまると兩岸の壁が稍高く、水はその中を聲を吞んで疾走して行く。少さいが然

し美しくし廊下を形ち造つてゐる。私等はその中を股までつかつて徒渉して行つた。兩岸の壯麗な岩が差し迫つて狭く、樹木が茂つてゐるので、洞門の中を潜つて行く様な暗さを感じたが、行く手にあつて白く谷水に反射してゐるのが鏡の様に光つて見えた。こゝは水の多い時は無論左岸を高く登り、崖側をへづらなければ通られぬ處らしい。

午前九時半に奥抜戸へ着く。この邊には下抜戸程の岩壁の削立を見ない。水から二間程の高さの大木の下に暗い岩小屋があつて、そこに鍋茶碗等が置かれてある。檜の林の中に白檜が著しく目立つ様になつた。少し上手に同じ様な岩小屋があるが、これは前のよりは稍よささうである。

奥抜戸からは、兩岸の岩壁や崖尾根が低くなり、従つて行先が開豁になつて来る。三ツ又蓮華を仰ぎながら、午前十一時頃になつて蓮華谷の落合につく。兩岸には崩岩が夥しく交り、巨岩がその間に累々として、谷の様子が源流地らしい荒寥さを見せてゐる。本流は穏やかであるが、蓮華谷の方は河床が急で非常に荒れてゐる。天上が近くなつたので、今迄陰鬱な谷は急にガラリと開けて、まぶしい程の明るさになる。こゝ迄上ると幽深な双六谷はもう過去のものとなつたやうな氣持がする。双六谷で最も壯大幽邃を極めてゐるのは、打込谷の出合から下抜戸を経て奥抜戸に至る迄の間らしい。

出合の左手の角にある巨大な一枚岩がのしかゝつてゐる下で中食をして、暫くの間晝寝をさしてもらう。岩魚は矢張り不漁で、大きなのを一つ釣り落しただけで了りになつた。

蓮華谷を溯る。(山岳第九年第三號の双六谷流域概念圖に、蓮華谷が本流に出合ふ下手の處に、九郎右衛門澤が入つてゐるが、あれは間違ひで、九郎右衛門澤は、乗越の方から出て、蓮華谷に落ち込んでゐるのである。)右手の尾根の可なりの高みから山の地肌が丸く大きくむき出されて、其表面に沿つて水が夥たゞしく流れ落ちてゐる。少し上ると釜の連続が始まつた。瀑の高さは一丈乃至二丈に過ぎないが、立派な釜を差し挟んで、大小九つの連続した瀑と釜とが、溪谷を震撼して、狂ひ落ちて来る。

笛吹川の上流七ツ釜に比べて、數に於ても立派さに於ても劣つてゐないが、如何せん樹木が無くなつて周圍が明るすぎると、あまりに荒廢してゐるので、全く前者の如く幽邃神秘の感じを與へない。出合から約四十分にして小流が右手から落ちてゐる。川身を溯つて行くと、左手から水量は少ないが十丈程の瀑がかゝつてゐる。これが九郎右衛門谷の落口である。瀑と懸崖で落口からは兎ても登れないので、尙少しばかり急峻な河床を辿ると、谷は左折してその突き當りの崩崖の間から、瀑が數段にかゝつてゐる。私等は戻つて、九郎右衛門谷の少し上手の空瀑を匍ひ上り、森林の下のミヤマハンノ木や白樺などの密叢を潜つて、左斜に溪側を廻つて行く内、九郎右衛門の瀑の丁度上へ出た。その上流になつてゐる、浅い流を踏んで暫くの間藪を分けてひた上りに登ると、勾配が漸次に緩漫になつて來た。

午後三時半、もう私等は随分高い處まで登つてゐたので、顧みると前方の尾根の上から、拳の様な山の頂きがぬけ出して、その額の邊に残雪が光つてゐる。それから數十歩登ると、大笠が抜戸岳を越して、突如として麒麟の様な頭を現はした。そのつゞまつた頭から少し下つて、殆ど水平に延びてゐる長い尾根の線から、獸の斑の様な美しい皺を、打込谷に向つて懸け下ろしてゐる。先刻の拳の様に見えた山骨は奥笠であつた。大笠から右は山勢が著しく低下して、双六谷の末を見通しに、飛驒の高原が糞糊として煙れる如く、その山川も、都市も、田野も、一眸の下に展開される。私は石に腰を下して暫くの間、環境の眺望に耽つた。

澤が素的によくなつた。笹や樺などの密叢が疎になり、草叢の方が茂つてくると、俄然大きな偃松が處々に現はれ、行先の青空が目八分に展がつてた。水芭蕉をふみしだし、ミヤマキンボウゲ、シロウマフウロ、ミヤマ大根草などの咲き亂れてゐる、草原の上をぶらついて行く内、私等はだまされた様に何時の間にか、闊々とした美しい高原へ出た。黒部乗越！私はこんな緩やかな登りを



口落澤劍



澤名無澤屋小棒
りつへの間



壁の岸右澤越新



口落澤越新



近附口落澤越新



近附口落澤越新

岩永信雄氏撮影

尾根へたどりついたことは始めてある。

乗越の向ひの空は澄水の流れの様にすみ切つてゐた。その下に薬師の大岳がドッシリと腰をすえて、臥牛のやうに蟠まつてゐる。丁度彌陀ヶ原の方から見たときやうに、そしてその裾は長く黒部の上下流に向つて波打つて、夕日の影になつて蒼紫色にくすんでゐる山の隈取は、私等をしてこの山の雄偉なることを感ぜしめる。雲の平が蒼黓い防波堤のやうな山の堤を深く薬師の懐に突込んで、その谷寄りの急崖には幾筋かの赭ガレが晒されて見える。その間の黒部の流が如何に躍動し、冥想し、奔放し、沈静してゐるかを思ふと、私はその上流の水を見るのでさへ待遠しくなつた。黒部谷を隔てて薬師岳が見えるやうに、双六谷を隔て、桔梗色に冴えた笠ヶ岳の全容を眺めることが出来る。蓮華岳は東の尾根で隠れてゐるが、右に續く双六岳が稜々たる山骨を連らねて、その懐に可なりのカールを抱いてゐるのに氣づいた。然し何れも雪は少ない。

この平で天幕を張るつもりでゐたが、意外にもすぐ鼻先に、平の南寄の少し高い處に、立派な小屋が出来てゐるのを見て、私は喜んだ。三日程續けて谷渉りをしてきたのに、今夏は出がけから下痢で悩ませられ、腹具合が物騒なのを苦にしてゐた爲、暖かな野營を欲してゐたからだ。この小屋は二間半に四間位の大きさで、随分太い材料と行き届いた設備で頑丈に出来てゐる。爐が二つ切つてあり、風呂迄据えて、煖爐も設けてあつた。入口の掛け板に五郎平ノ小屋としるしてある。名古屋の伊藤孝一氏がこの山稜を重に冬季旅行の爲建てられたので、昨年十一月頃に漸く出来上つたのだと云ふことである。氷冷の夜臥を覺悟してゐた私は、この資に感謝の意を表した。人夫達も喜んで濡れてゐる旅装を干燥して、のんびりした氣持になり爐邊に打くつろいだ。

小屋の硝子窓から西北の方がよく見える。夕日が薬師の後ろに沈むと、やがて空は一面に光流の世界となつて、蜻蛉の羽の様に透き徹つた金樺色の雲が、幾筋となく静寂として徐ろに動いて来る。

日暮と共に外は風が強く、非常の寒さとなつた。假松が風にゆられて、波のやうにうねつてゐる間から、時々雷鳥の叫びが鋭く聞える。幾羽かの岩燕が羽がいを縮めて、黒部谷の方へまひ下りて行つた、もう彼等も岩巢の罫に歸る時刻なのであらう。

二 黒部川を下る

黒部乗越 黒部川 立石

双六谷を溯つて黒部川の上流へ降り、上廊下を通つて、平の小屋に出て、それから更に下廊下を極めて鐘釣まで下ると云ふ計畫は、中々容易でない様な気がした。なんぼう谷が好くつても、岩魚の様にのべつに谷底ばかりを行くのでは、身體も疲勞するし、自然興味もそがれるので、今日は少し山の上を歩いて見やうかと思つた。

然しながら黒部乗越で、一夜を過し、笠ヶ岳や双六岳を見、黒部五郎岳に連なる山骨を眺め、近く黒部谷を隔て、上廊下の王様薬師の大岳を望み、越中の山奥の大觀に腹がふくれると、どう云ふものかもうそれで、山上の景色は澤山になつた。矢張谷に限る。流動あり、潤澤ある谷の美觀、然もそれが日本無双の黒部峽谷。その深溪から重錯された嵩岳を仰ぎ見ないで、何の景勝だ。何が日本アルプスだと、私は吐きすてる様に獨語した。

平の小屋で落合ふ筈になつてゐる岩永君が、遅くも七日には平に出られると云ふことを考へた。昨夜は行程の都合もあるので、私らは蓮華岳を越えて鷲羽を登り、東澤の乗越から、東澤を下つて黒部へ出て、平の小屋へ一日も早く出やうと思つたが、山よりも谷と云ふ考へが取り去れないので人夫の漚るのをなだめて、漸く承諾してもらい、兎に角一度黒部川へ下り、都合で五郎澤の出合から源流迄溯り、鷲羽乗越を上るかさもなくば祖父谷を雲の平へ上り、それから東澤の乗越を平へ出て同じ位

ひの日程になるから、差支へはあるまいと一人できめた。

八月六日。今日は朝から薄曇りで、山々もどんよりと霞んでゐる。鞍部の草原を黒部川に向つて、なるべく窪について、緩やかな下りを行くと、草原の土の剥けて段々になつた處が續く内に、小さな溝となり十數分も下ると、地肌から岩石が露はれて、谷らしいものとなつた。草原の下から絞れた水が集まると、可なりの水量で岩の間を走つて行く。美しく冷たい水、私はそれに嗽いで見た。乗越から三十分で、黒部五郎岳の直下からくる五郎澤が、大きな押し出しになつて出合つてくる。仰ぐと黒部五郎頂上附近の岩骨が磊々として聳えてゐる。少し降ると五郎澤も随分大きな澤となり、奔流が石を越し、岩をくゞり、階段の様になつて、轟々と流れ落ちて行く。もう岩に狭まれた小さな淵には岩魚が幾匹か遊び廻つてゐる。矢張黒部は岩魚が多いなと思つた。

小澤が右から一つ入つた。顧みると乗越の草原は遙か上に棧敷の様になつて、黒部五郎岳は暗褐色の大きな岩の堤を黒部の方に向つて乗り出してゐる、頂點は何處にあるのか、殆んど一連の石崖のやうに見える。雲の平の側壁が間近くなつた。あのなだらかな雲の平も、その黒部川に向いてゐる側面は非常に急勾配で、黒木の茂つてゐる山の肌に、幾筋もの赤薙がえぐれてゐる。降るに従つて傾斜は緩くなり川幅が追々廣くなると、榛の木や川楊が、岸に添つてゐる、堤のやうな砂洲を隔て、茂り始めた。

降りきつた處は、随分闊く美しい草原になつてゐる。そしてその中に唐檜や川楊、白樺の雑林が、氣持よく配置されて、西北方の眼界をかぎつて、太郎兵衛平が、高く悠揚として打擴がつてゐる。その濃緑の山の色や、空線の抑揚の美が、この廣い平の景と調和して、頗るのんびりした感じを與へる。もう乗越は、遠く森林の影になつて、その間から、鮮綠色のスロープが、ちらりと光つて見える。平を歩いてゐると、行く手に煙りが一筋たなびいてゐる。だん／＼近よると、そこに粗末な小屋が

あるので、覗いて見ると、その主は今しがた出て行つたらしく、まだ火の残つてゐる爐の棚の上に無数の岩魚が干されてある。兎に角この附近で、岩魚釣をしてゐるらしい。こんな黒部の奥にも人が入つてゐるのかと、私は不思議に思つた。山岳、豁谷、森林、高原が、皆悠大な一つの自然の中に渾然として融和されてゐる、こんな樂天地に悠々糸を垂れてゐる岩魚釣を、羨やましくも思つた。午前九時。

それから私等は、まだ黒部川への合流點に出ないのだと思つて、左岸の方へ移り、呑氣な草原の上を、川楊や白樺の森つゞきを、好い氣になつてどん／＼降つて行つた。何時の間にか、川が緩やかに左手に彎曲して、その幅も大分狭くなつた。その内に左岸から立派な澤が落合つてゐる。どうも藥師澤らしい。兎に角川添が樂なので、もつと降つて見やうと、右岸を又調子に乗つて降つて行つた。空は申し分がない。兩岸はまだらからで廣く、森林に圍まれた溪流は、その諧調樂につれて、大衆がダンスをして行進する様に、後からも後からも面白さうに躍り走つて行く。雲の平の側面の處は、何方を見ても悠々たる山のうねりが、積翠を一面に流して、涼風が肌を透し、日は暖かく、斷雲が銀光を放つて、谷の上空に游戈してゐる。私は顧みては幾度かつまづきながらも、四周を觀賞せずにはゐられなかつた。又左から小流が落ちてゐる。川幅が更に狭くなつた。

正午近いので私等は川原に荷を下ろして、飯を焚く支度をする、と見ると少し離れた對岸に、岩魚釣が二人岩をひろいながら、竿を投げてゐる。私は先刻の小屋の主だなど思つた。先方では不思議に思つたらしく、しきりに私の方を眺めてゐる。聲をかけると、釣をやめて此方岸へ渡つて來た。こゝはどの邊だと聞くと、とんでもない處まで下りて來たと云ふやうな顔付をして、もう半町程下ると廊下の入口ですと云ふ。この川について直ぐそこで左に折れると、入口の絶壁がよく見えます。行つて見て御覽なさいとつけたした。そして兩岸が立壁になつてゐるのを手振をして、とても下までは土地の

ものでさへ行かない處なので、お戻りなさいと云ふた。
 私等は五郎澤を降りて、黒部川と落合つたのを氣がつかずに、地圖を見ずに美しい景色と、のんきな谷涉りに夢中になつて、五郎澤を降つてゐるつもりで、左岸の藪の中を通つたとき、知らず／＼に、上廊下の入口まで降つてしまつたらしい。あまりに馬鹿／＼しい誤りなので暫くの間啞然とした。

先刻小屋のあつた下の附近が、五郎澤の黒部合流點にあたる廣闊な平であつたのを、今になつて氣付いたとは、あまりと云へば山に對して、甚だしい鈍感を逞ふした譯である。然し私には心の中で却つてそれを喜んだ。始めの豫定の上廊下へ期せずして到着したのは、この巡禮に山靈の験があらたかであつたのであらうと。それにしても随分行程が捗つたものだ、溪谷の緩傾斜が身體の運動の調子とよく調和してゐたので、黒部川の水が面白く逸走する様に、私も自然の中を逍遙乎として流れ動いてゐたのであらう。

これから戻つて薬師澤を、薬師岳へ上つて行くか、五郎澤の出合の上を祖父谷まで溯つて、雲の平に出るかして行く方が樂だから、さうしろと岩魚釣が親切に教へてくれた。然しこの馬鹿な巡禮の禮讚する奥龕は生憎その彼等の恐ろしがる廊下の只中、兩岸に双聳する岩傳ひ、その間を重く流れて行く深潭や、鳴る神の如く溪谷を震撼して行く奔流などが、その宮居になつてゐるので、そこへ入らずにはどうすることも出来ないのだ。話しをしながら私の心は、見えないロープでぐん／＼と引きづられてゐる様に、廊下の方へ下つて行かうとする。

二人の内若い方の岩魚釣は、この附近の地理が中々詳しいらしく、水晶山、雲の平、薬師岳、太郎兵衛などのことをよく知つて居る。それもその筈で、この十二三箇年の間斷續的に夏になると、この黒部の源流地の谷底を根城として、殆ど一ヶ月以上も魚釣をして暮してゐるので、今年には老人が來た

いと云ふので、連れて來たと云ふ。家は何處であるかを尋ねると、信州島々から來るのだと答へた。そしてその道筋が最も我意を得てゐる。先づ徳本を越えて上高地へ出て、梓川を溯つて槍ヶ岳へ上り、それから北鎌尾根を降り、双六、蓮華などを越して、黒部乗越へ出て、最後に五郎澤を降つて、落合の小屋に落ちつき、そこで遊山がてら岩魚釣を一箇月もやつて、その獲物を脊負つて、又もと來た道を島々へ歸るのだと云ふ。

先づ岩魚釣としては、これ程高い道を通つて、深く入るものも少ないと思つた。然し悠々自適に避暑がてら、遊山氣分で來るのだから、自分でも年々樂しみにしてゐるらしく、私等が山登りをする位の氣持でゐるのかもしれない。兎に角奇抜な岩魚釣に遇つたもので、矢張何となく黒部氣分だ。

午後一時半。私等は岩魚釣に別れて、一町程下ると、話しの如く谷が急に左に折れ曲つて、約半町先の處で、山脚が殆ど垂直に近い、高さ數百尺の削り落した様な赭壁をたてかけて、それが谷底に向つて左右から胸をつき合せてゐる。溪流はそこで初めて幅狭く壓し縮められ、奔潭となつて、躍進して行く。上流の廣闊な傾斜の緩い處を降つて、突然こゝで行き詰ると、急に身體中が緊張して、目前に現はれてゐる峻険に對して、神經が自づから鋭敏になる。

然し手がかりはある。右岸の壁の凹に疎らに生へてゐる根曲り笹や、灌木に身を托して、足が這らないやうに氣をつけながら、徐ろに第一の壁のへつりを始める。岩の皺折を物色しながら、十數間も上下して漸く川へ下り、徒渉して左岸にうつつて、それから左手の壁を横ぎつて、水の上へ降ると、川は又闊くなり、兩岸に河原が出て、川中に突き出てゐる巨岩の間や廻りを、水は蛇行して流れて行く。やがて兩岸はとりつきに大きな赤崩の爲に蔽はれてゐる。又右岸に移り岩壁の棚の上を行き、草や木にすがつて川原に下る。兩岸の壁はまだ渾成されない角のある赭岩が恐ろしく聳立してゐるかと思つと、又岸一杯に横臥してゐる、そしてその崩岩はともすれば川中にまで押し出さんとしてゐる。

この附近の川添の岩壁は脆弱らしく、右岸にラマ塔の形をした巨大な赤煉瓦を積み重ねた様な数尺の岩塔を仰ぐ。谷が一寸曲ると薬師の側から瀑が一つ入つて来る。暫くの間同じやうな案外好い澤の上を行く、水が小さい爲川幅の廣い處は何處でも徒渉が出来るので都合がよい。

川は右へ右へと曲つて行く、行く手が急に陥没して、河中には美しい花崗岩の巨岩が、續々と現はれてくると、前方の針葉樹の尾根の後から、赤牛の一角が、緩やかな線を薬師の方に向つて引いてゐる、深谷の底から、赤ガレに蔽はれてゐる尾根の間に偃松が鮮麗の色彩を舒へてゐる天上を仰ぐと、實際山なるかなと云ふ感に打たれる。午後三時四十分。兩岸は又頗る狭く、廊下の間を行く様になる。この邊から溪趣が殊によくなり、オクノタル澤迄は、奥廊下中での美景を形ち造る。

森林で蔽はれてゐる峻急な山脚も、見渡す限り、水から數十尺の處で、その地肌が高低參差の美しい壁となつて露出して、その壁には、又階段の様に幾つかの壁が綜錯し纏綿してゐる。激流に削磨された大理石の肌の様な花崗岩は、ある處は寢覺の床の様に重なり合ひ、ある處は猿飛式にその肩をつき出して、狭谷を蔽はんとしてゐる。而もその節理の美は四境の深遼と相待て、その美觀は寧ろ前二者を凌ぐ。

谷が狭くなつたので、遠くの山は見えなくなるが、さう云ふ處は愈々溪谷が狭く深くなる。廊下の間を流れる水は、奔流激湍をなしてゐるよりも、滯になり深淵になつて、油の如く、靜かに重く、悠悠として非常に疾く落走して行く。

午後四時。廊下は水愈々深く、その底を辿ることが出来ない。左岸に一箇所ロープを用ひ、約一尺縁の花崗岩の岩つゞきをへつる。降つて又徒渉を續けて行く内、谷が左手に曲ると、行く手の尾根が切れて急に眼界が明るくなり、廊下の門から出た私等は廣い河原で荷を下ろした。右手から可成りの澤が落ちてくるのがオクノタル澤で、こゝはその出合の立石であつた。午後四時五十分。今日の行程

は樂で割合に捗取つた。

荷をおくと竹次郎が早速岩魚釣に出かけ、金作は下の様子を見に行く。私は一人残つて四境を眺めながら、散歩がてらに流水を集める。石の間に熊を撃つ爲の鉛の玉が落ちてゐた。多分冬期に入つた獵師のものであらう。

一時間もして金作が戻つて來た。これから約一時間行程は樂に下れるが、その先は又谷が悪くなつてゐるので、今度は山をへつらなければ行かれないと云ふ。その内に竹次郎が潑刺たる岩魚十數匹を木の枝に束ねて、重さうに提げて來た。それから夕暗の中を焚火を圍んで夕飯を認め、この旅行始めてからの御馳走にありつく。

オクノタル澤は、その落口が二つに分れて、今は上手の方から水が落ち込んでゐる。一寸東澤の落口に似た處で、その三角洲の上に、唐檜や落葉松がこんもりとして、その丘の向つて左下の處に、岩小屋がある、中の乾いたよい小屋で、五人位は樂に泊れる。よほど以前に魚釣が來た處と見えて、岩魚を干した棚が爐の形ちになつてゐる上に残つてゐた。大岩がのしかゝつてゐる處へ、半分だけ木の枝や、ソイだ板を網代に編んで塞いで、其傍に三尺四方位い人が出入の出來るやうに開けてある。然し大きな澤の落口の三角洲の處にあるので、暴風雨で澤の暴れてゐる時には、随分恐い泊り場だと思ふ。立石と云ふ名は、この岩小屋の大きな岩が立てかゝつてゐる爲に、名づけられたらしい。

出合からオクノタル澤の奥を覗くと、母、白檜、落葉松、黒檜等の大木が轟々と生ひ茂つて、谷中は可なり大きく深く、何となく、暗い凄い感じを興へる。出合の所から一町程上で、右手に曲つてゐるので奥の方は見通せない。

この附近には双六谷で見なかつた落葉松が、崖側に嫩綠色の優美な枝葉を連らねて、黒木の間を綴つてゐる。黒部には檜よりも落葉松の方が、ふさはしい様に思はれた。



澤助の藏内るげ仰りよ下



む望な峯本山立りよ流上澤助の藏内
影撮氏耶次松冠

立石の上手薬師側は、百米突以上の赭壁が聳立して、その中程に尾根から薙ぎ落ちてくる赤崩れが、谷まで下つてゐる。右岸の岩壁は稍劣つてゐるが廊下となつて、本流はその間を立石の前に來て、擴がつて池のやうなトロとなり、碧潭となつて流れてゐる。落合から東北の森林の上に、赤牛の尾根が夕日に長大な脊を輝かしてゐる。それがこの出合から見得らるゝ天上唯一の豪華である。

空はよく晴れてゐる。今夜は穴居をするので、天幕の必要はない。夜になると溪聲はだん／＼高く響くやうになる。オクノタル澤の水はザワ／＼と流れてゐるが、黒部本流のはゴト／＼と地響びきかする様に、非常な重みで鳴り轟いてゐる。

立石 薬師岳の下 赤牛岳中腹

八月七日。今日は天氣が思はしくない。五時に起きて外を見ると馬鹿に暗い。空が曇つてゐた爲である。昨夜はよい星月夜だったのに、今日はどうしたものか谷上の雲が切りに騒いで、時折驟雨が襲つて來る。飯を焚く時分には大降りになつたので、廊下へ入つてから降られては堪らぬと、皆申し合せた様に顔を見合せた。苦勞性な竹次郎は、この出合の岩小屋は危険なので、降りが續いたら外に避難所を捜さなければ、ラチカンと云ひ出した。

暫くして小降りになつたので、外へ出て見ると、雲が少しづつ切れて、やがて下流の方に青空が見える様になつた。今のは朝夕立だから、ぢきに好い天氣になると云ふことにきめて、出發準備をして、午前七時三十分、下流に向つて降る。然しこの日と翌日が一番天氣が悪く、殆ど一日中驟雨に襲はれつゞけた。

最早これからは、薬師側は全くとりつけない。暫くの間川の中を行き、右の壁をへつゝ山嘴の大廻りをすると、先は廊下で通れない。一尾根を横ぎると赤牛側からなる小澤が入つてゐる。又川原へ下ると、北の空が開けて、越中澤岳の薬師寄の一角と、スゴイ乗越がよく見える。午前八時壁をへ

つり、徒渉をして、中途でもとの赤牛側へ戻り、崩石の積み重なつた處を上へ行き、又徒渉をしてヤクシ側へ出て見ると、先は壁が高く、谷が狭つて兎ても通れさうもない、二度程徒渉して谷が右に曲り落ちてゐる處で、壁を行き又徒渉をする。皆赤牛側を行くので、その内に峻急な壁で先進を拒まれたので、六十度以上もある崖側を百米突程、灌木や笹などにつかまつて上る。薬師側からは澤があまり落ちてゐない様に覺えてゐるが、赤牛側から出る澤は、皆五六段の瀑となつて落下してゐる。

午前九時半。くたびれたので大木に跨がつて休む。下を見ると、すばらしい廊下になつてゐる。サルオガセの垂れた、梅や落葉松の大木の間を通して俯瞰すると、暗褐色の數百米突もある高い壁が、兩岸から迫つてゐる間を、岩に激した黒部の水は藍黒色に清んで、淙々として流れてゐる。上廊下でもこゝだけはかなり暗い凄い様な感じがした。

山嘴を右上へと通つて、瀑の澤を渡り、もう下れるだらうと思ひながらも、知らず／＼に却つて上つてしまふ。足場が悪い爲である。又ひと廻り次の出鼻をからむ、山側は峻急になつて下降するのが益々危険になるので、追はれる様にと／＼三百米突以上をはい上つてしまつた。

上流で岩魚釣の話をした、五六町の上りになると云ふた處がこゝだと思つた。十時半頃に漸く下向きに歩くやうになつて、尾根から草と笹をたよりに斜面を下る。薬師岳がよく見えて來た。手が、りのない峻急な草崖を、恐る／＼横に降つて、漸くにして赤牛側から出る、第三の瀑の中途を横ぎる。この瀑は水は少ないが、高さは二百尺位あつて、四段になつて落ちてゐる。落口の圓滑の岩の上を、一面に水が流れて來る上を、日が輝やくと五彩の光りを放つて、中々美しく見えた。尾根もこの岩の上からは可なり緩やかになつてゐるらしい、それから次の尾根先の灌木や、笹の中を降つて、谷上の大岩壁の上へ出て、ロープを出して暫らくぶりで谷へ降る。午前十一時。

もう先刻から上流で盛んに雷鳴が聞えてゐる。谷へ降る時分には大粒の雨が降つて來たが、その中

を水深腰を没する徒渉をして、薬師側へ移つて、十間程蒼灰色に淀んでゐるトロの中を、立壁に添つて下り、又赤牛側へ戻る。豪雨沛然として到り、水面は煙りの如く浪立つてくる。閃光は青紫色に溪谷を射り、雷鳴は廊下に響いて物凄い。金作も竹次郎も胸に近い水深の處をあたふたと、赤牛側に走つて行く。トロが板を立てた様な赭壁續きの下になつてゐるので、大雨の時には墜石が怖ろしいので、早く對岸へと私を麾く。私もあせり氣味に後を追つて深い處へ入つた。氣が付くと寫眞器がポケットに入つたまゝである。驚いて取り出すとサツク諸共水に浸つてしまつた。右の手にそれを高く捧げて、赤牛側に移り、腰にあつた時計を出して見ると、これも水に浸つてゐる。幸ひにキカイが濡れてゐなかつたので使用に堪える。

午後十二時少過。ヤクシのカルから落ちる澤の出合の前へ出て晝食をとる。今日は黒部川の空で間斷なく雷鳴が聞える。殆ど終日に亘つての夕立には、すつかり閉口してしまつた。十二時半そこを出發して、赤牛側の河原を過ぎ、板狀に積み重ねられた岩壁の棚の上をへつる約一時間で谷極まつて全く先進を拒まれた。

こゝで黒部は非常の落差を示してゐる。脚下に集まつてゐる數百米突の屏風岩は、ヤクシの方からも、赤牛の方からも轟々と乗り出して、丁度扇の要の如く、幾つもの障壁が谷底に到つて、つゞまつてゐるその狭間を、廊下の水は鞆鞆たる叫音を擧げて落走して行く。上廊下を二つに分けて、今迄の處を奥廊下の領とすれば、これから中廊下になる。

大雨は中々上りさうもない。谷涉りと雨で服は皆濡れてしまつて、これから先は徒渉も壁へつりも容易でない。マントを着てゐては深い徒渉が困難であり、雨にぬれた岩壁や崖側は危険である。私等は相談して、今日はこゝで滞在して、明日薬師側へ移つて下へ降らうかと思つた。然し事情がゆるさないので、金作に前進をすゝめて見たが、この雨では危険だといふので、先行を思ひ止まつた。岩永

君が今日は既に平の小屋に待つてゐらるゝ筈になつてゐるので、幾度か思案をした、二三日雲の出方が多くなつて來たので、若しも霧下の中で雨の爲に、幾日も滞在することゝなつては都合が悪いと思つて、結局強行して赤牛岳に登り、八日一杯に平まで出ることに定めた。

それから私等は、赤牛の崖側を、僅かな溝にとりついて登り始めた、午後二時。もう夕立も急斜面も眼中にない、密叢せる灌木と矢來の如き大竹藪の中を、押し分けたり、かき分けたりして、服やズボンの破れるのもいとはずに、遮二無二登りつゞけた。一間先の人は、熊だか人だか分らない位い、竹が密生し、然も親指程の太さの頑強な奴にとりまかれては、最早歩行ではなく、直立の匍行である。前へ行く者のあまり近くに寄つて行くと、竹にはねられてえらい目に遭ふ、少し離れれば全く先行者は見えない。傾斜が急なので間斷なく這る。くたびれると竹につかまつて休む様な有様である、兎に角私も毎年一度は必ず藪くゞりをさせられるが、この斜面のは今迄経験した内の白眉であつた。昨日金作が赤牛の登り丈は眞平だと云つてゐたが、尤もだと思つた。

約三時間程は谷の景色も山の眺望もなく、雨に叩かれ、濡れてゐる藪の雫を頭から浴びて行くので、服は徒渉以上に濡れてしまつた。溪側の斜面と、口元のタル澤の南の大尾根とのタルミへ出て、大きな岳樺の許に少しばかりの平地を見出して、野營の仕度をする。焚火をしても中々もえが悪い。藪の中なので服を脱ぐことが出来ない。小降りを待つて周圍を薙り拂ひ、どうやら焚火を盛んにして、根曲り竹を折り敷いて、不完全ながら天幕を張つた。水を得られないので、飯を焚かずに、持ち合せた干鰯を焼いてかじり、ドロップをなめて飢を凌ぐ。

夕方になると密雲もやゝほぐれて來たので、すぐ谷向ふに、薬師の胴體が、亂雲の間から、ガレや假松や壁を面白く見せる。その頭上はまだ雲の幔幕に閉されて、時々思ひ出した様に雷鳴が轟く。その右手に夕日が樺色にボケると、越中澤岳、楯山、數河乗越がはつきりと現はれた。雲が大分切れて來た



口落澤切の藏内



壁の近附口落澤助の藏内



りよ前手澤助の藏内
む望を山別部黒



りよ近附口落澤助の藏内
む望を岳澤赤



りよ流上澤助の藏内
峯本山立



りよ近附口落澤助の藏内
む望を流上川部黒

岩永信雄氏撮影

のでじつとしてはゐられず、天幕からはい出して藪の中を散歩する。丁度立山の方では今が夕立の眞盛りらしく、雷雲がぐんぐんその頂上あたりの處を渦巻いてゐる。今頃は彌陀ヶ原あたりは篠突く雨であらう。

この夜は疲勞してゐたからよく寝られる筈であるのに、斜面の竹の上へ着莫塵を敷いてゐたので、身躰が自然に這つて行く、丁度足元の竹の中に蜂の巢があつたのを知らずにゐたが、一晚中ブンブンなられたので閉口した。夜はよく晴れた、又谷へ降つて見たくなつたが是非に及ばぬ。

赤牛岳 東澤落口

八月八日。朝は兎に角よく晴れてゐた。朝飯をとらずに、午前五時半出發、今日はもう藪もいくらか樂だらうと思つて上ると、案外中々の密叢なので悲觀する。少し登つて谷の方を見ると、野營地から約半町程右手に、盆の様な平らな草場がつゞいて、その中に小池が二つ見える。昨夕水のある處を探せと金作に云つたが、皆疲勞してゐるので探さずに、今朝になつて直ぐ間近な處に水があつたのを見ると、餘計に空腹を感じた。

漸く大尾根の森林の下にたどりついたがまだ暫くは藪がひどく、密叢を全く抜け切ると、唐檜の森林が著しく矮くなり、偃松の長大なるが交つてくる。

すぐ鼻先に薬師の大屏風が擴げられた。大きい、殆ど西北から西南にかけての視界は、この大岳の翼に遮られて、見ゆるものはその立派な肩骨と、五つのカール、それから黒部川へひかれた峻急な縦谷と、その間を彩つてゐる蒼青の偃松の群、山の地肌の赭黒色と、藍紫色の壯麗な隈取りである。

私が今迄見た山の内で、薬師岳ほど色彩の豊富な變化の美しくしい、山は少ない。北の方の山はどれも皆さうであるが、この山も東面から見た時、その感を一層強くする。旅客もし赤牛岳の一角に立つて夕日が正にその後に没せんとしてゐる壯麗な薬師を眺めたならば、恐らくその幻影を拂拭すること

が出来ない程、強い印象を受けるだらう。あの肩幅の広い山脊に喰ひ込んでゐる、幾つもの大きな椀状のカールの雪が、氷藍色に變る時分、假松が著しく蒼黝くなると思ふと、山の地肌は千變萬化する。ある處は赭赤色の暖い光りを放つてゐるかと思ふと、その影は暗紫色に深く沈んで、恐らく私等があこがれてゐる山の色の最も幽玄な色調を現示する。もう薬師を見てからは、赤牛も黒部五郎も、標高の高い黒岳ですら、到底その靴の紐を結ぶに足りない。

今日は朝だから、そのデイトイルが見え過ぎて、神嚴の味は缺けてゐるが、位置が低く見上げる様になるので、山の壯大さは赤牛の頂上から見ると幾倍する。兎に角こんなに近く、こんなに大きく、薬師を眺め得る處は外にはない。頂上直下のカールが最も標式的で、釣り合ひのとれた椀状にエグれてゐる。今は雪が少いので、カールの底の三分の一位いしか残つてゐない。右の北薬師の下のカールも中々壯大であるが、幅が稍狭く溪谷に向つて傾きすぎてゐる。右端のは形ちが劣り、最左端のは形はよいが、大きさに於て見榮えがしない。頂上直下のカールから下が一寸早くなつてゐるが、それから雪溪が続いてゐるので、割合に登降に便利の様である。北薬師のカールからも降れる様に見受けられた。黒部川の近くで兩カールの溪が合し川まで崩れと残雪を押し出してゐる。私の見たときには水は殆どなかつた様だ。

北の方に五色が原と、それを圍む山々、黒部川に派出されてゐる木挽山など、手のとどく様に見える。昨日上つた下手の廊下の山勢は赤牛側に於て殊に峻嶮で、山足が直截されてゐるので、川通しはとも下れさうもない。

白檜の森林が短かくなつてくると、長大な假松の林をくぐるやうになるが、幸ひ間もなく、それが短かくなり、急に足元が樂になつた。赤牛の岩尾根の間から、黒岳がこじんまりした頭を出す。オクノタル澤が雲の平に喰ひ込んでゐる手前に、青い毛氈を敷きつめたやうな草原の中に池が光つてゐる。

る。赤牛の黒部寄もしばらく緩傾斜になつて、草原と池とが處々に見える。この附近の地勢は、下廊下の後立山側とよく似てゐる。野營地から三時間餘で漸く岩尾根へたどりつき、その上を巨岩を乗り越して上つて行く。

昨日晝飯をとつたきり全く食物にありつかない一行は、申し合はせたやうに、ひだるさうな身軀を瘦れた足で運んで行く。荷の軽い私は左程飢がこたへなかつたが、重い荷を擔いでゐた金作と竹次郎は、遅れ勝ちに氣儘な方からぶら／＼登つて来る。左の方を歩いてゐた竹次郎が、水があると云ふので行つて見ると、大きな硯岩の凹に二三合の水が溜つてゐる。昨日の夕立の忘物である。然しこの僅かな水が我等をどれだけ元氣づけたか、私等は全く御助け水だと思つた。急いで口をつけ、濁らさない様に一口嘸み、金作がその後を飲む、大分よい氣持になつた。岩峯を二つばかり横にからんで、赤牛近くなると、口元のタル澤の上に初めて残雪を見た。皆荷を下ろして休む。雪を解して飯を焚く時間惜いので、雪を山刀で割つて來て飯盒に入れ、砂糖とレモンとウキスキを交ぜて素的においしい御馳走を作つて、鱈腹すゝり込む。皆元氣を恢復して、一隆起を廻ると、赤牛の絶巔がすぐ前に大きく緩やかに延びてゐる、もうそれまでは大きな緩傾面で、偃松も少なく、赭い砂原の上を登つて行く内に登りついて、三角石標の傍で腰を下して、何となく肩が軽いやうな氣持になつた。時に午前十時。

北アルプス中隨一の觀望臺の上に踞坐して、私は藥師を顧み、立山を見、劔を見た。黒部川の平附近、その下流中の谷邊が殊に鮮やかに見られる。然し生憎東北方の空を濃厚な雲の潮が押し寄せて、白馬岳から針の木岳につゞく山腹をひたし、鹿島槍は半ばその中に埋められた。東澤の向ひに連なつてゐる三ツ岳、野口五郎の丸い尾根は、灰鼠色の地肌に、青緑の羅をかけたやうな纖麗な色彩をして、西の方藥師の幽玄な色彩と、對照の美を示してゐる。

黒岳の左に高く抜け出てゐる、槍にも穂高にもまだ雲の幕はかゝつてゐない。黒部乗越附近であんなに低く扁平に見えた黒部五郎岳は、今日は高く肩をいからし、赭黒い顔をつき出して、この数日の間、その下をぐる／＼廻つて來た、はかない享樂病者の私を、睨視してゐるかのやうに見える。私等が今迄廻つて來た黒部上流の溪谷や山壁は、歴々として指呼の間に横たはつてゐる。その複雑も、その曲折も、その峻險も、今は私の思ひ出の種となつてしまつたかと思ふと、何となく残り惜い。なつかしき谷よさらばと、私は心の中に默禮した。

見てゐる内に眞黒な夕立雲が簇々と擴がつて、瞬間に日をかざして、薬師の方へと押し流れて行く、すると冷風が峽間から吹き起つて、身體が冷えるので山の鼻にはゐられなくなつた。今日も亦名物の黒部夕立だなどと思つてゐる内に、直ぐ頭上でだしぬけに雷鳴が始まつた。午前十時半。大急ぎで赤牛の頂上を辭して、疾風の中を黒岳に連らなる、第一のピークを越えて、すぐ東澤の方の小谷に向つて美しくい草原に出た。岩桔梗、高根スミレ、岩櫻やミヤマリンダウなどが、烈風に押しつけられて、岩の間にカジカンでゐる。

この斜面には残雪が夥しく、池の様な美しくい水溜りが處々にある筈なのに、今年は雪が殊に少い爲、谷まで全く水を見ないで、斜面がかさ／＼に乾いてゐる。残念ながら空腹を抱へて谷へ下ることに定め、草原の上を暫く降り、それが盡きる邊になると、谷が急に落ちて、非常に荒廢してゐる。水は岩の間からしぼり出てゐるが、兩岸が恐ろしい赤崩れになつて、その岩石が脆弱なので崩石の危険を感じたので、何處かで中食をと思ひながらどん／＼谷を下つていつた。二丈程の瀑を二つ降ると、その下には五六丈の險惡なのがある。兩岸の壁が悪いので降らずに、上の瀑を一つ戻つて、その右手のヤセ尾根の藪をかき分け、瀑壺近くまで下り、草の急坂をへづつて、崩崖にステップを切り、漸く谷に下る、雨が盛んに降つて來た。

曾て私は東澤から、この谷を上つたことがある、その時には東澤に岐れると間もなく、雪溪がつゞいてゐたので、何の苦もなく、雪の上を通過して草原近くの藪にまごついた丈で、登ることが出来た。最下の五六丈の瀑は、其時には水量が夥しく、矢張右岸の崖を上り、藪を歩いたが、その上の二つの瀑は半は雪で埋まつてゐたので、附近に崩岩の心配がなかつた、その上手の右岸に高さ數丈の岩壁から立派な瀑がかゝつてゐたのが、今年は水の一滴も見ないで數丈の岩壁だけが光つてゐた。この邊の谷は皆、雪の少ない時には荒れて中々登り悪い。最下の瀑の下から傾斜も緩くなり、谷が大分よくなつたので、灌木の間に荷を下ろして、右側の石の間で飯を焚く。

雷鳴と豪雨の中を蔽遮物がないので、飯は急に煮へ上らない、漸くのことで汁をかけて食ひ始めると、夕立が遠慮なく茶碗の中へ溜つてしまふ。兎に角昨日の夕餉と、今日の朝食と、中食とを兼ねた食事を終つたのは、午後二時近かつた。

飯が終るとそこへ、雨具の用意をして、東澤に向つて下る。對岸三ツ岳、烏帽子の山側を、雲霧が面白くボカしてゐる、現實のものを幾層倍にしたやうな、恐ろしく大きな、三ツ岳の頂上附近を、あぶり出すかと思ふと、何時の間にか潮の如な雲の波が襲つて來ては陰沈たるその底にかくしてしまふ。やがて又明るくなると、山の周りを繞り動いて行く雲の綾の、奥に息づいてゐる森林の山側が、美しく夢の様に現はれてくる。

谷を降ると云ふよりも、寧ろ走つたのであつた。東澤への落口に着いたのは午後三時頃で、それから東澤を下つて行くと、大町の岩魚釣が一人上つて來た。黒部上流以來始めて人に遭つた。最近に東澤も大分荒れたらしく、ある處は楊や榛の林のつゞいてゐる美しく砂丘などが、何處かへけし飛んで、澤の中が大石狼籍として、生々しい巨木の殘骸が幾つも横たはつてゐるだけで、先年とは大分面影を異にした。今私の降つた谷の下流に、同じ様な走向で赤牛の方に稍小さな澤が入つてゐる。これ

が赤牛岳の頂上へ一番早く出られるので、その下に狭い割れ谷が一つ、入口の處で瀑が見えるのが落ちてゐる。これは登れないらしい。

篠つく雨の中を強行して、午後五時黒部の出合に出たが、一同無言のまま、荷を下ろして、林の下の砂利洲の上へつかれた足をなげ出した。今日の行程は正に一日半分、而し昨日の晝から飯をとらずに、午後二時頃まで我慢をして、大雨の中を疾走して來たので、疲労が甚だしく、荷の重い人達は随分エラかつたやうであつた。今日の中に平まで出たいと思つてゐたが、斷念して、廣い東澤の出合の河原で天幕を張ることにする。

午後六時になつても、夕立はなか／＼歛まらない。谷の上で雷鳴が時々轟くと、山側や流水にまで反響して、壯嚴の音が谷中に漲ぎり傳はる。午後七時頃になつて、上空が大分明るくなり、雲の斷れ目から、夕焼の空が高く／＼茜色に輝き始めた。明日は天氣だ。そして朝早く平の小屋へ着くことが出来る。さぞ岩永君が待つてゐらるゝことであらう。

御山澤落口まで

黒部川の源流地、薬師岳、雲の平、黒岳、赤牛岳附近ほど、夏期に多く、低氣壓の発生するところはめづらしい。越中の夕立ほど始末の悪いものはない。日によると朝から晩まで、一日ゴロゴロ／＼鳴つてゐることがよくあると、金作が上廊下で嘆息をしてゐたが、實際今度は執拗な夕立につきまとはれて、少なからぬ困難をした。そのくせ下流にゐた岩永君は、私等が一番ひどくやられた日でも、夕方三十分程雨を見たばかりだと云ふ。發生した低氣壓は里の方へ下らずに、源流地附近の山や谷を繞り歩いて、夕刻になると自然に消滅して、又翌日同じ様にくり返して行くのではないか。先年私は赤牛の上で、えらい雷雨に逢つた時も、黒岳の西方から起つた雷雨が、黒岳から赤牛の上に来て、逆に戻つて又黒岳をかすめ、野口五郎岳、三ツ岳方面に盛んに夕立を降らせ、それが又もと來た道を辿つ

て黒岳赤牛へ來襲して、とう／＼立山の方へ移つていつた。その翌日、双六岳の處で、同じ様に山廻りする御神立を見て、私はめづらしいことに思つたが、今年もやられて、黒部の低氣壓の執拗なものにつく／＼あきれた。然し上流のことだから、まだ力が割合に弱く、落雷することは滅多にないので、危険は少ない。

八月九日美晴。東澤の野營は寒いので有名ださうだが、成程廣い出合に、上流から吹き集まつてくる風は中々寒い。焚火がもえ上ると、その方へはい寄つて煖をとる。昨日は晩まで夕立が續いてゐた爲衣服は皆濡れたまゝなので、氣持が甚だよくない。

静寂な朝だ。空を仰ぐと明星はまだ閃々として、大空は淡碧に澄み切つてゐる。静かに川面を延びて行く朝靄を眺めながら、嗽ぎ、黒部本流の上手を覗きに行く、黒部は矢張唐松が美しい。そして唐松がこの谷の原始的の風趣に、最も調和して見える。下流の方は山がなるくなり、壁が少なくなる丈あつて、何となく明るい氣分に充たされてゐる。

今朝はなるべく早く平に出たいので、急いで朝飯をすませ、午前六時に出發する、出合の處で左岸に渡り、又右岸に涉り返し、稍深い徒涉を一回、その外二三回の徒涉をして、それから重に左岸に添うて、水の中、岩の間、壁の小へつりをして行く。東澤を合せてから、黒部の水は非常に大きくなる。顧みると上流は既に幾多の尾根にとざされて、その奥から赤牛が顔を出した。今迄とは打つて變つて、行手も益々明るくなり。兩岸から翠緑の尾根先が幾つも／＼、黒部に向つて延びてゐる。

空は心往く迄晴れ渡り、風は殆どなく、陽炎は川からも、壁からも、ちら／＼と登つて行く。銀欄でも敷きつめたやうな黒部の静流は、悠々と曲折して、愈々河中が廣闊になつてくると、楊の密林が、これは五郎澤出合この方なつかしいものであるが、大きな洲の中に繊細な枝葉を織り出して、並木のやうに長く續いてゐる。立山本峯がこのゆつたりした谷の上へ高く見えて來た。愉快々々、私は

思はず喜びの聲を出さずにはゐられなかつた。そして久方ぶり、近く靈峯を仰ぎ見て、私も幸が多い溪谷禮讃者であることを喜んだ。

木挽谷を上つて、右に廻つて川へ下り、急いで行くと、間もなく廣い越中澤の落口近くなり、やがて一廻り廻ると、籠渡しの鐵線が見える。東澤を發つてから、僅かに一時間と四十分、籠渡し場の處へ出て、私はその早いのに驚いた。東澤の出合から平までは、平水で半日はかゝる筈だが、水が少い爲と、急いだったので、行程が捗り、午前七時四十分、平の小舎に着くと、傍の小舎から、長次郎と米谷とが出て來た。昨日の夕方から、私達の來るのを待つてゐたので、岩永君は御山澤の出合の處にゐらるゝと云ふことを聞いて、私は安心をした。

平家造りの小屋は取毀たれて、新しい二階建の倉庫の様なのが、その跡に建てられて、附近も大分廣く蒔り廣げられた。私はこゝで、米、副食物等を補ひ、長次郎米谷と共に、小屋の横をぬけて、電力の歩道を行く。大正九年に下廊下へ降つた時には、平から川岸に添つて、水の中を徒渉して降つたが、今年には日本電力がこの沿岸に道を拓いたので、小屋の後ろの藪の中に、大きな天幕が二つ張つてある。その前を通つて廣い河原へ下りて、砂利洲を横切つて行くと、間もなく中の澤の出合の手前に出る。對岸針の木岳の山側に向つてかけられた、三十數間の釣橋を渡つて、右岸に移り、後立山側の歩道について、元ザクホ澤を横ぎつて、曲折せる崖道を、梅や落葉松の間を埋めてゐる樺、山毛櫨の林の下を辿る。

上流を顧みると鬱蒼たる幾多の尾根を越して、木挽山の頭が丸く聳えてゐる。尾根の足は、川近くになると皆、緩傾斜の丘つゞきの様になつて、幾筋もくく黒部川へ集まつてくる。そのかき合はされた、衣の襟のやうな間から、黒部の大流は悠々として漲つてくる。廣い川中を點綴する花崗岩の分解された白洲の丘の上に、川楊の森が茂つて、浮島の様な優美な景色をとりつぎに展開する。上流に



冠松次郎氏撮影

身山澤 (落口附近)



内蔵の助澤の上池

赤牛岳、木挽山を望み、中の谷から下流に當つて、川一杯に、峨々たる岩峯を簇立させてゐる赤澤、鳴澤の峻峯を仰ぐこの邊の景趣は、悠大を極めてゐる。これから御山澤までは川幅が随分廣い。

小スバリ澤の押し出しの上を横ぎつて、間もなくスバリの壁の手前へ出ると、四十間程の長い釣橋が霞の様にかけられてゐる。それを渡つて御山澤落口の上の丘へ出た。そこには大天幕が五つ程張られて、湯殿までこしらへてある、私は僅か兩三年の内に、黒部川の様子が大分人臭くなつたのに、軽い哀愁を禁じ得なかつた。

天幕の中に岩次郎がゐて、茶を出してねぎらつてくれた。出合の砂洲の上の天幕の中にゐた岩永君は、喜んで駆けて來られた。私は約束よりも丸二日も遅延したことを心から御詫をした。然しながら、その二日間があつたればこそ、君は御山澤の落口の壯麗な景に親しみ、路づたいでなく、谷通しを、内藏の助澤の落口まで降つて、非常な收穫をして來られたので、無駄に私を待つてゐなかつたことを知り、私は自分の違約の罪が、完全に償はれたやうに思つた。實際御山澤附近に滞在してゐると、私等はその環境の絶景や、上下流の黒部川の變化と、深遂に陶醉して、一週間位はあはたゞしく過ごしてしまふからである。

それから私等は、岩永君の一行に加はり、打ち連れ立つて、峻高雄麗の岩傳ひを、曾遊の下廊下へと下つて行つた。

黒部川より立山川への旅

岩 永 信 雄

これは大正十三年八月、双六谷から黒部川の上廊下に入り込まれた冠氏を御山澤の落合附近にて待ち合せ、共に下廊下を下らんとして能はず、引返して内蔵の助澤を廻り、内蔵の助平に出て、黒部別山乗越を踏え、ハシゴ谷より劍澤を経て別山乗越を過ぎ、轉じて室堂乗越に上り、立山川を下りて伊折に達した往復九日間の紀行であるが、黒部峡谷の下廊下のやうな偉觀を充分に記述することなどは、自分には及びもつかぬことであるから、それは他の記文に譲り、單に日程を略記して後遊の人に何かの参考になれかしと思ふ許りである。

人夫は大山村の宇治及米谷の兩長次郎と冠氏の連れられた宮本金作及山田竹次郎の四人であつた。四人の人夫では下廊下を通過することは、溺水期でも殆ど不可能に近いことを此時に知つたのはよい経験であつたと思ふ。

参照地圖 五萬分一 魚津 五百石 立山
廿萬分一 富山 高山

一 御山澤まで

八月四日。晴、時々驟雨あり。

此日は朝から雲の往來激しく且つ蒸著い日であつた。時々襲ひ來る驟雨を氣にしながら重いリュックサックを肩にして出發、上野驛から夜行列車中の人となつたが甚しく混雜してゐた。寝られないので車窓から外を眺めては空合に氣をとられる。輕井澤邊では小雨となつたものゝ、出發から雨とは縁起でもないと餘り好い氣持にもなれず、さりとて致方もないので諦めて、混雜中にも可成睡眠することを得た。

八月五日。晴天。

何時の間にか眠つてゐる中に汽車は猶豫なく進んで午前四時頃直江津に着く。まだ眠いので久振りなる日本海沿岸の景色を眺むる氣にもなれず、ウトウトと眠りを續けてゐた。其中夜も全く明けて睡氣も去り、海岸の景色に目をやる。魚津附近から立山連山が見られた。七時富山着、直に市内電車にて南富山驛に向ふ。八時立山鐵道に乗り換へ、九時三十分千垣に着いた。車中立山温泉事務所の鳥居八郎氏に會ひ、種々温泉の様子等を聞き便宜を得た。空は晴れて暑さ次第に加はる。千垣には長次郎と米谷とが迎ひに来てゐて呉れた。一町上手の常願寺川沿ひの茶店に休憩して準備を整ふ。この附近も大正十年に通過した時とは様子が變つて隔世の感がある。常願寺川には日本電力會社で立派な釣橋を架し、鐵道も滑川から五百石迄であつたのが千垣まで延長し、登山者は徒勞を省くことが出来るのである。空晴れて暑さを覺ゆること甚だし。眺望も相當によく、雄山、別山、淨土等の連山が森林の中に輝いて居る。時期が遅いので雪量も餘程減じた様である。十時半立山温泉に向つて出發、左岸の道を進む、土産物を賣つてゐる粗末な小屋は感心しないが、絡繹として盡きない下山者を見ると成程と首肯される。立山に強行軍した富山聯隊の兵士五百五十名程が歸營するのと出會つた、鐵砲を肩にして随分疲勞の色が見え氣の毒にも思はれた。十二時藤橋着、晝食。藤橋ホテルなどいふ旅館が出來たのには恐れ入つた。橋の手前から左手に入り、稱名谷を通つて大日平に上る道も完成した様で、道標など建て、あつた。午後一時出發、材木坂附近のブナ林の中を通り、右岸の道を行く、左岸の道は前年の洪水に破壊して今は無い。赤兀谷やカラ杉谷を右手に眺めつゝ進み、二時三十分河原の道に出て少憩す。荒れた廣い河原を見ると洪水の時の常願寺川の物凄さが想ひやられる。長さ百六十四間の鬼ヶ城隧道は蠟燭の火を頼りにして通過し、三時四十五分ブス谷と云ふ小流を渡る。天少しく曇り雲の往來ありて冷氣を覺ゆ。四時真川の合流點を通過、附近にブナ、タケカンバの類多く、老鶯の聲

聞くも山に入りたる心地す。四時三十分水谷を過ぐ、この所にて瀑を望見することを得た、高さが相當にあるので水量多きときには見るに足るであらう。このあたりより兩岸は赭色の岩石露出して草木としては殆どなく、少しの雨にも崩壊する危険がある。五時三十分多枝原谷を左岸に見る頃、薬師の大岳は右手に其一角を現はし、俄然景色一變す。路は急に狭くなり約一丁許の間絶壁の下を通るに幅二尺に過ぎずと覺ゆ、殊に岩石脆くして崩壊し易き故、風雨激しき時は危険にして通行不可能との事である。此道は大正六年に出来たる由なるも、洪水の度毎に路筋變じ、翌年通つた際にはもつと上手の安全な所を通つたが、前の路跡を望見せしに崩壊甚だしく、到底通過覺束なき有様であつた。六時斜陽西に沈まんとする頃立山温泉に着いた。雑沓いはん方なく、宿がないので温泉上の薬師堂で一夜を明すことにした。

八月六日。晴天。

山中の温泉でも斯程の雑沓ではゆつくりと疲労を癒することも出来ぬが、埃臭い體を温泉に浸した後には流石に爽快なるを覺えた。九時頃就寝、前日の疲れで可成の睡眠をとることを得、午前五時頃起床した。空は曇り勝ちなるも雲高くして淨土山、龍王岳の姿を隠すに至らず、この附近の谷間に一箇所残雪を見た。

七時二十分出發。少し曇りたるため餘り照り付けられずして凌ぎ易い程であつた。行くこと暫らくにして大林區署の小舎あり、附近にて小規模なれども砂防工事に従事しつゝあるを眺めながらブナ、タケカンバなどの森中を進めば、鬼ヶ岳、淨土山、龍王岳、ザラ峠の連嶺が前面を遮る。八時四十分湯川温泉を右に見つゝ登り、川原に出で、一息付く。道程は長く荷物は重い故、ゆつくり歩みて十二時ザラ峠頂上着。野口五郎岳、烏帽子岳、三岳、不動岳等の諸峯よく見ゆ、雲高くして眺望に妨げなし、米谷と共に五色ヶ原に遊びに行く、御花畑は盛を過ぎたるも人氣なくして却つて心地よし。此邊



近附ンビガテタホオ
川部黒の



道棧の中途る至に澤人仙



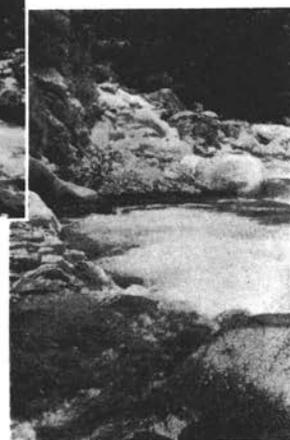
子梯の坂ミジン



りよ近附ンビガテタホオ
る見を流下川部黒



口落澤前御



川部黒の口落澤助の藏内

岩永信雄氏撮影

も大分以前とは變り立派な二階建の小舎も造られ、愈々天幕の不必要を感ぜしむるに至つた。雪も殆ど消えて僅に大鷲に少量を存するのみ。

午後二時十分荷を整へて出發。少し下りたる所に雪溪あり、面白さに滑降を樂しみなどし、雪溪の終りたる所にて冷水に渴を醫したるときは久振りで谷川の水の甘さを味つた。四時刈安峠着、眺望相變らずよく、雄山、一ノ越、龍王等の立山連山を始め、岩小屋澤岳、針ノ木岳より烏帽子岳方面も手にとる如く見え、赤牛岳邊は雲のため少しく遮らる。少憩して出發、途中駒鳥の朗かな聲を耳にし、五時半小舎に着す。荷を下すや急ぎ河原に出づれば、前年此處を越えたる時より水量大に減じ、折しも對岸より人夫の徒涉し來る様を見るに、籠渡し附近にて膝を没する程の深さなれば、籠渡も不必要なる位なり。斯くては天候さへよくば、今年は必ず下廊下の通過も成功せんかと心躍る。此附近も以前とは全く趣を異にし、小舎も改築されて二階建となり、四十人位を泊めることを得。殊に驚きたるは、黒部川筋に道が出來たりとは長次郎などより聞きたるも、斯程までとは思はざりしに、今見れば一間幅程の立派な道なるに全く意想外に感じたり。(山岳第十八年第二號、冠氏「黒部川瑣談」參照)。小舎から二十間程下るとブナ林の中に日本電力會社の天幕が二張はつてあつた。長次郎が關係して居るので私等も一夜世話になつて非常に優遇された。參考のために當時の平小舎日記を左に抄出する。

一九二五年		天候		氣 溫		降水量		水 位	
七月一三日	晴	前六時	一〇度	後九時	一二度	〇	一	二〇八	尺
一四日	晴	八	二六	一三	無	〇	〇	二〇〇	〃
一五日	晴後曇	一〇	二七、五	一二	〃	〃	〃	一、九九	〃
一六日	曇後雨	一四	二二	一五	〃	〃	〃	一、九〇	〃

○黒部川より立山川への旅 岩永

昭 和 二 年 六 月 發 行

○黒部川より立山川への旅 岩永

夕食のアザミ、ダケワラビに舌鼓を打ち、十時寝に就く。夜半に天幕を叩く異様の音に眼ざめて外を覗けば雨降るなりしも、いつしか復た眠に落ちたり。温度も割合に高く、且つ静かなので立山温泉

一七日	雨	一五	二〇	一五	二、四	一、九二
一八日	晴後曇	九、七	二八	一八	一二、五	一、九五
一九日	晴	一〇、六	二六	一二	二、〇	一、九〇
二〇日	晴後曇	九	二二	一五	無	一、八八
二一日	晴	九、四	二四、五	一五	一、一	一、八三
二二日	晴	七、七	二五、五	一六、五	無	一、八二
二三日	曇後雨	一四、七	二二	一六	八、六	二、〇五
二四日	曇後雨	一三、七	二二	一六	六、七	一、八三
二五日	雨	一七	一六、八	一六、四	五、三	一、八二
二六日	雨	一五、二	二四	一五、二	四〇、二	二、二一
二七日	晴	一一、〇	二五、八	一〇、二	無	一、八一
二八日	晴	一一、六	二七、二	一七、五	無	一、七六
二九日	晴	一二、八	二七、三	一四、〇	無	一、七三
三〇日	晴	七	二七、七	一三、七	無	一、七〇
三一日	晴	九、四	二八、五	一三、七	無	一、六九
八月一日	晴	一一、五	二八、五	一六、二	無	一、六五
二日	晴	一一、六	二九	一六、二	二、九	一、六四
三日	晴後曇	一〇、〇	二八、三	一四、六	無	一、六三
四日	曇	一〇、七	二八、〇	一七、七	無	一、六二
五日	曇	一三、五	二五、五	一四、六	六、〇	一、六二
六日	曇	一四、五	二五	一四、六	〇、二	一、五九

一三六

などより心安く睡ることを得た。

八月七日。雨、後快晴。

午前五時頃起き出でたるに、夜來の雨は小降りとなつて居たが暫らくにして歇む。長次郎なども天氣に心配するがものは無いと言ふ。木々の水滴が旭光を受けて五彩に輝き、翠色一しほ鮮かに、萬物生動して清新の氣溢るゝ如く、そよ吹く朝風に搖れて枝や梢からは雫がはら／＼と落ちて來る、如何にも氣持のよい音である。今日來る筈の冠氏を御山澤の落合で待合せることにして、午前七時五十分昨夜來の好遇を謝して小舎を後に下り始める。小舎の下手は直ぐ廣々とした河原をなし、黒部の奔流は右岸の絶壁を洗ひ、一曲して物凄しい姿を現はして居る。河原の幅は一二町もあつて、御山澤手前の廣河原と共に最も河幅の廣い所であらう。左岸の段丘には川楊が鬱蒼と生ひ茂り、心持よい木の香が鼻を打つ。暫く河原の中を傳ふと左側の森林の中から中ノ谷の清冽な流が合する。水量少なき爲め踵を没する位で難なく徒渉することを得た。これからは俄然景色も一變し、河原はなくなり、立山側も川近くまで傾斜が急になつて居るので、長さ二十間位の釣橋で後立山側に移るのである。(八時)。上流を望めば廣い河原の彼方に木挽山や赤牛岳が望まれる。この道はこの年六月より長次郎指導の下に作られたもので、幅は一尺位、風趣も害はれず、河原から高さ二三十米突の所に通じて居る。それに餘り上り下りもなく、大きな闊葉樹林の間を縫ふて進み、黒部川の奔湍を望見することも出來、充分に谷の氣分が味へるのであるから何とも申分がない。間もなく一の涸澤に出て少憩する。其處へ大町の遠山品右衛門の子兵三郎と平ノ小屋番志立八十太郎とが釣竿を肩にして下つて來た。暫く山話をして九時五分出發し、これから河原に沿うて歩くのである。兩側は闊葉樹鬱蒼として繁り、その間を奔流が時に藍靛の淵を湛え、時に湍急たる急湍をなして隠見する。この邊一體は緩やかに落ちて來る闊葉樹林の尾根の出入が婉曲なる曲線を描いて、如何にも穩かな黒部中流の趣をなし、河原も右岸は一二町程

にも達し、平小屋附近のものと共に一大特色を現はす。下流の方を眺めると、赭色の岩小屋澤岳が巍然として、清澄な碧色をした谷の空一ぱいに屏風の如く聳え立つて居る。一度この景觀に接すれば恐らく何人も之を忘れ得ぬであらう。黒部川の溪觀中黒部別山は他の追従を許さぬものであるが、赤澤岳も中々に棄て難い趣がある。九時二十五分冠氏が小スバリ澤と命名した澤で少憩する。水量減じたこの頃では徒渉と云ふ程のこともない。天は愈々晴れて一點の雲影もないと云ふ有様である。九時三十分猶も右岸に沿うて進む、溪水は殆んどスレ／＼に岸を洗つて居るので、所々岩へヅリをするが、高さも左程ならず、別に危険を感じることもなく御山澤手前の釣橋に達す、長さ三十間位、左岸に渡ると川楊の森林の中に日本電力會社の天幕が三つ張つてある所に達した(九時四十分)。人夫達も荷物を卸して休憩し、冠氏の來着を待つことにして、御山澤の落合附近の白砂の所に天幕を張り、荷物の整理などして野營の準備をなした。

御山澤の水は兩岸に川楊の茂つて居る奥の方から、叫喚の聲を上げて小躍りして本流に合する。其對岸は數十丈の絶壁をなし、下は眞青な淵となつて淀んで居る、斯様な所で水の變化する様を見て居ると少しも見飽きると云ふことがない。

此處から仰ぐ立山連峯は又何とも云へぬ趣がある。景はよし道は樂であるのに、來る人の絶無に近いのは如何したことかと思ふ程である。いづぞやこの附近で富山の人夫が霧のために道を迷ふて死んだ、それを搜索に行つた實話を長次郎の口から聞く。又昨年棒小屋澤のあたりを通つた時は、この附近は大きな竹が一面に河を塞いで黒部の水を堰き止めて居るのだと村の古老の話に傳へられて居るとも聞かされた。それは兎もあれ時間も早し快晴でもあり、内藏の助澤までは河傳ひに行つても危険はないと長次郎がいふので、辨當と釣竿とを携えた米谷を連れて、内藏の助澤迄河傳ひすることにして出發する、時に十時三十五分。

双六谷



左 (上)打込谷落口附近
(下)蓮華谷の邊と釜



右 (上)釜
(下)長瀬戸



奥 抜 戸 附 近



冠 次 松 耶 氏 撮 影

二 内 藏 の 助 澤

御山澤も水量が減つて居るので徒渉の要なく、大きな石を傳ふて何の苦もなく横切り、立山側に沿うて降る。瑞々しく茂つた川楊の下を辿りながら足元に注意して巨岩の間を右に左に拾つて行く、水量減じて所々に河原もあれば砂洲もある。溪水はその自然に配置された巨岩の間を渦行して奔騰激越し、淺瀬などは絶えて無く、或時は巨岩にせかれて瑠璃色の水簾を懸け、或時は數尋の下底からむくむくと湧き上つて躍り狂つて居る、そうかと思へば油の様な碧潭となつて流れるとしても見えない。私等は何等の苦もなく暢びりした氣持で川風に送られながら深緑を賞しつゝ、降つて行く。

米谷は所々で釣を試みたが、今日は餘り天氣が良過ぎるためか一向に獲物が無い。暫くにして日本電力會社の水準測量の標木あり、その直ぐ近くの小流に手を觸るれば幾分か温味を覺ゆ、こんな所に温泉が湧出するらしい。晝食。下流を望めば釣鐘形をした赭色のオホタテガビンの大岩壁は、黒部川に突出してのしかゝるやうに聳えて居る。後立山側は急峻なため山脚を河が流れて居るから、之に沿うて下ることは難かしいが、立山側は可成の河原をなして居るので樂に歩くことが出来る。赤澤、鳴澤の二峯も近く突兀として赤黒い肌を露出し、怪奇人に迫るの慨がある。休憩して午後十二時十分出發。そろ／＼黒部らしくなつて、所々に赭黒い小岩壁を河原まで押出して居る。しかしさしたることもなく十二時半には御前澤の落口に出た。御山澤より二時間を要したに過ぎない。

御前澤は御山澤に比して落口は非常に小さく、之が有名な御前澤かと疑はるゝ位である。落口は幅の狭い瀑の様な奔流をなして居るが、何となく陰鬱な感じがする。行手には岩壁が屹立して右折して居る。上流に二三の瀑布があり、樹木も生ひ茂つて居るから、之を遡るのも非常に興味あること、思ふ。

御前澤から下は俄然景色も一變して兩岸迫り來り、僅に立山側に水量の減じた時砂洲を現はすのみである。足下に注意を拂ひつゝ進めば、前面には赤澤岳の黒部寄りの一峯が急角度をなして高くその雄姿を現はし、恰も我等を迎ふるが如く、加ふるに赤澤岳の頂上近くは鋭く尖りて人を魅するものがある。河水も勾配を増したるため一層たぎり立ち、彼を見是を眺めて心恍惚たるを禁じ得ない。

御前澤から三十分程進むと立山側が可成りの角度をもつた赭色の岩壁を現はし、對岸には赤澤岳から出た大きな押出しがある所に達する（一時五分）。此處は一寸した河原をなして居る。後立山側は依然として激流に洗はれ、巨岩峙ちて所々に水門を現出し、溪水が其間を奔躍飛騰して流れ行くさま壯快である。

此處から下流は河の傾斜益々急に、河中には巨石恠岩縦に聳え横に蟠り、河水之に激して千態萬狀到底筆紙に盡し難いのである。上流を望めば赤澤岳はその亂杭齒のやうな突兀たる姿を谷一面に現はし、其肌には赤いガレが生創のやうに痛々しい。岸も愈々相逼つて居る。時には川楊の藪を少し巻くやうにして、可成り岸近くを通行するので、足下に注意を要するが、黒部特有の景色が次第に展開して來るために氣ばかり急ぐのも無理はない。

此時天の一方に黒雲現はれ夕立模様となつた。谷が右折すると後立山側は直立の絶壁數百尺、直に河岸から屹立して其下を黒部川が奔馳してゐる。赤黒色の壁は文字通りに垂直であり、數十丈上までは樹木の生ずるを許さない程で、その壯觀を見れば快哉を叫ばぬものはあるまい。左岸も順層の數十米突の絶壁を形成し、兩岸相扼して下廊下の關門をなして居るので水は愈々窘蹙して深淵をなし、そこへ内藏の助澤が急瀬をなして落込んで居る。此處に着いたのは二時半であつた。

私等が此處に來たとき丁度日本電力會社の人夫十數名、今や道を作らんとして、二三名のものは岩壁にポルトを打ち込み、綱に縋つて工事の作業中であつたので、我等も綱の助けをかりて落合に出る

ことが出来た。此處は先年冠氏が非常に苦心せられた所である。

内藏の助澤の落口附近は、黒部川が三間程の落差をなして巨岩の間から奔出し、瀑らしい様を見せ
てゐる。澤の上部を望むと右岸の豪壯な岩壁と、左岸のオホタテガビンの障壁が對立して、間に大き
な窓を作つてゐる。私は非常に暗い感じのする澤ならんと想像して居たが、上に内藏の助平のあるた
めか、却つて非常に明るい幅の廣い谷で、水量は御前澤よりは可成多い様である。

落口附近の大岩上に腰懸けて黒部川の下流に眼をやれば、右岸は赭黑色をした數百米の岩壁が釣鐘
状をなして屹立し、鳥でもなければ到底近付くことを得せしめない。左岸も二三十間程は數十尺の一
枚岩續きで、奔流は巨岩を嚙んで河一面に溢出し、やゝ下つて少し河原を現して居る。河は一町程で
殆ど直角に左折して居るので其先は見えない。暫時は唯其壯觀に魅せられて茫然たるばかりである。
積年の希望を達した喜は、とても言葉や筆紙に盡し難い。兎角する中空模様が怪しくなつて來たので
大急ぎで引返し、内藏の助澤手前の岩壁の下の窪の所へ入つたとき、沛然たる豪雨は盆を覆すが如く
やつて來た。それも所がら一興である。四十分程で雨も全く歇んだので、午後四時出發して歸途に就
いた。

歸りは此年六月に作られた黒部川沿ひの道路によつたが、雨後の深緑滴るが如く、翠嵐梢を拂ひ、
樹間より河の見えつ隠れつ、興趣頗る饒であつた。出發のとき雨具の用意をして來なかつたので、長
次郎が途中迄雨具を持って迎ひに來て呉れた。道は出來たばかりで非常に歩きよい。四時三十七分御
前澤通過、五時十分には御山澤に歸着することが出来た。

夜食にはダケワラビの味噌汁に舌鼓を打つ。冠氏も先程の夕立には相當惱ませられた事と案じられ
た。時に天全く晴れ、半輪の明月皓々として前面の深淵に銀波を漂はし、清爽の氣身に沁むばかり
で、願れば立山本峯の氷雪が川楊の森林を隔て、輝いてゐる。この寂しきと軟かみとの中を大地を揺

がす黒部の流のみが私等の寢床をも震蕩して流れてゐた。

八月八日。晴後曇。

谷間の一夜も安らかな睡を得て、午前五時頃起床すれば、一天澄み亘り、あたりの川楊も水滴麗らかに、緑も一層濃やかさを増して、今にも滴らんとする有様である。暫くすると立山本山は旭光を浴び、峡谷は未だ醒め切らないで、静寂の中を駒鳥が聲高く囀りながら谷から谷へと渡つた行く。相變らずダケワラビの味噌汁に舌鼓を打ちつゝ、七時頃朝食を済し、何時でも出發の出来るやうに準備を整えて冠氏の來着を待つ。御山澤を遡つて見やうかとも考へたが、若し留守中に冠氏が來られた時は都合が悪いと思ひ、附近の縁に見怱れながら數時間を過す。眞夏なるに拘らず暑さも覺えず、河面を吹く微風も思ひなしか膚に涼しく、一日位はこんな所に逗留して居るのも面白い。此處を中心として御山澤を遡るのもよし、又河沿ひに平小屋へ行き、若しくは内藏の助澤方面へ往復するのも無意義の事ではない。私も時間の餘裕さへあれば平小屋へ河通しで行つて見たく思つた。

午後から赤牛方面に黒雲が湧き出したかと思ふと一天かき曇り、忽ちにして私等の所にも襲ひ來つて、一時半頃から沛然たる驟雨となつたので、一同大急ぎで天幕に潜り込んで雨宿りをした。三時頃になると雲も霽れ雨も全くやんだので、河邊に出て見ると今迄は清冽そのものの如き流も、濁水となり水量も増したやうに想へたが、しかし夫は殆ど變りがない。流水も清濁に依つて感じに非常な差異を生ぜしむるものである。冠氏も今頃は上廊下邊でこの雨に遣はれて困難される事と心配する。雨のやんだ後も空は曇り勝ちで、上流の方では時々電光が閃いた。長次郎等も退屈しのぎに釣糸を垂れて見たが、濁水のためか餘り獲物もなく、私も仲間に加はつたものゝさつぱり様子もわからず、皆で漸く夜の食膳に上す位の獲物を釣り上げたのみであつた。

空も夜に入つてから全く晴れ亘り、冷氣を覺ゆること甚だしい。日本電力會社の技師中島達郎氏に

是非今夜は泊るやうにと薦められて固辭するも心ならずと、其好意を受けて天幕に入り、温き夜具の中で睡ることを得。

中島氏の話によれば、廊下には徑七八寸位のシヤクナギは珍らしからずとて、其實物を見せられ大いに驚いた。

八月九日。快晴。

昨夜も天澄み氣も冷やかに秋夜の如く覺えたが、温い夜具にくるまつて寝た事とて左程の寒さも感ぜず。午前四時半頃眼醒むれば空には一點の雲もなく、星も未だ淡く光つてゐた。谷に入つては好天氣が何よりの幸福で、この調子ならば未だ數日位は大丈夫だと長次郎も請合つた。

豫定の日も過ぎたし、それに食料の補充もせねばならぬので、長次郎と米谷とが平小屋迄行つて見ると云つて六時四十三分に出かけて行つた。四邊は静寂で、朝暾既に富士の折立岩の邊に輝いて居るが、谷間は容易に夜の帷を披かない。八時になつて漸く夜が明けたやうになり、九時始めて谷一面に日光を浴びて真に明るい感じとなつた。今日は多分冠氏も來れること、思つて片付けものなどして居ると、果して遠くの方から「オーイ」と叫ぶ聲がした。早速飛び出して見ると今しも三人は御山澤の釣橋を渡つて居るところであつた。互に無事の會合を喜んで心から固い握手を交した。十時である。昨日の夕立には上廊下では殆ど終日降られて非常に困難し、其上約束の日限にも遅れたので大に強行されたとのことである。皆揃ふたので未だ早いが午食をとることにして少憩し、十一時四十分愈下廊下に向つて出發した。

三 下廊下へ

下廊下へ！、積年は非とも足を踏み入れて見たいと思つて居た所へ歩一歩と近付くかと思へば胸騒

ぎを覺える、緑深き山道を踏分けて進めば、鳴澤岳は突兀たる主峰を現はして居るので、其立派さに驚いて赤澤岳かと思つた程である。黒部別山も雄大に流を掩ふが如くはびこつてゐる。午後十二時十五分御前澤通過、一時五分内藏の助澤落口着。ここで工事中の技師一行と互に挨拶して別れた。前日には未だ内藏の助澤落口の所は道もなく、従つて橋も出来なかつたのに、今日は道も貫通して瀑布の下には二間程の橋が立派に架けられて居るので何の苦もなく通り着くことを得た。これから愈々未知の秘境に入るので、此處で一息入れることにした。長次郎は早速一人先發して左岸の高さ五六間ある一枚岩を通過して、僅かばかりの河原に出て私達を磨いだ。此處は左程危険な所ではないが、足下がつる／＼するので稍不安を感じ、一寸汗が出た（一時三十分）。

河中には鼠色の巨岩横はり、水は瀬をなし奔湍をなして其間を流れてゐる。行手は兩岸の岩壁相迫りて私等を遮るが如く、又後立山側には、自然に刳れた大きな岩穴が幾つもある。神妙な感じがする。來し方を願れば暗黒色をした内藏の助澤の岩壁が河岸から直に數百尺の高さに聳立してゐる。實に此處は上流から下廊下へ入る第一の關門たる觀がある。此處迄來る途中は河幅も割合に闊々として、全體に明るい感じのする、それでゐて幽邃の氣に充ちた所のやうに思つたが、内藏の助澤を界として、谷は急に狭くなり、岩壁は高く屹立し、恰も箱の底に居るが如く、河中には幾多の巨岩蟠踞し、其間を力任せに河水の流駛する様は全く上流と趣を異にしてゐる。

いくら眺めてゐても飽くことを知らぬが、遂に割愛して一時五十分出發す。長次郎は無言のまゝ、綱を肩にして一人先の様子を見ながら私等を導いてくれる。竹次郎は相變らず竿を手にして行く／＼潑漉たる岩魚を釣り上げては喜んでゐる。金作と米谷とは親切に要心深く私等の面倒を見ながら種々戯談を云つては元氣付けてくれる。水打際の巨岩の間を飛び／＼進むこと一丁程にして右折すれば、眼界頓に狭められ、前方遙にオホタテガピンの絶壁聳立するを見るのみで、全く岩壁と奔湍との世界と

なる。暫らくして後立山側の蒼鬱たる緑の中から小流の來會するを見る、水量は左程多からず、下の方は悪いやうにも見受けぬが、上の方には大分急な所がありさうで、之を下るも中々困難を伴ふことと推察される。この邊まで來ると岩魚も大きく其數も多く、淵の中を遊び廻つてゐる。一尺位あるやうに想へた。

後立山側は赭褐色の荒々しい岩壁が逆層をなして空中高く聳え立ち、溪水はその岩壁をこびきながら流れてゐる。立山側は幾分段丘らしいものを形成してゐるので。其處がどうにか辿れる。河の落差は進むに従つて加はり、二三尺の瀑布めきたる奔湍をなすことが少くない。

内藏の助澤より下ること約一時間にして、午後二時五十分オホタテガピンの近くに達した。後立山側は相變らず岩壁の連続で、其直下は瀬をなしてゐるので、とても人間には通れさうにも見えぬ、之に對して立山側も亦岩壁を露はし、全くV字狀の峽谷をなし、其奥に黒部別山ののんびりした峯を見るのも面白い。

更に進むと高さ一丈程の逆層の壁に出遭ひ、一寸困つたが長次郎等が巧に綱を使つて安全に通過することが出來た。綱を用ひたのは此處が最初である。荷物を纏めて三時十五分出發。黒部別山は眼前に緩やかな斜面を見せながら、絶壁を川に向けてかぶさるやうに突き出してゐる。冠氏が前年此處を通過したときに紀念の署名をされたと云ふ巨岩も依然として蟠居して居るが、文字は今は全く消え失せて跡方もない。

三時三十分オホタテガピンを通過した、天氣のよいのが何よりの幸福である、こんな所まで入つて來て若し降り込められたら夫こそ如何な困難に遭遇するか計られない。長次郎等を見ると實に落付いたもので、その甲斐／＼しい働き振りには感心してしまつた。

此處から河は殆ど直角に左折して居る。進むこと十分程で、汀から十米突程の高さにある安全な土

地で、しかもカンバ、ハンノキ等の繁茂した間口七八間、奥行四五間の野陣場を見出した。それで今夜はここに泊ることにして早速その準備にとりかゝる。地均らしも終り、二張の天幕も張られて焚木等を集めてしまうと、米谷と竹次郎とは下流に釣に行く、長次郎は後に残つて炊事にとりかゝる。終日緊張した氣持ちで過した後で、かゝる幽邃な所で泊るのは誠に印象深く、今思ひ出しても其時の光景がまぎ／＼と眼に浮ぶ程である。

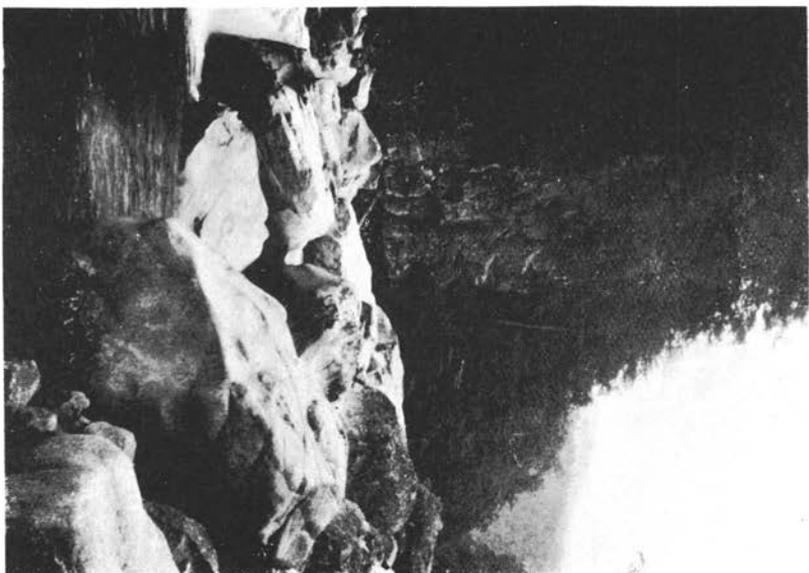
釣に出た二人は中々戻つて來ぬので、私等も河原に出て見た。前面には冠氏が鳴澤の瀑と命名した二段の瀑布が深く／＼後立山側から落合つてゐる、水量は左程でもないらしいが之を遡ることは上にもた瀑布もあつて困難に見受けられる、溪水の變化に富める有様は、見る者をして飽くことを知らしめない。

薄暗くなつてから二人は大分の獲物を提げて歸つて來た、六時夕食。下廊下の岩魚は殊に油があつて鹽焼などは實に美味である、可なり飽食してもまだ食へ足らぬやうな氣がした、谷底は暮れるに早く、今夜も上弦の月が溪水に銀波を躍らし、ヨモギ、ムラダチの褥も心持よく、大きな焚火をして明日を樂しみに九时就寢した。

八月十日。快晴。

午前四時起床。焚火で充分に暖り、熟睡することが出來たので眼が覺めても心持がよい、谷は末だ全く闇に鎖されて僅かに蟻壁の間から星屑のきらめくを見るのみである。河聲の怒號を外にしては四邊は幽寂を極めてゐる。暫く焚火の周りで雑談に花を咲かす。皆元氣であるのが嬉しい。

兎角するうちに夜はホノポノと明け渡り、人夫等も朝食の仕度にとりかゝる。下廊下の中心で清冽な流に啾／＼氣持はまた特別である。時折深緑な樹間から響き亘るピーカラ／＼と鳴く駒鳥の聲に耳を樂しませる。六時十分岩魚の味噌汁で朝食をとる。對岸の壁が高いので朝日の光は之に遮られて容易



双六谷の奥抜戸

冠松次郎氏撮影



双六谷廣河原附近

に私等の居る所へは達しない。傍の樺の木に署名して七時二十五分懐しい野營地を後に出發した。

汀に近き巨岩の間を分けて進む、後立山側の鬱蒼たる森林の下は絶壁をなして、その岸を奔流は一寸の隙もなく洗つて居る。傾斜漸く急に、進むこと約一町程で河中に特に目につく巨岩に達した。兩岸とも絶壁の廊下をなして居るが、立山側は幾分傾斜が緩やかで、少し進むと僅かばかりの残雪を見た。これから下流は一寸した砂洲をなして居るが、奔流が勢凄しく岸邊を洗つてゐるので近付き難い。一同荷物を下して架橋準備をなす。長次郎は早速綱を十文字に肩にかけて真先に進み、奔流をものともせず一問程の丸太を擔いで膝を没する邊まで進み、巧に之を岩壁に立てかけて足場とし、壁に身をへバリ付け、大手を擴げてヤモリのやうにへばつて行く、一寸他人の追隨を許さぬ所がある。すると米谷と金作とは三問程の丸太で急造架橋にとりかゝる、私等も好奇心を以て眺めて居ると、丸太の先を綱でしつかりと結び付け、夫を長次郎に渡す、長次郎が受取つた丸太の一端を岩壁の程よい凹所に固定すると、米谷の方では先づ大きな石を河中に投げ込んで橋臺を作り、その上に丸太の手前の端を載せ、二三の大石を重しとして動かないやうにする、これで第一の架橋は終はつたので、人夫は荷物を運んで交る交る橋を渡り、岩壁にへバリつき、其處にある極く僅かの棚かゝの力を長次郎が確保して呉れる綱を手頼りとして横に二問程へつり、表面の平たい鼠色の石の上に荷物を纏めてから私等を渡して呉れた。一同が渡り終ると直に橋をはづし、先端を縛つた綱を手に、流を利用して荷物を置いた巨岩に沿うて丸太を廻し、この巨岩の所に第二の架橋をなすこと略ぼ第一の時と同様な方法であつた。唯今度は少し長いので、金作が綱を張つて手摺を作つて呉れた。夫を頼みに注意して丸太を渡り、對岸の僅かばかりの砂洲に出たから荷物をかたみ代りに受取つてやり、無事に悪場を通過することが出来て一安心する。これがために一時間十五分を費し、九時三十五分又荷を纏めて進む。谷の底を歩いて居るので漸く此頃になつて日光に浴することを得た。これから汀の浅い所をヒタ／＼と足を浸しながら

ら進み、稍左折して少しの闊葉樹林の中を行くと、新越澤が鬱蒼たる緑樹の中から二段の吊懸谷を瀑となつて奔下して居るのを見る（九時三十分）。共に高さ數十米で、全く垂直に落下し、水量も相當にあり立派なものである。少し敷くゞりして、巨石が所々に散在してゐる此邊には稀な廣場に出で、荷を下して休憩した。（九時四十分）。長次郎は此處から先が壁をなしてゐるから先づ様子を見て來るといふて、六十呎の綱を持ち、四人揃つて出懸けた。

黒部川は新越澤の落口より一層險絶の度を加へ、二三間の落差をなして奔馳し、絶壁の下には縦三間横四間程の立派な釜を形成し、釜から沸上つた奔流は一團となり電光形をなして轟雷の響を立てつゝ全流は殆んど幅一間位に盛められながら岸を打つて奮躍洶騰、碎けて白泡を飛散するさま、壯絶といふも過ぎたりとはしない。それが數間にして巨岩磊砢たる間をめぐりて深潭をなし、ウネウネと渦巻きつゝ靜かに流るゝかと思へば、又奔湍岩を嚙んで流下するなど、光景同じきが如くにしてそれぞれ異つた特色を呈してゐる。何時まで見てゐても飽きることを知らない。右岸は少しの餘裕を與ふることなく水際より直立して赤褐色の絶壁を形成し、樹木などの成長すべき寸地とてもない。

左岸はと見れば私等が休憩してゐる所から少しく行くと、大きな残雪があり、珍らしいことにはそれが河原に近く雪の隧道を作り自由に人の通行が出来るので、之を潜つて更に十數間行くと、上の稍平らな巨岩の所に出で、そこから先はとても綱の助けを借りなければならぬ。ここから眺めると兩岸とも全く荒削りのまゝの赭色の壁で、數町先に黒部別山澤はアングリとあいた落口を雪に閉され、黒部別山はその向ふに鼠色の岩壁を曝露し、その頭は緩やかな傾斜をなして前方を遮断してゐる。實に岩壁と奔流との美に於て海内無双といふも過言ではない。

空は一點の雲なき快晴であるが、風がないので岩陰にでも身を横たへねば暑氣を感じる程である。右岸の赭色の岩壁からは數百の岩燕が翩翻として舞ひ上り、縦横に飛び交ふさま頗る奇觀であつた。

私等は之等の光景に見入りながら、一向に長次郎等の快報を齎さんことを念じてゐた。聽てオーイ、オーイと呼ぶ聲がするので下流の方を眺めると、人夫の一行はしきりに綱を使ひながら戻つて来る。早く様子が知りたいので行ける所まで出かけて行つて下流の様子を聞く。大分悪くなつたと長次郎の返事は餘りよくない。最早十二時なので荷物の置いてある所に戻り、お茶を沸して簡単な晝食をとつた。話を聞くと、長次郎達も大ヘヅリを通過して先年冠氏が徒渉した所を對岸に渡り、更に下の方まで行つて見たが、前年とは流れ方が變つて、一體に立山側を流れるやうになつたので、岸に沿うて行くことは出来ない。尤も彼等だけならば荷物を幾度にも分け、時間をかけて如何にか渡すことも出来るが、私等を支へるだけの十分の足場がないので、どうしても架橋の必要がある、そして夫は可成の難工事である。其上うまく對岸に達することが出来ても一ヶ所殆んど絶壁をなしてゐる所があるから、之を通過することが不可能に近いとの事であつた。勿論長次郎等も頻に相談して何とか仕末を付けたいとは云ふてゐる。私等も切角此處まで来て空しく引返すのは如何にも残念であるから、一日を要してもかまはぬ、何とか工夫して呉れとせがむ。それで長次郎等も汀に立つては四邊をねめ廻してゐるが、此邊で渡れさうな所とても少なくとも十間位の幅はある、之に架橋するには如何しても五六間の丸太を必要とする、所があたりは壁が高いので到底その長さの材料を求めることは絶望である、最後に渦巻く流を泳ぎ切ることの一方があるのみとなつたが、勿論之は云ふべくして行はれないことであつた。事ここに至つては最早退却の一途あるのみで、如何に路を取つたものかと二三の案が論議されたが、結局内藏の助澤を廻り、立山川を下ることに一決した。

協議一決した後は何程去り難くも仕方なく、最後の撮影を試み、荷物を纏めて愈二時四十五分歸途に就いた。今迄の元氣は失せて口數も少なく、足取も遅く自然と一同の氣持も減入りがちだ。三時十分岩壁に架橋した所に來た、材料が揃つてゐるので割合に早く出來たが、何をするにも張合がない

ので、冠氏も第一架橋を行つた附近にて足を滑らせ、長次郎と共に數尺落込んだ。然し別に何の障もなく、皆橋を渡り終つて前面の砂洲に出たのは三時四十五分であつた。兎に角一度通つた所であるから行程も自然に捗り、四時十分には昨夜の野營地に歸着した。此邊の景觀は幾度見返しても飽くことを知らない。此處で又一夜を明さうとは夢にも想つて居なかつたので、實に感慨無量であつた。夜食の膳に上つた岩魚はうまひにはうまかつたけれども。

八月十一日。快晴。

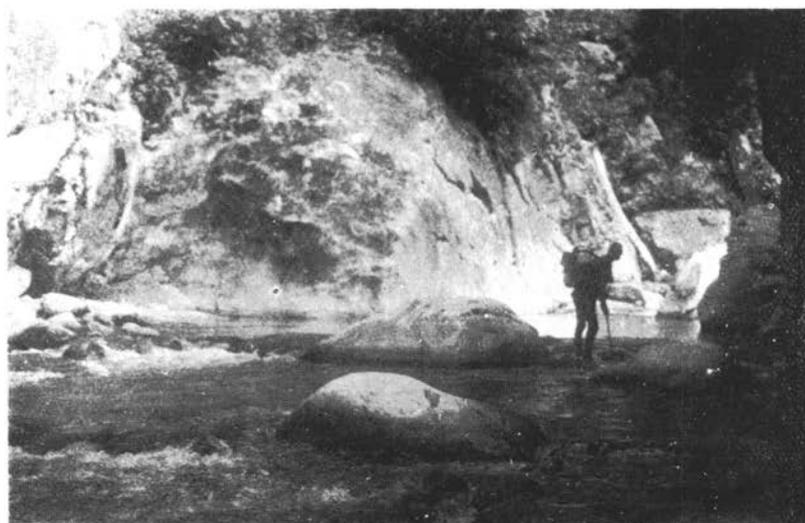
午前三時頃一度眼が覺めた。焚火が消えかゝつて冷氣を感じたためであらう。空は晴れてゐた。復うつら／＼して次に眼が覺めると谷間には薄雲が棚引いてゐたが、暫時にして快晴となつた。今日は内藏の助澤を上るので、かねての希望でもあるから昨日の引返しに較べると元氣になつた。六時四十分足取り軽く爽やかな朝の大氣を胸一杯に吸ひながら野營地を後にした。昨日通つたばかりにも拘らず、今日は又面目を新にしたやうな岩壁と奔瀉、くどいやうであるが幾度見ても全く別な景に接するやうな氣がする。綱を使つた岩壁の所も亦事なく通過した、此方から行く方が足がかりがあつて上り易いやうである。七時四十五分内藏の助澤手前の小澤に出て少憩。これまで來ると内藏の助澤手前の障壁もそろ／＼現はれて來て目的の澤も附近に通つて來たのが知れる。七時五十分出發。暫く行くと、一昨日まで道らしいものなく、相當に緊張した氣分で通つた場所も、今見れば數人の人夫が盛に道路開鑿中で、之を辿つて八時五十分内藏の助澤の落口に達し、三間程の瀑の下で少憩した。

四 内藏の助澤

内藏の助澤は會員田中喜左衛門氏に依りて廻られた事があるが、其後餘り此澤を上つた人の話を聞かない。自分は前年沼井君と内藏の助澤に泊つた時下つて見たいと思つた程で、之を廻ることには一



岳ヶ笠るた見りよ越乗部黒



影撮氏耶次松冠 下廊の近附戸抜、奥谷六双

層の興味を唆られる。此澤は地圖で見ると兩岸とも岩壁が相迫つて屹立し、非常に暗い澤の様に見えるが、落口附近から仰ぐと上に内藏の助平があるためか、右岸の大岩壁も左岸のオホタテガビンの罅壁も、上が大きく開いてU字形をなす明るい感じのする谷である。

八時二十分出發、瀑の下の二間程の假橋にて右岸に移つた。左岸は壁の下を水が流れたり、又闊葉樹が茂つたりして、この藪くぐりも可成困難らしく見ゆる故、右岸を廻ることとする。身丈程の高さのオホイタドリや樺類の間を押し分けて進む。行手内藏助平方面は愈開け、右岸の鼠色の壁も益々雄大に、左岸の罅壁は黒部川に近く急角度をなして落込んでゐる。後を願れば赤澤岳が突兀として鋸齒狀の尖峯を聳え立たせ東の天を限つてゐる。地圖に示すやうな瀑らしいものは全く無い。今は湧水期で水量は少なく、澤の幅とても五間位に過ぎないし、所々に巨岩散在して、其間を奔下する溪水は時に水晶簾をかけて中々見事である。進むに従ひ岩壁は益々豪壯となり、岩上りの練習でもして見たい様な氣が起る。落差も漸く加はり、二間程の小さい瀑ともいふべきものが所々に懸る。十時四十分左岸にある稍平らな平地に出で、少憩し晝食をとる。大分高く登つたので眺望も開け、鳴澤岳、赤澤岳が目前にのし懸るやうに聳え、遠く針木岳方面迄も望むことを得た。暑くなつて來たのでレモン水も特に美味に感じた。此處まで來る途中では所々陣竹の藪を潜りなどしたが、最早これからは左程歩き悪い所もない様に思はれ、一息入れて後十一時二十分に出發した。足場のよき所を拾ひつゝ、數回左右に徒渉して十一時五十分以内藏の助澤が左右から合流する出合に着いた。闊葉樹の茂れる間を綜々として流れ來る溪流を前にして雄山、大汝等の殘雪が日に輝くのを望むも氣持よい。これより右に折れて稍行けば空澤となり、其處の木影に少憩した、午後十二時十分で、暑氣を覺ゆること甚しく、傍に湧出する清泉を掬びて口にすれば味甘露の如く、手を水中にしばしも入れて置けぬ程に冷い。

前年内藏の助平に來た時は、出合から左折して少し行つた河岸に天幕を張つて泊つたことなど回想

しつゝ、十二時三十分出發して空澤を辿つて上つた。長次郎等も此邊は熟知のことゝて一同全く暢氣になり、戯談なども言ふやうになつた。

黒部別山乗越に近づくに従つてオホイタドリ、陣竹、樺の類進路を遮り、傾斜も加はつて數回の少憩を餘儀なくされる。内藏の助平は眼下に青々と青壘を敷いたやうで如何にも原始的の平原のやうな感じがする。二時四十分乗越着、時に少し雲の往來はあつたが眺望を妨ぐる程ではない。此處から見た劍岳は立派なもので、八つ峯附近は殊に豪宕を極めて居るが雪量は大分少ないと思つた。ハシゴ坂を下る途中輕き食事をとり、三時十五分出發した。この邊は雪なく、前年一面の雪田をなしてゐた時のことを想へば、何となく別な所を歩いてゐるやうで、所々の奔湍も稍通過に面倒である。

三時四十五分劍澤に出て左岸を辿り上つた。此附近は特に記す程のこともなく、平凡な雪の景色である。四時眞砂澤の合、これより雪溪を上り、別山乗越北側の登山小屋に着いたのが六時十五分であつた。登山者に遭ふのも數日振である。

この小屋は間口二間、奥行三間位で、この年の六月大阪毎日新聞社で建築したものであるとか聞いた。劍岳登山には恰好な小屋であり、殊にスキー登山には好適のやうに想はれたが、冬は雪だまりのため用をなさないことは遺憾である。

満月に近い月は一瞬の雲影なき空に皓々と冴え渡り、別山や鶴ヶ御前の殘雪その光に輝き、眞黒な劍岳は靜に眠れるが如く、遠くは白馬連山、近くは爺、鹿島槍等後立山山脈の諸峯も糶糊たる姿を顯はしてゐた。この良夜を空しく、小屋内に過すも惜しく、獨り屋外に佇立して靜に山上の夜景を楽しんでゐたが、體も次第に冷えて來たので、十一時飽かぬ名残を惜みつゝも、久振りに床の上で寢袋に入つて睡つた。

五 立山川へ

八月十二日。快晴。

今日は山にある最後の日だと思ふと後髪を引かれる思である。朝からの好晴に他の登山者も狂喜して思ひ思ひに出發して行く。私等も今日は立山川を下り伊折まで行く豫定なので、左様ゆつくりも出ず、午前六時二十五分に小屋を出た。當面の劔岳は突元として黝色の岩壁を現はしてゐるが、夏も終に近い故か雪は極く少量である。頂上附近は既に旭光を浴びてゐるが、長次郎谷のあたりは未だ冷く仄暗い趣を呈してゐる。残雪を踏みながら徐ろに辿つて行く。雪の途切れた所にはツガザクラやハクサンイチゲ等の散見するのも可憐である。鶴ヶ御前附近には未だ相當に雪がある、毛勝連峯の眺めも悪い心持はせぬが、何となく物足らぬ感じがするのも止むを得ない。七時二十三分別山乗越着、遠近の山は手にとるが如く見え、立山及び薬師岳の連山、黒部五郎岳、之を越えて遠く白山、富山平原より日本海、毛勝、劔、白馬等、此處から見得る山で目に入らぬ山はない位である。遙か下の室堂から出て來る登山者の姿も指顧の中にある、弘法茶屋も見えた。ゆる／＼休憩して七時四十五分出發、電光形の細徑をヒタ下りに下つて途中から大日岳方面に連る尾根に出で、八時二十分室堂乗越の數十間手前から少し急だが尾根を離れて立山川に下り込んだ。奥大日岳から落下する二條の雪溪は雄大で心持がよい。行手は明るい感じのする谷が所々に残雪を見せて左右の山に包まれながら屈曲してゐるのが眺められる。荒つばい黒部の谷を見馴れた目には非常に優しい感じがして氣も樂である。少し下ると傾斜が可成り急に、而も落石がありさうなので、僅かの間ながら長次郎が足場を作つて呉れる。夫を成るべく石を落さぬやうに足下に注意して進むと直ぐ雪溪となり、傾斜は緩くカンジキを用ふる必要もなく、唯時期が遅いので所々に割目を生じてゐる。九時雪溪終る。其處にダケワラビが簇生して

ゐるのを人夫が山の土産だと云ふて歩きながらとつて呉れた。澤は水量が少ないので邪魔な大石を避けながら河床を進む。右には劔の亂杭齒のやうな峯頭が谷間を覗いてゐる。九時三十分、手入れがしてある河沿ひの歩道に出たとき、下から上つてくる四十人ばかりの團體登山に出會つた。聞けば今朝未だ暗い中に伊折を出發したのだとの事、中には十二三歳の少年も交つてゐた。今日の中に室堂まで行くのだといふ。此處で一息入れ、九時四十分出發、路幅は三尺位で誤り易い所には道標さへ建て、あり、それが不調和でなく山道らしいのが嬉しい。午後十二時十五分左岸の河原の巨岩の側に荷を下して食事をした。竹次郎は連日の氣苦勞と暑氣のために元氣衰へ、時々頭痛を訴へる。自分も昨夜來少しく腹工合が悪くて氣力が無い。ゆつくり休憩して一時四十五分出發する。水量は増して徒渉は困難となつたが、その代りに立派な橋が架けてあるので、何等の困難なく、知らず／＼の中に道は渉る。闊葉樹林の中を抜け、五間程の橋を渡ると眼界頓に開け、右の方から白萩川が合流する（二時三十分）。其處はバンバ島と呼ばれてゐる。水量は略ぼ伯仲し、緩くうねる流の奥も人を惹付ける深さがある。

もう此處まで下ると何となく人臭く、里へ出て來たやうな氣がして仕方がない。今度の旅もはやここまで來れば終を告げたのも同様であるからさういふ感じのするのも無理ではあるまい。勿論傍に鑛山の水力電氣の發電所があるが、人は居ないやうであつた。

バンバ島から下は道も全く改修され、幅も三間位で荷馬車も通るし、平地を歩いてゐるのと異らない。劔岳の全容が望まれる筈であるが、午後になつて雲が出たため姿を現はさなかつた。三時二十分小又川、三時五十分大熊澤を経て、八月も中旬に近づいたとはいへ未だ日も可成り高い午後五時に伊折の酒井松之助氏方に着いて一泊した。此道は翌大正十四年第二高等學校の學生が長次郎を案内として辿つた時には、水量多かりしため途中三回の架橋をなし、地獄谷まで二日を要したといふから、水

五
郎
澤



上
廊
下
の
入
口



上
廊
下
の
入
口



上
廊
下
立
石
の
上
手



冠
松
次
郎
氏
撮
影

量多きときは一日では一寸困難と思はれる。

八月十三日。快晴。

平地は未だ暑さがひどいので、涼しい中にと早起して午前三時二十分に出發した。星光天に満ち風身に泌みて心持宜しく、夜のほのぼのと明る頃、眠からさめた劍岳、大日岳の連山を懐しく眺めた。

七時上市驛に着き、少憩の後來ん夏の再舉を約して長次郎等一同と別れ、鐵路直江津を経て歸京した。

(大正十五年五月二十七日稿)

雜 錄

○黑部川の概観

冠 松次郎

森林が濃密であり従つて溪谷の幽深である大井川や、遠山川の谷は、その上流に悠大なる山岳のうねり、長厚なるその重錯をもつてゐるやうに、溪谷も亦甚だ闊大で、古生層の岩床の上を横溢してゐる水の流動は、私等に如何にも遠く奥深い感じを與へる。

然しながら、黒部川を跋涉して、その最も偉大なる廊下の狭谷に入つて見ると、岩壁の露出が廣大である爲に、樹木は僅かにその皺折に添ふて疎生してゐるのみで、森林の豊潤な處があつても、それは岩壁の雄麗を併せて更に光彩を放つてゐるやうな傾きがある。

源流地の山々は岬々として溪谷を壓して高く、その峽間を流るゝ溪水は、花崗岩の河床を穿鑿して、流は幅を以て横溢することを得ず、却つて堅岩に衝突し或はこれを深貫して、奔流飛川となつて、鬱勃たるその力を放散してゐる。

森林の豊かな大井川の谷は、近來大規模に伐採せられ、その本流の壯觀も、支流の美景も、今や全く墮落沈淪の危機に瀕してゐる。然しながら幸ひに我が黒部川は、その峻嶮によつて却つて溪谷を保護し、今に到る迄殆ど原始の姿を保存してゐる。それが我等のやうな谷好きのものに珍重せられ、熱愛せられてゐる主因の一つになつてゐる。

大井川、遠山川の悠大と、黒部川の雄峻とは、殆ど正反對の溪趣を爲してゐるが、それが却つて私等の自然美に對して渴望してゐる種々相を開展してゐるので、私はどちらも好きである。

私は初めて黒部川の下廊下へ入る前に、岩壁の壯大を豫期してゐたが、それと同じやうに峽谷の暗さをも想像してゐた、然しながら入つて見て驚いたのは、この谷が非常に明るく、光りに満ち満

ちてゐることであつた。勿論兩岸の山側が急峻であり、高く削立してゐる爲に、日の射し込むことが遅く、反對に日の没することは早い、それにも係はらず、岩壁の露出の高大なこの川筋は、日光を遮るものが少なく、光線は麗岩に反映し、奔川の面を射り、その底にまで屈折浸透して華々しい溪趣を呈してゐる。

複雑な層峰や岩壁の、光輝と陰翳の變幻、渦行し、沈静し、漲溢して行く水の姿態など、到る處明瞭に吾人の前に卷舒せらるゝ。何物も隠さずさらけ出してゐる赤裸々な谷、その堂々たる男性美の發露は、幽邃と云ふよりも寧ろ豪快の氣にみちて、どこまでも明るいその底に、覗ひ知れぬ自然の技巧、その深奥と神秘の傑作は含蓄せられてゐる。

明るいら然し奥深い谷、それを私は黒部川に於て初めて見た、それはクラシカルやロマンチックの美しさでなく、寧ろ自然の種々相を明かに啓示してゐるナチュラリズム風貌を備へてゐるものと思へた。

私はもう一つ黒部川の大なる特色を加へたい。この川は源流地から約三十里を日本海に至る迄、殆ど絶景と美觀との連続であつて、少しの弛怠がない。その山勢の極まる處、堅岩相迫つて峻高壯麗の廊下を形ち造り、その峽間に壓縮せられた溪水は驚くべき落差をもつて奔落して行く。

然し兩岸の山脚が緩やかに相接する處は、積翠漲り、白砂を點綴し、高原連亘して、優麗闊大なる大河の趣きを呈してゐる。この剛軟の對照の美はずばらしいものである。

古來自然美を賞へらるゝ多くの溪谷は、幾ヶ所かの壯麗境をもつてゐるが、それは部分的で随分たるんだ風景をも相交へてゐるものが多い。然し變化に富んだこの谷筋は、幾度入つても、どこを見ても、見盡すことが出来ない。飽きると云ふことを覺えない程の複雑な、そして緊張した風景を吾人の前に展開してゐる。

二度は一度よりも、三回は二回よりも、益々興味が沸いて、曾て氣がつかずに過ぎた、想ひがけないデイトルが私等の目を喜ばすことが多い。

それだから飛脚のやうな山旅をせずに、この溪谷を中心にして、天幕生活を営み、ある時は上廊下へ、或時は下廊下を探り、支流の美しいものを溯つて、この谷を圍繞してゐる山々を訪ねたならば随分に楽しい印象の深い旅情にひたることが出来ると思ふ。

私は以下黒部川全流に亘つて、自分の覺えてゐるその溪趣の大體を書きつらねて、谷好きの人の参考に供したい。

源流から立石まで

黒部川の源流地は、日本北アルプス中、最も僻遠深奥の境を爲してゐる處で、東は鷲羽岳、蓮華岳の高峯を以て信州北安曇郡と界を接し、南は同じく蓮華岳と黒部五郎岳、上ノ岳の連嶂を以て、飛騨國吉城郡に隣してゐる。

僅か數歩の差で、國境山稜の水は一つは高瀬川の源を爲し、遠く信濃川に入り、一つは双六谷の幽谷を繞つて高原川に合し、やがて神通川となつて日本海に没して行く。

高瀬川、姫川、神通川、常願寺川、早月川等の

流域によつて劃られてゐる黒部川の水も、鷲羽岳の西側よりその源を發して、蓮華岳、祖父岳の間を落走すること里餘、雲の平から入る祖父谷、黒部五郎岳から落ちる五郎澤が合流する邊は、随分廣闊な高原になつて、その間を流るゝ溪水は可なり悠大な趣をなしてゐる。

そこは上平カキヒラ、出水平（小島鳥水氏日本アルプス第四卷）或は芋平（飛騨史壇第八年第四卷）などと呼ばれてゐる處でこの高原をさし挟んで、祖父谷の方からは、上の岳や黒部五郎岳が、五郎澤の方からは、雲の平、太郎兵衛平が、美しくい森林の集團の上を、一面の高原の上に、悠々として高く圍繞してゐるのが見える。

この平を過ぎると、川は右へ緩やかに曲走して行く、その流域は頗る闊大で、壯麗な岩壁にとり圍まれたヤクシ澤の水が落合ふあたりも、可なりな廣さをもつて流れてゐる。それから數丁の間は、谷幅が大分狭くなつてくるが、まだ溪流は廣く緩く流れて、ヤクシ澤下手の小澤がヤクシ側から入るあたり迄、尙右へ右へと曲折して行き、そ

れから數十間先で、谷が急に左に折れると、その下半町程の處で、山勢が俄然相窺まつて、兩岸から赭色の岩壁が高く重なり合ひ、川幅は僅かに十數間に縮められてゐる。陸地測量部五萬分ノ一地形圖に、ヤクシ澤の下手で初めて兩岸に岩壁の印しのある處で、この門のやうに狭まつた岩壁が上廊下の入口をなしてゐる。

右岸の壁を川近くでへッリ、左岸に徒渉してその壁の棚をへつて川へ下ると、入口で驚かされた程でなく、川勢は割合に穩かに、積もあり、淺瀬もある、それから三時間近くは徒渉や、積傳ひや、低い壁へツリをして、樂に降つて行くことが出来る。間もなくヤクシ側から小澤が川近くで瀑になつて落ちてゐる。

オクノタル澤の出合近くになると、又山側が迫つて廊下状となり。左岸の壁傳ひや、棚を行く様になる。この邊は上廊下で岩壁の最も美麗な處で、花崗岩の縦横に削鑿せられた節理と、洗ひ出された岩の肌の色が美くしい。

オクノタル澤の出合の處が下流に向つて可なり

廣くなつてゐる。三角洲があつて流れは二つに分れてゐて、水は以前には下手の方から流れてゐたのが、今は上手のもの、みから本流に合してゐる。三角洲の丘の横に、巨岩が自然にのしかつて、その下に五六人は宿れる様になつてゐる。地が乾燥してゐるので、泊り心地がよい。この巨岩があるので、を立石と云ふのらしい。

ヤクシ側は崖側が急峻で、オクノタル澤の附近は稍廣くなだらかである。立石の岩小屋の前から赤牛の一角が壯大に見える。

註。黒部川の源からヤクシ澤落口迄約半日、黒部乗越からヤクシ澤落口までは四時間弱、ヤクシ澤落口からオクノタル澤の出合立石まで半日行程である。

立石からヤクシ直下カールの澤の落口まで

立石から又一時間行程は川通しを行ける。下流に赤牛の一角、スゴウ乗越、越中澤岳の一角が見える。こゝからヤクシがつきる近くまでは赤牛側の方が樂で、自然その方をのみ辿るやうになる。

立石から一時間程で山側の小迂回を一ヶ所、勿論下は廊下で通れない。それから谷へ降つて少し

行くと、今度は崖側を三百米突も上らなければならぬ。その下は深邃な廊下をなして、遙か脚下に折れ曲つてゐる削壁の底を、溪流は藍靛の流に白泡を漲らして疾走してゐる。

赤牛側から出る第三の瀑、最も大きい瀑布の中段を横切つて、山側を廻り、壁を綱に依つて黒部川に降り、川の中を行くと、この邊が一寸悪い、やがてヤクシのカールから落ちる澤の二町程上手から、兩岸が立壁になり、川は可なりなトロとなつて流れてゐる。壁を上ると云ふことが容易でない爲、川中を赤牛側について行く内、赤牛側が通れなくなり、臍を没する位深い徒渉をして、漕をヤクシ側に横ざり、その壁について十數間も降り、赤牛側に歸り、間もなく、ヤクシ下のカールの澤の落口に出る。この徒渉は水の大きい時には可なり難澁である。

こゝでも赤牛側は懐が廣くなつて、墜石の積がたゞいてゐる。右岸の行づまりである。こゝからヤクシ側へ移らなければ、又廊下つゞきになるので、赤牛側は暫くすると通過が不可能となる。

註。立石からカールの澤の落口まで約半日を費す。

カールの澤の落口から東澤落口を
經て平小屋まで

私はカールの澤から半時間程、岩壁の皺折について降つて行つたが、雷雨の爲に戻り、行程の都合で、赤牛岳の方へ登つたので、これから東澤落口までを歩いてゐない。

大正九年七月末に溯られた、澤本千代次郎氏の行程を参考にさしてもらつて、その部分を挿記する。

ヤクシのカールの澤から下手、約二時間行程は、廊下が深い爲、左岸ヤクシ側に移つてその崖側を迂回しなければ下降が出来ない。降つた處は、赤牛岳から北微西に派出された尾根の三角點二二一〇米突の處から、正西に出てゐる支尾根の、黒部川へ突き出てゐる突端附近になる。この間は上廊下で最も水の深い、壁の狭く高い處で、實に立派な廊下をなして、前記ヤクシのカールの澤の上手のものと、その上手のものと、川通しを通れないものが三ヶ所ある譯で、その内で最もこ

れが險惡であると思ふ。

この廊下から下流は、最早山嘴の迂回は殆どなく、川通しを壁傳ひや徒渉をして行けることとなる。然しながら壁は低くとも谷は矢張廊下状を爲し、一時間餘も降ると、藥師岳を上流に仰ぐ位置になる、川が右に折れてゐる處の左岸に礫があり野營に適する。

註。ヤクシカールの澤より約半日を要す。五萬分一圖 兩岸に崖の記號のある西端の邊。

廊下澤 前記二二一〇米突の三角點を有する尾根の、正北の所へ向つて、廊下乗越から落ちてくる澤の落口までは三十分弱で達せらるる。

廊下澤から口元のタル澤—赤牛岳から北方へV字形に降つてゐる二つの尾根の間から出る澤—迄は壁が高く谷が迫つて、こゝ數町の間は黒部川は真直に流れ走つてゐる、この間は約四十分行程で、口元タル澤から東澤の落口までは、谷も相當曲折し、岩石も雄大で、右岸赤牛側は絶壁が中々高く、所々小流が兩岸の絶壁から瀑となつて、本流に瀉下してゐる。

東澤近くなると、左岸から澤が一つ入り、又右岸から落口が小瀑布を爲したものが入つてゐる。(シリナシ澤?) 口元のタル澤から、東澤の落口迄は二時間を費やす。

東澤の落口は可なり廣く、野營地には適當であるが、非常に寒い處である。こゝから平の小屋迄は、今では右岸に道がつけられてゐると云ふことであるから、破損してゐない限り、一時間あれば達せらるゝと思はれる。

然し道が手入しなくては、右岸より寧ろ左岸の方が安全であると思ふ。これは平水の時には四時間、水の少ない時ならば二時間弱で樂に達せらるる。落口の下で二三回徒渉をして左岸に添ふて行き、オクコビキ澤の處で、この澤を少し登り、小さな迂回をして川へ降れば、それから殆ど川通しを、河原の上を行き、口元コビキ澤を過ぎ、越中澤の出合近くになると、平の籠渡場の鐵線が見え、間もなく平の小屋に着くことが出来る。

オクコビキ澤落口の下手から、溪谷は更に闊大となり、礫は原のやうに續いて、川楊の集團が川中

を並木を爲して連らなつてゐる。顧みると赤牛岳は、上流の幾多の尾根の後から胸を突き出して、下流の緩傾斜の尾根の上からは、立山本峯や、黒部別山が悠大な姿を現はしてゐる。今迄廊下の峡間をのみさまよつてゐた者の心身は、急に開放せられて、思ふさまに壯快な、光りに満ちた氣分に浸ることが出来る。

註。前註の終りの處から平の小屋迄は一日行程とす。

黒部川の上廊下は、下廊下の如く連續して壁は高くはない。數百尺の斷崖をなしてゐる處もあるが、概して數十尺から百尺前後の壁が、川近くに絶壁を爲してゐる。それが洗ひ出された花崗岩の美くしい壁になつてゐる處も、赭岩の累積されたやうな壁で溪谷に差し迫つてゐる處もある。そしてその上は鬱葱とした森林、樺、唐檜、クロベ、落葉松などが密生してゐる。廊下と云ふも、溪谷が全部廊下を爲してゐるのでなく、溪流の曲折してゐる處、山勢の相迫つてゐる處が、立派な壁つづきになつて、流水は愛らしきトロとなり、淵となつて淀んでゐる。兩岸が緩やかな川幅の廣い處に

なると、思ひがけない程呑氣な谷涉りを續けて行ける、山脚相接してその肩骨相摩するやうな處を僅かに通過し終つて、俄然溪谷が明るく闊くなり、南面が打ち開けて、赤牛岳、越中澤岳、薬師岳などの一角を高く天半に望むとき、その氣持のよさは格別で、眞に天空開豁と云ふやうな、氣分を味ふことが出来るのである。

平の小屋から内藏の助澤落口まで

『平』附近は當今は舊の面影は全くなくなつて、低い頑丈な小屋は、大きな二階建のものと建替へられ、周圍も廣く刈りひろげられ、今では籠渡の傍に橋が架けられたと云ふことである。小屋の横に出來た日電の歩道を行くと、日本電力の小屋場の前に出る。それから廣い磧に下り、中の谷の落口の方へと横ぎつて行くと、右岸後立山側の山坂の上から、針木岳、スバリ岳に連らなる天上が、岩壁や偃松の斜面の上に頭を並べて聳えてゐる。中の谷の手前から後立山側に三十數間の釣橋が架けられて、その方の崖側を歩道は元ザクボ、小スバリ澤を横ぎつて、スバリの壁の手前まで續き、



赤牛岳側よりのつる
澤の瀑



薬師岳中下央部の上廊下



薬師岳カルクの落口



木挽澤落口附近の黒部川



奥のルタ澤



薬師岳の下廊下

冠松次郎氏撮影

御山澤の落口の上手に向つて、又四十數間の釣橋がかけられてある。御山澤の右岸の落口からこの澤を一町程上ると林が切り開かれた平な丘が出来てゐる。そこは曾て日本電力の小屋場にあてられてあつたので、野營地によいが、御山澤落口の左手にある本流の傍の、美しい白砂の上に天幕を張つたならば、更に壯快な泊場が出来る。

御山澤の落口からは立山東面森林の上に、雄山、大汝、富士折立が鮮かに見られる、立山本峯が間近く、立派に見える處は黒部川中でこゝより外にはなく、野營地としてもこゝ程氣持のよい處は黒部全流を通じて恐らくあるまい。

平小屋から御山澤の間は、黒部川では最も快闊明媚な景趣をもつてゐる處で、兩岸から川に向つて緩傾斜の尾根が幾重にも集まつてくる。廣い流域を隨所に積が續いて、花崗岩の分解された白砂の丘には、川楊が美しく茂り、浮島のやうに川中を點綴してゐる。上流に赤牛岳や木挽山が聳え、中の谷から下の方へ、川一杯に赤澤の峻峯が乗り出してゐる。この間の落差は著しくなく、川

瀬は至極緩慢である。

御山澤の落口から一町近く上にある丸木橋を渡り、山側の平坦地を歩道について行くと、對岸から大スバリ澤が入り、立山側から小澤が二つ落ちてゐる。一しきり道は積と汀を行くやうになり、又山側を降つて行く内、御前澤の落口は瀑の如き奔流となつて黒部川に落下してゐる、水量は御山澤のよりも稍少い。

道は左岸を通じて美しい森林の間を行く。御前澤の落口前後から、黒部別山の大大テガビンの岩峯が赭黒色の斷岩を重ねて、黒部川に向つて薙き込んでゐる。

谷は赤澤が入る附近から、傾斜を増し、道は漸次に高所につけられ、兩岸の岩壁の露出が著しくなる。森林の美しいのは赤澤の上流迄で、追々樹林は影をひそめ、岩壁の雄大がそれに代つてくる。

右上に赤澤の奇峭が叢立して、下流に當つて黒部別山は全容を擴げてゐる。陸地測量部の五萬分の一の圖にはこの邊の黒部本流に瀑布の符號が入

れてあるが、それは誤りである。

遙か下方で本流が急に右折して、その左岸の凹角から内藏の助澤の水が瀧の如くに躍り込んでゐる。

赤澤の壁 赤澤岳の山側は直立數百米突の大岩壁を屏立して、左岸丸山側の大壁と共に下廊下の關門を扼してゐる。

道は丸山側の岩壁に沿うて爆破によつて付けられてある。道の無かつた時分と違ひ、今では容易に内藏の助澤落口に出られる。

註。平から内藏の助澤落口まで約四時間。

これを分れば、平から御山澤迄一時間半、御山澤落口から御前澤落口迄一時間、御前澤落口から内藏の助澤落口迄は一時間餘。

然し平から内藏の助澤落口の間は、川が穏かなので、道によらず、川通しを行つても一日か、れば樂に行ける。この方が谷の景色が遙によく、谷渡りの面白味を充分に味ふことが出来る。

内藏の助澤落口から黒部別山澤落口まで

内藏の助澤落口から急に右折してゐる溪流は、下流一二町の處から又大きく左折する。其處で後

立山側から小澤が一つ入つてゐる。右岸の岩壁の立派なものと、川中に點在してゐる巨岩の雅趣に富んでゐること、川床が急激なる傾斜をもつてゐる爲、流水の動搖が華々しいことなど、内藏の助澤落口の上流よりも溪谷は更らに雄大な趣を爲してゐる。

溪側の道はやがて又林叢の間に入る。谷筋は右に曲走して又左に廻り落ちて行く。對岸から鳴澤の落口が二三丈の瀑となつて入つてゐる。その邊で、榛の森林の中を刈り廣げられた小平地に出る。

榛の平の小屋 こゝまでは内藏の助澤落口から三十分にして達せらるゝ、然し川通しを行くと三時間餘を費やし、二ヶ所程ロープ場がある。私はこの小平地を榛の平の小屋場と名づけた。

道はやがて又登りとなり、林叢を脱して岩場の上に行く。その長さは一町餘ある。岩壁の爆破によつて道を開いてあるので、曾て川中を下つたときこの下で二度程架橋をした難場であつた。

新越の瀑 この岩壁を通過すると降りになり、

黒部別山下の大窪地へ出る。こゝには残雪が夥しく、九月始めになつても未だ解けつくさない。丁度この對岸に新越澤落口が直立十數丈の瀑布となつて、峻高の岩の割れ目から落下してゐる。

新越の壁 この瀑の下手の壁は直立二百米突を越え、その稜角を仰ぐと天柱の如く聳立してゐる。内藏の助澤落口の前に削立してゐる赤澤の壁と、この新越の壁はこゝまでの内で最も特筆すべきもので、岩壁の壯麗は重に後立山側にある。

内藏の助澤落口の前後から急になつた川床は、ドン／＼陥没して大タテガピンを廻る時分から新越澤落口附近になると殊に甚だしく、黒部川は新越の大壁の直下で、その全流が僅かに一丈程に狭められて、流水は噴煙の如く弧状を爲して奔騰してゐる、恐らく全黒部川を通じて最も狭い流れを爲してゐる處と思ふ。

日電の歩道はこの窪地の處で止まつてゐる。この下流は後立山側も、立山側も、壁の傾斜は暫くの間緩くなり、窪地がつきて、數十間程大石の間を行くと、大ヘツリの嶮が始まる。

大ヘツリ そこは黒部別山の急峻な山壁が、川近い所で稍澁滞して、約二丁の間高低緩急とりつぎの壁となつてゐて廊下中で最も長いトラヴァースである。そこをロープを用ふること數十回約三時間にして通過し終ると、黒部別山中央部直下の大屏風岩の處で、前進を遮られてしまふ。

廊下の徒渉點 丁度その下が美しい靜流になつて、對岸に徒渉が出来る。下廊下唯一の徒渉點である。

徒渉を終ると砂利洲になり、それから石の丘の棚を廻つて行くと、美しい白砂の敷かれた數十坪の丘へ出る、野營の好適地でもうそこは後立山側になる。

大屏風岩 黒部川を隔つて削立してゐる屏風岩は、雄麗なる赭黑色を爲し、その上方は黒部別山の三分の一位の高さに達し、菱形に尖つてゐる。

その頭の上に同じく楯のやうな、壁が重なり合ひ、稜々として黒部別山の頂上に迫つてゐる。

黒部川の水はこの大壁の方へ傾いて蒼々として流れてゐる。もうこゝまで入ると全く岩壁の世界

で、木の茂つてゐるのを見るさへ珍らしい。上流には赤澤の峻峰が見えるが、下流は壁に遮られて遠望が出来ない。

黒部別山澤 野營地の丘から二町程下で、右に折れ曲つてゐる所で、壁がガツクリと口を開いて、左岸から黒部別山澤が薙き込んでゐる。そこから下約四五丁の間は谷筋は全く通過することが出来ない。兩岸が立壁續きで、流は激しく非常に深いからである。

赤ムケの壁 後立山側はこゝで北方に向つて一面の赤ムケになつてゐる川に向つて高さ數百米突の障壁が立てつらなつてゐる。この附近は下廊下の中心地點で流水も岩壁も實に立派である。

註。内蔵の助澤落口から、この野營地まで半日を要する、然しその二分の一近くは大ヘツリの險で費す。

黒部別山澤落口より下のタル澤の落口附近まで

これは廊下での大迂回路である。黒部別山澤落口から下は降ることが出来ないので、野營地から石の丘を戻り徒渉點の所へ出て、それから右岸に

ついて川縁を十數間も上ると、一ヶ所とりつける岩壁の割れ目がある。水の少ない時には容易にこの割れ目から上ることが出来る。然し水の大きい時には相當の準備を要する。

この岩の罅隙の中を十數間も匍ひ上り、右手の壁へ綱で攀ち上つて暫く行くと、藪の中に入る。

傾斜は急峻で途中二ヶ所程ロープを用ゆる。それから二時間程遮二無二登りつゞけて、この尾根

(岩小屋澤岳支尾根の二〇六七米突の三角點から西北に派出せられ黒部別山中央部に降りてゐるもの)の一七八〇米突程の脊梁の棚に出る。それから尾根の南側について一九五〇米突位の處に上ると、大正十四年七月につけられた、東信道が新越澤の方から登つて來てゐる。私等は二〇六七米突の三角點迄登らずに、その道に従つて、三角點から北微西に棒小屋澤落口に向つて落ちてゐる尾根上を行く。一八〇〇米突附近で道は棒小屋澤の方へ落ちてしまふので、私等はそれと分れて尙暫らく道のない尾根上を辿る、この附近から壯麗なる立山本峯の姿、岬々として黒部別山の脊梁の上

胸をつき出してゐる、劔の雄姿がよく見える。三角點西北にある澤、下の垂澤（これは名のない澤であるから假に名づける）を避けてなるべく、その澤近くの山のよささうな處を選び、（勿論道は全くない）黒部川へ降り、下の垂澤落口近くまで溯ると、徒渉點からこの澤の落口に到る下廊下の中心地點である、最も岩壁の高大な處を略ぼ見盡くすことが出来る。一部は前記の尾根上から、一部は下の垂澤落口附近から。

註。この行程は最も不便な處で、黒部別山澤落口即ち徒渉點附近から下の垂澤の落口附近迄、途中では全く水も雪も得られない。二〇六七米突三角點の下の東信道の處まで強行半日、それから下の垂澤落口附近の本流迄同じく強行半日を要する。最も長い困難な行程である。

下の垂澤落口から廊下の十字峽（棒小

屋澤劔澤の落口）まで

下の垂澤落口から四十間程下手には、狭いが巨岩に包まれた積があるので、兎に角野營をすることが出来る。この野營地から右岸について約三分で岩壁が急になり、その下一町程の處から全く下行することが出来ないので、僅か二町程の水平

距離であるが、崖側を攀ぢ登つてこの難場を避けなければならぬ。前日降つて來た草崖にとりつき、それから急峻な登りを反對に、下流の方へと登つて行き、下の岩鼻を分けるやうにして川へ降るのであるが、この降りには下廊下中で最も急峻なもので、ロープに頼つても、尙ほ不安定を感ずる場所があつた。

降り切つた處が、美しく闊々とした積になつて、澗流は川中に蟠つてゐる巨岩の廻りを、左から右へと半圓形を描いて蛇行してくる。下流を見ると五六十度程の角度で、兩岸から落ちてくる岩壁がV字形狀を爲したその上に、仙人山の岩尾根が三つの隆起を連ねて聳えてゐる。

廊下の廣河原 この邊は下廊下中最も廣い河原を爲してゐるので、私等はこれを廊下の廣河原と名づけた。

こゝから下手になると壁は著しく低くなる、又暫くの間、石の間、水の中、壁へつり等をして、右へ緩くエグれて行くと、川の折れ曲つた角が積になつて、可なり廣い砂地の先を巨岩が狼藉とし

て、暫くの間岸邊は岩壁つゞきになつてゐる。

この角を曲つて、稍高い岩壁を横に廻ると、崖側は、又右から左へとくねつて行く。この積の角から、次の積のある角までが、下の垂澤落口から、棒小屋澤落口までの間中での難場で、私等が溯行した時にピトンを用ひた處である。

次の積に辿りつき、上流を顧みると、黒部別山の北峯の下部が、屏風のやうに築き上げられ、その山壁の上に、様々な岩峯をつき出してゐる。その左手に岩小屋澤の支尾根の突端が、將棋を立てたやうに削立して、べつとりと鎧はれた針葉樹の間を、山の地肌が無残にも赤く剥け出されたのが如何にも壯烈な感じを與へる。

丁度この積まで、下の垂澤下手の積を加へて、川の右岸の節になつてゐる處に、積が四つあつた。そして走向は、五萬分一地形圖の如く、大體北方を指して流れてゐる。

もうこゝまでくれば、さしたる難場もなく棒小屋澤劍澤落口の四丁程上手の神潭迄、約一時間半にして達せらるゝ、然しながら、神潭の上手迄下

ると、私等はそれから又川通しを降ることが出来る。來ない。

神潭 岩壁に圍まれた、函のやうな深いタルの水が、右折して流は急激に落ちて奔流となる。兩岸から突き出てゐる岩の門で狭められた、その下手に於て、直徑約二十間の美くしい淵となつて擴がつてゐる。そこが神潭と名づけた處で、その潭を壺のやうに丸く取り圍んでゐる花崗岩の美くしい壁、その上に茂つてゐる森林、谷一杯に差し込んでくる白差の反映を受けて、鏡の如き深淵は凝つて紫水晶のやうな光輝を放つてゐる。

この淵の三四丁下で、谷が又著しく狭められて、その上手から劍澤の水も、棒小屋澤の水も、本流を挟んで躍り込んでゐる。然しそれは落口が狭く壁が隙間ないやうにつめられてゐるので、上流からは見定めがつかない。

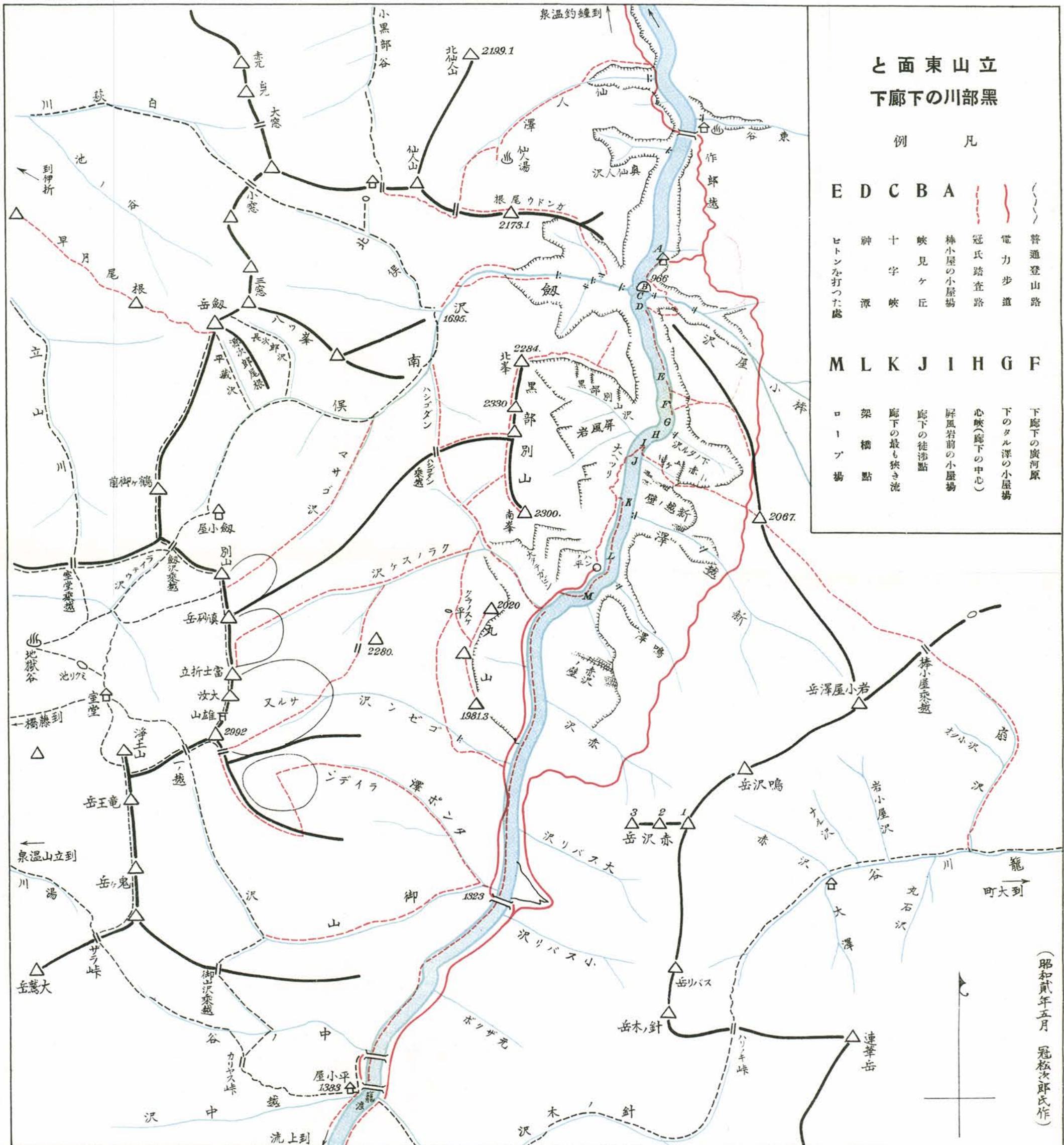
川通しを行くことが出来ないで、私等は棒小屋澤と黒部本流との間に差し出てゐる尾根の端を迂回して、棒小屋澤へ出なければならぬ。

神潭の上手には後立山側に狭いが積があり、大

立山東面と 黒部川の下部

例 凡

E	D	C	B	A	(---)	(---)	(---)
ヒトンを打った處	神源	十字峽	峽見ヶ丘	棒小屋の小屋場	冠氏踏査路	電力歩道	普通登山路
M	L	K	J	I	H	G	F
ロープ場	架橋點	廊下の最も狭き流	廊下の徒渉點	屏風岩前的小屋場	心峽(廊下の中心)	下のタル深の小屋場	下廊下の廣河原



(昭和貳年五月 冠松次郎氏作)

岩壁の下の窟が段々になつてゐる處がある。そこには十人位の人が泊ることが出来る。その野營地から、右岸に添つて大まかな岩の棚の上に戻り、それから岸邊に別れて眞直に尾根に向つて登つて行くと、草地に出る、それから森林に入り、約三百米突程の處から横に、岩場の下を廻つて行く。棒小屋澤に近づく頃になると、本流を隔て、劍澤最下段の瀑と、その釜とがよく見える。

随分ひどい降りとなり、やがて棒小屋澤の左岸に出て、巨大な岩の脊をロープで廻り、下から第三の瀑壺に降る。そこから脚下に棒小屋澤の瀑、黒部本流、それから劍澤落口の瀑と云ふやうに、黒部本流を差し挟んだ二つの割れ谷を縦観するところが出来る。

廊下の十字峽　そこが私等の所謂廊下の十字峽で、谷が全く十字の廊下を爲してゐるのである。

棒小屋澤第三の釜の落口の上へ丸木を横へて對岸に移り、榛莽の中の切り開けについて登つて行くくと、大きな櫓の如き岩の丘の上に出る。

花崗岩の麗壁が、衣の皺折のやうに美しい立

皺を爲してゐる、廣さ四間四方、高さ七八間の黒部本流へ突き出てゐる岩の丘、そこが下廊下第一の關門を爲して、黒部本流劍澤棒小屋澤を眺める屈竟な物見臺になつてゐる。

大正十四年の夏、棒小屋澤下手の小屋場から溯つてこの丘に匍ひ上り、初めてこの附近の溪趣の雄大峻拔なのを眺めたとき、私等は只恍然として驚異の眼を見張つたのであつた。

註。下の垂澤から廊下の廣河原迄、約四時間、廊下の廣河原から神澤まで五時間、神澤から十字峽迄二時間強。

棒小屋澤落口から東谷落口まで

十字峽に突き出てゐる丘の上から戻つて、溝のやうな斜面を右岸について降ると、河水の一部が急瀬となつて岸を打つて漲つてゐる。その中を石の上を拾つて行くと、流れが早いので、足をとられるやうで一才悪い所である。七月水量のまだ多い時には通過は容易でないらしい。

丘から棒小屋澤下手の小屋場までは、僅かに四丁程の處であるが二時間を費す。崖側は非常に悪く、道がないからである。途中二ヶ所の難場があ

つて、上流から第二のものは最も悪い。

棒小屋の小屋場 距愛本道標十一里十町、これは大正八年七月、古河合名會社の測量隊が創設したもので、山側から十數間も差し出てゐる岩の廣場に粗末な小屋が二つ建てられてある。川から數丈の高さにあるので、出水には絶對安全で、後ろの山勢が穏やかなので、山抜けも恐れないやうである。

この小屋場附近から仰いだ黒部別山は實に立派である。こゝで初めて道のある處へ出ることが出来るので、小屋場の後ろを眞直に登つて暫く行くと、途中で東信道が右から入つてゐる。構はず尙少し行くと、道は多少の昇降をもつて、尾根の横を廻つてゐる。

作郎越 棒小屋の小屋場から東谷落口に通ずる日電の歩道は、重に山の中腹の等高線に沿つてつけられてある。それを作郎越と云つて、東谷落口まで約三時間にして達せらるゝものである。

よくつけられたこの峠道は、危険の箇所がなく森林は濃密で美しく、眺望も非常によい。黒部の

峡谷を通じて、遠くは黒岳、東澤乗越、近くは赤澤岳、鳴澤岳、岩小屋澤岳、それから當面に黒部別山と仙人山とを望むことが出来る。

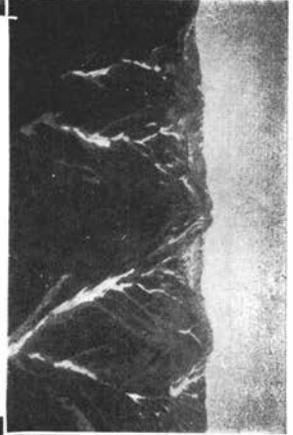
東谷落口 乗越を降り本流の澗に出ると、そこも釣橋が架けられてある。それを渡らずに、右岸を降り、岩の棚に沿つて約一町程行くと、東谷落口の瀑の處に出る。最下段の瀑の手前の岩の丘が均されて、日電の小屋場になつてゐる。その岩の横皺から温泉と清水が迸出してゐる。東谷落口附近は實に好い處である。

東谷落口から下流

東谷の釣橋を渡つて立山側に移り、急峻な崖側を行くと、遙か下で川が右折する、その隅の處から、仙人の瀑が三四段になつて、くねり込んでゐるのが見える。途中に押し出しのやうな石の澤が一つ入つてゐる。尙崖側の道を行くと、間もなく仙人澤の落口に降るやうになり、瀑の下にかゝつてゐる丸木橋を渡つて落口に出る。東谷から仙人澤までは、案外近距離で、三四十分もあれば達せられる。瀑の落口の岩に「距愛本道標九里三十五



屋小岩の石立



岳師樂るた見りよ腹中岳牛赤



む望な平衛兵部太リよ口落澤部五



む望な越乗ツエスリよ下岳師樂



手上の石立下廊上



手上の石立下廊上

影塚氏郡次松冠

町」と記されてある。

仙人澤の落口から少し登ると、數丈の梯子が岩上にかけられてありそれを登り切ると、道は山側を川から二百米突位の處を通じて乗越のやうになり、それからアゾ原の澤までは至極好い道で約二時間で達せらるる。

アゾ原 この附近は温泉が多く、アゾ原の澤からも、その澤が黒部本流に入る上手の石の丘からも、大量の湯が湧き出して居る。

アゾ原の澤を道について少し降ると小さな廣場があり、小屋が建てられてある。そこは東谷への荷の中つき場になつてゐる。それから餓鬼谷の方へ向つて、崖側を昇降しながら廻つて行く、道は川から五十米突乃至百米突の處につけられ、途中二ヶ所程絶壁を縫つて長い棧道がかけられてある。この道は非常の惡場で、この棧道が落ちれば、通過は容易でない。

この崖側を左へ大きく廻る手前から、濃密な闊葉樹林の底に、餓鬼谷の流れがきらめいて見える。崖を廻り切つて、西の方へ崖側の道を降り氣

味に行くと石小屋の前に出る。それから川に向つて降ると、そこはオリヲ谷の出合である。

オリヲ谷の落口 東谷以來の絶景で、森林溪流、山壁の悠大な景色が、この出合を中心として總攝されてゐる。アゾ原から二時間程を費す。

オリヲ谷落口の處から、山側を五十米突程登つて左に折れ、森林の茂つた崖道を行くと、それからシアヒ谷までは、一時間にして達せらるる。シアヒ谷の落口の前で、黒部本流は兩岸から出てゐる岩壁によつて狭められ、その間から奔出してゐる。この岩壁を夫婦岩と云ふてゐる。

崖道はやがてシヽミ坂上流の嶮にさしかゝる、崖側には岩壁の皺折に添ふて細い道が開鑿せられ、ポルトを打ち込み、鐵線が張られてゐる、直ぐ對岸に奥鐘山黒部向の大岩壁が高さ千餘米突の峭壁をもつて聳えてゐる。その下で黒部川は激湍となつて奔落してゐる。鐘釣方面から黒部川へ始めて入つたものは、先づこの奥鐘の絶壁と、シヽミ坂の嶮に驚かされるのである。

岩場の道がつきると、急峻な割れ谷に出る。

シヰミ坂 狭い割れ谷で、空瀑のある傍の丸い岩壁に添つて、十二間位の梯子がかけられてある。それを降つて道は又崖上を通じて行く。シアヒ谷落口からシヰミ坂までは約一時間の行程で、道さへ壞れてゐなければ左程危険を感じない。

樺平 シヰミ坂から樺平までは三十分も費やせば達せらるる。こゝには日電の大きな小屋と天幕が幾つか張られて、好い小屋場になつてゐる。上流御山澤附近以來の最も廣い平である。

樺平から暫く行くと、右から祖母谷の道が入る。猿飛を見物して小黒部谷の手前で立山道に岐れ、釣橋を渡つてウド谷やガラ谷を横ぎり、名剣山、百貫山の崢嶸とその下の雄大なる溪流を眺めて鐘釣温泉へ着く。樺平から約四時間を費す。

鐘釣温泉から約五里で、黒部鐵道の終點宇名月驛につき、それから北陸線三日市までは一時間餘で達せらるる。

黒部川の概況はこれまでゞ終りとする。書きつめた時間は、數日の野營に要する荷を負ふた人夫と共に行く速度によつたもので、休憩の時間もそ

の中に含まれてゐる。

黒部程の谷を渉るのには、何よりも減水の時期を選ばなければならぬ。源流地の雪量の多少によつて異なるけれども、大體八月下旬から九月初旬を最もよいとする。七月下旬八月初旬頃では水の大きい爲渉れない處もあり、假に渉れても非常に困難に遭ふ處が多い。

今の處、樺小屋の小屋場から黒部別山中央部の大ヘツリの上手まで、川通しは全く道がないので、ロープは是非用意して行かなければならない。これは多い程よい。私等は英國製ザイルを三百餘

呎、ライン百呎、その外補助の細引を若干携帯して、ピトン迄持つて行つた。

黒部川は道のある處でも、樺平から上になると年々雪崩で破壊される。水力電氣でその道を修覆してない時には溯行は容易なことではない。なまじい道をつけた爲、附近の地磬が弛んで、悪場になると崩壞の箇所が多く、本流に架けられた釣橋でも落ちてゐると引返すより外に方法がない。

小屋なども、水力電氣の人夫の入つてゐない時

には先づ用をなさないと思はなければならぬ。
食料は下流では鐘釣温泉、上流では平の小屋で
調達するより外には得られないので特に注意を要
する。

○積雪期の黒部川

(平より東澤まで)

渡邊漸

黒部の東澤は積雪期に於て、最も奥深く秘めら
れた境の一つである、そして此れに達する最捷路
として「平」から本流を遡るものを擧げる事が出
来る。吾々七名(三高山岳部員)が昨年(大正十
五年)三月下旬から約一月に亘る山旅にも「平」を
基點とした。「平」までは富山から立山弘法茶屋を
經、松尾阪を降り、立山温泉に達し、次いで大鷲
への尾根を攀ぢ、ヌクイダニを降つて日電小屋に
到る經路を採つた(吾々は勿論、人夫四名スキ
を用ひた)。

「平」日電水位觀測小屋は、今後積雪期の黒部
川、及び其れを繞る山々を志す人々に取ては、見

逃すべからざる存在である。建坪は約十五坪位、
二階建てで、階下は雪面下に没して、一見平家の感
がある。位置は「立山」圖幅、「平の小屋」に略々相
當し、富山縣登山小屋の少し下手になる。當時、
「平」附近は積雪一丈餘で、登山小屋の方は殆ど全
部埋没して居た。日電の小屋は二階は三室より成
り、階下は炊事場、物置に宛てられ、觀測者の長
期の滞在に差支へないだけの設備が具はつて居
る。一昨年(大正十四年)の秋に建設されたもの
で、當時は、松岡、宮本の兩氏が芦峯の人夫四名
(嘉左衛門、宗作等)を従へて、滞在して居られ、
兩氏の好意に依つて、吾々は大に助かつた。小屋
が大きい上に、米、味噌等の貯藏も豊富であるか
ら、十名以上の旬日に亘つての滞在も可能であ
り、更に進んで東澤にでも入らうとする人人は食
糧の補給を確實に受ける事が出来るから、非常に
便宜だ。吾々は最初、立山温泉から數回に亘つて
食糧を運搬する計畫であつたが、計らずも、斯る
便宜を得たので、多大の勞力と時日の節約とを併
せ行ふ事が出来た。此點は今後とも略々確實と信

ずる。

東澤に根據地を置くとすれば、「平」より上流を數回往復しなければならぬ。然かも一行が多人數となり、根據地での滞在が長くなれば、勢、相當の重量に達する物資の運搬を遂行せばならぬ。此の爲には少し手数は掛つても、先づ、半永久的の通路を拓かねばならぬ。然かも、黒部川は、此の時期にあつては、全流積雪下に埋没して居るのではなく、一支流たる東澤でさへ、全流が雪面下に没し去るのは「三ッ岳」直下よりも、尙、上流に於てある。況んや、本流に於ては、處に依つては、水面の露出せる部分が、雪に掩はれし部分より廣い場所に屢々遭遇した。従つて流水量も夏季に比して著しく減少して居るとは考へられぬ。例へ水面が相當廣く露出されて居ても、水流が正しく河の中央を流れ、兩岸の雪面が夫々連続して居たならば、甚だ好都合であつたらうが、河流の屈曲に従つて、水面も左右の何れかへ偏して居るので謂はゞ吾々は飛石傳ひをせねばならなかつた。若し架橋の勞を厭うて、一岸のみを固執しようとする

れば、雪崩の威嚇と時間及勞力の無益なる浪費とを蒙らねばならぬ。

斯る理由の許に、吾々は四つの架橋を行つたが、其の長さ何れも五米以上に達した。水面より雪面までの距離は平均三米に近く、只、「口元コビキ澤」の稍上流のもの、みは、淺瀬を利用したもので、長さは最も長かつたが、水面を洗う程度のもので、従つて、ほんの獨木橋に過ぎなかつた。他の三つは何れも水面より三米も離れ、然かも眼下には底知れぬ奔流が渦巻くと言つた様なものであつたから、橋臺には丸木を二本針金で組んだものを深く兩岸に差し込み、且つ、手摺を添へたもので、眞に橋の形をなし、可成、堅固なものであつた。

此の三つの橋は、東澤から引揚げて來る時にも、尙、其の儘存在して居たが、口元コビキの上手のものは、雪解けと降雨とに依る増水で流されて居たので、徒渉を強ひられたが、深さも大したものではなく、流れも緩慢なので、單に、冷い思ひをしたに止まつた。尙、此れ以外に雪橋を一つ

利用したが、歸りには既に落下して居たので左岸を暫らくへつらねばならなかつた。

然し、四つの架橋だけでは合理的に行動する事は出来なかつた、其の勞力は可成大きいものではあらうが、尙、二つ或ひは三つの架橋を行つたならば、安全に、然かも短時間に（三時間も掛らぬだらう）東澤の落合まで達する事が出来たであらう。二つの架橋を省略した爲に、當然行はれるへつりは、實に豫想外に時間と勞力とを消費するもので、雪崩に對する懸念で精神的にも可成の影響を受ける。

現に、東澤の落口に近いへつりの場所では、吾が荷物を置きに行つた日、行きには何等の形跡も無かつたのに、歸りまで近々數時間の間に、雪崩が出て居た個所があり、また根據地を引揚げた日にも、前述の雪橋の落下に依つて強ひられたへつりは若し晴天の日であつたら、雪崩に對する危険率が著しく高められて、殆ど通過不可能であつたらうと考へられる。

架橋には觀測所の人夫も借用して、六名を使用

したが、相當に時間を要するものなので、一日を此れに提供し、併せて、食糧、天幕等の運搬を行つた。

東澤に入つてからは、流石に流れも狭くなり、架橋の必要も無く、雪橋ばかりで行けたが、時季が遅れたり、例年より暖かい年はどうであらうか。

東澤の根據地は二ノ澤落合の直ぐ上手の右岸、縦の木の林に接した風の全然當らない場所を選び、雪を踏み堅めて、其の上に縦の葉を敷詰め、十人用と言ふ大きな天幕を張つた。八日間の滞在に、殆どストーヴを焚き續けたのに、天幕内の雪は、僅かに十糶ばかりしか低くならなかつたのは寧ろ意外であつた。そして馴鹿の寢袋（冬毛）と長さ三米ばかりの煙突付きの折疊式ストーヴとの恩恵に依つてゝあらうが、少しも寒い思ひをせず、携へて來た防寒具も用ひずに、容易に、最良の状態の許に、旬日を過ぐす事を得た。天幕の傍には雪面を掘り下げて水面に達せしめ、屋根代はりに防水布を張つた炊事場を設けた。炊事及び、

ストーヴ用の燃料は、概して枯れた唐松のみを用ひた。

「平」から東澤への経路の概略を述べれば、先づヌクイ谷を越し、其の儘、左岸に沿うて暫らく進む。やがて河岸の雪面が消失するので、稍高みを採つてへつて行く。此の邊りは斑らな闊葉樹林で、雪崩に對する危険は少い。稍々へつた後、左岸に再び廣い雪面を見出すので、適當の所で二十米ばかり降つて雪面に達するが、此の降り口は、東向きであるから、新雪直後の午前中は注意を要する。

口元コビキ澤（地形圖に水線あり）の落口は雪面下に没して居て、此の邊りは左岸の雪面が最も發達した部分である。暫らくして河流が東に屈曲するが、此の手前で右岸に移る。此處は前述の如く淺瀬を利用したもので、渡つた右岸の所で東側から一つの雪崩路が降下して居るが此れは通路には無關係である。中コビキの落合を越すまで右岸に沿うて行くが、此の部分は、へつりも無い。中コビキ澤（口元コビキと奥コビキとの中間）の落

合の上手で左岸に移る。此の架橋點の稍々上手右岸に相當の雪崩路があるが、これも直接關係は無い。左岸を靜かに木々の間を縫つて行く。再び右岸に移る所は雪面が河幅一杯に擴がつて居て、雪橋を利用した。此の少し手前に對岸に前同様な雪崩路があるが、問題外である。右岸に移つてからは、左岸は次第に急峻となり、雪崩路らしきものを對岸に數多く望む。その斜面も漸く緩漫となる所で、三度左岸に移るが、此れから暫らくの間は本流の西に向つて屈曲部に相當し、赤牛の斜面が眼前に展開される。

奥コビキ澤（地形圖、右岸水線ある澤の稍々上手）の數町下手で、右岸へ渡るが、此の地點の下手にも、右岸に雪崩路が見えた。此の架橋點から東澤落合までは、地形圖（「立山」「鎗ヶ岳」）で見ると、中コビキより奥コビキに至ると略々同様の距離があるが、此れは地形圖の明かな誤謬で、事實は、奥コビキと東澤との落合は殆ど相對して居て、東澤の方が、稍々上流になつて居るに過ぎない。で架橋點から東澤落合まで僅々二三町ではあ

るが、此の部分殆ど全部を徒歩でへつらねばならぬので、時間を費す事夥しく、一時間も掛る始末である。此の部分は雪崩の危険が前述の如く頗る大きくて、最も不愉快な所だつた。

要するに本流を溯るには、雪崩路を巧みに對岸に避け、然かもへつりを行はぬ事を旨とし、架橋の勞を厭はぬ事である。尙、河面を掩ふ雪は單なる積雪よりは寧ろ兩岸より頻々として落下せる雪崩の堆積に依る方が主要なものであり、此等の堆積が明かに對岸にまで乗り上げて居る事は雪層の斷面よりも推知するを得た。

東澤に入つてからは雪橋が自由に得られ、可成意の儘に進む事が出来、根據地までは、雪崩路は餘り見受けなかつた。只、二の澤落合の下手のものには相當大きなものであつた。東澤上流も赤牛岳直下近くまでは本流と略々同じ性質の雪崩路を數多く見たが、此れから上流になると、殊に赤牛側は大きな谷が幾條となく平行して降つて來て居るが、此等は何れも、新雪直後に、乾燥表層新雪雪崩が出るものらしく、東澤との合流點近く、或ひ

は數條の偉大なる雪堤を爲し、或は又丘の様な堆積を形造り、谷と谷とに挟まれた尾根筋の末端は、谷筋より低いと言ふ奇觀を呈して居る。野口五郎直下では河床は一面の雪の大廣場と化し、斯る雪崩の偉力の如何程大きいものかを如實に物語つて居る。

「平」から東澤乗越に至るまでの間で、赤牛直下附近を境界として、雪崩の相は劃然と二つに分れるらしい。即ち、下半に於ては、其の雪崩路は其の大きさは大したものではなく、雪崩の性質は多くは濕潤表層新雪雪層で、然かも必ずしも、それのみならず、進んでは舊雪表層、更に時期を經過しては舊雪全層雪崩となるべき過程にある雪を保持するものであり、上半のものは新雪直後、乾燥表層新雪雪崩となつて、殆ど何等の豫告も無しに一大威力を振ふものであつて、此れに屬するものは、時期が經過しても、残存せる部分は決して舊雪全層雪崩となる事なくして、夏季、雪溪として残つて居るものらしく考へられる。標高、即ち、氣温、風力、日射等種々の要素の影響の如何に依つ

て谷の一般的地形の變化に伴つて、此の差異を生ずるものと考へられる。

東澤は行きにも歸りにも積雪状態には大差はなかつたが、本流では可成の變化があつて、前述の如く、雪橋が落ちたり、新しく、雪崩が出て居たりした。歸途にも一日を割いて、行きに用ひた通路が完全なりや否やを調査して、それに對する對策を講ずる事が必要である。

甚だ雜駁ではあるが他は後日に譲り、筆を擱く。尙、詳細を知られん事を希望される方は三高山岳部報告第五號(昭和二年一月發行)の「春の東澤」(西堀榮三郎、奥貞雄兩氏)を参照されん事を望む。

○春の黒部川

冠 松 次 郎

下廊下から御山澤落口附近まで

立山の雪が、まだ山の平に幾丈となく残つてゐる時分、その東面下を流れてゐる黒部川が、その深い廊下の流域が、どんな風な状態にあるか、私

の遊心は幾年かの間、その想像に耽つてゐた。

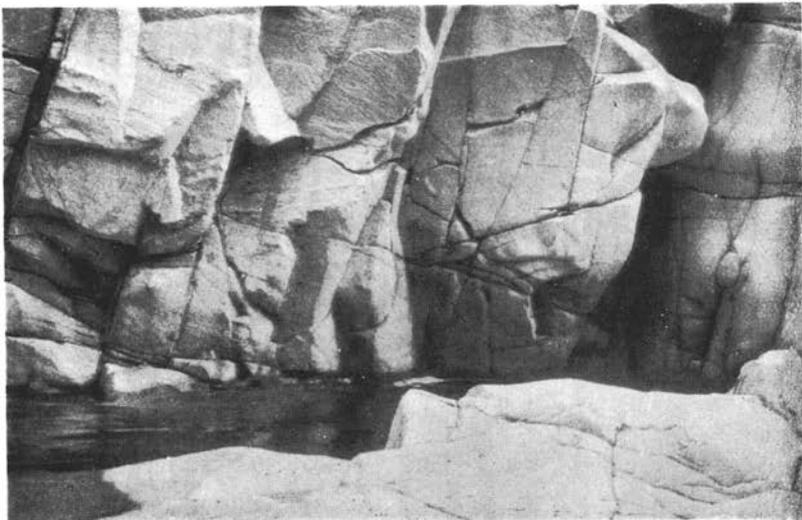
大正十五年六月初、黒部別山に登り、雪に蔽はれたその脊梁を辿つて、支尾根の急崖を綱によつて連續に降り、可なり下方の尾根先まで出て、丁度棒小屋澤が黒部川へ落ち込む、最下段の瀑壺の釜が、眞下に見える位置にまで降つて見た。

落葉松、白樺の新緑の間から遙か對岸の下に、森林の衣がはげて、岩壁の錯綜したその底に、碧藍色の深い水は、恐ろしい白泡を立て、釜の中に溢れたぎつてゐた。夏あんなに少なかつたこの瀑壺の水が、幾層倍の夥しい水量となつて、沸騰し狂奔してゐるのを見て、私は不思議にも亦痛快にも思つた。

棒小屋澤は、その上方に向つて雪が斷續して、兩岸から相迫つてゐる尾根の間を、S字形に深く割れ込んでゐる。その最も狭く見えない峽間は、瀑の連續になつてゐる處だ。左手から懸つてゐる支流からも、細長い瀑が残雪の間から垂れて、又残雪の間にかくれてゐる。



薬師の湍の合流点



冠松次郎氏撮影 水蝕たれ上る廊下の壁

棒小屋澤落口の下流數丁の處、棒小屋の小屋場のあるあたりの上手には、赤薙が川近くに見え、下手に於て、急峻な崖澤ガメサワが一つ、落口に夥しい残雪を押してゐるのが見えた。

恐ろしい氷雪の暴威によつて、谷に向つてかきとられた幾筋かの赤ガレの間は、滴たるやうな新緑は尾根を埋めて美しい。東信道が見えた。小屋場から上へ、棒小屋澤の右岸の崖尾根を刻んで折れ曲つて、やがてその谷の中に消え込んでゐる。

丁度この尾根先から、劍澤の最も悪い部分の一部と、その向ふに、屏風のやうに立て廻された、仙人山のゴンドウ（岩道？）尾根の側面、劍澤の左岸をなす大削壁が、雄渾なる岩壁の節理と、色彩とをもつて私等を威嚇してゐた。

最も高い岩壁の middle に渦を爲した岩の皺、それは丁度非常の壓力によつて押し潰されて、縦横に延び縮んだやうになつて凝結した金屬のやうな、亂暴な形をして、劍澤に臨んでゐる。黒部川では谷の窮まつた處、壁の高峻な處には、かう云ふ岩壁の模様を時々見る。最もすばらしいのはこの壁

と、赤ムケ（黒部別山澤と下の垂澤との間）の下の壁とで、その下こそ翼がなければ通へないやうな處である。

黒部別山澤の左岸から、下の垂澤に向つてつき出てゐる尾根、その一番川寄の高い隆起の上に立つと、黒部川の廊下の上半部が鮮かに指摘出来る。

黒部別山の大屏風岩が、鋼鐵の楯を重ねたやうな菱壁を、立てかけてゐるその對岸に、新越の壁から續く廊下隨一の岩壁の塀は、直立に近い急角度を以て相對して、下廊下をヤゲンのやうなその山壁の底に取り圍んでゐる。山上に夥しい残雪があり、川中も雪が斷續してトンネルを爲してゐるのに、壁の表面には殆ど残雪を止めない程の峻しさになつてゐる。

大屏風岩と向ひ合ひに、岩小屋澤支尾根の末端が、百米以上ぶつりと斷たれて、直立の壁になつてゐる。その下で本流は雪に封じ盡され、夏好い野營地になる積や、白砂の丘などは、全く雪の

下に隠れてゐる。然しその上手の徒渉點の處で、黒部川は大きな雪のトンネルの下から、恐ろしい水を吹き出してゐる。下廊下としては珍らしい静かな流れ。川底の小石をすら一つ／＼數へらるゝやうな美しくかつたこの徒渉點の澗流も、春は雪解の水嵩の大きい爲、怒濤のやうな水は叢り流れて激流に化してゐるのが見えた。夏に比して水量はどれ程あるか量り知れない。

すぐ上手につゞく大へつりの下も、長大なトンネルに埋められ、その上手黒部別山下の大窪地の處で、溪流は暫くの間巨石の間を走つてゐる。新越澤落口の下で雪は又一面に谷を埋めて、やがて又上手暫くの間溪流は現はれてくる。こゝまで廊下の流は殆ど直線の走向をとつてゐるが、鳴澤の落口近くになると、大へつり上部の壁のオデコで隠れてしまふ。

夏と異なり残雪期には、山の凹凸谷の彫塑が殊に目立つ。鳴澤岳、岩小屋澤岳の懷を深く浸蝕してゐる新越澤の水は、黒部川に向つて落ち込むあたり、その左岸の長壁にかくれて見えなすが、私

はこの谷の源の大きいのを見て驚いた。

黒部別山北峯二二八四米突附近からは廊下の流れは僅かしか見ることが出来ない。然しそこから新越澤落口の長大の瀑の一部が残雪の下から、赭黑色の高壁の間から、垂直にかゝつてゐるのを見つけたとき、私等は曾遊のものでなければ味ひ得られない、深いなつかしみを覺えた。

同じ黒部別山の南峯二二〇〇、二米突の峯からは、大屏風岩の側面、黒部別山澤の左岸になる壁根の長壁がよく見える。然しそれよりも私の好奇心を満足せしめたのは、下流に當つて黒部別山澤落口から下手の黒部川が、廊下中での絶嶮境の溪水や山壁の有様が、最もよく見えたことであつた。

黒部別山澤の落口の處で、雪に埋められてゐる本流は、その下で俄然滔々たる激流となつて落走してゐる。立山側の壁は高く聳えてその下は川に向つて深くエグれてゐる。後立山側は高い赤ムケの壁の下から崖のやうな雪溪が一筋かゝつて、そ

の雪は川まで押し出してゐる。この方は稍廣い緩斜地があつて、川は立山側に傾いて深い。

雪解の水の夥しさ、その奔騰のすさまじさは、今が一年中で最も流水の活動の旺盛であることを思はせる。

この峯から、上流を顧みると、東澤落口から下手の闊い川筋の一部が見え、更に御前澤下手の流れも見える。赤澤の落口から内藏の助澤落口の上手の川筋も見えるが、雪は最早川を埋めてはゐない。

ゴゼンダンの丸山。御前澤と内藏の助澤との間に、富士の折立の方から派出された四ツの隆起。その中央部から黒部別山で見えなかつた鳴澤落口から上手、内藏の助澤落口までの黒部川が、S字を二つ繋いだ形をして流れてゐるのがよく見えた。

内藏の助澤から下流の壯麗な溪水、到る處川近くへ押し出してゐる残雪の周圍を繞らしてゐる新緑の輝き、その上に赭黒色の巨大な岩の瘤を天空に向つて築き上げてゐる大タテガピンの雄偉なる

姿、それから溪流が左へ折れて見えなくなる、左手の突端に榛の新緑林が一きわ目立つて、積翠を漲らしてゐる、榛の平の小屋場など、可なり美しい眺めである。

この山の一九八一・三米突の峯（御前澤寄のもの）からは、御前澤落口附近から上流御山澤落口附近の清瀬が、唐檜の森林、落葉松、白樺の新緑の間から立派な溪觀を見せてゐる。然しこの丸山は藪が濃密なので、夏には登山も骨が折れるし、展望もその爲に妨げられる。

黒部別山を降りて、私等は内藏の助平の野營地から、内藏の助澤を黒部川へ下つて見た。

丸山の櫓のやうな立壁と、大タテガピンの大嶮壁とによつて、壯快なU字状の谷を爲してゐるこの澤は、落口まで雪で埋めつくされ、大残雪の下から激流はしぶきを上げて、瀑の如く本流（眞川）に向つて落下してゐる。

内藏の助澤の落口。大タテガピンの岩壁と、丸山の壁と、赤澤の壁とが三方から相迫つて、下

廊下の關門を扼してゐるこの落口には、水量の甚大なる爲春は殊に荒蕩たる趣を呈してゐる。夏見えた巨大な岩石、川中に點在してゐたその多くは水面下に没して、漲り溢れてゐたこの附近の流水は、今や逆卷く奔流となつて恐ろしい勢ひで衝き落ちて行く。然しながらこの激湍に映ずる新緑の輝きを眺め、幽谷、眞に春こそ幽谷と云ふ感じに私はうたれたのであるが、その幽谷の空氣を駭蕩たらしめる様々な小島の囁きを聞きながら、深い残雪の上を辿つてゐると、私の身邊を取り圍んでゐる、大自然の剛軟の調子に刺激せられて、じつとしてゐられない程私の感情は高潮に達して行く。

路は丸山側の岩壁の横を廻つて行く。これから赤澤が入つてくる附近までは立山側は中々悪い。氷雪の爲崩壊せられた悪場を、ロープによつて昇降して行くと、頭上に當つて石ナダレの音は断え間なく聞える。岩角に縋りロープを握り、難場をへつり終らんとする時、尺角大の落石が身邊をかすめて落下するのを見て慄然として一行を顧み

た。幸ひに過ちなきを喜んだが、危険を感じながらも歩行は逡巡として捗らない。

氷雪の作用で岩の組織が弛んで崩壊してくる石ナダレ。黒部川の春の谷涉りの恐ろしいものはこれだ。私等は黒部別山澤を本流まで降らんとしたが、間断なき落石の音に尻込みした。劔澤の支流へも降ることが出来なかつた。矢張落石とヌマ(底ナダレ)との恐ろしさからである。

赤澤の壁に向つて残雪は大きなトンネルを作つてゐる。丸山側の急傾斜の雪の上をロープを張つて横に渡つて行くと、追々残雪が小さくなりやがて大難の上に出る。

對岸赤澤の壁の稜角は、柱を立てたやうに直立して、その盡くるあたりから、赤澤岳の叢峯は深碧の空から簇々と浮き出でゐる。何時見ても痛快な姿である。

丸山中央部の剝落せられた山壁の途中から、二つの岩峯の割れ目を瀑布が一筋かゝつてゐる。夏には水のない處であるが、兎に角今では小澤になつてゐる。

赤澤が對岸から入る時分、立山側の山裾は急に
なだらかになり、岩壁がその影を収めると、新緑
は左岸を埋めて茂つてくる。黒部川から聳立して
ゐる赤澤岳の一岩峯を過ると、溪谷は開けて更に
悠大となり、私等は燃ゆるやうな若葉の底を、の
びのびとして歩けるやうになる。然し残雪は到る
處に木立の下に溢れ小溪を埋め、川にまで押し擴
がつてゐる處もある。

檜、山毛櫸の新緑は樺綠色に、白樺、榛、ナ、
カマドの若葉は鮮綠色に透き徹つて、その間を轟
々と延び上つてゐる落葉松の嫩芽は、煙の如くた
なびいてゐる。

道は川近くを、流れから僅かな高さを通じてゐ
るので、日に輝やく奔川の眺めは、新緑の間から
殊に華々しく眼に映ずる。雪解の水溜りの中には
水芭蕉の純白の花が夥しく、森林の下には猩々バ
カマの牡丹色の花が咲きほこつて、ツ、ジもコブ
シも、山櫻も、今が満開である。

内藏の助澤落口から約二時間にして御前澤の落
口に達した私等は、この落口にづり出してゐる長

大な雪の堤を見て驚いたのであつた。

表面凹凸の甚だしい残雪の高さは二丈餘、その
長さは約半町も續いて、堤のやうな雪の押し出し
をなしてゐる。周圍の新緑は滴たるやうに山裾を
埋め、山櫻が満開であるのに、この夥しい雪の有
様は、立山黒部でなければ見られないものである。
内藏の助平が一面の雪野原であり、山上の殘
雪は數丈の厚さをもつてゐたのも尤當然であると
思つた。

こゝで長次郎は中食をひろげ、米谷は平の小舎
へ米の補給に、竹次郎は得意の岩魚釣に川中を溯
つて行つた。

私はI君と共に御山澤落口に向つて岨道を辿つ
て行く。東信道が對岸に低く見える。到る處殘雪
に埋められてゐるので、春は矢張り通行は容易で
ないと思はれる。道が一しきり積へ降り、川の中
を立山側について行くやうになる。顧みると雪を
戴いた黒部別山の南峯と、その右から黒部川へ、
嶺岩の瘤を重ねて落ち込んでゐる大タテガビンの
大岩峯が見える。

立山側の小溪を二つ程横ぎり、御山澤近くなると溪側は益々緩漫となり、やがて廣々とした御山澤の流域に出て、川楊の森林の中を、澤を降つて黒部川の澗に降りた。

御山澤落口の上手にある、おなじみの白砂の上に腰を下して、私等は先づこの美しい落口の春のたゞずまひ、この澤の源流地に連らなつてゐる雪山の壯景を心往くまで觀賞するのであつた。

私はこの出合に五六度も來てゐる。然しそれは皆夏なので、その暢氣な谷涉りの氣分は、春の荒蕩として近づき難いものとは各々趣を異にしてゐる。

御山澤の衝き入る處、スバリの壁の下で黒部川は淵をつくつて水はその中を旋回してゐるのだが、水量の多い今は流水は激湍となつて、怒濤のやうな狂瀾は淵一杯に非常の動搖をなしてゐる。

御山澤の水量の饒多なることは想像以上で、夏のみ美しい奔流も、出水の時のやうな水はうねりを打つて川楊の密林の間を躍進してくる。然し流水は清んで美しくしてそして甚だ冷たい。

東面の積翠の上に連らなつてゐる晶燦たる雪山。立山本峯の壯麗なる雄姿は、黒部本流、御山澤の清流、東面の森林の美觀と共に、日本無双の深溪と雪山との雄偉なる自然境を形ち造つてゐるのである。

巨石の横に風を避けて、I君と共に中食を認め雑談に耽つてゐると、鶉鴒が二羽、水の上を靜かに飛び交して、山裾ではカッコウが寂しく囁づつてゐた。やがて長次郎が下流から上つて來た。米谷は平の小屋で米を求め、熊の肉や砂糖などを分けて貰つて來た。竹次郎は潑刺たる岩魚を二十數尾、楊の枝に提げてゐる。

それから私等は又御前澤の落口まで降り、御前澤を登つて、丸山の鞍部を乗越して、内藏の助平の野營地に歸つた。

春の黒部川を跋渉することは容易でない。殊に下廊下に入ると云ふことは命懸の仕事であると云はねばならない。内藏の助澤落口の上手では、可なり危険を感じた場所があつた。御前澤落口から御山澤落口に到る間でさへ二三ヶ所崖道が崩れて

ゐて注意を要する處もあつた。

下流のシ、ミ坂から、東谷を経て棒小屋澤の小
 屋場までは、恐らく水電で歩道の手入をした後、
 七月下旬からでなければ入ることは出来ないであ
 らう。今年に數十年來の大雪であり雪崩の害が甚
 大であるから崖道の損害も亦甚だしく、従つてこ
 の川筋へ入るものは餘程注意して行く必要がある
 と思ふ。

内藏の助澤は大部分雪溪となつてゐたし、御前
 澤も、中央部の三段になつてゐる瀑だけは出てゐ
 たが、谷幅の狭いこの谷は、残雪は最も深く厚い
 やうに思はれた。然し最も長大な御山澤は、黒部
 川近くはもう溪流は自由に奔放してゐた。

春の深溪は一口に云へば荒蕩たるものである。
 殊に残雪によつて、トンネルが斷續して造られて
 ゐる廊下の峽間は、如何にも荒くれた、近づき難
 い趣がある。然し長閑な春日影、霞や靄の變幻や
 微動、新緑の華麗さ、百鳥の囀りなど、夏ではと
 ても得がたい、駭蕩たるその氣分は春に於て最も
 味ひ得らるゝ特長であると思ふ。

(丁)

○黒部川探勝の經過

冠 松 次 郎

黒部峽谷の中で、從來多く人々の入り込んでゐ
 た處、たとへば、温泉のある爲、土地の人達がよ
 く往復した、鐘釣黒難の温泉に到る道筋、それか
 らこの十數年來登山者によつて開拓された、立山
 に通ずる小黒部入の道、小黒部谷落口より上手の
 猿飛の奇勝を経て、更にその奥まで入り、釣橋を
 渡つて祖母谷川を溯る祖母谷温泉までの通。この
 温泉は明治四十四年かの出水の爲流失し、今では
 小屋が一つ建てられてゐるのみになつてゐるが、
 温泉宿のあつた時分には入浴客が可なり有つたや
 うに覺えてゐる。現今では最早大蓮華群峯から黒
 部谷へ、或は立山方面から大蓮華に到る主要の登
 山路となつてしまつた。

大町から立山方面に到る平の籠渡しは勿論、そ
 れから上流東澤に到る間の黒部川、これは可なり
 前から獵師や大町の岩魚釣が入つてゐたばかりで

なく、赤牛岳東澤乗越附近の山々を目ざす登山家も稀に溯るものがあり、その文献も山岳の随分古いものにあるやうに覺えてゐる。源流地から薬師澤迄の川筋は黒部川としては早くから信州島々方面の獵師や魚釣によつて歩かれ、歩山家によつても相等探られてゐた。嘉門治が上高地から薬師や有峯方面へ獵に出かけたときの道筋になつてゐたし、島々の岩魚釣が十數年來五郎澤（黒部五郎岳から出る澤）の出入に小屋を造り、黒部川をその上流へも下流へも岩魚釣に入つてゐたのも分る。

然しその他の黒部川の川筋で最も神秘境であることされ、峻嶮並びなきものとされてゐた、廊下の峡間は、或は部分的には岩魚釣や獵師によつて跋渉せられた處もあるが、登山家の入つたのはつい數年前からであつて、それまでは全く人跡絶無或は稀薄な廓寥境であつた。

大正七年の七月私は雄山から御山澤を降つて、黒部川の澗に出て、それから上流を平方面へ溯り、戻つて御前澤落口まで降つて、又御山澤を登

り、その支流タンボ澤から雄山に出て歸つた。その時分には、平の小舎は荒れはて、番人もゐず、その下流の黒部川の川筋には人跡は全く絶えてゐた、その當時この大きな溪谷がどんなに寂寥として悠々たる天地を爲してゐたかを、今日になつて回想すると全く隔世の感がある。

大正八年の夏から、そろ／＼黒部も、時代の渦中に巻き込まれて來やうとした。この年は恐らく黒部川始まつて以來の混雜した時で、古河合名會社は劔澤落口附近の水測を爲す爲に、その探險隊を派して、祖母谷川から上流、黒部川の右岸の尾根を越して、棒小屋澤落口の數丁下手まで道を拓いて、そこに現今もあるよい小屋場を建設した。

同じ年の七月、會員近藤茂吉氏は、劔澤を黒部川に降らんとして果さず、仙人澤を下り、その落口の上手にて崖上より川中に筏を差し出し、冒險的渡河を強行して、對岸に移り、東谷落口附近を経て、棒小屋澤落口まで入らんと企てられしも、食糧の不足の爲、牛首岳の尾根を鹿島槍ヶ岳に登り大町に降られた。



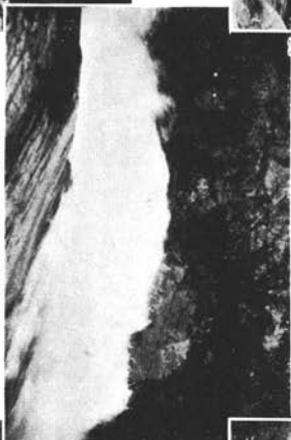
近附口落澤越新



川部黒の近附ソビガヲタホオ



む望を山挽木リよ近附澤リバス小



川部黒の手下口落澤越新

影撮氏権信永岩



橋架の前手澤越新



(川山立)島バソバ

これと時を同じうして、會員木暮理太郎、中村清太郎の兩氏は、鐘釣温泉より樺平に到り、黒部川左岸に沿うて仙人澤落口附近に出で、その雪溪を溯つて立山に出られた。この行、初めは鐘釣温泉を起點として、平の小屋までの跋涉を試みる爲出發されしも、殆ど人跡を絶てる急峻なる崖側を通過することゝて、その困難は非常にして、加ふるに天候の不良は、その計畫を頓挫せしめ、遂に仙人澤より立山方面へ登ることを餘儀なくせられた。水電の歩道略ぼ完成せられた今日にては、僅かに一日の行程を、殆ど一週間近くの日子を費されたるを見ても、如何にその當時この崖側通過の困難なりしことがよく察せらるる。

同年八月、會員沼井鐵太郎氏は、大町より鹿島谷に入り、五龍岳に登り、八峯附近に於て東谷を黒部本流近くまで降り、それより非常の努力を以て急峻なる尾根の横をからみ、棒小屋澤落口下流の古河合名會社の小屋場に降り、更に黒部川を溯ること數丁、棒小屋澤落口より二三丁下手まで辿られたが、準備や食料の都合で、棒小屋澤左岸の

尾根を登つて、棒小屋の谷に入り、溯つて棒小屋乗越を扇澤に下つて大町に歸られた。

その年の七月、會員伊藤孝一氏は、大町より平小屋に入り、御山澤御前澤の落口を経て内藏の助澤落口の上手まで降り、戻つて御山澤の支流タンボ澤を登り雄山に出られた。

翌大正九年、七月末より八月にかけて、澤本千代次郎氏兄弟が、平より東澤に到り、上廊下を溯つて、立石よりオクノタル澤を上り、雲の平に出られた。それと前後して會員田中喜左衛門氏は、同じく、平から上廊下を貫通して、ヤクシ澤の出合迄溯られた。

同じく大正九年八月初旬、私は長次郎を伴つて、平から降り、御山澤、御前澤、内藏の助澤の落口を経て、下廊下に入り、大タテガビンの下を廻り、黒部別山の中央部から、大ヘツリを抜けて、對岸後立山側に徒渉し、黒部別山澤落口に到りそれから岩小屋澤岳支尾根に取りつき、二〇六七米突の三角點の峯まで登り、更に下つて黒部川の下降を決行せんとしたるも、天候の不良と食糧

の缺乏の爲、棒小屋乗越を扇澤へ下つて大町へ出た。

大正十年の夏、會員田中喜左衛門氏は、平から内藏の助澤落口まで下降し、内藏の助澤を溯り立山に出られた。

大正十二年七月、京都の西堀榮三郎今西錦司氏一行は、薬師岳の頂上より、ヤクシのカールの崖澤を下り、黒部川を横きつて赤牛岳に登り、黒岳より東澤に下り、平に出て更に御前澤を溯り雄山に出られた。

其他會員伊藤孝一氏は五六月の交、上流から上廊下のヤクシのカールの澤附近まで降られてゐるらしい。

大正十三年八月、私は双六谷を溯り、蓮華谷から九郎右衛門谷を経て黒部乗越に出て、それから五郎澤を黒部川に降り、ヤクシ澤落口より數丁下にて上廊下に入り、ヤクシのカールの澤落口より三十分行程を下つたが、大雨の爲下降を中止して赤牛岳を越えて東澤を下り、平の小屋に到り、御山澤の落口にて、會員岩永信雄氏と落ち合ひ、内

藏の助澤落口から下廊下に入り、大ヘツリ迄下つたが準備の不足と、川の狀態が悪かりし爲、戻つて内藏の助澤を内藏の助平に出て歸つた。

大正十四年八月末より九月初にかけて、私は會員沼井鐵太郎同岩永信雄兩氏と共に、前回數度の失敗に鑑み、充分の準備を整へて鐘釣温泉から東谷を過ぎ、棒小屋澤落口に達し、尙上流を溯つて遂に下廊下の未踏境を突破して、平の小屋まで溯つた。

大正十五年七月、會員山崎和一氏は、鐘釣温泉より東谷を経て棒小屋澤下手の小屋場に達し、棒小屋澤落口に向はれしも、水量非常にして加ふるに崩雪の危険を感じたる爲、棒小屋の小屋場に戻り、東信道を登り棒小屋澤に入り、小澤を牛首山の尾根に登り、鹿島槍を極め大冷澤を、鹿島谷に下り大町に出られた。

同じく大正十五年九月、會員田中喜左衛門氏は鐘釣温泉より、東谷を経て棒小屋澤の落口に達し、棒小屋澤下手の小屋場に戻り、東信道によつて、岩小屋澤支尾根二、〇六七米突三角點の峯の

下を廻つて黒部別山澤落口の上手に降り、それより大へづりを通して、内藏の助澤落口に至り平の小屋に出られた。

以上は道の拓けてゐない、或はまだ道が造られてゐなかつた時分の、黒部川の川筋を通過された人々の経過を略記したのであるが、この外にまだ入つてゐらるゝ人もあるかも知れない。

大町の品右衛門や兵三郎は、可なり以前に下廊下の大へづり下の徒渉點を横ぎつて、岩小屋澤支尾根に登り、棒小屋乗越を大町へ降つたと云ふ話も聞いた。それから音澤村の助七は鐘釣から一週間で平の小屋まで達したと云ふことを云つてゐたが、助七の通つた道筋も、棒小屋澤落口から黒部別山澤上手迄は、川通しをはぶいて尾根を通つたらしい。この間は日本電力も歩道を開鑿することの困難の爲、上下流から道を拓いてゐるが、こゝだけは今だに残してある。

兎に角さしも峻嶮を以て、敬畏せられてゐた黒部川も、大正十四年に到つて殆ど探勝せられ、その神秘の扉が愛山家の前にかゝげられ、雄麗な岩

壁も、豪壯なるその流水の姿態も、私等自然兒の前に開放せられたと云ふことを思ふと、私は愉快に堪へない。その記念としてこゝに特別號黒部川を發行することは、その探勝に一段落がついたのと、目下水力の歩道が進捗しつゝあることゝを考へて、甚だ機宜に適してゐるものと思ふ。

○黒部川の歩道

冠 松 次 郎

黒部川に沿つてつけられてある歩道、それは私によく知らない處もあるので、正確に記することは出来ないが、鐘釣温泉を基點としてその概略を述べると、鐘釣温泉から奥、小屋の平を経て、黒部谷落口の釣橋を渡り、暫く登ると小黒部入の路と、黒部川沿岸につけられた路との岐れに出る、それから祖母谷川に分れる道迄は、登山者や湯治客によつて古くから通はれてゐたものであるが、尙黒部奥に向つて行く道は、大正九年東洋アルミナム會社によつて拓かれ、現在は日本電力の

歩道となつてゐる。

樺平の小屋場から、シバミ坂、シアヒ谷落口を経て、オリヲ谷の合流點に出て、尙尾根先を川について崖側を廻り、餓鬼谷を下に見て、可なりの峻嶮に棧道がかけられ、アヅ原の澤の處に出ると、小屋が一つある。

戻つてオリヲ谷落口より數十間上手で山側に登ると、七八人位い宿れる石小屋がある、その横手から崖側を廻らずに、眞直に尾根上の鞍部に達すると小さな乗越に出て（石小屋乗越）、そこを上流に向つて降れば、矢張りアヅ原の澤の澗に出る。餓鬼谷附近の崖側が壊れてゐる中は、この乗越道を通過するをよしとする、歩道はアヅ原の澤から、崖側五十米突乃至百米突の處を仙人谷附近までつけられ、仙人谷落口の上は長い梯子があり落口には丸木橋が架けられてある。

それから東谷落口の對岸までは、道は崖上の森林の間を縫つて、東谷落口の三十間程上手の釣橋を以て後立山側につけられてある。東谷落口の上手には日電の小屋場がある。釣橋の處で山側を登

り尾根先を迂回して約五百米突位の登りになつて棒小屋澤落口から五丁程下手の棒小屋の小屋場まで峠通が通じてゐる。東谷釣橋から棒小屋下手の小屋場までのこの道を作郎越と名つけられてゐるので、日本電力の道はこれできつてゐる。

棒小屋の小屋場から上流川添は、悪場つゞきなので道はまだ出來てゐない。この小屋場から少し日電の道を戻つて登ると、東信電氣の歩道が、日電の道と反對に、峻嶮な山側を曲折して、棒小屋澤の二俣、西澤小澤と棒小屋本澤との合流點附近に出て、それから棒小屋澤を渡り、岩小屋支尾根の棒小屋澤落口にまで延びてゐるものゝ、一八〇〇米突附近に上り、二〇六七米突の三角點の峯の下一九五〇米突位の處を廻り、新越澤に向つて降つてゐる。それからコンターに從つて鳴澤に出て、赤澤の上部を昇降し、御前澤附近に至つて殆ど川近く降つてゐる。御山澤落口の下手からスバリの壁の上部を越して日電の歩道と暫く合し、小スバリ澤、元ザクボを横ぎり。針の木澤に出て針の木峠の道を横ぎり、更らに右岸を東澤落口まで通じ

てゐる。その上手上廊下を通過して薬師澤の落口まで果してつけられてゐるかは甚だ疑問である。この東信道は大正十四年七月に急造されたので、大正十三年に上廊下を通つた私はこの道を知らないので確言は出来ない。

日電の歩道は、一方は前記樺平から上流へ棒小屋の小屋場までつけられてあるが、大正十三年六月から更らに平の小屋から下流に沿うて、中の谷手前に釣橋を架け、後立山側に移り、小スバリ澤を横ぎり、スバリの壁の上手で、釣橋を又立山側へ御山澤の落口に向つて架けられてある。御山澤を横ぎり、川近くの歩道は御前澤落口の上でこの澤を渡り、内藏の助澤落口手前から岩壁の横を道が開鑿せられて、下廊下に入り、大タテガピン下の崖側を廻り、對岸に鳴澤を見て榛の平の小屋場を横ぎり、それから岩場道を通して黒部別山中央部の窪地に出で、新越の瀑布を對岸に見るあたりで終つてゐる。

この先は大へつりになつてゐるので道を拓くことを中止してある、大へつりから黒部別山澤落口、

下の垂澤落口、尙下手の棒小屋澤落口を経て棒小屋澤下手の小屋場に到る約一里の間は、川通しは全く通れない、黒部河中での絶嶮になつてゐる。

この外に大正八年の夏、古河合名會社が、祖母谷から南越の道に沿つて餓鬼谷へ下り、可なり高い尾根を昇降して棒小屋澤下手の小屋場へ出てゐるものを開いたが、日電の歩道が出来てからは廢道となつて通過するものがない。

日本電力ではこの外にまだ大分歩道を開鑿する計畫をしてゐる。大正十四年の夏には、樺平から約三百米突程の處へ道を造り、尾根をからんで約千米突前後のコンターに沿つて東谷迄と、更らに立山側を劔澤落口に迄延長せんとしてゐる。兎に角樺平からと、東谷からと既に道の開鑿に着手してゐた。

まだ道のない下廊下の最も悪い處は立山側の岩壁に半トンネルを穿ち、道を造ることや、劔澤迄水利權を得たので、大町からこの方面へも道を拓く豫定をしてゐる。

日電の歩道は勿論東信の歩道も、年々修覆しな

ければ通過不可能の處が出来るので、今年のやうに數十年來の大雪で、大崩雪が沿道に頻々と起るときには、下流の比較的安全なるべき出し平、出し清水や、祖母谷温泉附近でさへ、數千坪、數萬坪の恐ろしい崩雪に襲はれるのであるから、上流の山側の遙かに急峻な處につけられてゐる歩道や、棧道梯子、釣橋などは、完膚なく破壊されたものと思はれる。

日電の發電所豫定地とされてゐる小黒部谷附近、仙人澤落口下手の奥平附近なども、大崩雪に遭へば、假令堅牢な發電所が出来ても非常な損害を被ることは必然で、殊に劍澤落口に發電所を設けるなどは、誠に心細い危険至極な仕事と云はねばならない。東谷から上流には恐らく御前澤御山澤落口附近まで登らねば、安全な處は全くないと云ひ切ることが出来ると思ふ。

黒部川の歩道のことについて、私の知つてゐるはこれ丈であるが、この外には恐らく今の處沿道には道は開かれてゐないものと思ふ。

〇雜誌『旅』大正十五年七月 號の附録「黒部峽谷案内繪 圖」の誤を正す(略圖参照)

この繪圖は、黒部保勝會發行の『天下の神秘境 黒部峽谷』と云ふ繪圖と同じものである。私は猥りに筆者の誤りを摘發して喜んだり、折角出版せられたものにけちをつけて得意とするものではないが、兎に角あの繪圖を信用して、輕卒に黒部ほどの峻嶮な峽谷に入り、發電所があるから(實際はあるところではない)そこ迄行けば宿もとれる、食料の補給も出来る。歩道があるから大丈夫だなどと思つて漫然と深入して非常な目に遭ひ、萬一人命にかゝはるやうなことがあると、寒心すべきことだと思ふので、あれ程の繪圖を書いた筆者に敬意を表しながらも、一言述べない譯にはゆかないのである。

先づ平の小屋から下流に向つて考へると、日電歩道を左岸中の谷と御山澤との間に入れてあるのが誤りで、この歩道は中の谷落口手前から釣橋で

後立山側へうつり、御山澤の落口の手前へ釣橋が架けられて、又立山側にうつつてゐる。繪圖はこの釣橋を逸してゐる。御山澤の落ち込む對岸には、灰白色のスバリの壁約百尺位のものはあるが、御山澤の落口の對岸から御前澤落口の對岸（この間に大スバリ澤が入つてゐる）、それから赤澤（内藏の助澤落口と御前澤落口との中間の對岸にある押し出しのやうな澤）の落口近くまでは壁らしいものはなく、東信の步道が岸近くにつけられてゐる。それだから、繪圖にある金剛壁など、特に名づけるやうなものがあらう筈がない。

繪圖にスバリ岳と赤澤岳との間の澤が大スバリ澤で、赤澤岳の懷から落ちてゐるものは赤澤である。この二つの間にはやはり特に摩利支天と云ふ名をつける程の壁がなく、赤澤寄に岩峯が一つ森林の間から聳えてゐる、然し前述の如く赤澤の落口は御前澤の落口と内藏の助澤落口との中間稍内藏の助澤落口寄の對岸に入つてゐる、従つて内藏の助澤落口の對岸に、赤澤の懷から出る澤はない。これは陸地測量部の五萬分一の地形圖が誤つてゐる。

るので、それがこの繪圖に現はれたのではないかと思ふ。

内藏の助澤落口の對岸には、赤澤岳から西北に派出された長大な尾根の先は二百米突近くの大齧壁を屏立して、落口から見ると本箱を立てたやうに四角になつて随分雄麗に見える、これは大正九年始めて下廊下へ入つたとき、赤澤の壁と名づけたもので、黒部川は内藏の助澤落口の處で直角に近い角度を以て下流に向つてゐる、それから約三四丁で赤澤の壁が可なり低くなるあたりで小澤が一つ入つてゐる、これは無名の澤である。

内藏の助澤落口から黒部川は二曲り程くねつて流れてゐる。その第一の凹から前述の無名の小澤が入り、第二の凹からは鳴澤が落口は瀑になつて落下してゐる。それから新越澤、繪圖の岩小屋澤の間は下廊下としては最も壁の低い處で、こゝにも繪圖には帝釋天と云ふ壁が誤入されてゐる。

黒部川は新越澤（岩小屋澤）落口から下手で、最も雄大な然も殆ど直立してゐる二百米突以上の大壁を露出してゐる、繪圖では却つてこの壁の

處に貧弱なる壁の記號あるのに過ぎない。

この繪圖の岩小屋澤落口から棒小屋澤の間は繪圖の如く簡單なものでなく、その距離も五萬分一の地圖に示す如く、内藏の助澤落口から岩小屋澤落口に到る間よりも倍近くも長い。繪圖のはそれが反對になつてゐる。

岩小屋澤岳の尾根は黒部川に向つて二つに岐れてゐる、一つは棒小屋澤落口に向ふもの、一つは黒部別山中央部の黒部別山澤に向つて突出してゐるもの、この後者の尾根先の周りは黒部川中での最も峽谷の差し迫つた岩壁の高大な處で、僅か四五町の間全く人の溯行をゆるさない。この二つの尾根はその股から落ちてゐる、下の垂澤によつて分けられ、黒部川は黒部別山澤落口と、下の垂澤落口とで電光形に折れ曲つてゐる、五萬分一の地形圖にもこゝはこの曲折を逸して書き入れてある。

黒部川は仙人谷の落口の處で非常に折れ曲つてゐる。樺平から下手には立派な道がついてゐるので別段こゝで述べる程のこともないと思ふ、又恐らく誤もないと思はれる。

兎に角下廊下で最も岩壁の偉大な處は(1)内藏の助澤落口の對岸の赤澤の壁、(2)新越澤落口下手の新越の壁、(3)黒部別山中央部の大屏風岩、(4)その對岸から下の垂澤の落口につゞく赤ムケの壁、(5)赤ムケの對岸立山側の壁等で、棒小屋澤や劔澤落口は壁の高さ立派さに於て到底これ等のものには匹敵出来ない。

尙甚だ遺憾なのは、小黒部谷落口は勿論、劔澤落口にも發電所が全くないのに拘はらず小黒部發電所、殊に劔川發電所と記入してあるのは誠に不都合なことだと思ふ。

然しそれよりも何よりも、黒部川の上廊下に對し、下廊下と云ふ立派な名のあるのに何故に筆者は殊更に大廊下など、云ふ名を新につけたのか、これ丈は是非訂正してもらいたく思ふ。(冠)

雜 報

○阿蘇山の爆發

【熊本特電】阿蘇山は一日午前十一時頃轟然たる音響と共に大爆發をなし、火焰天に沖し二三百貫の大石を百四五十メートルの上空にまで噴きあげた、登山中の二十餘名はこの不慮の大變動に驚きいづれも携帶品を遺棄し一時は生死さへ氣遣はれたが、噴出した小石で頭部その他を打たれた位で一人の死傷者もなかつた旨熊本縣警察部に報告があり、熊本測候所では二日所員を現場に急派してこれが調査を行はしめることになつたが八田所長代理が熊本から觀測したところでは、別に新噴火口ができたわけがなく舊噴火口中の池の爆發であらうと語つた。(昭和二年四月三日東京朝日新聞)

二日朝熊本縣保安課に達した情報によると、大阿蘇の噴火口は一日午前十一時ごろ百雷の一時に落つるやうな大鳴動を起すと共に今日まで活動してゐた南北の兩火口の中間、中ノ池に新に大火口をあげ活動をはじめ、火柱は天に沖して物凄く二、三百斤位の大岩石や熔岩を降らし、同日登山した三十名は落下する小石のためいづれも負傷し命からんく下山した。なほ二日も一日同様活動を開始し熔岩や灰を降らしてゐるので、附近の農民たちは阿蘇山が爆發するのではないかと不安を感じてゐるが、熊本測候所では語る。

縣廳の報告通りとすれば爆發状態も大きく、非常に心配だから是非調査したいが、雨天で駄目だから雨のあがり次第調査したい。二、三百斤の岩石を噴出するのは新火口が出来たによるのだらうと思ふ。(熊本發)(四月三日大阪毎日新聞)

【熊本特電】阿蘇山は四月二十二日來全く活動を休止してゐたが三日午後一時から遠雷の如き鳴動と共に多量の水蒸気を噴出し、その後間歇的鳴動となりその度毎に少量の水蒸気を噴出してゐたところ、五日午後に至り活動や猛烈となり、小砂まじりの煙を多量に噴出するに至つた旨五日午後縣警察部に報告があつた。(五月六日東京朝日新聞)

○燒岳の降灰

【松本電話】二十三日朝一年半振りで大爆發した日本北アルプス燒ケ岳は、同夜に至るも依然猛烈な噴煙を續けて居るので、麓民は極度に再爆發を恐れて居るが、爆發當時上高地にあり實地視察をして同夜九時島々に下山した梓川電力社員の話によると、同地は幸ひ人畜の死傷と直接の大被害はなかつたが爆發の際一大音響と共に屋鳴り震動したので驚愕して屋外に飛出すと燒ケ岳は飛驒側から物すごく噴煙を擧げ、黒煙曉の天に沖して物すごく、風に送られ次第に遠く大町方面に延びた。同地一帯は爆發後約四十分を経ておびたゞしき降灰あり厚さ五六寸におよび、これがため、四邊一面眞暗となり、清淨な大正池や梓川の水迄濁つてしまひ、殘雪白く輝く北アルプスの一部は灰色に變つてしまつた。尙これと

同時に信州南北安曇や東筑摩地方も七時頃から十時頃まで約三時間の長い間物すごい降灰を見、一時は同様に一寸先も見えぬ様となり行人はいづれも屋内に逃げ込み又は傘をさして歩く等大騒ぎをした。(四月二十四日東京朝日新聞)

○臺灣山岳會

臺北郊外の靈山觀音山頂に發會式を擧げた臺灣山岳會では、發祥の記念としてこの山頂に石碑を建立中であつたがこの程竣功し、堂々二千餘尺の絶頂に立つた碑は堅硬な自然石の中央に『臺灣山岳會發會記念』の文字を刻した高さ六尺餘のもので、支那海の波打ち寄せる淡水の海岸を脚下に廣々と開けた淡水の河口をへだて、大屯、小觀音、竹子七星の連峰と相對峙してゐる、年中風雨のたぐひ中に雄々しく聳えたこの碑は同會の前途を誇くやうに高く中空に嘯いてゐる、尙ほ記念のため周圍に臺灣松の記念植樹をしたがそれも日一日繁茂してゐる。(三月三十日東城日報)

新竹支部

山嶽熱勃興につれ各地に支部設置されるが、新竹州では眞先に支部を設置し、十日竹東郡内横屏山を征服し山上で發會式を擧げることとし、本部より多數の參會を希望して來た、同山は今櫻の時節、九日内横屏著泊、翌十日登山するのであるが、臺北からの參加者は九日午後十二時四十六分發して出發する。希望者は總督府文書課内同會へ申込まれたい。(四月五日臺灣日日新聞)

○早池峯登山路

【宮古】 宮古營林署では、六月初旬下閉伊郡門馬小國の兩村より登る早池峯登山道路を約八百圓の經費で地元民の應援を得、開鑿工事にあたり、同月末日頃に竣工の見込であるが、門馬村よりの道路は同村縣道より約一里の間に自動車を通す位の幅員にする筈である。尙本年よりは登山者の便利を計るため、各所にベンチ、道しるべ、案内圖等を設け、適當な場所には登山者に高山植物の智識を與へるため、小規模の植物園も設ける筈である。之に付いては青森營林局の植物の大家佐藤氏を招聘して決定する見込みである。(四月五日岩手日報)

○飛驒山脈彙報

【大町電話】日本アルプス一帯を管轄とした大町營林署では、今年の登山もホカ／＼陽氣の春季節と同時に思はず登山客の心を惹くに至つたので、何等かの方法を今の中に講じたいと希望を寄せて居るが、本月中旬その具體案を作るため富山縣と本縣とが互に隔意なき意見の交換會を開き、日本アルプス一帯、特に白馬、針の水を越え黒部谷を経て富山立山方面に行くもの、の聯絡を執りたいたと大した意氣込みで、目下その準備を着々進めてゐる。大町營林署の意嚮に依ると従來は兎角、富山縣下の營林署と本縣の營林署とが聯絡を執らず、互ひに秘策を講じながら宣傳を試み、登山客の吸收に腐心した迄はよいが、登山客に云はせれば聯絡が執られて居ない結果、信州の日本アルプスと富山の日本アルプスとは山

脈が同一でありながら全く別個の山としか感じを持たせなかつた、従つて登山客の不満を買ふことが往々あり、且つ聯絡が円滑でないために各種の障害が持ち上り、遂には登山客が暴風雨の悩みを受けて生死不明となつたやうな急變が出来たときにも互ひに責任の轉換を計るなどの不始末さへ發生したことが多かつた、大町營林署は右の點を非常に不快に感じた爲、今年には富山縣の營林署中でも日本アルプスに關係した營林署長と本縣の關係署長とを同署内に集め大評定を行ふ計劃で、期日は大體十五日前後の模様らしく、協議會の結果は深山の資を投じ登山路の開鑿事業を始め、避難小屋の増設登山小屋料の一定其他諸點に涉り新面目を施されるものと登山ファンは今から多大の興味を持つてゐる。(四月五日信濃毎日新聞)

小屋増築

【高岡電話】富山營林署の新年度事業として、二萬五千圓の豫算で日本北アルプスに於ける縦走新路を開拓する事に決定した、即ち從來憩場とされた鷲岳から白馬岳への縦走路及び黒部合流點から白馬岳頂上への登山道などが新設されるが、雪どけを待つて早々工事に着手。更にまた、避難小屋の増築は針ノ木峠に一箇所、三百人を收容し得る大建物と、白馬岳にも立山室堂式のものを作るので、今夏の登山期迄には是非竣工させたいと當局は進捗に努めてゐる、て是等の小屋の増築、縦走路の新設された曉はテントなして北アルプスが縦走され得てあらうと。(三月二十九日國民新聞)

【富山電話】竹田宮北白川宮の兩若宮殿下が昨年夏劍岳御登山の際に御宿泊あらせられた別山平の小屋は建坪わづかに六坪の狭隘なものである、而も今年是一般登山家の興味は劍岳八つ峰の「岩登り」に向つて注がれるであらう、斯くて、劍へくゝと集まり来る人々にとつて此の小屋は頗る不便であるので立山々麓の有志佐伯靜氏はその小屋を更に十二坪増築し、是を立山保勝會に寄付し一般登山家に公開する事になり、目下富山營林署とその敷地につき交渉中。(四月五日國民新聞)

○會員通信

△本月二十一日大町を出て畠山小屋一泊、大澤小屋二泊の後針ノ木峠を二十四日に越し、平の日電小屋の宮本氏のもとに四日居ります。毎日のんきにスキーを味はつて居ります。又マクイ谷はスキーには非常に適し居り候。こゝからの針ノ木、スバリは日本の山の感じがしません。四月上旬里へ出る積りてゐます。(昭和二年三月二十八日吉澤一耶)

△其後又急に出懸り度くて堪らず獨旅に出ることに相成申候。二十八日(三月)夜行にて出發、長井驛にて下車、萩生を経て明神平峠を踏え、桂谷に一泊。翌日は三體山より柴倉山に至り四周の山々を眺め、且スキーを享樂して暢氣になりて木地山に一泊。翌日は朝より少し曇り勝ちなりしも、九時頃より快晴となりたるを以て祝瓶山へと出懸り、野川を廻り、角檜合流點より大玉山への尾根を上り、案外樂に午後三時二十分祝瓶山頂上に達し、四周の山々を指呼の間に望み、大に快哉を叫び申候。翌日は木地山よ

リ桶澤を廻り、安部ヶ館山より葉山に登り、スキーを樂みながら山を眺め、長者原に下り長井に出て、其夜の列車にて歸京致し候。天候良好にて豫期以上の收穫を得たるを喜び居り候。(岩永信雄)

△拜啓。三月二十一日東京發て二十四日上高地に参りました。雪は比較的少く三四尺です、二十五日一ノ俣小舎に至り五泊しました。槍へは二十七日参りましたが雲一つない快晴だけに烈風物凄く遂に肩迄で穂には登れませんでした。槍澤の上部は丁度日中だったので可成り板状雪崩におびやかされました。二十八日は一ノ俣を廻行しましたが可なり漉に惱まされた、四月一日歸京しました。(田中管雄)

△上州の山の春忘れ得ず、小閑を得て白砂山に登り申候、武田博士、山口、戸澤の兩友、偶然輕井澤驛にて邂逅したる安藝君を加へ、一行五人、春雪に輝く奥上州の山嶺に驚喜しつゝ、漫談に時の移るをも忘れて草澤齋。

地を踏み呼吸するさへ心地よからざる温泉町を素通りし、花敷まで二里の道を新緑に浸りて迫り申候、七年振りの花敷温泉はシラクチ川に立派な吊橋が懸り、浴槽にも屋根が設けられ、様子變り候へど依然として閑寂なる山奥の湯の趣失せざるは嬉しく候。

嘗つて東京人の足早きに一驚を喫したりとか申せし引沼の山本照吉老人を今度も伴はん心算に候ひしも隣村へ屋根葺きに頼まれ同伴不可能の由甚だ残念なれど致方無之、小倉の若者山口仙治郎と申すを伴ひ候、之は白砂山の山名さへ知らぬ者にて案内の役には立ち不申た、輕き荷を背負はせたるのみに候。

當日は「未明に出發、ラテルネの光を頼りに」と申す寸法なりしも、何のかのと取紛れ五時半宿を出立致し候、申分なき美日にて、今日こそは白砂山の頂に立たんと一行勇み立ちて登り初め候。

八間山、辨天山の鞍部に八時着、野反池は先年参り候時より雪多く融氷したるは一部のみにて大部分氷雪に閉され壯觀を極め、思はず歡喜の聲を揚げ候、八間山頂に少憩、愈生路に踏入りたるは十時半頃に候、八間より白砂までの山稜は起伏屈曲驚くべきもの有之、根曲竹の繁茂猛烈なれば雪なき時は困難甚しかるべしと存候。幸ひ箆は全く屏息し、雪も所々踏み込み候も大體に於て歩きよく、豫想外に進行し、地圖に所謂八十三山まで一時間半にて到達致候。

このあたり一體に鬱蒼たる針葉樹林にて楢がくれに或は壯大なる岩管の連嶺を眺め或は聳立する白砂山を近く仰ぎ、或は遠く谷川岳方面を望み、足のつめたきも忘れては、厭感嘆の叫を禁じ得ず候ひき、八十三山から白砂山頂までは山稜の瘦せたるためか雪落ちたる箇所も有之候へど國境の切明と覺しきものありて大いに助かり申候、佐武流、苗場愈々近く、登見事に現はれ形容の語も無之候。

急峻なる最後の登り竭きて、久懸の山頂に立ち候は一時半、八間山より約三時間を費したるに過ぎず、春ならではの感を深く致し候。

山頂は東西に長く全く雪に蔽はれ居り候、四圍の展望筆紙の到底盡し得る所に非ず、御推察に任せ申候。仙倉、谷川方面最も

見事に候ひしも春霧たなびき撮影は山口君の「A」フィルムターを以つてしても中々難かしき様子に候ひし。

空腹を充たし、湯を嚥し、疲れを憩め、留る時餘にして歸途に就き申候。歸途は八十三山よりハンノキ澤に下り、尾根を越すと二つ、野反池畔に達したるは六時。日はサツビキ山の彼方に没せんとし、白とも銀とも灰とも言難き暮色に包まるゝ風物は、恐らく忘れ難き印象を何人の胸にも刻みたるなるべしと思はれ候。鞍部より最後の一臂を野反池に。疲れ果てゝ宿に歸着したるは九時半に候。

最後の日は萬座温泉へ赴かるゝ武田博士に別れ、須川に沿ふ道を長野原へ、時折山の端に見ゆる白砂山を振返へりつゝ辿り申候。

積年の宿望を達し得たる喜びと上州の山に對する愛着の益深くなりまさるとを禁じ得ざるもの有之候。

(一九二七、五、二、藤島敏男)

△拜啓。去る四月二十八日午後十時飯田町發の汽車で學友三名と水曾の御岳に向ひました。二十九日はゆっくりして五合目の千本松の小屋に泊り、翌三十日約七時間半を費して頂上に登りました。降りには約三時間弱でした、雪は五合目上の森林帯からあり一尺位落ちて一寸困りました、八合目から頂上にかけては絶好のスキーがアツてスキーがあつたらと思ひました。一日は千本松を出、正午過ぎの汽車で即日歸京しました。(田中菅雄)

△去る一日の夜汽車中で藤島氏一行の歸京する所へ出會ひ、花敷の様子と白砂の話を聞いたのでとうとう我慢出来なくなり八日に

出發して其日に花敷へ入りました、此日野反から少し行きますと大降りになり、寒氣烈しく、止むなく野反へ引返し、焚火を試みしも燃え付かず、其儘温泉へ歸りました。花敷の様子は少し違ひました、橋の位置と風呂の廻りが。今朝はこれから萬座へ行きます、餘は後便にて。(上州花敷温泉中村屋にて松本善二)

△拜啓。小生去る七、八兩日の丹澤行を簡單に御報告申上候。七日前八時十三分飯田町發、八王子にて横濱鐵道に乗替へ橋本驛に下車、自働車にて鳥屋村(貨車圓二十錢約二時間)に出て、中食に約三十分を費し、地圖の點線の道を上りて青野原よりの道と合し候時は午後三時、燒山往復。陽は未だ高けれども井戸澤の小屋一泊。翌八日未明發足。井戸山乗越(八丁坂)にて日の出を拜し、姫岳を経て七時二十五分毘盧ヶ岳着。小憩の後鬼ヶ岩、不動ノ峯を傳ひて丹澤山頂上九時五十分、眺望壯快、燒山より姫岳に到る防火線も明に指點するを得申候。大休憩の後出發、塔ノ岳十一時三十五分。何時の間にか道の間違ひ、行けども大山を右に見、思ひ掛けない札掛の部落に辿りつき候。諸戸植林事務所を過ぎ、ヤビツ峠を経て秦野町に出て小田原電鐵にて歸京仕候、幸にして天候快晴甚だ愉快に存じ候。(五月二十三日小島染之助)

△拜啓。五月一日厚木より上荻野に出て、高取山、華嚴山、經ヶ岳を経て佛果山に登り、三角點東北の尾根を半原に降り、再び厚木に戻り、夕刻歸宅仕候。久振りにて最も近く丹澤山塊を眺め、よい氣持に相成候。(五月二十七日神谷恭)

會報

○第三十五回小集會記事

昭和二年二月廿日午後一時半から、麴町區紀尾井町清水谷皆香園に於て、別宮幹事司會者として開催左の二講演があつた。

小又川と劍澤 冠 松 次 郎氏

右は同氏が昨大正十五年八月末に行かれた旅行の話で、先づ上市より伊折を経て小又川の發電所に泊り、次ぎの日は小又川の左股を廻り、炭焼小屋の最奥のものを越し、立山圖幅の小又川の小の字の邊に野營、翌日は間もなく雪溪となり奥大日岳（地圖の大日嶽）の東々南の鞍部に登り、尾根を通つて室堂乗越附近に夜營、翌日は劍澤乗越（別山乗越）より劍澤を下り、三窓の出合にて野營、その夜より翌朝にかけて豪雨に襲れたれど、翌日

午後四百呎近くのロープを携へて劍澤右岸を下り、兩岸せまりて文字通りの廊下となり、前進不可能となりて野營地に引き返した。翌日は道を改めて劍澤下りを企て、池の平まで登り、不用の荷を置き、仙人山の三角點（二一七三米）よりヤブを分けて尾根を東に進み、劍澤に落ちる空澤を下り、すぐ先きに雪に埋つた劍澤を見ながら、瀑の爲めに前進をはゞまれて空澤の中途に野營し、それより池の平、小黑部谷を過ぎて鐘釣温泉に出た話をされた。

劍澤が黒部川支流の内でも最後まで残されたものであり、その廊下は黒部本流より遙に取扱ひ難さを説かれ、傍ら多くの寫真を示されて出席者に多大の印象を與へられた。第二に
一月初旬の大朝日岳附近

別宮 貞 俊氏

は今年一月初旬同氏が大朝日岳麓、朝日俣黒俣澤の出合所謂二ツ俣の小屋を根據として、行はれたスキーツ旅行の話であつて、天氣續きでスキーツこそ餘り用ゐなかつたが、山の方は非常に好運で、第

一日には鳥谷原山（地圖の鳥原）、第二日には朝日俣を廻り、烈風を冒して平岩山に登り、第三日には黒澤を廻り、百間乗りの雪溪（地圖の小朝日岳の東南にある、著しい谷）より小朝日岳に登り、第四日は最後の日で、二ツ股より朝日俣を少しく廻り、尾根を上つて御影森山へ登り、上倉山を経て朝日礦泉へ下られた話である。要するに大朝日岳を種々の方向より眺めた話で、御影森より見たる大朝日の殊に美しさを説かれた。殊に第三日は羚羊の巻狩をして、それは失敗に終つたけれども山人が羚羊を獲る方法を覚えてそれを説明された。多くの寫真並びに双眼寫真まで持參されたので、一段と興味を増した。

當日の來會者は西岡俊雄、長谷川孝一、高畑棟材、吉澤一郎、吉田直吉、小島染之助、大熊保夫、茨木猪之吉、藤田國啓、瀬戸強三郎、四谷龍胤、松井幹雄、山崎武士、渡邊漸、山崎和一、岩永信雄、鳥山悌成、別宮貞俊、冠松次郎、木暮理太郎、高頭仁兵衛、藤島敏男、山口成一、松本善二、磁貝藤太郎、飯塚篤之助、吉田竹志、芋川稔

一、堀龜雄、酒井忠一、吉田次男、本多友司、野口末延、柳澤悟、川口敏郎の三十五氏にして他に會員外の來會者が十名であつた。

○會務報告

昭和二年二月二十日午前十時より麴町區清水谷皆香園に於て、別宮、藤島、木暮、冠、高頭、鳥山の六幹事出席、幹事會を開き、小集會會場を變更する件に就て協議し、入會申込者の詮衡を行ふ。

○交換及寄贈圖書目

會報	第四年三號	關東山岳會
山岳會報	三ノ十	日本齒科醫事山岳會
旅行	第十三、十四號	東京旅行クラブ
旅	七年四、五、六月號	東京アルカウ會
ベデスツリヤン	八十九、九十號	神戸徒歩會
山嶺	第六年四、五號	東京野歩路會
アルカウ趣味	第十四年四、五號	日本アルカウ會
山の叫	三十、三十一、三十二號	美登里山岳會
キャンピング	五七、五九、六〇、六一號	ジャパン、キャンピング、クラブ

山 峰 會

山 岳 時 報 第一、二、三號

山 岳 時 報 第八年一號

會 報 四年三、四、五號

旅 報 第四卷四、五、六號

ツ ー リ ス ト 十五年二號

山 と ス キ ー 七〇・七一號

リ ュ ッ ク サ ッ ク 五號

嚴冬の大深生活(四谷)、初冬の上高地生活(藤田)、仙丈岳(矢島)、春の槍(家村)、東北朝日連峯(後藤)等あり。菊假綴一七六頁、挿畫六葉、價一圓五十錢。

山 想 創刊號

山岳成因の新説(齋藤)次高山旅行記(秋永能高越)佐藤其他あり。菊假綴一六八頁、大朝尖山、新高山、南湖大山、次高山、大武山等の網銅版を載せ、ヒマラーヤのジャノー(ジャンヌ)の尖頂を想はする大朝尖山頂の大磐石は奇景といふ可し。定價二

臺 灣 山 岳 劍刊號

臺 灣 山 岳 會

山 岳 會

テ ク リ 會

城 南 山 岳 會

サ ン シ ャ イ ン 旅 行 會

圖。

The Geographical Journal, Vol. LXIX-No. 1, 2, 3, 4.

Die Alpen Les Alpes, III-No. 2, 3, 4.

The Prairie Club, Bulletin, No. 163, 164, 165.

The Prairie Club, Year Book. 1927.

Sierra Club Circular, No. 23.

Sierra Club Bulletin, Vol. XII-No. 4.

Batllet Excursionista de Catalunya, Any XXX-VII-Num. 380, 381, 382.

The Mountaineer, Vol. XIX-No. 4, 5, 6.

Bird-Lore, Vol. XXIX-No. 1, 2.

Revue Alpine, Vol. 27-No. 4.

The Scottish Mountaineering Club Journal Vol. 18-No. 103.

一九二六年十二月三十一日に逝き「シロネ」・「ヘーバーン」の記事あり

The Annual of the Mountain Club of South Africa, No. 29-1926.

Bulletin of the International Committee for Bird

Protection.

Trail and Timberline, No. 101, 102.

La Montagne, No. 198, 199, 200.

Club Alpino Italiano-Rivista Mensile, Vol. XLV

I-Num. 1-2, 3-4.

Natural History, Vol. XXVI, No. 6. XXVII.

No. 1.

○本會規則拔萃 (昭和二年二月改正)

第二條 本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス

第三條 本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌『山岳』ヲ發行ス、又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定期ノ出版物ヲ發刊スルコトアルベシ

第五條 本會ハ會長ヲ戴カズ幹事若干名ヲ置キテ一切ノ會務ヲ處理セシム

第十條 本會會員ヲ別テテ正會員及ビ名譽會員トス、名譽會員ハ幹事會ノ決議ニヨリテ推薦セララルモノトス

第十一條 正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所、姓名、年齢及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送付スベシ、但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス (入會申込用紙ハ事務所ニ備付ケアリ)

第十二條 入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス

第十三條 入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直ニ入會金五圓ニ會費

ヲ添ヘ拂込マルベシ

第十四條 正會員ハ會費年六圓ヲ毎年二月末日迄ニ納付スベキモノトス

第十五條 正會員ニシテ一時ニ金百圓以上ヲ納付シタル者ハ爾後會員籍ヲ有スル間ハ會費納付ノ義務ナキモノトス (以下略)

現任幹事八名

藤島敏男 冠松次郎 木暮理太郎

高頭仁兵衛 鳥山梯成 別宮貞俊

横有恒(滯歐中) 沼井鐵太郎(在臺灣)

評議員十七名

小島久太 武田久吉 高野鷹藏

近藤茂吉 中村清太郎 三枝守博

辻本満丸 田部重治 山川黙

及現任幹事八名

正 誤

前號目次に禮文島深浦沖、圖版に禮文島深港沖とあるは、孰れも禮文島香港深港沖の誤につき、訂正す。

昭和二年六月二十七日印刷
昭和二年六月三十日發行

【定價金二圓五十錢】

發行兼編輯者

新潟縣 三島郡深才村深澤

高 頭 仁 兵 衛

印刷者

東京市神田區美土代町二丁目一番地

島 連 太 郎

印刷所

東京市神田區美土代町二丁目一番地

三 秀 舍

發行所

新潟縣 三島郡深才村深澤

日 本 山 岳 會

東京市芝區高輪南町三十番地

日本山岳會計取扱所

振替口座東京四八二九番

東京市神田區表神保町

發 賣 所

東 京 堂



The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXI

1927

No. 2